令和２年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
ＦＤ・SD報告書

編集・発行　ファカルティ・ディベロップメント(ＦＤ)委員会

スタッフ・ディベロップメント(ＳＤ)委員会

発　行　日　令和３年３月 31 日

目　　次

はじめに ･･･ 1

第 1 章

令和 2 年度 FD 活動及び SD 活動の取り組みと今後の課題･････････････ 3

第 2 章

新 教育改革プロジェクトにおける取り組み ･････････････････････････ 10

第 3 章

令和２年度授業評価アンケートの実施結果について ･････････････････ 13

第 4 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動の諸相 ･････････････････････････ 21

第 5 章

本学における仏教教育について ･････････････････････････････････････ 164

第 6 章

学生支援センターが取り組む学修支援について ･････････････････････ 175

第 7 章

SD 活動の取り組み･･ 181

規程

・ファカルティ・ディベロップメント委員会規程‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 184
・スタッフ・ディベロップメント委員会規程‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 185

はじめに

現在では、ファカルティ・ディベロップメント（FD）は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催など」とされている。

制度上の位置づけとしては、大学設置基準において、平成 11 年に努力義務化され、平成 18 年には大学院で義務化、平成 19 年からは大学と短期大学で義務化となった。

また、平成 29 年 3 月には、学校教育法が改正され「第 37 条⑭　事務職員は、事務をつかさどる。」とされ、「事務に従事する。」から変更された。そして、大学設置基準等でも「第 2 条の 3　大学は、当該大学の教育研究活動等の組織的かつ効果的な運営を図るため、当該大学の教員と事務組織等との適切な役割分担の下で、これらの者の間の連携体制を確保し、これらの者の協働によりその職務が行われるよう留意するものとする。」という内容が新設され、「第 41 条　大学はその事務を遂行する（以前は、処理する）ため、専任の職員を置く適当な事務組織を設けるものとする」に改正され、SD が本格的に導入された。

このような中、平成 29 年 4 月より三つのポリシーの策定と公表が義務化されたことに伴い、本学においても、三つのポリシーを策定するとともに、アセスメントポリシーの策定及び、PDCA サイクルによる教育改善に努めている。学生アンケートや教員相互の情報共有・授業参観の実施については、アセスメントポリシーのもとで実施方法を検討しながら取り組みを進めてきた。

主な取り組みとしては、第一に、新任教員への対応・研修のあり方を検討した。令和元年度の看護学部の設置や教職課程の再課程認定に伴い、教育職員が多数採用された。このような中、組織的な教育改善を図るため、新任教員のための研修会の実施や情報交換ができる場の設置等の対応を行い、教育の充実に努めてきた。

第二に、アセスメントポリシーに基づく学生アンケートを実施した。令和元年度以降は、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて全科目の授業評価アンケートを実施することにした。授業評価アンケートの結果をどのように解釈し、教育活動の改善に結びつけるための取り組みのあり方についても、課題として議論を深めているところである。

第三に、令和２年度の新型コロナウイルス感染拡大に伴う遠隔授業実施に関して、授業方法に関する情報共有や研修に取り組んできた。遠隔授業に際して求められる ICT ツールの活用については、科目特性や受講生人数による困難さがあり、さまざまな課題が露呈したが、今後のデジタル社会に対応した高等教育機関のあり方を含め、議論を深めているところである。

今後は、FD の取り組みによる成果を、本学の三つのポリシーの達成に結びつけられるように、内容や実施方法を検討することが課題と考えている。

第１章　令和２年度 FD 活動及び SD 活動の取り組みと今後の課題

１.「三つのポリシー」の策定及び改定

学校教育法施行規則の改正がなされ、第百六十五条の二において「大学は、当該大学、学部又は学科若しくは課程（大学院にあっては、当該大学院、研究科又は専攻）ごとに、その教育上の目的を踏まえて、次に掲げる方針（大学院にあっては、第三号に掲げるものに限る。）を定めるものとする。 一　卒業の認定に関する方針　二　教育課程の編成及び実施に関する方針　三　入学者の受入れに関する方針　２　前項第二号に掲げる方針を定めるに当たっては、同項第一号に掲げる方針との一貫性の確保に特に意を用いなければならない。」とされ、平成 29 年 4 月 1 日以降に施行されることとなった。本法施行に先立ち、平成 28 年 3 月 31 日に中央教育審議会大学分科会大学教育部会より「『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー），『教育課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入れの方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」が示された。いわゆる「三つのポリシー」のガイドラインである。

本ガイドラインでは、「三つのポリシー」について「その内容については、抽象的で形式的な記述にとどまるもの、相互の関連性が意識されていないものが多い」という指摘がなされている。そして、高大接続、学修成果の可視化、PDCA サイクルによるカリキュラム・マネジメントの確立等にも大きく関与するものである。

以上のような状況の中、本学では、平成 29 年度に大学全体のディプロマ・ポリシーを策定し、FSD 研修会で報告した。平成 30 年度は、三つのポリシーを策定し、その内容は本学のホームページや履修要覧等に掲載している。加えて、アセスメント・ポリシーの策定を大学全体と学科別に行い、アセスメントすべき内容について学科・専攻・コースごとに検討を行った。今後、アセスメント・ポリシーに基づく学修成果を可視化を通じて、「三つのポリシー」の相互関連を見直し、改訂に向けた取り組みを進めることが重要になる。

２．令和２年度の取り組み

（１）学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠である。本学では、これまでにオリエンテーション時の新入生にCASECによる英語テストを実施してきた。英語のテストは2セメスター終了時にも実施しており、入学時からの学修成果の変化について資料を収集している。特に、国際キャリア学科と教育学科中学校英語・小学校コースの学生については、学修成果の経年変化の可視化をねらい、1年生から4年生時までCASECによる英語テストを実施している。

また、令和２年度は、4月に新入生を対象にPROGテストを実施した。このテストにより、ジェネリックスキル（社会人基礎力）を測定して数値化することで、単位認定による成績以外の成果を可視化することができる。さらに、PROGテストの結果をもとにして、１年生の担任教員が個別面談を実施した。そして、大学では3年生次、短期大学部では2年生次にそれぞれ２度目のPROGテストを実施し、大学、短期大学部での学修成果のエビデンスの一つとして、また、進路設計を含めた学生指導に活用する資料として活用している。

今後は、アセスメント・ポリシーを明確にし、全学的な学修成果の可視化を進めると共に、PDCAサイクルによる検証作業を組織的に実施し、教学面の改善を進めていくことを目ざしている。

（２）シラバス作成や教育評価方法の見直し・改善

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学士課程教育の質保証と関連し、学修時間の確保が重視されている。「授業計画（シラバス）を作成している大学は平成21年度で96.4%まで進んでいるが、そのうち『具体的な準備学修内容を示している』大学は 35.8%、『具体的な標準学修時間の目安を示している』大学は 6.8%にとどまっている」ことが指摘され

ている。

本学では、学生アンケートに授業外学習を行った時間に関する項目を加えると共に、シラバスに具体的な授業外学修の学修内容を明記するように求めてきた。全科目のシラバスの記述内容については、ＦＤ委員が分担してシラバスチェックを実施し、改善に努めている。平成29年度以降はこれに加えて、学生への学修成果へのフィードバックの有無と内容を記述するように求めた。同じく、学士課程教育の質保障のために、到達目標を測定可能な行動レベルで記述するように求めた。

そして、平成28年度以降は、アクティブ・ラーニングを導入しているかどうか、ICTを活用しているかどうか、授業を英語で実施しているかどうかの3点を記入する欄を設けた。令和元年度には新任教員が大幅に増えたことから、平成31年3月27日に実施されたFD・SD全体研修会において、全教員を対象にシラバスの記載内容や活用意義等について研修を行っている。

一方、学習評価の改善・見直しについては、平成 28 年度からルーブリックを使った学修評価の導入に取り組み、全学で取り組んできた。さらに、令和元年 9 月 5 日の FD・SD 全体研修会では、本学のアセスメント・ポリシーをふまえた学習評価のあり方を題材に研修も実施している。

令和２年度については、遠隔授業への移行に伴い、シラバス作成や教育評価方法の修正・変更をせざる得ない状況になったが、シラバス作成や教育評価方法を改めて整理し、見直す機会にもなった。次年度も継続して、シラバス作成や教育評価方法の見直し・改善を進める。

（３）学生へのアンケートの活用と検証作業

学生への授業評価に関するアンケートの結果は、第3章で詳しく分析されている。平成30年度までの学生アンケートの結果は、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の2回、担当する科目の中から1科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員に

ついては、各学期で第1期と第2期の2回に分けて実施、非常勤講師については第2期の1 回のみ実施してきた。また教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

令和元年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて、全科目について授業評価アンケートを実施した。インターネットを介した全科目を対象とするアンケートの結果は、全学的な傾向の把握は容易になる一方、各科目における授業改善については、具体的で効果的な手続きや方法のあり方を検討する必要がある。これらの授業評価アンケートに関わる成果と課題については、ＦＤ委員会において共有しており、次年度以降、授業における ICT 活用の在り方を含め、継続的に検討したいと考えている。

（4）基礎教育ワーキンググループと ICT 教育等ワーキンググループによる教育内容・方法の検討・提案

令和２年度、本学が直面する教育上の諸課題を検討するため、「本学学生の基礎学力を向上させるための教育の在り方について提言する」ことを目的とした基礎教育ワーキンググループと「「遠隔授業改善の取り組みと重なり・並行する形で，本学全体の ICT 教育の在り方について提言する」ことを目的とした ICT 教育等ワーキンググループが設置された。これらの組織は、令和3年度設置予定の「本学学生に適した，学修意欲を引き出す教育内容・教育方法を開発し実践を支援するとともに，その継続的な改善を図っていくことにより，学生の自律的な学修活動を支援し，もってディプロマ・ポリシーの着実な達成に資すること」を目的とする「高等教育推進センター」の準備組織の位置づけではあったが，そのプロセスの中で、FD 活動も実施してきた。

基礎教育ワーキンググループでは、本学の基礎教育の現状分析と他大学での基礎教育の取り組み事例を調査・検証した。この中でとりわけファシリテーションという教育方法に着目し、本学の大学基礎演習等の授業でのこのファシリテーション実施の可能性を検討す

るべく「ファシリテーション研修」を開催した。参加者は、当ワーキンググループに加えて ICT 教育等ワーキンググループのメンバー、さらにファシリテーションに関連する教育実践をこれまでに行ってきた教員である。今年度では、このファシリテーションをもとにした具体的な大学基礎演習の内容や方法を検討することまでは議論できなかったが、その導入に向けた具体的検討を次年度進めていく。

ICT 教育等ワーキンググループでは、遠隔授業における ICT 教育の実態と課題に関するアンケートや、AI・数理データサイエンス科目のリテラシーレベルにあたる「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」の見直しなどの活動の中で、令和 2 年 10 月 29 日に「数理・データサイエンス・AI を社会においてどのように活用しうるか」と題する FD 研修会を実施した（ICT 教育等ワーキンググループ及び FD 委員会の構成員対象）。また、後述の令和 3 年 3 月 29 日（月）開催の全教職員参加の合同研修会においては、FD 研修として実践例を含む具体的な提案や報告が行われた。

両ワーキンググループの活動及び FD 研修等は、令和 3 年度発足の「高等教育推進センター」に移管され、継続的に取り組まれる予定である。

（5）FD 全体研修会

令和 2 年 9 月 3 日（木）13 時から 15 時 10 分までの時間枠で、全教職員参加の FD 合同研修会を実施した。新型コロナ感染症の感染拡大リスクを回避するため、例年より 1 時間程度短縮した内容で実施した。前半は「本学の方針と課題」、後半は「事務局からお知らせ」で構成されている。まず、宮﨑常務理事、岩尾学長、「新型コロナウイルス感染症に対する本学の取り組み」、「with コロナ,after コロナの教育への課題意識」について講話が行われた。また、矢羽野副学長からは「高等教育センター（仮称）」に関する現状と展望、長澤 ICT 教育等ワーキンググループ主査からは「冬学期授業への提案と今後の取り組み」が報告された。

後半は、事務局の各部局より、「総合型選抜オープンキャンパス参加型および学校推薦

型選抜高大連携型」、「アセスメント・ポリシーをふまえた成績評価」、「現状の就職内定状況と冬学期移行の教職協働」等が報告された。

以下にプログラムを摘記する。

１．宮﨑光映 常務理事「新型コロナウイルス感染症に対する本学の取り組み（講話）」
２．岩尾洋 学長　　「with コロナ,after コロナの教育が本学の今後を決める（講話）」
３．矢羽野 副学長　　「高等教育センター（仮称）に関して」
４．ICT 教育等ワーキンググループ：長澤 主査「冬学期授業への提案と今後の取り組み」
５．入試広報部：東 部長
「総合型選抜オープンキャンパス参加型および学校推薦型選抜高大連携型について」
６．教務部：須原 部長「アセスメント・ポリシーをふまえた成績評価について」
７．キャリアセンター：隅田 副センター長
「現状の就職内定状況と冬学期移行の教職協働について」

令和 3 年 3 月 29 日（月）には、令和 3 年の新着任教職員を含む全職員参加の FD 合同研修会を実施した。新型コロナ感染症の感染拡大リスクを回避するため、例年より３時間程度短縮した内容で実施した。前半は「本学の方針と課題」、後半は「事務局からお知らせ」で構成されている。まず、宮﨑常務理事、岩尾学長、令和 2 年度における本学の取り組みの総括と今後の展望について講話が行われた。長澤 ICT 教育等ワーキンググループ主査及び他 5 名からは、「今後のＩＣＴ活用」について、実践例を含む具体的な提案や報告が行われた。また、松岡高等教育推進センター長と間辺高等教育推進副センター長からは「高等教育推進センター設置」の報告、浅田基礎教育等ワーキンググループ主査からは、昨年度の実施報告が行われた。

後半は、事務局の各部局より、「2021 年度入試の結果と今後の取り組み」、「令和 3 年度授業運営・和の精神」、「コロナ禍の学生支援」、「コロナ禍の就活支援」及び「学校法人四天王寺学園創立 100 周年記念事業」について報告が行われた。

以下にプログラムを摘記する。

１．宮﨑光映 常務理事　講話
２．岩尾洋 学長　　講話
３．ICT 教育等ワーキンググループ：長澤 主査，他５名
「今後のＩＣＴ活用に向けて（提案）」
４．高等教育推進センター：松岡 センター長，間辺 副センター長
「高等教育推進センターの設置について」
５．基礎教育ワーキンググループ：浅田 主査「これまでの基礎教育 WG の活動」
６．入試広報部：東 部長「2021 年度入試の結果と今後の取り組みについて」
７．教務部：浅田 部長「令和 3 年度 授業運営について」
奥羽 副部長「令和 3 年度 和の精神について」
８．学生支援センター：伊達 センター長「コロナ禍の学生支援について」
９．キャリアセンター：笠原 センター長「コロナ禍の就活支援について」
10．学園 100 周年企画委員：鈴木 総務課長
「学校法人四天王寺学園創立 100 周年記念事業について」

［引用文献］

中央教育審議会　2012　「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm）

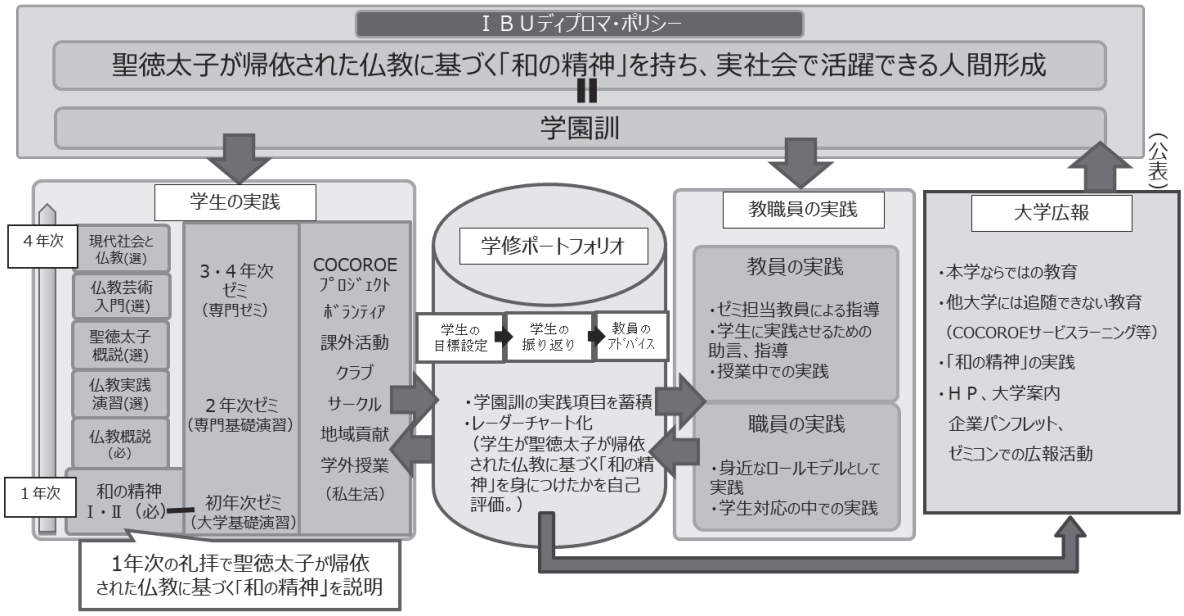
中央教育審議会　2016　「『卒業認定・学位授与の方針』（ディプロマ・ポリシー），『教育課程編成・実施の方針』（カリキュラム・ポリシー）及び『入学者受入れの方針』（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」

（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf）

第２章　新 教育改革プロジェクトにおける取り組み

和の精神（学園訓の実践）について

＜概念図＞



大学全体及び短期大学部全体のディプロマ・ポリシーに基づき、本学学生が在学中に、『聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を持ち、実社会で活躍できる人間形成』を図るため、令和元年度より「和の精神（学園訓の実践）」プロジェクトを実施している。

１．新型コロナウイルス禍における「和の精神Ⅰ」の実施

基礎教育科目「和の精神Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」は、本学仏教教育の柱であり、学生が入学初年次から意識して「和の精神」を身につけることを目的とした科目である。

例年であれば、本科目は、大学及び短期大学部の所属学生が一堂に会し、本学の「建学の精神」や「学園訓」、四天王寺や学園の歴史等についての講話を受講し、「献灯」「読経」「瞑想」「写経」「聖歌斉唱」を行っていた。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、「和の精神Ⅰ（瞑想）」の開講を夏学期から冬学期へ延期するとともに、学生を半数に分け、対面とオンデマンドで授業を実施した。なお、対面授業においては、学科別に各教室に分散させて受講することで「３つの密（密閉・密集・密接）」を避ける授業体制をとった。

「和の精神Ⅰ（瞑想）」の授業運営の詳細については、第５章「本学における仏教教育について」を参照とする。

２．学修ポートフォリオを活用した教育

令和元年度より「和の精神（学園訓の実践）」学修ポートフォリオシステムを活用し、学生が、「和の精神Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」で学んだことを基に、大学生活や私生活の中での自らの行動を学園訓に結び付け、省察することができるようにした。

学生は、学修ポートフォリオを活用し、学園訓の実践に関する１年間の目標設定、自身の実践の記録・蓄積、省察を行う。また、必要に応じて教員の指導を受けることもできる。

学生の学修プロセスは、以下のとおりである。

①「和の精神Ⅰ」の授業において、学園訓の実践の意義及び「和の精神（学園訓の実践）」学修ポートフォリオの活用方法について学ぶ。

②学生は学修ポートフォリオ上で１年間の目標を設定し、各目標が学園訓の各項目のうち当てはまるものを選択する。

③学生自身の普段の生活の中で学園訓に当てはまる行動や自身が観察した他者の学園訓に当てはまる行動と、その行動からの気づきや学びを学修ポートフォリオに記録する。

④１年間の実践について学修ポートフォリオ上で自己評価を行う。評価基準については、学園訓の実践の意義を理解できたかと実践できたかについて次の３段階で設定している。

＜評価基準＞

３：実践することの意義を理解し、実践ができた。

２：実践することの意義は理解しているが、実践できなかった。

１：実践することの意義がわからず、全く実践できなかった。

学生の学修ポートフォリオの活用状況は、令和元年度と同様に和の精神（学園訓の実践）プロジェクト委員会によって掌握され、当該情報を各学部長及び学科長と共有することで、学生個人に活用方法等の指導が行き届くよう指導体制を確立している。これにより、担任教員はアセスメント・ポリシーで定める面談等において個々の学生の状況に応じた指導を行っている。

３．エピソード集の発行

「和の精神（学園訓の実践）」の取り組みについて、本学の学生、教職員及びステークホルダーが実例によりわかりやすく理解できるように、令和元年度１年次生の実践エピソードを集めたエピソード集「こころに、学びを。STORIES 2020」を７月に発行した。

エピソード収集から掲載エピソードの決定までのプロセスについては、各学部・学科の

協力のもと、「和の精神（学園訓の実践）」プロジェクト委員会が担った。

当該エピソード集は、オープンキャンパスにおいて来場した高校生等に配布し、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神に基づく教育についての広報にも活用した。

４．課題と今後の対応

学生が、より効果的に学修ポートフォリオを活用するために、１年次生は「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業において一斉に指導をすることが可能であるが、２年次生以降は一斉指導できる科目がないため、担任教員による指導が中心となる。

令和３年度においては、新型コロナウイルス禍による影響が続くと考えられるため、特に２年次生以降の学生に対する効果的な指導方法について、更に検討していく必要がある。

エピソード集は、今後も学修ポートフォリオに蓄積された実践エピソードを基にエピソード集を定期的に発行し、学内外への配布や本学公式ホームページでの公開等により、「和の精神」の実践に取り組む環境を更に醸成していくとともに、当該取り組みの学外への広報に努めていくこととしている。

第３章　令和２年度授業評価アンケートの実施結果について

１．授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成 20）年 12 月 24 日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考える」(p.40)と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学においても 2006（平成 18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後 2008（平成 20）年度に学生アンケート委員会から FD 委員会に発展的改組を行い、以降についても試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。

このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成 22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第 1 期学生アンケート（2 回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。

また、形成的評価として 7、8 回目の授業時における第 2 期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行ってきた。

最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第 3 期学生アンケート（14，15 回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成 22）年度だけではあるが、3 回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。

以上のような考えに基づき、本学では授業改善に向けた様々な対応を取ってきた。特に、診断的評価においては、その後は、1 年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底することを進めてきた。特に、平成 29 年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROG テストをすべての１年生に実施した。そして、これまでと同様に、形成的評価と総括的評価については、本章で述べる学生アンケートを学期中に２度実施してきた。

２回の学生アンケートの利用方法として、本学では、これまでに PDCA サイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画［P（Plan)］し、実施［D（Do)］し、確認［C（Check)］し、改善［A（Act)］するという PDCA サイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画（P）になり、授業を実施（D）し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認（C）しあうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善（A）し、学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目ざしてきた。

また、中央教育審議会 2012（平成 24）年 8 月 28 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」では、

学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加え､本年度も次節に示した学生アンケートの実施目的を遂行すべく改善に努めた。

令和元年度からは、授業評価アンケートと名称を改め、平成 30 年度までの学生アンケートの質問項目について、学生が所有するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じた全科目の授業アンケートを実施した。翌令和２年度については、前年度の方法を採用しつつ、遠隔授業に対応して設問を一部修正した上で、授業評価アンケートを実施した。全学的な授業改善に向けた取り組みによって明らかになった傾向と課題について報告する。

２．授業評価アンケート実施目的

以上にあるこれまでの経緯から、授業評価アンケートの実施により、以下の二点の達成を目ざしている。

第一に、授業評価アンケートの活用により、授業の改善が進み、シラバスに明示された到達目標が意識され、授業外学習時間も増加することで、学生の単位修得が促進されることを目ざしている。その結果、セメスターごとに決められている履修上限（キャップ制）の制度が機能し、セメスターごとの学生の達成感や知識・技能を身につけることができたという有能感も高まることが期待される。

第二に、全体的に学生の単位修得が進むことで大学全体の GPA は上昇し、大学全体の教育力を示す指標としての GPA 制度が機能することを目ざしている。本学で導入されているセメスター制、キャップ制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。

以上のことを踏まえ、授業評価アンケートによる授業改善の目標として、「学生の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める」「学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識を深める」の二点を設定し、アンケートを実施した。

３．授業評価アンケートの実施方法

令和 2 年度は、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第 14 回または 15 回の講義時に、IBU.net を通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを資料または口頭で説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.net で集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの選択設問項目は表 1 の通りである。

令和元年度時点の設問 1「授業時間外に 1 週間にこの授業の予習や復習を学内・学外を含めてどの程度しましたか。」については、授業形態が遠隔と対面のハイブリット式授業となっていたため、「毎回の授業（対面授業，課題提示型・オンデマンド型・リアルタイム型

の遠隔授業）について、授業時間・予習復習・課題作成を合わせて、どれくらい学習しましたか。」に改変した。

表 1. 授業評価アンケートの設問項目

設問内容	回答内容（評価値）				
1. 先生は、授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
2. 先生は、学生に対して丁寧に対応してくれていましたか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
3. あなたは、毎回の授業（対面授業やリアルタイム・オンデマンド・課題提出などのあらゆる形式の遠隔授業）時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか。（何回分かの授業をまとめて一課題が出ている場合は、その回数で割ってください。）	1：4.5時間より多い	2：4.5時間以内	3：3時間以内	4：1.5時間以内	5：30分以内
4. あなたは、この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
5. あなたは、この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
6. あなたは、履修要覧の授業科目編成表にある「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
7. あなたは、シラバスの到達目標達成のために努力してきたと思いますか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
8. 先生の授業の方法は、工夫されていましたか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない
9. あなたは、総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。	1：そう思う	2：少しそう思う	3：どちらともいえない	4：あまりそう思わない	5：そう思わない

また設問 2「授業の開始時刻は守られていますか。」と設問 11「授業中、私語等をするなどして他の学生に迷惑をかけていませんか。」については、遠隔授業を含む授業形態では回答が難しいため、令和２年度の授業評価アンケートからは削除した。その他の表現についても一部修正した上で、夏・冬学期共通の授業評価アンケートの設問を設定した。

集計は、「１：(そう思う)」が５点、「2：(少しそう思う)」が４点、「3：(どちらともいえない)」が３点、「4：(あまりそう思わない)」が２点、「1：(思わない)」が１点で採点している。これらの選択設問に加え、最後の設問として「この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。」とした質問を設定し、自由記述を求めた。

（１）夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 15 回講義時にあたる令和 2 年 8 月 1 日（土）～8 月 15 日（土）を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 2 年 8 月 17 日（月）～8 月 31 日（月）を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

（２）冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 3 年 1 月 4 日(土)～1 月 20 日(水)を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 3 年 1 月 22 日（金）～2 月 20 日（土曜）を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

４．集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

（１）夏学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表２の通りである。回答率については、大学合計 51.17％（前年度 72.60％）、短大合計 56.97％（同 76.77％）、総計 51.93％（同 73.45％）となった。新型コロナウイルス感染拡大により、アンケート回答時期に全学で全面遠隔授業となったこともあり、回答率が大幅に下落した。

表 2. 夏学期アンケートの実施授業数･回答者数･回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率（%）
日本学科	67	1,918	1,061	55.32%
国際キャリア学科	67	2,337	796	34.06%
社会学科	91	4,121	1,817	44.09%
人間福祉学科健康福祉専攻	57	1,548	637	41.15%
教育学科小学校教育コース	118	4,026	2,366	58.77%
教育学科中高英語教育コース	42	1,055	558	52.89%
教育学科保健教育コース	35	1,184	878	74.16%
教育学科幼児教育保育コース	62	1,927	1,069	55.47%
経営学科　公共経営専攻	31	1,656	679	41.00%
経営学科　企業経営専攻	64	3,021	1,488	49.26%
看護学科	12	979	670	68.44%
大学非常勤	433	17,050	8,870	52.02%
大学合計	1,079	40,822	20,889	51.17%
保育科	65	3,161	1,716	54.29%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	33	1,025	729	71.12%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	21	260	96	36.92%
短大非常勤	50	1,661	938	56.47%
短大合計	169	6,107	3,479	56.97%
総合計	1,248	46,929	24,368	51.93%

集計された授業評価アンケートの結果は、IBU.net を通じて科目担当者に公開された。その後、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。授業改善アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

（２）夏学期授業アンケート結果について

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表３の通りである。

表 3. 夏学期授業評価アンケートの解答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9
日本学科	4.49	4.48	3.06	4.40	4.29	4.18	4.28	4.31	4.37
国際キャリア学科	4.27	4.31	2.30	4.33	4.19	4.12	4.17	4.15	4.25
社会学科	4.41	4.39	2.72	4.34	4.09	4.01	4.13	4.26	4.35
人間福祉学科 健康福祉専攻	4.44	4.49	2.60	4.32	3.87	3.78	3.99	4.21	4.37
教育学科 小学校教育コース	4.43	4.46	2.67	4.43	3.98	3.93	4.10	4.29	4.44
教育学科 中高英語教育コース	4.46	4.61	2.57	4.51	3.94	3.93	4.12	4.43	4.52
教育学科 保健教育コース	4.23	4.30	2.66	4.22	3.93	3.81	3.93	4.14	4.34
教育学科 幼児教育保育コース	4.36	4.41	2.67	4.45	3.89	3.85	4.09	4.21	4.39

経営学科 公共経営専攻	4.16	4.16	2.52	4.09	3.95	3.89	3.95	4.03	4.07
経営学科 企業経営専攻	4.24	4.24	2.46	4.20	4.03	3.95	4.05	4.12	4.21
看護学科	4.42	4.41	3.01	4.35	3.87	3.79	4.08	4.24	4.34
大学非常勤	4.19	4.22	2.60	4.23	3.94	3.87	4.01	4.07	4.19
大学平均	4.34	4.37	2.65	4.32	4.00	3.93	4.07	4.21	4.32
保育科	4.56	4.54	2.47	4.57	3.96	3.94	4.15	4.47	4.58
生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻	4.64	4.64	2.37	4.60	4.26	4.21	4.36	4.55	4.61
生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻	4.56	4.56	2.07	4.47	3.83	3.56	3.84	4.39	4.60
短大非常勤	4.51	4.52	2.43	4.54	4.20	4.12	4.29	4.42	4.51
短大平均	4.57	4.57	2.34	4.54	4.06	3.96	4.16	4.45	4.58
総平均	4.40	4.42	2.57	4.38	4.01	3.93	4.10	4.27	4.38

評価平均点が 4.00 ポイント（少しそう思う）未満の項目は「3. 毎日の授業時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか」と「6. 履修要覧の“身につけるべき能力”をよく読んだか」のみであった。令和元年度は、「授業概要（シラバス）をよく読んだか」「シラバスの到達目標達成のために努力してきたか」も 4.00 ポイントを下回っていたことと比較すると、遠隔授業の導入によって学修状況が大きく低下した様子はみられなかった。また、令和元年度の「授業時間外に予習や復習をしたか」の設問については、総平均 1.91 ポイントで「予習・復習時間 30 分」を下回る結果であったが、令和 2 年度の設問 3 では総平均 2.57 ポイントであり、総学習時間の平均が 1.5～3 時間の範囲であったことから考えると、学習時間の低下も認められなかった。

一方、各学科の評価点をみると、「1.授業時間外に予習や復習をしたか」が総平均 2.57 ポイントであったのに対して、日本学科の平均点が 3.06 ポイントであった結果など、大学・短期大学部平均得点を上回る得点を得た学科もみられる。それら平均得点を上回る得点を得た学科でどのような取り組みが実施されているのか、学部学科を越えて、情報を共有する取り組みが今後の課題となろう。各学科・各科目に特有の性質があることはもちろんだが、同一の学生集団が受講している点から、指導上の修正点や改善点を検討する余地は十分にある。

なお、上述した通り、授業改善アンケートの集計後には、昨年度のリフレクション・ペーパーに替わるものとして、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。また、「この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。」とした自由記述の回答結果については、担当者・担当科目を匿名化した上で、学科ごとに整理し、各 FD 委員によって傾向と課題が各学科に報告されている。

（３）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 4 の通りである。回答率については、大学合計 42.69％（夏学期 51.17％）、短大合計 50.08％（同 56.97％）、総計 43.50％

（同 51.93%）となった。同年度夏学期の授業評価アンケート回答率と比較して、全体として回答率が下落したが、例年と同様に、同時期に学生動態調査が実施され学生にとっては煩雑さや負担感が生じたものと推測できる。今後、IBU.net を通じて、授業評価アンケートを含む調査を実施する際には、全学的な周知体制を整えることが重要であろう。

なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業改善アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

表 4. 冬学期アンケートの実施授業数･回答者数･回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率（%）
和の精神Ⅰ	1	1037	620	59.79%
日本学科	71	1,585	559	35.27%
国際キャリア学科	65	1,663	558	33.55%
社会学科	107	4,128	1,622	39.29%
人間福祉学科健康福祉専攻	60	1,251	538	43.01%
教育学科小学校教育コース	117	3,956	1,773	44.82%
教育学科中高英語教育コース	39	889	337	37.91%
教育学科保健教育コース	35	1,151	692	60.12%
教育学科幼児教育保育コース	67	1,779	896	50.37%
経営学科　公共経営専攻	74	3,227	1,559	48.31%
経営学科　企業経営専攻	38	1,064	370	34.77%
看護学科	11	728	412	56.59%
大学非常勤	430	15,869	6,424	40.48%
大学合計	1,115	38,327	16,360	42.69%
和の精神Ⅰ	1	228	161	70.61%
保育科	39	1,839	575	31.27%
生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻	41	1,130	816	72.21%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	23	283	161	56.89%
短大非常勤	35	1,290	676	52.40%
短大合計	139	4,770	2,389	50.08%
総合計	1,254	43,097	18,749	43.50%

（４）冬学期授業アンケート結果について

冬学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表 5 の通りである。冬学期については、評価平均点が 4.00 ポイント（少しそう思う）未満の項目は、「3. 毎日の授業時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか」のみであった。夏学期と比較すると、学習時間に関する設問以外の設問については、すべてポイントが微増しており、遠隔授業において学生の適応と教員の工夫があったものと推測される。

一方､学習時間に関する設問については､夏学期に比べて 0.16 ポイント低下しているが、遠隔授業に対してスムーズに対応できることになったことで、総学習時間が縮小したことも考えられる。これらの評価については、学修成果と合わせて検討する必要があろう。

一方、各学科の評価点をみると、夏学期と同じく、大学・短期大学部平均得点を上回る得点を得た学科もみられる。回答率自体にも大きな差があるため、単純に比較することは難しいが、学部学科を越えて、情報を共有する取り組みが次年度の課題となろう。近年の

デジタル社会に向けた教育改革の動向を踏まえて、新しい教育方法の開発と共有も重要課題であるため、これらのアンケート結果を活かした、組織的な取り組みがより重要になると考えている。

なお、授業改善に関する本学の取り組みの１つとして、外部団体における本学の活動の紹介を行ってきた。2011（平成 23）年 5 月 21 日（土）に実施された関西地区 FD 連絡協議会第 4 回総会において、平成 22 年度の本学の学生アンケートの取り組みについて「学生アンケートを利用した授業改善の取り組み」というテーマで発表した。ポスター発表の原稿は、関西地区 FD 連絡協議会の活動成果として対外的に発信されている。

本学の活動内容は、京都大学高等教育研究開発センターの MOST と呼ばれる「大学教員の相互研修の場」をコンセプトとするコミュニティサイト内の KEEP Toolkit を使ったスナップショットとして作成され、現在も公開されている。

（URL：https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/gallery.php?id=31786006811807）

これらのネットワークを活かし、他大学の取り組みも参考にしながら、本学独自の組織的なＦＤ活動を進めていきたい。

表 5. 冬学期授業改善アンケートの解答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9
日本学科	4.51	4.35	2.03	4.20	3.83	3.92	4.05	4.18	4.23
国際キャリア学科	4.54	4.49	2.92	4.48	4.35	4.24	4.36	4.30	4.46
社会学科	4.41	4.40	2.50	4.35	4.25	4.23	4.22	4.28	4.33
人間福祉学科 健康福祉専攻	4.45	4.41	2.52	4.31	4.18	4.07	4.13	4.34	4.31
教育学科 小学校教育コース	4.48	4.47	2.35	4.32	4.08	4.03	4.08	4.25	4.39
教育学科 中高英語教育コース	4.55	4.57	2.45	4.51	4.12	4.10	4.25	4.39	4.52
教育学科 保健教育コース	4.42	4.49	2.33	4.43	3.94	3.95	4.11	4.23	4.35
教育学科 幼児教育保育コース	4.53	4.56	2.42	4.42	4.02	3.97	4.11	4.37	4.55
経営学科 公共経営専攻	4.52	4.45	2.50	4.48	4.01	3.98	4.20	4.30	4.46
経営学科 企業経営専攻	4.42	4.50	2.44	4.31	4.22	4.17	4.18	4.28	4.35
看護学科	4.38	4.34	2.43	4.24	4.14	4.08	4.11	4.21	4.24
大学非常勤	4.67	4.54	2.87	4.53	4.14	4.05	4.30	4.43	4.51
大学平均	4.26	4.27	2.33	4.29	4.06	4.00	4.11	4.12	4.21
保育科	4.47	4.45	2.47	4.37	4.10	4.06	4.17	4.28	4.38
生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻	4.48	4.46	2.06	4.16	3.99	4.03	4.20	4.40	4.18
生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻	4.80	4.84	2.66	4.80	4.04	4.17	4.36	4.77	4.86
短大非常勤	4.44	4.43	2.18	4.40	4.16	4.10	4.21	4.40	4.48
短大平均	4.65	4.64	2.17	4.53	4.46	4.43	4.43	4.57	4.61
総平均	4.59	4.56	2.31	4.54	4.28	4.28	4.35	4.45	4.53

５．今後の課題

平成 21 年度以降、今後の課題として、第一に、授業概要（シラバス）の記述内容を見直していくこと、第二に、学生アンケートの結果とリフレクション・ペーパーの活用の 2 点を掲げて取り組みを行ってきた。

今年度は、全科目について授業改善アンケートの実施し、全学的な課題等は把握できたものの、具体的な授業改善については、各科目担当に委ねらえている状況である。また、学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識については、数値上は一定の成果がみられるが、学修成果に結びついているかについては、検証が必要である。上述したように、各科目単位での授業改善だけでなく、学科単位での授業改善や学生と協働した授業改善等、組織的な授業改善の取り組みが重要であり、今後、FD 委員会を中心とした組織的な検討がより重要になろう。

なお、コロナ禍により遠隔授業を含む授業形態が導入され、デジタル社会に応じた授業のあり方が問われる現在においては、FD 活動の充実がより重要になる。従来から取り組んできた授業概要（シラバス）のあり方やリフレクション・ペーパーの活用等による学生とのコミュニケーションの改善についても、授業形態に応じた工夫が必要であろう。本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降もシラバスや授業方法に関する FD の研修会を通して、授業改善に向けた課題意識の共有を図っていきたい。

なお、授業改善アンケートの設問の内容についても、今後の検討課題となる。組織的な授業改善の取り組みの中で、授業に関して明らかにすべき点を整理し、設問の内容についても検討していきたい。

［引用文献］

文部科学省　2008 年　中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf）

文部科学省　2012 年　中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf）

第４章　各学科・専攻・コースによるＦＤ活動の諸相

本学ではいわゆる 1 年生時の初年次教育科目として、学科・専攻ごとに科目を設置している。大学では、4 つの学部のすべての学科に「大学基礎演習」（人文・教育・経済学部は共通教育科目・卒業必修科目でⅠ・Ⅱの 2 科目で各 2 単位、看護学科は専門家教育科目で１科目２単位）」を設置している。短期大学部については、保育科に「保育実践演習Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 1 単位）」、生活ナビゲーション学科ライフデザイン専攻に「ライフデザインゼミナールⅠ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各１単位）」および「キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各 2 単位）」、生活ナビゲーション学科ライフケア専攻に「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ（専門教育科目・卒業必修科目各１単位）」をそれぞれ設置している。これらの授業内容と運営は、学科・専攻・コース（以下、学科等と略記）それぞれにおいて協働して取り組むべき初年次教育であることから、FD 活動の中核として位置づけられてきた。特に平成 20 年度以降については、初年次教育が全学的な重点課題として位置づけられ、それぞれの学科等において、「新入生の大学生活への適応」に向けて、重点的に取り組んできた経緯がある。

本学では、学科等の所属教員が分担して初年次教育を実施するだけでなく、担任教員を設定して個別に指導・支援も実施してきた。その結果、担任教員としての負担は少なくないが、学生支援やピアサポートの充実、教育効果の確認、専門教育の基礎作り等の点で、いくつもの利点をもたらしてきた。本学は、学生の基礎学力や進路志望の傾向が学部や学科ごとに大きく異なる。初年次教育の実践を通じて、教員が学生の学力やコミュニケーション能力等を身近に実感することができるため、結果として、教育的な配慮や進路指導、合理的配慮等のあり方を共通理解することができてきた。

なお本学では、オープンキャンパスや入学前教育でも学科ごとに独自のプログラムを用意している。オープンキャンパス等は、本学における初年次教育のシステムの延長線上に位置づけられ、個々の教員が志望者や入学予定者に接する機会を多く設定することで、スムーズに初年次教育に移行する機能を果たしてきた。本章の各記述にも見られるように、それぞれの学科等で、入学前後から卒業後までを想定した連続性のある授業内容が設定されており、これらは PDCA サイクルの中で常に工夫・改善されている。

学修状況の確認については、平成 29 年度以降、PROG テストを 1 年生全員に実施し、その結果をもとに担任教員が面接を行っている。短期大学部については、2 年生時に PROG テストを再度実施し、学生の変容についてデータをもとに教員間で検討してきた。令和元年度以降は、大学の 3 年生に対しても PROG テストを実施し、学生の変容について教員間で共通理解を図った。また学生の変容に関するエビデンスに基づいて、学生に対して個別面談も実施した。

共通理解を図る学科等の取り組みとしては、授業相互参観も行われている。学科等で行うことにより、個々の学科の教育内容やカリキュラムの改善という点で問題意識を共有できる。参観対象科目は、教務課を通して全教員に IBU.net 上に告知され、学部・学科を越えて参観される授業も少なくない。

今後、授業評価アンケートの結果の活用と共に、学科等の授業内容及びシラバスの見直

しを進めていく。また、アセスメントポリシーの観点からの検討も、継続的に実施する予定である。

人文社会学部　日本学科

1. はじめに

日本学科の令和２年度報告書においては、以下の項目について報告する。

2. 基礎的必修科目について

(1)「日本学表現演習Ⅰ」（1年次必修）

(2)「日本学表現演習Ⅱ」（1年次必修）

(3)「大学基礎演習ⅠⅡ」（1年次必修）

(4)「日本学基礎演習Ⅰ」（2年次必修）

3. 授業相互参観について

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 「パフォーマンス実践演習」

(2) 「日本学インターンシップ演習」

(3) 教員採用試験対策

2. 基礎的必修科目については、1年次2年次の基礎的科目を取り上げている。まず「日本学表現演習ⅠⅡ」（H31年度設置）は、初年次教育科目であるとともに、ディプロマ・ポリシーである高度な日本語運用能力の向上をめざす科目である。学生へのアンケートによると、夏学期は全面リモートだったため、プレゼン発表にやや不満が見られたが、全体としては「有意義」との回答が多かった。冬学期については、現地調査ができなかった「四天王寺ツアープレゼン」の満足度がやや低かった。

「大学基礎演習ⅠⅡ」は、「日本学表現演習ⅠⅡ」と連携して高度な日本語運用能力を学ぶ科目である。アンケートによると、意外にもハイブリッド授業も実施できた冬学期に否定的回答が増えていた。その背景には授業についてこられなくなった学生の存在が推定される。より丁寧な指導の必要性が明らかになった。

「日本学基礎演習Ⅰ」は日本学科の各分野について、ディプロマ・ポリシー―の問題発見・課題解決のための基礎力を養う科目である。オンラインでの課題を中心とした授業となったが、アンケート結果はおおむね良好であった。しかし、着実に学修を積み重ねた学生と、そうできなかった学生の二極化が見て取れ、今後の課題である。

3. 授業相互参観については、参観及びその後の合評会について述べている。今年度も順調に実施することができた。合評会では、オンライン授業でのグループワークの有効性などが議論され、有意義だった。しかし、自己評価シートの提出が一部教員にとどまったことは遺憾である。今後、学科教員に周知徹底していかねばならない。

4. 学科独自の取り組みについては、特色ある授業２科目と、授業外での取り組みを取り上げた。「パフォーマンス実践演習」（夏期休暇期間中の集中講義）は、マスク装着など感染防止に最大限の注意を払いつつ、対面で実施した。無事授業を終えることができたが、マスク装着が対面コミュニケーションに及ぼす影響は大きく、今後の課題である。

「日本学インターンシップ演習」は新設科目である。コロナ過の中、手探りで実施することになったが、受け入れ先のご協力でほぼ予定通り実施できた。初年度としては十分にこの授業の目的を果たすことができた。

「教員採用試験対策」では、夏学期の４年生への教員採用試験対策支援は限定的なものとなったが、幸い例年よりも多い現役合格者（8名）を出すことができた。また、冬学期の３年生への自主勉強会支援はほぼ実施することができた。とくに、教採に合格した４年生が３年生を指導するという例年の取り組みは、コロナ過での工夫を引き出し、双方に有意義だった。

（文責：田島智子）

2.基礎的必修科目について

(1)「日本学表現演習Ｉ」（1年次必修）

Plan（計画）　コロナ禍により、学期直前～４月時点では開講延期とされ、その後「夏学期は原則オンデマンド授業で」ということになったため、令和２年度用に建てた計画から、授業内容・形態・評価法の全般にわたって大幅な変更を余儀なくされた。（後述）

Do（実施）　変更の結果、次のように実施した。（WS：ワークシート、FB：教員によるフィードバック、GW：グループワーク）

【内容及び形態】

《オンデマンド授業》　IBU.net 授業支援メニューを通じ、教員から資料と WS 配信及び課題出題（全クラス共通）→受講生が課題提出　という形で実施。配信・出題及び課題提出期限をこの科目の本来の曜日時間に合わせ設定。扱ったテーマは次の通り。

・「私の大学生活の計画（抱負）」：ワード原稿用紙に入力し提出

・ノートテイキング：講義動画（外部機関のものを活用）を視聴しながら手書きでノートを取り、完成物を写真に撮り提出　→FB　→別の講義で再度行い、提出

・「私の薦める一冊」の取り組み：本選び　→本のデータを提出　→「学術的なレポートの構成」について学ぶ　→それに沿って本の紹介原稿を作成し提出　→FB→　決定稿提出

・担当教員６人が「大学での学び」をテーマにそれぞれ作成した文書または動画を配信→それらを読解あるいは視聴し、その概要や感想をまとめたものを提出

・「日本学科の学びとは」を大テーマに、各人の関心に沿ったテーマ（例：教職、日本語力向上、文学、異文化交流）を設定し、過去の学科ブログ記事からそのテーマに関連ある記事を複数抽出し、読み取ったこと・それらを元に考えたことを WS にまとめて提出

《オンライン授業》「私の薦める一冊」のプレゼン（口頭発表）を、WEB 会議システムを用いて中継の形で行った。その際、ルーブリックによる学生相互評価も課した。

《対面授業として》１回のみ実施が許可さ、クラスメートとの交流に重きを置いた。

・「日本学科の学びとは」で各自が作成した WS の内容を GW で披露し合い、報告。

・「教員へのメールの書き方」についての講義を聴き、例題を考える。

【成績評価】　小テスト中止に伴う変更の結果、「各種提出物および発表による評価＝100%」（提出物９種および発表１回が、各 10 点満点）とした。

Check（評価）　学期終了後、この科目の独自アンケートを WEB で行った。その結果を下に抽出する。（回答者数 77 人＝受講者の８割弱）設問はいずれも５段階評価

１．「日本学基礎演習Ｉ」全体についてどのように感じたか（有意義度について５段階評価）　…評価５＋評価４＝67 人（87%）

２．テーマ別の評価（「非常によかった」～「全くよくなかった」まで５段階評価）で最も高評価だったもの：「私の薦める一冊」原稿作成　…評価５＋評価４＝63 人（83%）

３．この科目での学習は、他の科目の学習を行う上で役に立ったか　…評価５＋評価４＝57 人（74%）

４．この科目での学びにより、大学での学習意欲が高まったか…評価５＋評価４＝55 人（72%）

５．この科目での学びにより、“大学生になった”という自覚を持てたか　…評価５＋評価４＝53 人（69%）

例年のアンケート結果と比べると、４、５および「私の薦める一冊」プレゼンへの評価がやや低調であった。対面授業が行えないことによる種々の制限（そもそも登校できず大学生になった実感や自覚が持ちにくかった、WEB 中継でのプレゼンでは内容と音声以外の点(姿勢や視線等)がわかりにくい、緊張感に欠ける等）が影響したと思われる。

しかし１については例年のように「有意義」との回答が多かった。この科目全般についての肯定的な評価（自由記述）としては、「自分の考えを文や言葉にして相手に伝える機会が多くあったので勉強になった」「レポートのまとめ方やどうすれば伝わるのかなど、今まで考えていなかったことを考えるようになり、力が付いたと感じる」「話す力や書く力、聴く力、まとめる力などたくさんの力をつけられたので今後に活かしたい」「作品（薦める一冊）との向き合い方を見直すきっかけになり、リモートながら得たものが多かった」「提出課題にコメント※がある所がよかった」（※IBU.net を利用した FB）「講義を聴きつつ、考えながらノートを取るのが新鮮だった」「オンラインでもスピーチをする機会があってよかった」等、オンライン授業の受講という制約ある環境ではあっても、これまでにない学びの経験を通して、自身の日本語力の向上の実感や、大学での学修基礎力を得たとの認識を示すものが多くあった。

オンラインという形態に関わる回答では、不満としては「オンライン授業形態がもっと早く整っていればよかった」（大学の支援体制の整備やこの科目の授業形態の確定についてのことか、自身の IT 環境や PC スキルについてかは不明）、接続が不安定で授業視聴に支障が出ることがあったこと、友達ができないことの嘆きや次学期以降は対面で受けたいという声等があった。肯定的な回答としては「オンデマンドにより自分のペースで視聴や再確認ができて助かった」「やる気がなくクラスの雰囲気を悪くする学生と関わらずに済み、授業に集中できた」等、自分でペースを作りつつ集中して受講できることへの評価があった。こちらが懸念していたよりは不合格者（脱落者）は少なかった。

<u>Act（改善）</u>　まずオンライン授業については、次年度はオンライン授業必須で新入学生はノート PC 必携となることに伴い、入学時の情報ガイダンスでカバーしきれないオンライン受講スキルを「日本学基礎演習Ｉ」で補うことになった（開講前授業～第 4 回までにその時間を取る計画）。R2 年度にあったような、学生の知識やスキルの無さにより受講に支障が出た問題は、かなり解消されると思われる。

内容面では、中長期計画を見据えての学科の学修内容の見直しにより、この科目は「日本語力の向上に注力し、その結果が明確な形で示される」（具体的には、漢字検定２級・日本語検定２級（いずれも大学卒業程度レベル）相当の力を付ける）ことを目指して、日本語力向上対策の時間を多く取ることになった。その時間を組み入れつつ、従来の、学生にとって有益な内容（「私の薦める一冊」の取り組み（レポート作成と口頭発表）、GW、進路・キャリア関連の学び等）も出来る限り維持する。授業形態は半数ずつが対面受講・オンライン受講するＡ方式ということで困難もあると思われるが、より充実した質の高い学修になることを目指す。

（文責：高橋美奈子）

(2)「日本学表現演習Ⅱ」（1 年次必修）

Plan（計画）

本授業は日本学科初年次ゼミ科目として開講 3 年目、カリキュラム改変前の「大学基礎演習Ⅱ」から数えて 9 年目となった。前年度カリキュラム終了時のアンケートの結果、基本的な受講の柱としている授業前半の「ブックトーク」個人発表と「四天王寺ツアー」グループ発表を通じ、読解力やプレゼン能力の向上にある程度効果が認められていることから、基本的な授業形態を維持しつつ、以下のような改善を試みることとした。

① 四天王寺ツアーのグループ発表の準備時間が短いというアンケート結果を受け、レクリエーション的に活用されていた回を四天王寺ツアーに当てる

② 四天王寺ツアー発表のために現地調査において、学生のマナーが寺と大学のトラブルを引き起こしかけてしまった。この点を反省し、今年度においては寺にゲスト講師を依頼し、境内見学について講義してもらう等、寺との連携を緊密化させていきたい。

③ 当授業における学修ポートフォリオの運用は２年目となったが、授業アンケートにはこれに関係する記述がまったく見られない。学修ポートフォリオを学生の主体的な学びに繋げ、どう実質化していくかが課題である。

Do（実施）

結果として、新型コロナウイルス感染拡大により、上記計画の実施について大幅な修正の上での実施を求められることとなった。

①については授業計画を修正し、教員講義の回数を減らし、その分プレゼンテーション準備の回を 1 回増やした。ただ②、③についてはウイルス対策のための授業計画中と変更により、四天王寺訪問自体を推奨できなくなってしまったこともあり、結果的にあまり進められなかった。

漢字テストは 1 回の授業で対面受講学生のみを対象に 2 回分出題し、その次の授業で、前の回にオンライン受講だった学生に対し同じ問題を出題するという方式で進めた。12 月以降については授業の完全オンライン化に伴いテスト自体を中断せざるを得ず、結果として 13 回分のテスト予定のうち 10 回分をこなした。

ブックトーク発表について、当初 1 回で全学生済ませる予定であったが、オンライン発表と教室での発表の環境格差を恐れ、発表を 2 回に分け、全員教室での発表とした。ただし、その後のクラス代表発表においてオンライン発表学生と教室発表学生へのギャラリー

評価に大差がなく、オンライン発表があまりハンディキャップとならないと見受けられたため、四天王寺ツアー発表はオンラインと教室、並行して実施した。

他学生の発表へのルーブリック評価と授業独自アンケートにおいて例年通りに紙を用いることが難しかったため、Google Form で代用した。

四天王寺ツアーの資料も例年紙で配布していたが、隔週登校でうまくグループ内共有できないのを危惧し、今年はじめて PDF ファイルを作成配布した。

Check（評価）

オンライン対応のためこの年度はじめて独自アンケートを Google Form で取り、受講者数約 100 名のうち 49 名から回答を得た。ブックトークは 48 名、四天王寺ツアーは 43 名から「有意義であった」という回答を得た一方、そのうち「大変有意義である」という回答はブックトークで 26 名を占めたのに対し、四天王寺ツアーは 17 名で、後者の満足度がやや低かった。

Act（改善）

令和 3 年度は当初よりオンラインを前提とし授業計画を立てていく必要がある。具体的に以下の点について計画を進めていかねばならない。

① 初年次ゼミ科目として、新入生にオンライン授業に慣れてもらう。ビデオ通話アプリの利用について、教員と受講者、受講者同士の対話の機会を増やす、頻繁なグループディスカッションを行うなど、他の授業で応用できるような様々な活用法を試みつつ、不慣れな受講者に対し丁寧な説明を続ける。

② 四天王寺ツアーは机上の資料探索と現地調査を組み合わせた学修であり、ウイルス感染拡大状況が研究の進行を大きく左右する。できるだけ学生の現地調査の可能性を探り、その場合寺との連携を欠かさないようにしつつ、もし現地調査が難しくなった場合の授業の進め方について、様々な状況を想定し教員間であらかじめシミュレーションしておきたい。

③ 独自アンケートの回答率が例年に比較しかなり低かった。授業内の様子を見る限り Google Form の使い勝手そのものは受講者は理解していたようではあったので、回答率が低い原因は周知の不十分にあったと思われる。令和 3 年度も同じ状況が続くので、改善したい。

（文責：森嶋　俊行）

(3)「大学基礎演習ⅠⅡ」（1 年次必修）

Plan（計画）

本科目は、日本学科 1 年次夏学期・冬学期の必修科目であるが、いわゆる初年次教育としての「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」とは異なる。初年次教育としての役割も（「和の精神」を可能な限り意識させるという意味では）部分的には担うが、本科目の主たる目標は、①日本語（表現）についての幅広い知識を体系的に身に付け、②文章の書き方の基礎を確実なものとして実践的に運用できるようになるとともに、③レベルのより高い話し方・聞き方ができるようになることである。この目標はつまり、日本学科のディプロマ・ポリシーに合致したものであり、これを具体的に実践することにより、学生が日本語（表現）についての幅広い知識を

体系的に修得し、基本的な事項を理解するにとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになることを目指している。なお、授業担当は、１年生全員を学籍番号順に４分割し、「大学基礎演習Ⅰ」は、①麻生、②田島、③坂田、④中村が、「大学基礎演習Ⅱ」は、①坂田、②麻生、③中村、④田島が、というように、ⅠとⅡとでクラスを入れ替えて担当した。4 人で分担して担当するものの、クラス間の教育レベルの公平性を担保するため、教員間での連携を密にすることはもとより、２クラスの合同授業も数回取り入れた 15 回分のシラバスを作成・公開して授業に臨む予定であった。

Do（実施）

公開シラバスに沿って「大学基礎演習Ⅰ」の授業を開始しようとしていた矢先、新型コロナウイルスの流行の為、夏学期の授業は全てオンライン授業となった。シラバスは、対面での授業を前提としていたので、急遽授業内容の変更を余儀なくされ、人前でのスピーチやプレゼン、毎時の敬語小テストなどが実施不可能となった。IBU.net の「授業支援メニュー」を用いてのオンライン授業で、多くの制約があり、試行錯誤しながらの授業であったが、それでも「大学基礎演習Ⅰ」の中核となる次の８項目を授業で扱うことができた。すなわち、①「言葉とは何か」の作文と解説、②「言葉と私」の小論文と書き方の説明、③「言葉と私」のルーブリックによる相互評価、④敬語の正誤問題、⑤対面授業（７/１）、⑥「心に残る表現」の原稿作成、⑦「心に残る表現」のルーブリックによる相互評価、⑧「言葉と私」の小論文（最終レポート）の８項目である。これらの８項目は、元のシラバスを可能な限り活かしたものである。また、冬学期の「大学基礎演習Ⅱ」は、対面授業とオンライン授業とを併用したハイブリッド型授業となったため、こちらもシラバスを少々変更せざるを得なかった。扱うことができたのは、①導入（表現の工夫、流行語、キャッチコピー、レトリック）の講義・グループワーク・発表、②「自己アピール」の原稿作成とスピーチ、③「自己アピール」のルーブリックによる相互評価、④「文章の要約」についての講義と実践、⑤敬語の学習、⑥「和の精神、私の実践」の原稿作成とスピーチ、⑦「和の精神、私の実践」のルーブリックによる相互評価、⑧「手紙の書き方」の講義と実践の８項目である。夏学期とは異なり、学生も教員も Zoom の扱いに慣れ、人前でのスピーチを実際に行なうことができたのは大きな進歩である。

Check（評価）

大学基礎演習Ⅰ・Ⅱともに、授業効果を確認・評価するために学期末には学生に対する独自アンケートを実施した。質問項目は、それぞれ上記の①～⑧に加えて⑨「この授業全体の感想」を、「評価１＝とても勉強になった　２＝勉強になった　３＝どちらとも言えない　４＝勉強にならなかった　５＝まったく勉強にならなかった」の５段階で学生に評価させるものであった。集計結果は次のとおりである。なお、大学基礎演習Ⅰのアンケートには７７名が、大学基礎演習Ⅱのそれには７６名が協力してくれた。（自由記述欄は割愛）

大学基礎演習Ⅰ

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
評価１	３２	４５	４２	５１	４２	４３	４０	４０	４５
評価２	４０	２５	２４	２１	３１	２７	３０	３０	２７
評価３	５	７	８	４	４	６	７	７	５
評価４			３	１		１			
評価５									
合計	７７	７７	７７	７７	７７	７７	７７	７７	７７

大学基礎演習Ⅱ

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
評価１	３０	４２	３８	４３	４３	３７	３３	４７	４６
評価２	３２	２３	２５	２５	２２	２２	２６	１７	１９
評価３	１２	９	１０	６	９	１３	１１	９	６
評価４	１		３		２	４	３		５
評価５	１	２		２			３	３	
合計	７６	７６	７６	７６	７６	７６	７６	７６	７６

Act（改善）

上に掲出したアンケート結果は、コロナ禍で多くの制約があったことを考えれば、概ね良好な学生からの評価と考えてよいだろう。しかし、いくつかの改善すべき点も浮かび上がる。まず、評価４・５の否定的評価が、夏学期よりも冬学期の方が増加している、ということである。これは、授業についてこられなくなった学生や課題を提出できなかった学生が増加傾向にあることを示していると解釈できるので、また、今後もしばらくコロナ禍は続くと考えられるので、Zoom の扱いなどのコンピュータ・スキルをより丁寧に説明するとともに、ピアタをより積極的に活用するための方策を考えるべきであろう。今年度はコロナ禍でそれほど活用できなかったのが残念であった。ついで、提出物やルーブリックによる相互評価の結果を如何にして学生にフィードバックするのか、ということも今後の改善点に挙げられよう。より効果的で効率的な方法を考えたい。最後に、上のアンケート結果からは読み取れないが、実際には担当教員間での結果のバラつきが見られたのも事実である。教員間の連携をさらに緊密にすることが求められる。一方で、多くの学生が「受講してよかった」「とてもためになった」「楽しかった」等のポジティブなコメントを寄せてくれている。一人でも多くの学生がこうした声を寄せてくれるように、我々教員は努力を続けなければならない。

(4)「日本学基礎演習Ⅰ」（2 年次必修）

この科目は、例年であれば、学年に共通する内容・取り組みと、各担当者がそれぞれに行う内容・取り組みを混在させ、6 クラスの少人数で展開するものであるが、令和 2 年度は、変則的に 5 クラス割となったうえに、新型コロナ感染症対応として、急遽、オンライン授業

となったため、各種の授業内容の変更が必要となった。そのため、前半は、急遽全クラス共通の教材を作成し、同一課題を配信するという授業に変更し、授業担当者がオンライン授業に慣れてきた後半期に、それぞれの担当者が独自の内容に基づく授業を実施することとした。以下では、このうちの全クラス共通の内容について記述する。

Plan（計画）

・ここ数年、改善を図ってきた初回授業グループワークは、これを踏襲すべく準備した。
・これも数年来改善を図ってきた発表相互評価ルーブリックの在り方について、現行ルーブリック使用の意義を認めつつも、ルーブリックの使用について検討を継続することにした。この授業では、グループプレゼンテーションと個人プレゼンテーションを実施する予定なので、その 2 回のプレゼンの 1 回目に「プレゼンテーションにおいて達成すべきこと」、2 回目のプレゼンテーションで「達成すべきことが達成できているか」などの段階的ルーブリックの使用法などを検討した。
・敬語や、日本語表現技術などについて、学生に継続的な学習を促すべく、適切なテキストの授業時使用について検討し、実施することとした。
・授業独自アンケートを実施し、今後の授業改善に役立てることとした。

Do（実施）

実際には、夏学期のすべての授業が急遽、遠隔授業となったため、計画の大幅変更が必要となった。緊急事態宣言下で教員の打ち合わせもままならない中、メール等で連絡しあい、授業内容を調整しながら実施した。

・初回グループワーク（オープンキャンパスの来訪者に日本学科の学びを紹介する企画を考え、発表する）を、オンラインという状況下でも実施可能な個人作業で課題の達成できるものに変更した。
・授業の初期の段階では、パソコン環境に問題がある学生もおり、オンラインでのプレゼンテーションが難しいと判断されたため、オンライン上でのグループプレゼンテーションは実施されなかった。しかし、「もし、プレゼンテーションを実施するなら」という前提で作成したパワーポイントを提出させ、これを、資料配信中心のオンライン授業時に、教員が受講者に提示しながらフィードバックを行う、さらには、受講者各自に個人的にフィードバックを行うなどして、「あるべきプレゼンテーション」イメージの形成を行った。
・メディアリテラシー教育（文献検索の仕方、ネットで得た資料の扱い正しい引用法など）を含むレポート作成技術については、全クラス共通テキストを作成し、これを配信した遠隔授業を行った。
・敬語についての学びについても、オンライン授業で指導を行い、小テストを実施したが、それ以外の日本語表現技術指導は、授業形態の変更により実施できなかった。
・授業期間の後半数回の授業については、各授業担当者の状況に応じて、独自の授業内容及び授業形態で、冬学期の「日本学基礎演習Ⅱ」および次年度のゼミへのつなぎとした。
・急遽オンライン授業となったため、例年この授業で実施している独自アンケートについては、グーグルフォームを使用してこれを実施した。

Check（評価）⇒Act（改善）

この科目では、毎学期末に、かなり詳細な学期末アンケートを実施しているが、今年度は、グーグルフォームでの実施となったため、設問を絞り込んでの実施となった。その結果を踏まえて評価および改善すべき点について述べる。授業担当者の印象としては、急遽、遠隔授業に切り替わったことで、学生は、定期的に送られてくる授業資料と課題に、自分なりのペースで取り組み、対面授業時よりもしっかりと学修を積み重ねることができた学生と、そうした学修態度を形成できず、課題の提出のみに追われた、もしくは、落ちこぼれていったものとに分かれたと感じられる。その結果として、授業アンケートへの回答率もあまり高くなく、回答者は、おおむね授業に積極的に取り組んだ学生であったという前提のもとに回答結果を分析する必要はあろう。

まず、本来グループプレゼンテーションで実施するはずだった「オープンキャンパスの来訪者に日本学科の学びを紹介する企画」を考える個人課題への取り組みについては、学習上の参考になったとする学生が 82.3%（「大変参考になった」を含む、以下同様）、敬語に関する学びは、参考になったとする学生が 94.1%、レポート・小論文作成法についても参考になったとする学生が 88.2%と、急遽、遠隔授業に切り替わったにもかかわらず、授業構成とその内容にはおおむね高い満足度を示す評価を得ていた。反面、低評価を行った学生のコメントには、「対面で受講したかった」、「改善点が理解できないままであった」、「学生同士の学びの機会が少なかった」と不満を訴える内容のものがあった。

本来、この科目は、2 年次夏学期の必修授業として、冬学期のプレゼミと 3 年次のゼミの前段階的役割を果たすことを目的とするものである。授業アンケートの「ゼミでの学びについての理解が深まったか」という質問については、82.4%が「はい」と回答しているため、その目的は達成されたと考えられる。しかし、上記の学生の自由回答内容も含め、今年度、急遽、遠隔授業に切り替わったことで、特に、グループワークやプレゼンの機会を失ったことが、この学生の 3 年次でのゼミでの学修にどのように影響しているのかを確認しつつ、来年度のゼミにおいて、そうした内容を補完していくことが、今後の課題であろう。

オンライン授業を通じて、授業担当者へのメールなどでの個別質問や、授業担当者側からの提出物への個別指導・フィードバックを行うことが比較的容易にできたため、学生の取り組み方によっては、通常授業時よりもきめ細かな指導ができたケースもある。が、やはり、演習形式の授業は、対面授業を中心に構成すべきものだと感じた。なお、令和２年度の「日本学基礎演習Ｉ」の授業担当者振り返りも早急に実施しつつ、令和３年度の当該科目は、遠隔授業も取り入れた年度の２年目になり、また、クラス編成も４クラスへと変更が追加されているため、授業期間内においても、各クラス担当者間での情報共有を密に行い、遠隔授業、オンライン授業という制約がある中での演習科目のあり方を模索したいと考える。

（文責：南谷美保）

3. 授業相互参観について

例年、日本学科では冬学期の全学的取組に加え、夏学期にも学科独自に相互授業参観を実施してきたが、今年度はコロナ禍により夏学期授業が全面リモート化されたため、実施を見送

らざるを得なかった。冬学期には、FD 委員会（10 月 20 日）にて示された指針に沿って相互授業参観を行った。

Plan（計画）

（1）ねらい

本学科が力を入れている教員養成に関する科目、また近年授業に求められている課題に関する科目を公開し、授業内容や方法について教員相互に知識技術の研鑽に資する。

（2）相互参観の実施期間

【冬学期】: 令和２年年 11 月 16 日（月）～12 月 15 日（火）

（3）公開する授業

教員は自身の担当科目のうち、下記に該当する科目を１科目以上公開する。

＊教免関係の科目（教職に関する科目、教科に関する科目）

＊ICT 利用、AL 活用など、新たな手法を導入して運営されている科目

＊その他の科目

（4）授業参観までの手続き

公開科目一覧をもとに科目を選び、参観者と授業担当者との間で事前連絡をする。

（5）授業参観後の手続き

参観者は参観後に「参観シート」に記入し、速やかに授業担当者に提出。授業担当者は「参観シート」をもとに【評価できる点】【改善すべき点】【検討を要する点】【今後への展望】などの観点から自己評価をしておく。

（6）合評会およびその後の手続き

合評会では、授業担当者が「参観シート」をもとにした自己評価を述べ、その後、適宜質疑応答を行う。合評会後、授業担当者は合評会での議論も踏まえて「自己評価シート」を作成し、ＦＤ委員に提出する。ＦＤ委員は相互授業参観のエビデンスとして一定期間、「自己評価シート」を保管する。

Do（実施）

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾞ	参観有無
麻生迪子	11/16, 30, 12/14	月	2	日本語教育学概論Ⅱ	5-210	○	○
今田健太郎	11/25、12/9	水	2	音楽文化論	4-263	○	○
坂田達紀	12 月 16 日	水	4	大学基礎演習Ⅱ	4-406	○	
高橋美奈子	12 月 9 日	水	2	講読Ⅰ（日本語学）	4-215	○	○
田島智子	12 月 16 日	水	4	講読Ⅲ（古典文学）	6-206	○	

戸田文明	11 月 30 日	月	2	日本史研究Ⅱ	4-412		○
松山雅子	11 月 25 日	水	4	教科教育法Ⅳ	4-314		○
南谷美保	11 月 26 日	木	1	講読Ⅳ（日本文化）	4-414		○
源健一郎	11 月 16 日	月	4	教科教育法Ⅱ（国語）	4-408	○	
森嶋俊行	11/24-12/15	火	5	観光文化地理	6B-351	○	○
矢羽野隆男	12 月 14 日	月	4	教科教育法Ⅱ	4-408	○	○

Check（評価）

（1）参観者による参観シートの記入・送付

参観後、参観者は参観シートに感想・問題点を記入。授業担当者に送付する。

（2）授業担当者による参観シートの分析

授業担当者は参観シートの内容を把握。「評価できる点」「改善すべき点」「検討を要する点」「今後への展望」を分析して、合評会に備える。

Act（改善）

（1）合評会の実施

1 月 22 日（金）にオンラインによる学科会議に合わせて合評会を実施した。参観があった科目について、意見を交換。指摘された問題点について、他の科目にも共通する事例を上げながら改善案を出し合った。たとえば、グループワークをどう活用するかが議論になった。

（2）「自己評価シート」の提出

合評会では有意義な意見交換がなされたが、その終了後に求められる自己評価シートの提出は一部教員にとどまった。本来であれば、合評会実施のエビデンスとして自己評価シートを保管すべきところ、未徹底に終わってしまった。また、各教員の了解が得られれば、自己評価シートを相互に共有することで、相互授業参観の意義はより深いものにもなるだろう。自己評価シートの提出の徹底と共有については次年度の課題としたい。

（文責：田島智子）

4. 学科独自の取り組みについて

（1）「パフォーマンス実践演習」

Plan（計画）

この科目は、学生の対面コミュニケーションの力を伸ばすために、「ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習」（シラバスより）である。例年、夏休みの４日間に、いわば「合宿」のようなかたちで実施され、また受講した学生の満足度も比較的高い状態が続いている。シラバスを執筆した当初の計画は、ここ数年のルーティンを踏襲しつつ、洗練させてきたもの

であった。

Do（実施）

上記の授業内容から分かるとおり、この科目の教育効果を引き出すためには、対面受講が必要不可欠である。令和２年度に入って急速に感染拡大した新型コロナウイルスのため、授業内容の変更が検討されたが、最終的には感染拡大を防止する措置をおこなったうえで、対面で実施することとした。すなわち、１．マスク装着の徹底してもらうこと、２．密を避けて広い教室を用い、声を出すときには４～５メートル離れること、３．発熱等があれば強制的に欠席してもらうこと、４．身体を互いに接触させるようなアクティビティは避けること、である。

Check（評価）

受講した学生の全体的な満足度は、おおむね高い状態ではあるものの、例年より少し低くなっているように思われる。その原因はいくつか考えられるが、大きく２つほど挙げられよう。

ひとつは、ヴォイストレーニングについてである。発声をともなうため、広い空間が必要だろうということで体育館にて実施されたが、担当した特別講師が遠慮したのか、意外に声を出す機会が少なかった。学生にとってもアクティビティの意図を理解しづらかったように思われる。

もうひとつは、マスクの装着を徹底したことである。例年であれば、１～２日目には受講者同士が打ち解けて、実習に積極的に参加する様子が見られるが、今回はそうした雰囲気が薄かった。身体表現の特別講師の方と話し合った結果、マスクの装着により、互いの表情が分かりづらく、打ち解けることを阻害しているのでは？という仮説が導かれた。たしかに、他人の笑顔を見ることで気持ちが打ち解けていくものだが、マスクがその笑顔を隠してしまっている。マスクが、対面コミュニケーションに悪影響を及ぼすことは、今後無視できないことだと思われる。

Act（改善）

ひとつめのヴォイストレーニングの特別講師については、令和３年度には変更される予定である（そもそも令和２年度の方がピンチヒッターであった）。このため、ヴォイストレーニングの件に関しては、改善が見込まれるだろう。

ただ、マスク装着の件については、依然として今後の課題である。たとえば、適当な距離をとってマスクをはずし、表情を見せるといったアクティビティを導入したり、逆にマスクを前提にした表情の作り方を検討したりといったことが 考えられるだろうか。令和３年度になにかしら試みていく必要があるだろう。

とりわけ後者の課題は、これからの対面コミュニケーションを検討するうえでも重要な試金石になると思われる。

（文責：今田健太郎）

(2) 「日本学インターンシップ演習」

Plan（計画）

2020 年度より、3 セメスター対象の実践科目として、日本学インターンシップ演習を実施

した。学生が、日本語や日本文化を学ぶという学科の特性を活かしたインターンシップを体験することを通して、①自らの進路について考え、自覚的に学ぶきっかけをつくる、②その後のキャリア形成への取り組みに生かす契機とする、③組織の仕組みや仕事の実態にふれることにより、社会人としての心構えや技能・知識を習得する、などを目的とした。

冬学期の単位として認定することとし、①事前学習（冬学期開始前に集中講義）、②インターンシップ実践（9 月から 12 月）、③事後指導（インターンシップ実践後の礼状の書き方を初めとする個別指導と 2 月の集中講義による発表）に分けて行うこととした。

Do（実施）

受入先の開拓と学生の配属

キャリアセンター・エクステンションセンターなどの紹介も得て、日本学科の「学び」の特性を活かすことの出来る企業・機関を選び、依頼した。結果として、お願いしたほとんどの企業・機関からご承諾を得た。

学生の配属については、学生アンケート（8 月上旬に実施）により、企業・機関に振り分けた（9 月初旬）。

・受入先一覧	Ｊ国際学院、アーク日本語学校（日本語学校）	各 2 名
	はびきの市民大学・みのりの里（市民大学の企画・運営）	2 名
	藤井寺市立藤井寺中学校、羽曳野市立誉田中学校	4 名、2 名
	藤井寺市役所・羽曳野市役所（観光関係部署）	各 1 名
	藤井寺市立図書館	2 名
	藤井寺公立学校図書館	2 名
	ジェイ・ライン（広告代理店）	2 名
	ワークアカデミー（企画運営）	2 名
	遊文舎（印刷・出版）	2 名

・実際の授業

事前学習を集中講義（2020 年 9 月 10 日・11 日）で実施した。実施に際しては、zoom を用いてオンラインで行った。取り扱った内容は、インターンシップの心構え、基本的ビジネスマナー、会社・企業研究などである。

・インターンシップ実践

9 月～12 月の間、各企業・機関において 8 時間×5 日間就業体験を行った。なお、就業体験評価として、各企業・機関の担当者にルーブリックによる評価をしていただいた。

・事後指導、成果発表会

実践終了後、個別に礼状作成、ビジネス文書の書き方の指導を担当教員が指導した。

成果発表会は、2021 年 2 月 2 日に対面と zoom 使用というハイブリッド形式で行った。

成果発表会には、実習先にも参加呼びかけをしており、7 か所の実習先からの参加があった。

Check（評価）→Act（改善）

全体発表会終了後のアンケートでは，多数の受講生から「学ぶことが多かった」「成長が感じられた」「インターンシップが授業で行われているので参加しやすい」などの肯定的な

評価を得た。同時に，成果発表会を zoom 配信するハイブリッド形式で行うことで，外部受け入れ先関係者にも実習生の成長を見ていただくことが可能になった。zoom を用いることで，閉じた成果発表会ではなく，学生にも刺激を与える主体的な発表会になったと言える。しかし，反省点として，発表資料の作成時間が短時間であったため，発表技術が拙い実習生が散見した。外部受け入れ先関係者を招いての開かれた成果発表会を行う上では，学生の発表技術の向上が喫緊の課題である。その一方で，「教員と学生間の情報伝達がうまくいっていなかった」や「担当する教員によって提出物や提出期限が異なることがあった」などといった学生からのクレームもあった。どのように本授業を進めるかということについて，担当教員も手探りであったため情報伝達の不備や指示の不統一といったことが生じてしまった。次年度は，担当教員間で詳細にコミュニケーションを取り，成果発表会に向けて十分に発表練習を行うことで、本学の教育の成果が外部受け入れ先に周知できる授業を目指したい。

（文責：麻生廸子・戸田文明）

(3) 教員採用試験対策

教職支援委員会の年間計画を前提に、それと並行する形で、R2 年度も、教職支援委員（源）・松山、および教職教育推進センター職員の協力を得つつ取り組みを進めた。夏学期は教採受験に向けて４回生の指導を中心に、冬学期には、教採合格者を中心とするＳＡ4 回生の主体的な取り組みとして、日本学科独自の「キョーサイ合格プロジェクト」を運営した。ただし、コロナ禍のため、夏学期の支援は限定的なものとなった。

Plan（計画）

R1 年度冬学期に実施したキョーサイ合格プロジェクトを受けて、R2 年度においても、夏学期には新４回生による自主勉強会への支援、専門試験対策講座の実施を予定した。また、年度初めに、全学年を対象に教職志望調査を実施し、教職志望者リストを作成する準備も整えていた。冬学期には、４回生の教採結果が出揃うのを待って、今年度もキョーサイ合格プロジェクトの実施、３回生自主勉強会への支援、専門試験対策講座の実施、卒業生教員が勤務する学校に出向く見学会の実施を予定した。

Do（実施）

・前述の通り、夏学期授業の全面リモート化に伴い、教採対策も大幅に縮小せざるを得なくなった。専門試験対策講座は中止。自主勉強会は、教職支援委員が教室予約の上、実施開始時・修了時の感染対策の確認し、事後に消毒作業に取り組むことで継続した。
・冬学期に対面授業が再開されたので、10 月中旬、夏学期コロナ禍のためままならなかった教職志望リストを更新し、IBU.net から、次年度の教員採用試験受験に向けて動き出す３回生に向けて情報発信を行う旨を通知し、注意喚起を行った。
・１・２回生には、４回生の教採結果や３回生の取り組みを随時、本学公式ＨＰ学科ブログに記事化したものを IBU.net を通じて周知し、問題意識を持たせるようにした。
・11 月から「キョーサイ合格プロジェクト」開始。ＳＡ学生（教採合格者 7 名、講師登録者 2 名の計 9 名体制）が、偶数・奇数の登校日に２チームに分かれ、、１回につき、２～３名のＳＡが後輩学生の指導に当たることとした。実施日程は、以下の通り。

11 月 27 日(金)4 限（ハイブリッド）SA 自己紹介・教材受験体験談スピーチ（源）

＊介護実習等と重なり不参加となった学生は、Zoom 録画配信によってスピーチ視聴。

12 月４日(金)4 限（偶数対面）各自治体の試験内容や特徴について（源）

12 月 11 日(金)4 限　コロナ禍情勢悪化により休講

12 月 18 日(金)4 限（偶数 Zoom）志望動機・自己ＰＲ・エントリーシート作成（松山）

12 月 25 日(金)4 限（奇数 Zoom）4 日・11 日と同内容（源）

1 月 8 日(金)4 限（偶数対面）４回生による実技試験見本（源）

1 月 15 日(金)4 限（奇数対面）４回生による実技試験見本（松山）

1 月 22 日(金)4 限（合同対面）SA による個人面接の実地指導　（松山）

1 月 29 日(金)4 限（合同対面）SA による面接・場面指導・模擬授業の実地指導（源）

・２月以降は、教員の立ち会いなしに、ＳＡ学生中心に３回生とキョーサイ合格プロジェクトに取り組んだ。２月中は月・木・金、３月中（第３週まで）は月・火・金、いずれも１・２限に実施。教職支援委員が教室予約し、適宜、取り組みの様子を確認した。

・２月中旬以降、キョーサイ合格プロジェクトが実施される日を中心に、３限に専門試験対策として古文（源）、現代文（松山）の講座を設定した。実施日程は以下の通り。

2 月 15 日(月）3 限　古文（源）

2 月 18 日(木）3 限　現代文（松山）

2 月 19 日(金）3 限　古文（源）

2 月 25 日(木）3 限　古文（源）

2 月 26 日(金）3 限　現代文（松山）

3 月 1 日(月）3 限　古文（源）

3 月 12 日(金）3 限　現代文（松山）（不都合な学生が多く中止）

3 月 15 日(月）3 限　現代文（松山）（不都合な学生が多く中止。別途、資料配布）

3 月 19 日（金）3 限　古文（源）

Check（評価）

・コロナ禍にあって教採を勝ち抜けた４回生は、自信をもって後輩に自らの経験からの学びを伝授しようと主体的に工夫を重ねていった。このプロジェクトは、対象となる３回生に帰する日本学科独自の取り組みであるが、それ以上に、４回生自身が、自分の学びの方法、学びの過程を振り返る機会をもつことで、卒業後の４月から学校現場で教える立場に立つ自分の言葉に責任をもつ構えのようなものを自然と試されていった。就職のための貴重な準備期間としても機能していた。

・教職を志望する３回生にとっては、身近な経験者の言葉を通して、教職に就く者として何を学んでいくべきか、社会的な評価とは、どういうものかを、徐々に学んでいく場となった。

・専門試験対策（古文・現代文）においては、試験のために、何をどう準備したらいいのか迷っている３回生にとって、一人学びへの手引きとして機能した。

Act（改善）

・コロナ禍ゆえ、夏・冬学期の学びを補完する冬学期の授業参加と平行する形で、教職への準備も始めざるを得ないという特殊な状況下であった。そのため大学生としての学びが、昨年度よりは、基盤が揺らいでいる感があった。コロナ禍での教職対策を考えて

いくにあたり、授業の内容と専門試験対策を、これまで以上に相補的に位置付けていく必要がある。

・専門試験対策に 2 回生の希望者が参加した。熱心に参加し意欲喚起に繋がったという効果は認められたが、やはり基礎学問を身に付ける段階の２回生には、狭義の試験対策のように受け取りかねない難しさもあり、今後は、慎重に取り運ぶべきだと考える。

・５年目となったキョーサイ合格プロジェクトの実施については、一定程度、安定してきたが、その主体となった３・４回生自身が取り組みをどう評価しているか、把握できていない。R3 年度以降、アンケート実施等を通じて把握する必要があろう。

（文責：松山雅子）

以上

国際キャリア学科

1．はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2 年次では語学力の向上に重点を置き、さらに 3 年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの 3 領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4 年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1）1 年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2）2 年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」・「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3 年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の 3 つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3） 3 年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」、「異文化理解」、「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEIC や英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。したがって後述するが、このような授業を通した指導に加えて学生の自主的学習をサポートする e-learning を希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光領域の拡充に取り組むこと

で、使うための英語を実践的に学ぶ取り組みに参入している。また、地域連携の取り組みについても学生の希望をもとに導入していく方向である。

今後の課題として、コロナ明けに再始動する留学、語学研修、インターンシップ等のプログラム内容の検討および、コース毎の特性を生かしたプログラムの構築が挙げられる。

２．大学基礎演習について

(1) 大学基礎演習Ⅰ

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4 年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習Ⅰを通じて、国際キャリア学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明し、毎回の講義ではビジネスで必要な英語の単語を暗記する演習を行っている。大学基礎演習Ⅰで学ぶビジネス英単語は 300 語あり、これらを 1 年生から暗記することで、TOEIC の点数向上とビジネスやキャリア教育についての基本的な知識を習得させることが目的である。

(2) 大学基礎演習Ⅱ

大学基礎演習Ⅰで学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミックスキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2 年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習Ⅰでも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミックスキルなどの授業については 3 人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどういう方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

３．授業相互参観について

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	中継あり(○)	合評会
1	国際	奥羽　充規	12月7日	月	3	英語教育論	4-416	○	授業終了後
2	国際	神野　雅代	12月2日	月	3	キャリア英語(アドバンスト)	6-213	なし	授業終了後
3	国際	中井　誠	12月11日	金	1	グローバルファイナンス	4-262	○	授業終了後
4	国際	深見　環	11月25日	水	4	貿易実務Ⅱ	4-414	○	授業終了後
5	国際	山﨑　英一	12月9日	水	1	Extensive Reading初級II	4-259	○	授業後教室ないし講師室にて
6	国際	恵木　徹待	12月9日	水	1	国際NPO・NGO論	4－406		授業終了後
7	国際	李　美子	12月11日	金	2	中国語Ⅱ	4-214		授業終了後
8	国際	柴田　かよ子	12月7日	月	5	キャリア英語入門Ⅱ	4-207	○	授業終了後
9	国際	ロバート　ケリガン	11月27日	金	2	ベーシックコミュニケーションⅢ	4-306	○	昼休み(教室で)
10	国際	上野　舞斗	12月15日	火	1	英語音声学	6-254		12月15日　4限

(1)「ベーシックコミュニケーションⅢ」　担当　ケリガン講師　　11 月 27 日　金２　教室：4-306

参加者：山崎英一

①授業に関して

B 形式(自宅での宿題週と登校での教室での作業週の交互)で 2 週間が一つのまとまりとなる授業展開である。４技能中、リーディング・ライティングに注力する授業で、参観日は主にリーディングを扱う回であった。学科必修(2 回生)、レベル別で C レベルのクラスである。

良い意味で目立った点としては、①読書速度の記録シートの配布と利用がある。これは、分速 100 語以上範囲の速度と正答数とを記録でき、成長・改善を自覚できるものとなっている。実用的な速度や正答数の説明も過去に行っているそうで、速度と理解度の改善効果を各自が意識、検討できるのは受け身的な読みではなく積極的な取り組みにつながろう。また、②学生に相方の音読のできを相互に評価・記録させており、他者の状況に意識させることで、より積極的な絡みと発展が期待でいると感じられた。

テキストをメインとするのではなく、別教材や Google Classroom を積極的に利用するなど、熱意ある工夫が感じられた。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して

コロナ及び体調懸念等から８名出席であり、なかなか盛り上げにくい人数ではあったが、少数ということや担当者の積極的声掛けもあってか皆真摯に作業に取り組んでいた。

設備的には、やむをえないこととは思うが、廊下側の戸口は大きめだが、反対側の窓が小さいため、換気と暖房との両立が難しいと思われた。

(2)「英語教育論」　担当　奥羽准教授　　１２月７日　月３　教室：ZOOM
参加者：上野舞斗、恵木徹待
①授業に関して
　英語教育学の基礎の基礎を扱う内容の授業で、当該授業のトピックは「教師の役割」についてでした。授業では、「教師の役割とはなんだろう」という担当教員による発問の後、教員採用試験に合格した新卒教員のインタビューから、教師の役割を考え、学んだことや考えたことをブレイクアウトルームで話し合い、代表者が全体でシェアするという形がとられました。その後、授業担当者による補足説明がなされました。当該授業で担当教員自体がよく「促進者」としての教師の役割を認識していることが伝わり、担当教員が一方的に講義をするのではなく、学習者に気づきを与え、そして話し合いの中でこれを共有するというスタイルがとられており、「なすことによって学ぶ」ということが実現された授業で学ぶところが多くありました。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して
　英語教員を志望する２回生や、3・4回生が受講生で、皆同じ志をもった仲間ということがあって、議論や発表も主体的に行われていました。これは学生はもちろんですが、授業方式によるものも大きいと思います。
　担当の先生は、「ブレークセッション」の活用など、ZOOMの機能を余すところなく、使用されており、「オンラインによる双方向授業」をうまく成立させていた。学生も非常に積極的に講義に参加していたと思う。

(3)「キャリア英語入門Ⅱ」　担当　柴田講師　　１２月７日　月５　教室：Teams による（4-207）
参観者：深見環、神野雅代
①授業に関して
　TOEICテストの流れに沿ったテキストを用いており、リスニングから文法、リーディングまで、幅広く網羅した指導を丁寧にされていた。特に文法では、わかりやすい事例を出しながら、非常に理解しやすく授業をされ、学生のやる気を引き出していた。
Teamsを利用したオンライン授業であるものの、リスニングの授業も実施できており進捗度合いは対面よりも若干遅くなるということであったが、対面と変わらない授業を提供されていたと思われる。学生も、先生に素直に何でも聞いている様子で、双方向授業がしっかりできていると感じられる授業であった。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して
　遠隔授業であるものの、ほとんどの学生は、先生の質問にしっかり応答しており、リスニング教材の内容も理解していたと思われる。Teamsの手をあげる機能や資料閲覧

の機能なども使いこなしており、ソフトを工夫して使用していると感じられる授業であった。

(4)「Extensive Reading 初級Ⅱ」　担当　山﨑教授　　12 月 9 日　水 1　教室：ZOOM による遠隔
参観者：奥羽充規、中井誠
①授業に関して
　予習を事前に提出させて、それをもとに参加することで平常点とするシステムは中々良い方法だと思った。授業の開始時点の最初の設問が、「今回の 11 章で最も重要な情報は何だと思いますか」というのは、毎回のルーティーンにすることで学生の授業への取り組みや意識を高めることに役立つと感じた。また、他の学生が提出した解答を見ながら自分が考えるベストアンサーを選び、そのアンサーに含まれる情報を検討していく作業は興味深いものだった。参観者もブレイクアウトの部屋に入って学生の議論に入ったが、自然とそれぞれの解答と意見を述べて議論していたが急な参観者のコメントにも臨機応変に答えており、普段から積極的に議論していることがわかる。その後、英文の解説が先生から行われたが、一通り行った後、もう一度最初の設問に戻り、英文に対する理解の確認を再度行い、授業のまとめとして非常にわかりやすい結びだった。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して
　英語のレベルが最上級のクラスの学生が履修していることもあり、まじめに予習し討論もきちんと出来ていたように思われる。Zoom の機能を利用して、学生が自ら議論できるような環境を提供し、その後、教員が物語の内容や英文法について説明していた。学生も真面目に授業に取り組んでいると感じられた。

(5)「貿易事務Ⅱ」　担当　深見教授　　12 月 9 日　水 4　教室：Zoom を使用（大学からの指示により対面無し）
参観者：柴田かよ子
①授業に関して
　Zoom を利用して授業が行われた。教員は共有画面を使用し、パワーポイントを学生に見せ内容説明をされていた。その後、復習プリントをカメラで写して学生に当てながら解答を聞き、一緒に答え合わせをする流れであった。ビデオの視聴もありメリハリのある授業であった。パワーポイントの準備、ビデオの録画、プリントの準備など授業を行うにあたり、準備に時間をかけておられることがわかった。ビデオの放映も学生が少し疲れてくる中盤に視聴時間を設けておられたのも良かった。私自身の授業もそうであるが、オンライン授業でビデオオフの状態であると、学生の状態がわからないために、学生に

当てて返事の無い場合がある。その場合の対処の仕方も教員全員のこれからのテーマであると思う。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して

学生はプリントの答え合わせの際に当てられ解答をしていた。Zoom でビデオはオフであったので、見た目の態度はわからなかったが、当たるときちんとした口調で受け答えをしていた。

(6)「グローバルファイナンス」　担当　中井教授　12 月 11 日　金 1　教室：Zoom ミーティング

参加者・李美子

①授業に関して

教師としてのきちんとした身だしなみ、また背景もまるで教室で学生に授業を行うような雰囲気を作っていました。また、学生の出席のチェックをしたりし、瞑想もきちんと行い、受講者の学生にとっては学習雰囲気をしっかり作ってあげていると感じました。

授業資料は PPT 資料を使用しましたが、日本語文と英語文両方をあげながら、ユニクロやサントリ等株の上場をした会社と上場してない会社をあげながら株式の知識をわかりやすく説明していると感じました。パワーポのデザインも、文字のサイズなどもちょうどよい感じで、しっかり授業の準備をされているように受けられます。

学びたい点：

１、オンライン授業であっても、教室で授業を受けられるように雰囲気を作る事。

２、パワーポイント資料作成に工夫し、学生が授業の内容を理解しやすくように工夫した点。

３、英文を読み上げながら解釈を行い、学生の英語能力の向上にもつなげた点。

気づきの点：オンライン授業の制限もあるかと思いますが、学生への質問、学生の発表などによる双方向授業が行われてない点です。

②学生の授業態度や施設・設備などに関して

音声、画像とも良好で、違和感もなく、普通に授業が受けられている。

学生の質問がありませんでした。

４．学科独自の取り組みについて

(1)『てんしば」プロジェクト

「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。

国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度は学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画したが、令和 2 年度は活動規模を縮小し、新しい企画の計画などできる範囲の活動を実施した。

(2) Jump Start English (JSE)

Jump Start English (JSE)は、国際キャリア学科の学生達が、AO 或いは推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している英語教育プログラムである。学生が中心となって高校生に英文法とコミュニケーションを基礎から教えるというもので、毎年実施されている。教える学生も教わる高校生も毎年メンバーが変わるため、講義の方法や話し方などについては、国際キャリア学科の全教員が、交代で毎回本プログラムに参加し、学生に指導している。本プログラムを通じて、入学前に英語の基礎力が身につくことに加えて、新入生同志が友好を深めることも可能で、毎年好評を得ている。令和 2 年度はコロナ禍の為、ハルカスでのサテライトキャンパスでの対面実施ではなく、ZOOM を通してオンラインで実施した。

(3) TOEIC ゼミ

TOEIC ゼミとは、柴田講師が中心となってボランティアで毎週木曜日のお昼休みに、学習意欲のある数名の学生向けに実施している TOEIC や英検受験のための講座である。この講義を受講した学生の中には、TOEIC で 800 点以上を獲得した学生や英検準 1 級に合格した学生もいて、令和元年度においては、高得点を獲得した学生が、これから高得点の獲得を目指す学生に個別指導することで、学生同士の協力支援体制が確立されてきている。

(4) 海外研修プログラム（スタディ・ツアー）

国際キャリア学科の教員が中心となって取り組んでいるスタディ・ツアーである。カンボジアやラオスなどアジアの貧困国を訪問し、現地の小学生と友好を深め、現地でボランティア活動などを行う。国際キャリア学科の教員が、学生を引率し、事前・事後の研修も含め、参加する学生の指導を行っている。学生たちは、現地で様々な体験をすることで、異文化を理解するための能力を養うことが可能となる。令和２年度においては、ラオスのサービスラーニング・プログラム、カンボジア・スタディ・ツアーのどちらのプログラムもコロナ禍の為、実施出来なかった。今年度はどのようなプログラムを開催していくのかは、コロナウィルスの終息状況をもとに判断したい。

(5) ニュージーランド留学 100 万円奨学金プログラム

国際キャリア学科が実施している 100 万円奨学金プログラムとは、国際キャリア学科の学生が毎年ニュージーランドに 6 名～10 名（最大）の学生が留学し、オークランド大学の付属の英会話スクール（ELA）で 3 月から 6 月までの 4 か月間の語学研修に加えて、ニュージーランドにおいて、インターンシップ（1 か月）を経験させるというプログラムである。

本プログラムは、参加を希望する学生の中から筆記試験と面接を行って学生を選抜し、選抜された学生達は自己負担 50 万円で本プログラムに参加できる。本プログラムは総額で 150 万円～170 万円程度（為替レートの変動による）の費用がかかるものの、大学がその差額（100 万円～120 万円）を奨学金として負担している。本プログラムを終えて帰国した後、TOEIC の勉強に励み、卒業するまでに 730 点突破を目指すことになっている。

令和２年度においては、コロナウィルスの全世界的パンデミックにより 3 月末(

滞在 3 週間程度）には帰国した。その後、帰国後の学生への学びの代替として、ベルリッツ語学学校の TOEIC 研修を提供した。

（６）英語による観光ガイド研修会

全国通訳案内士を外部講師として 3，4 回生の学生を対象として藤井寺を英語で観光ガイドしていただき、その活動に生で触れることを昨年に引き続き、体験した。コロナ禍もあり、回数としては１回実施。学生には、日本文化に触れること、ガイドすること、英語を使い楽しんでもらい、喜んでもらう活動に直に触れ、様々な学びと気づきを得られる機会を与えた。現状、多くの学生が観光業界に興味関心を持っており、次年度に地域共創プログラムの授業を開始するための取り組みである。

（７）キャリアコミュニケーションセミナー実施

学生の大学生活でのやりがいを高める仕組みとして、より目標を明確にするために早期（1 年生時分）からコミュニケーションセミナーや、就職準備ガイダンスなどを外部講師を招いて実施し、学生の大学生活における動機付けや、目標設定への援助を行った。特にコミュニケーションセミナーでは「コミュニケーション」の取り方についてレクチャーと実践を織り交ぜることで、次年度以降の就職準備ガイダンスへの足場作りとした。

（８）TOEIC　e-learning プログラムの導入

1 回生の冬学期、2 回生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自律的に学ぶ学生への動機付けを行った。そういった取り組みの結果、昨年は TOEIC のスコアで 800 点以上をクリアした学生が 15 名程度でており、学生の意識に大きな変化をもたらした。令和 2 年度はコロナ禍の為、冬学期から募集を実施した。

（９）ツアーコンダクター研修の実施

国内旅程主任者資格を取ることができる研修を近畿ツーリストと提携して実施した。観光地でのツアーコンダクター実務を実際に体験しながら学ぶプログラムで、現役の添乗員にサポートを受けながら観光業界・観光地・日本文化・添乗員業務等について学ぶことができるプログラムである。夏休み期間中の８月に実施した。

５．その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力において実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史･文化･政治･経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協同しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

FSD 活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

社会学科

１．はじめに

令和 2 年度の授業は、新型コロナウイルス感染症対策に対応した大学の方針に従って大きく様変わりした。従来とはまったく異なる授業形態が求められた。大々的な遠隔授業の実施は、教員と学生にとって初めての経験であった。遠隔授業をどのように評価し、何が課題なのかを明らかにする作業は、今後の大学教育のあり方を検討するうえで極めて重要になるであろう。

さて、令和 2 年度夏学期の授業開始日は、4 月 4 日(土)に予定されていたが、緊急事態宣言の発令によって 4 月 20 日(月)に変更された。それに伴い、履修登録期間も 4 月 17 日(金)～24 日(金)に変更された。その後、教室等で行う通常の対面での授業開始は、5 月 9 日(土)からと決定され、4 月 20 日(月)～5 月 8 日(金)まで授業は教室では行わず、IBU.net（学生ポータルサイト）を活用した形で実施することになった。しかしながら、4 月 24 日(金)に教務部から、夏学期全期間を遠隔授業中心に実施する旨が伝えられた。

遠隔授業の実施にあたり、教務課からは以下の方法が提示された。

① 「教材、資料」の配信＋「質疑応答、課題提出」など：教材や資料などによる学修を一定時間自宅において行い、メールや掲示板等を用いた質疑応答や課題提出を行うような授業方法。

② 「動画配信」＋「質疑応答、課題提出」など：事前に撮影した動画配信による学修を一定時間自宅において行い、メールや掲示板等を用いた質疑応答や課題提出を行うような授業方法。

③ （のちに加わった）ビデオ会議アプリケーションを活用した同時双方向授業：リアルタイムで配信される動画を用いた講義や双方向での議論を行う授業方法。

同時双方向授業のツールとして Microsoft Teams を教務課が当初推奨していたが、社会学科では、各教員が試行錯誤するなかで Zoom の活用が一般化していった。教員にとっても学生にとっても初めての経験であったため、かなりの混乱が生じた。学生の場合には、受講するための情報機器の有無やネットワーク環境にばらつきがあり、そのスキルにもかなりの差があった。また、教員の側でも、遠隔授業に対応したスキルを新たに身につけなければならず、同時に学生たちの状況に対応した教育方法をとる必要に迫られた。

冬学期の開講日は例年通りに戻ったが、学籍番号によって登学する学生を 2 つのグループに分け、新たに 2 つの授業方式が導入され、各教員が選択することになった。A 方式では登学グループが大学の教室での対面授業を受講し、もう片方のグループは同時中継で Zoom などによって遠隔授業を受講する。B 方式では、登学グループが大学の教室での対面授業を受講し、もう片方のグループはオンデマンドで受講し、課題に取り組むため、教員は 2 回同じ授業を行うことになる。A 方式を採るにせよ B 方式を採るにせよ、教員間で授業の経験を交流することによって、より適切な授業のあり方を模索する必要がある。

２．「大学基礎演習」について

「大学基礎演習Ⅰ」の概要は次のとおりである。「この科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目標としています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになりましょう。大学では、高校までとは違ったアクティヴ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

また、「大学基礎演習Ⅱ」の概要は次のとおりである。「この科目は、大学における学修と生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標しています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティヴな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題をとりあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

以上の授業概要に見るように、「大学基礎演習Ⅰ」では、大学での学びが高校とは異なる点を学生自身がアクティヴに学ぶ必要があることに置き、この視点から社会学科の学生として求められる基礎的知識・技能・態度の修得を目指している。また、これを通して、社会学科の学生としての所属意識を形成し、将来の「生き方」を考えていく契機としている。これに続く「大学基礎演習Ⅱ」では、学生自身のアクティヴな学びを具体的な社会問題に即して、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとしている。

これらを踏まえた「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の到達目標は、①四天王寺大学社会学科に所属して主体的に学ぶ意義と課題を把握する、②大学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける、③大学卒業後の進路など、自分の将来を社会との関係で考える、④教員や友人との適切な人間関係をつくる、である。

これらの到達目標を実現するための「大学基礎演習Ⅰ」の授業内容であるが、合同授業を基本にして、それを展開していく形式を採っている。第１回から第15回までの流れを示すと次のようになる。

第１回：履修指導
第２回：本学での学び①　建学の精神
第３回：本学での学び②　図書館の使い方

第 4 回：本学での学び③　パソコンの使い方
第 5 回：【学科合同】　先輩の話
第 6 回：レポート①　レポートの書き方
第 7 回：レポート②　ミニレポート作成
第 8 回：レポート③　ミニレポート講評
第 9 回：【学科合同】　映画『ザ･コーヴ』鑑賞
第 10 回：【学科合同】　ドキュメンタリー『ETV 特集　鯨の町に生きる』鑑賞
第 11 回：ディスカッションの準備①　資料の収集
第 12 回：ディスカッションの準備②　資料の作成
第 13 回：ディスカッションとレポート
第 14 回：【学科合同】　大学卒業後のキャリア
第 15 回：レポート講評とまとめ

しかしながら、令和 2 年度は前述のように、ほとんど遠隔授業になってしまったために、合同授業は中止になった。また演習内容も、各授業担当者に任されることになった。そのなかで、キャンパスツアー企画・実施したり、ゼミ生にオンラインで参加してもらうという試みがあったのは注目される。新型コロナ下での演習のやり方を考えるうえで、重要な参考になるであろう。

冬学期の「大学基礎演習Ⅱ」は、A 方式か B 方式かの選択はクラス単位で、担任が決めることになった。いくつかの補足事項を述べておく。

・木 2「和の精神Ⅰ」は、奇数・偶数グループ交互に登学することを原則とした A 方式であるので、同じ日の 3 限にある「大学基礎演習Ⅱ」も A 方式が無難である。しかしながら、対面と遠隔の両グループを同時に同じように教育できるのかが疑問。B 方式と折衷的に、同じような内容を 2 回ずつ実施するような方向性も考えられる。
・合同授業は実施しない方向。オンラインの合同企画があってもいいが、クラスごとに参加を選択する。

この年度の「大学基礎演習Ⅱ」は、1 回生にとっては初めての対面での演習となった。それを踏まえて、次のようなスケジュールを実施することにした。

09/16(水)~19(土)：履修登録
09/17(木)：2 セメオリエンテーション⇒履修指導
IBU.net のお知らせ(「大学基礎演習Ⅱ」のまとめ役)
IBU.net の「大学基礎演習Ⅱ」授業資料(各クラス担任が配信)⇒オリエンテーションのスライド／冬学期クラス別時間割モデル／自己目標シート
09/24① オリエンテーション：履修登録の確認と訂正指導、自己紹介、授業計画、遠隔で利

用するツールの使用法、クラス内コミュニケーション手段(LINE や Google Classroom など)の構築

9/30(水)・10/1(木)　履修登録訂正期間

10/01② オリエンテーション：履修訂正指導、個別面談のアナウンス(自己目標シートに記入して、面談時に提出)、各種ツールの利用法など

10/08③ 個別面談(PROG テスト結果返却)

10/15④ 個別面談(PROG テスト結果返却)

10/22⑤ 関心のある社会問題を調べる(調べ方レクチャー)、冬学期履修のフォローアップ

10/29⑥ 関心のある社会問題を調べる（調べ方レクチャー)、冬学期履修のフォローアップ

11/05⑦ 調べたことをグループでディスカッション

11/12⑧ 調べたことをグループでディスカッション

11/26⑨ プレゼンテーションに関するレクチャー

12/03⑩ 関心を集めたテーマに関連する映像資料視聴

12/10⑪ 別の関連映像資料視聴

12/17⑫ 各自プレゼンテーション（相互評価）

12/24⑬ 各自プレゼンテーション

01/07⑭ 各自プレゼンテーション⇒対面参加者がプレゼンするとすれば、偶数回？

01/14⑮ まとめ

なお、当初の授業計画は次の通りであった。

09/24① オリエンテーション：夏学期の振り返りと冬学期の学修計画

10/01② 社会問題について考えるために（１）：社会問題へのまなざし

10/08③ 社会問題について考えるために（２）：関心ある社会問題について調べる

10/15④ 社会問題について考えるために（３）：ディスカッション

10/22⑤ 社会問題について考える（１）：ゲスト①による講演

10/29⑥ 社会問題について考える（２）：意見発表とレポート作成

11/05⑦ 社会問題について考える（３）：ゲスト②による講演

11/12⑧ 社会問題について考える（４）：意見発表とレポート作成

11/26⑨ 社会問題について考える（５）：ゲスト③による講演

12/03⑩ プレゼンテーションの基本と準備（１）：振り返り

12/10⑪ プレゼンテーションの基本と準備（２）：テーマ設定と作業

12/17⑫ プレゼンテーションの基本と準備（３）：資料整理と情報収集

12/24⑬ プレゼンテーションの実際（１）：役割分担とリハーサル

01/07⑭ プレゼンテーションの実際（２）：実施と相互評価

01/14⑮ まとめ

３．授業相互参観について

（１） 授業相互参観の実施

令和 2 年 11 月 20 日(金)～12 月 17 日(木)にかけて、社会学科の専任教員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。遠隔授業と対面授業の併用（ハイブリッド型授業）を行っている今年度は、授業参観についても、従来通りの教室での参観に加えて、Zoom を用いた遠隔参観やオンデマンド教材の視聴など様々な形式で実施した。これにより、遠隔授業を学生がどのように体験しているかという視点を取り入れた授業参観を行うことができた。参観者は、①授業内容および②授業方法に関して、参観カードにコメントを記入し、授業担当者はそれに対する応答を記入した。公開科目とその担当教員、参観した教員は以下のとおりである。

担当教員と公開授業科目、参観教員一覧（敬称略）

担当教員	日程	公開授業科目名	教室	参観方法	参観者
五十川	12/9	環境問題論	5-301	対面+遠隔	
上野(淳)	11/26	人格心理学	2-311	対面+遠隔	津崎、平井
大関	11/30	社会意識論	5-210	対面	
太田	12/3, 10 12/4, 11	文化研究概論 文化研究概論	2-311 5-302	対面+遠隔	田原
四方	11/30, 12/7, 14	西洋史Ⅱ	6-352	対面+遠隔	五十川、中村、田中、三宅
須原	12/1	日本史概説Ⅰ	4-316	対面+遠隔	太田、茂木、山本
曽野	11/25	生涯学習概論	4-208	対面	
田中(晶)	12/4	心理学実験法	4-B157	対面+遠隔	
田原	12/9	演習Ⅱ	7-114	対面	
津崎	12/11	社会階層論	4-314	対面+遠隔	
中村	12/7	社会教科教育法Ⅱ	4-407	対面+遠隔	上野、四方
平井	11/20~12/17	社会病理学	YouTube	動画視聴	大関、曽野、藤谷
藤谷	11/30	宗教社会学	4-416	対面	
三宅	12/4	カウンセリング理論	4-316	対面+遠隔	
茂木	12/4	教育相談の理論と方法(中・高・養)	6-254	対面+遠隔	

（２） 合評会の開催

令和 3 年 2 月 4 日(木)の学科会議終了後、Zoom 上にて合評会を行い、15 名が出席した。

合評会にはすべての参観カードをまとめたものを資料として用いた。

授業公開者の評、参観者の評を行い、今後の FD、授業相互参観のあり方について議論した。ここでは、新たな手法であるオンライン授業に関する議論や意見交換の内容を中心に紹介することにしたい。

・オンライン授業では、学生が参加していても授業を聞いているかどうかまでは把握が難しい。ビデオをオンにさせて顔が見えるようにする方法もあるが、通信費やアクセス環境、住宅事情など個別の事情もあるため、一概に求めることは難しい。
・出席確認の手段としては、Zoom の機能のほかに「スグキク」などのオンラインサービスを活用する方法もある。
・授業に対する 1 年生の反応をリアクションペーパーの内容から見たところ、毎回の 90 分授業の途中で集中が切れるだけでなく、15 回授業の経過の途中で意欲が減退していく様子もうかがえ、オンラインに合わせた授業進行の工夫の必要性が感じられた。授業の中盤に Zoom の機能を用いて授業内容に関するアンケートやクイズなどを行ったり、配付プリントを穴埋め方式にすることで、学生の集中力も保たれ効果的であった。
・冬学期になると Zoom を使いこなすようになる学生も増えたため、ブレイクアウトセッションなどを活用した授業も可能となり、充実した授業が行えるようになってきた面もある。

A 方式のハイブリッド授業（対面授業と同時遠隔配信）において、担当教員が単独で授業の準備や学生対応を行うことにはかなりの無理があるという認識が共有された。また、授業における動画の配信を希望する声が学生から聞かれることについて、現時点で教員が行っているそれぞれの工夫を共有したが、素材によっては導入が難しく授業運営の手法に新たな工夫が必要であるという認識も共有された。

そのような中で、ゲストスピーカーをオンライン上に招き、施設や業務を紹介していただく動画を YouTube で公開したオンデマンド授業の事例については、「ゲストを巻き込む手法として参考になる」、「何度も視聴できるので学生にはよかった」、「配慮が行き届いた動画だった」と、オンラインを用いた新しい授業手法として好評だった。

忌憚のない意見の交換により、お互いの教授法に関する情報を共有化するとともに、さらなる授業改善に向けての試みについて学科全体で検討する機会となった。

４．遠隔授業で使用中のプラットフォームの聞き取り結果について

（１）使用感等について、学生からの意見

・Zoom、Google Classroom、IBU.net が使いやすい。課題提出は IBU.net が一番簡単で良い。色々なプラットフォームを使われると課題の締切の管理が困難。
・Google Classroom に統一してほしい。

・IBU.net に統一してほしい。(2 回生以上から多い意見、それなりに使いなれたものだからか？)
・IBU.net は課題を提出する際に Word などで作らなければならず、PC で作るならよいがスマホなどだと切替が大変。Google Classroom のほうがはるかに使い勝手がよい。
・YouTube だと観やすい。
・オンデマンド型の授業は、Zoom、YouTube が面倒でなくてよい。Google Classroom や Microsoft Teams は最初面倒で嫌だったが慣れた。
・新入生からはプラットフォームがいろいろあって大変という声はある。2 年次以上の講義科目（Zoom によるライブ授業）では、「スグキク」で受講生に授業方法について聴いてみても、満足の声が多い。

（２）教員側からの使用感等についての意見
・講義科目では、学生から要望があり、IBU.net の課題提出「コメント欄」に直接書いてもらうように、変更した。字数制限・時間制限はあるが、Word を使う人はペーストできるし、使わない人は直接入力できるし、見る側も CSV で書きだして一覧で見られるから、見落としもなくなった。ただレポートは難しいかなと思っている。
・プラットフォームとして Google Classroom を、オンライン授業は Zoom を使用している。最初、IBU.net でという学生の意見もあったが、課題の受取の連絡をこまめに送ったり、課題に直接コメントをつけて返却（Google Classroom はやりやすいので）をしており、今は学生からの不満はほぼなく、対応してくれているように思う。
・Google Classroom と Zoom で全ての授業を行なっている。Google Classroom は Office365 と組み合わせて使えばスマホで全て完結するので最初のログイン作業だけしっかりフォローすれば使い勝手が大変良い。アフターコロナでも使っていきたい。演習系の Zoom のリアルタイム授業では出席率が毎回ほぼ 100%で、(どのような状況で聞いているのであれ)、アクセスはしやすい様子。
・1 回生からはかなり詳しく聞いたが、スキルに格差があり、当初は大変で課題提出方法が分からず遅れて出した、出せなかった学生も多いよう。ただ、最近は慣れてきたという学生が多い。語学が Google Classroom だったようだが、ログインできなかった学生が 28 名中 2 名（後略)。他に、Google Classroom については使い方が分からなくて困ったが今はできるという学生が 1 名、面倒なので IBU.net にプラットフォームを統一してほしいという学生 1 名いた。IBU.net での課題は全員できているが、コメント欄に記載の学生と添付ファイルの学生がいる。学生の利便性を考えて提出方法を統制してないが、教員側が面倒ではある（2 回生以上になるとさらにファイル形式が色々増える)。
・Microsoft Teams は個人で試してあきらめたが、他学科の先生が学期途中で導入したら、課題提出率が大幅に落ちたので、IBU.net に戻したとのこと。アプリをインストールしたり、アカウントを使ってログインさせるプラットフォームは一部の学生にとってやや敷

居が高いよう。

・slack はブラウザで動作してログインもいらないせいか、学生もだいたい問題なく使えている。なお、演習系のリアルタイム授業は全て Zoom で統一しているが、こちらも今のところ問題はないようである。

・1 回生は、課題見落としの不安を訴える学生が数名おり、個人的にもプラットフォームが多くなると面倒なので減らした方がよいという意見にはやや賛成だが、どれがよいか、未だに判断がつきかねている。講義科目は多数派にあわせて IBU.net メインだが、使いやすいとは思っていない。授業の性質にもよる。また、少数ではあるが、プラットフォーム以前の基本的なところでついていけない学生がいる。

・諦めモードの学生で Zoom 授業にアクセスのない場合は IBU.net に登録しているメールに通知しているが、返信してくる割合は低い。個人的見解だが、諦めモードの学生はスマホのみ使用の学生が多く、大学がパソコン貸出や教室開放していることを伝えているが、反応無しが多く、スマホで対応できる方法を聞いてくる。これに対する説明にかなり時間かかった。

・1 回生は LINE グループがあるといいという意見が多い。現状は大学に先輩がいるグループや、高校の同窓生で LINE グループができているようなのだが、それ以外の学生が孤立してしまっているよう。「誰かリーダーになってやってくれないか」と声をかけたのだが、それは敷居が高いようで、誰からも手が上がらず、困っている。

その他の所感

・他学科(他大)でも、他の人に相談しないと授業についていけない学生を中心に「諦め層」が出てきている様子。個人的にも例年より諦め層が多い気がする。

・見えない「諦め層」も多いと思う（私の履修登録者数は例年より半減程度になっている)。

・おおむね履修学生の 8 割程度の提出なので、通常授業での出席率と同じかと考えている。

５．そのほか：新入学生アンケートの結果から

令和 3 年度新入生アンケート＜全学部・学科共通設問＞の設問 17「高等学校等で遠隔授業を受けたことがある方にお尋ねします。遠隔授業は何を使って受けましたか（複数回答可)」について、社会学科の結果は 187 名中、遠隔授業を受けた経験のある学生が 63 名である（内訳は、Zoom などのソフト利用 47 名、YouTube などの動画 21 名、そのほか 4 名)。ほぼ 3 人に２人は経験ないという結果であり、入学直前から開講までの間に、遠隔授業の受講に関する集中的な教育が必要であることがわかる。

また、設問 18「ノートパソコンの準備状況について教えてください」では、「大学が推奨するスペック（性能）のノートパソコンを準備できた」が 174 名、「大学が推奨するスペック（性能）に満たないノートパソコン、タブレット等を持っている」が 8 名、「何も持っていない」2 名、「そのほか」1 名、非回答 1 名であり、令和 3 年度新入生からのノートパソコン必須化は、かなり達成されている。必須化に対応した効果的な授業のあり方を検討すると

ともに、ごく少数とはいえノートパソコンの準備ができていない学生に対するフォローが必要である。令和３年度のFD・SDの取り組みとして重視したい。

次に、令和３年度新入生アンケート 集計＜学部・学科等の独自設問＞の＜人文社会学部社会学科＞ 設問 1「社会学科に入学を決めた理由は何ですか。上位２つを選んでください」に移ろう。入学を決めた理由の第１と第２を合計すると、「人間・社会」20%（前年度16.6%）、「地域・メディア」13%（前年度11.4%）、「心理」46%（前年度40.0%）、「歴史」14%（前年度16.4%）、「4コース学べる」40%（前年度35.4%）、「教員志望」23%（前年度20.6%）、「公務員」13%（15.4%）、「いろいろな進路」34%（前年度32.6%）であった。

コミュニケーション能力を過剰に要求される現代社会において、その能力を補完してくれるように見える「心理」の学びは依然として人気が高い。一方、昨年度から新設された「歴史」コースは、若干低下したとはいえ健闘している。また、「4コース学べる」が40%あり、昨年度の35.4%からかなり上昇している。「いろんな進路が考えられるから」が34%（昨年度 32.6%）と合わせて考えるならば、新入生の側から見た社会学科の魅力は、学生自らの興味・関心によって4コースを自由に学ぶことができことを基本にして、そこで心理学も学べることにあるといえよう。令和5年度からの新カリキュラム作成に際して、社会学科らしい ICT を活用した教育やデータサイエンス教育のあり方や、また社会学科に対する学生のニーズを含めて、次年度は本格的に検討していくことになろう。

人間福祉学科 健康福祉専攻

１．はじめに

本報告書は、令和２年度に行った人間福祉学科健康福祉専攻のＦＤ活動をまとめたものである。

本専攻のＦＤ活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、以下の２点を目的としてＡ～Ｉの活動に取り組んでいる。

Ⅰ　講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。

Ａ．大学基礎演習

Ｂ．授業相互参観

Ｃ．社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

Ｄ．社会福祉相談援助実習・実習報告会

Ｅ．社会福祉士実習懇談会

Ｆ．精神保健福祉士実習懇談会

Ⅱ　受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）の合格率を向上させる。

Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座

Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座

Ｉ．福祉系公務員受験対策講座

以上のＡ～Ｉについて、ＦＤ活動としての概略を説明する。

Ａ．大学基礎演習

従来のこの科目の目的は、1年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供しながら、「学びのスキル」を習得することである。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組み発表するものであり、「学生が主体的に学ぶ」ことを目指している。今年度は新型コロナの影響で全面オンライン授業になったので、①学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートする、②課題レポートや登校日を利用して学生の状況を把握する、③レポートの書き方の指導に重きを置くこととした。

Ｂ．授業相互参観

「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心とした科目を参観科目として公開した。また、参観者があった科目は必ず事後に合評会を実施し、授業担当者に「合評会の報告書」の提出を求めるという報告形式をとった。参観者があった科目においては、有意義な相互参観であり、合評会からも多くの示唆を得られたと報告を受けている。公開授業のうち参観者の有無が分かれてしまったが、参観者の調整が困難であることや、合評会での十分な時間の確保が難しい科目もあり、これらが次年度に向けての検討課題である。

Ｃ．社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年１回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論し

ている。この打ち合わせは、第１に教員のファカルティの中核である教授力（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第２に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第３に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場として機能している。

Ｄ．社会福祉相談援助実習・実習報告会

Ａ～Ｃの活動の集大成として学生主体による実習報告会がある。前年度までは相談援助実習に取り組んだ学生が全体発表会と分科会（ポスター発表）を行い、それを下級生が聴講する方式にて１日間で行われていたが、今年度はオンライン開催となった。実習の履修を希望する 1 年生には全体報告会の動画の聴講を課した。１年生の段階から実習報告会の内容を学ぶことで、目指すべきキャリアとしての「社会福祉士」をイメージし、意欲を持って学ぶ姿勢にもつながると考えられる。また、今年度は新たな試みとして、実習時間の不足する学生に対する学内実習プログラムの一環として事例検討会を開催した。

Ｅ．社会福祉士実習懇談会，Ｆ．精神保健福祉士実習懇談会

実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年 2 月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する重要な機会である。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に開催を見合わせた。しかし、実習時期の変更や実習生の体調不良時の対応など、実習指導者と緊密に連絡を取り合うことが求められた。また、「新型コロナウイルス感染症に対応した学外実習ガイドライン」を作成し、実習機会の確保に向けて実習指導者の理解を求めた。

Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座

講義を担当するのは東京アカデミーの講師であり、本専攻の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。2・3 年生は、夏期と春期の休暇中に集中講義を実施しているが、今年度はすべてオンライン授業になった。4 年生の夏学期はオンライン授業、冬学期は対面授業とオンライン授業が併用された。合格率は 61.8%（21/34）であり、昨年度の 56.0%（14/25）に比べて上がり、好成績を残すことができた。一方、既卒者全体の合格率が 7.5%（5/67）であり、昨年度より上がったものの、卒業生の合格率向上は毎年度大きな課題である。

Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本専攻の石田が引き続いて講座を担当している。合格率は 100%（4 名中 4 名合格）であった。なお既卒者の受験生はみられなかった。

Ｉ．福祉系公務員受験対策講座

福祉系公務員に求められる資格（必須ではないが）として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。福祉系公務員受験対策として集中講義で開講しており、本講座修了者から、今年度は 2 名の公務員合格者を輩出することができた。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座である。

２．大学基礎演習について

（1）大学基礎演習Ⅰ

＊行ったこと

回	月日	曜	内容	課題
1	4/23	木	オリエンテーション	①「時間割」作成
2	4/30	木	和の精神について	②「和の精神・今年度の目標」入力
3	5/7	木	学科の目標	③「学修目標」入力
4	5/14	木	入学から現在までのふりかえり	④レポート（近況報告：生活中心）
5	5/21	木	学生生活と授業について	⑤レポート（近況報告：授業中心）
6	5/28	木	進路について	⑥レポート（自分の進路について）
7	6/4	木	登校日（希望者）：自己紹介（クラス別）、パスワード入力、キャリアセンター見学	課題なし
8	6/11	木	レポートの書き方①（小レポート）	⑦400 字程度のレポート（④のレポートを基にして）
9	6/18	木	登校日（希望者）：自己紹介 学生支援センター見学	課題なし
10	6/25	木	登校日（希望者）：困りごと相談など	課題なし
11	7/2	木	レポートの書き方②（長いレポート）	⑧1200 字程度のレポート（⑦のレポートを基にして）
12	7/9	木	レポート講評	課題なし
13	7/16	木	「和の精神」エピソード、学修目標・省察などの説明	⑨「エピソード」「学修目標の省察と冬学期の目標」記入
14	7/30	木	PROG テスト	各自 PROG テストに取り組む
15	8/6	木	まとめ	課題なし

新型コロナの影響で全面オンライン授業になったので、目標を A.学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートする、B.課題レポート（④・⑤）や登校日（希望者）を利用して学生の状況を把握する、C.全面オンラインで重要度を増したレポートの書き方の指導に力を入れる（とくに課題レポートにはすべてクラス担当教員がコメントを付けるようにする）。

なお上記の授業予定は石田が案を作り、毎回の授業の 1 時間前には担当教員 3 名（石田、坂本、平川）が集まって、その都度具体化していったものである。

＊評価

新型コロナの感染拡大にともなう非常事態というこれまで経験したことのない状況下で、しかも全面オンライン授業を実施することになり、すべて手探りで行うしかなかった。

そうした限界のなかでも、配信資料の工夫や時間割のチェック、情報環境に関わる相談

への応答、さらには上記目標 B への注力によって目標 A は 8 割程度達成できたのではないかと考えている。

目標 C も、とくに課題レポートに毎回コメント付して返したこともあって、例年に比べて手ごたえを感じることができた。

（2）大学基礎演習Ⅱ

回	月日	曜	内容	課題
1	9/24	木	オリエンテーション	①「時間割」作成
＊	10/1	木	見学実習ガイダンス	②希望施設（第２希望まで）記入
2	10/8	木	見学実習の位置づけと意義	③授業内容のまとめ
3	10/15	木	高齢者福祉について	④授業内容のまとめ
4	10/22	木	障害者福祉につて	⑤授業内夜のまとめ
5	10/29	木	児童福祉について	⑥授業内容のまとめ
6	11/5	木	「実習ノート」の意義と書き方	⑦授業内容のまとめ
7	11/12	木	事前学習のまとめ	⑦「実習ノート」（施設概要）記入
8	11/19	木	外部講師講義	⑧レポート（講義を聴いて）
9	11/26	木	見学実習直前にあたって	課題なし
10	12/3	木	見学実習	⑨「見学実習ノート」（「実習内容」記入）
11	12/10	木	「実習ノート」講評	⑩「見学実習ノート」（「感想」「反省」記入）
12	12/17	木	「実習ノート」講評	⑪「見学実習ノート」（「見学実習を終えて」記入
13	12/24	木	「実習ノート」講評	⑪「エピソード」「学修目標の省察」記入
14	1/7	木	まとめ	課題なし

＊は「授戒会」の後の学科活動の時間（13：15～14：45）

授業は原則 A 方式で行った（ただし第 10 回～第 14 回は全面オンライン授業）。

授業計画は平川が案を作り、毎回、授業の 1 時間前に集まり、担当の 3 人で話し合って授業内容を確定した。

最大の目標を、新コロナ禍において最大限内容のある見学実習を安全裡に実施することにした。そのために第 3 回～第 5 回は学科所属の笠原、原、上續の各先生にそれぞれの専門分野の講義を実施してもらい、学生にはそのまとめをレポートとして提出することを課題とした。

安全な実習に関しては、すべての実習参加学生と引率教員に「実習生健康管理表」（学科独自作成）を配布して、実習前 2 週間と実習後 1 週間、検温してそれに記入してもらうことにした。

実習実施 1 週間前ぐらいになって、予定していた実習先（和らぎ宛）が新コロナの感染拡大にともなって実習生を受け入れることができないという事態になり、急遽、別の施設（ぽんぽこはうす）に実習受け入れをお願いし、幸い受け入れてもらうことができたので、

何とか12月3日（木）に以下の7施設での見学実習を行うことができた。

種別	施設名	実習学生数	引率
高齢	四天王寺悲田院特別養護老人ホーム	5名	坂本
	四天王寺悲田院養護老人ホーム	7名	鳥海
	四天王寺悲田院在宅（デイセンター）	1名	坂本
障害	四天王寺悲田富田林宛	7名	笠原
	（株）PROmessa　ぽんぽこはうす	10名	平川
児童	児童養護施設　羽曳野荘	32名	原
	児童養護施設　清心寮	8名	石田
計		70名	——

当日、遅刻や忘れ物をしたため欠席扱いになった学生が 5 名いた。彼らには、反省文を提出させたうえで、高齢、障害、児童分野の動画を視聴してもらい、それらについてのレポートの提出を求めた。提出後、レポートの内容と分量とも妥当と判断し、出席同等と判定した。

なお3名は、実習に参加しなかった。そのうちの1名Aは夏学期からオンライン授業を含めて授業にほとんど出席することがなかったが、冬学期になってもその状態が続き、不参加となった。1名Bは、冬学期の初めから精神的に不調になり、オンライン授業には参加できたが対面授業に出席できなかったので不参加となった。残りの1名Cは、実習直前にケガをしたので不参加となった。

この3名のうち、後の2名（BとC）には実習欠席者と同様の課題を課した。そのうちの1名（B）については、課題の内容と分量とも妥当と判断し、出席同等と判定した。もう1名（C）は課題を提出しなかったので欠席と判定した。

したがって「大学基礎演習Ⅱ」が不可であったのは、見学実習不参加の 3 名のうち、課題を提出し、その内容と分量が妥当と判断された学生（B）を除く2名（A・C）ということになる。

なお個別面談は、対面授業の学生に対して、第2回授業（10/8）から第9回授業（11/26）の授業のいずれも終わりの30分程度を使ってクラスごとに実施した。

＊評価

新コロナ下で授業も A 方式で実施せざるをえなかったこともあり、見学実習当日、遅刻や忘れ物のために欠席扱いになった学生の数が 5 名になったことに窺われるように十分な成果をあげたということはできない。加えて、見学実習後のまとめの作業もすべて個人単位で「実習ノート」の該当部分を書いて送ったものに対して、クラスごとに担当教員がコメントするということしかできなかったこともあり、きわめて不十分であった。

今後も、今年度のような非常事態が起こることはありうると考えられる以上、そうした

状況に備えて、より有効な授業の組み立てを考えておく必要があるだろう。それが今後の課題である。

３. 授業相互参観について

（１）実施計画

本専攻の授業相互参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員全員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。

以前は 12 月に実施する「実習報告会」（科目名は「社会福祉相談援助演習Ｖ」「社会福祉相談援助実習指導Ｃ」）を公開授業としていたため、多数の教員の参観が集中した。それを避けるために、現在は「実習報告会」を公開授業科目とはせず、基本的には教員からの公開授業科目と公開日時の申告により、学科内教員全員が授業相互参観を実施できるように計画した。その詳細は以下の通りである。

（２）授業相互参観の実施

授業相互参観・合評会の実施と参観者は下記の表の通りである。なお、参観を予定していたが実現しなかった参観者を括弧で示した。

担当教員	日　時	時限	公開授業科目名	教　室	合評会	参観者 （参観予定）
石田（晋）	12 月 9 日	水 5	精神保健福祉援助技術総論	6－302	授業終了後	（笠原）
上續	11 月 30 日	月 4	社会福祉相談援助演習Ⅰ	6－302	授業終了後	坂本
笠原（幸）	12 月 15 日	火 4	キャリアゼミ実践演習	5－211	授業終了後	石田、上續、川下、原、和田
川下	11 月 20 日	金 1	臨床心理学	6－302	授業終了後	平川
坂本（光）	12 月 2 日	月 4	社会福祉相談援助演習Ⅰ	6－213	授業終了後	なし
鳥海	12 月 3 日	木 1	相談援助の基盤と専門職Ⅱ（特別講義）	6－353	授業終了後	なし
原（順）	12 月 14 日	月 5	社会福祉相談援助演習Ⅲ	6－304	授業終了後	なし
平川	12 月 16 日	水 4	社会学概論	6－254	授業終了後	（鳥海）
和田	12 月 4 日	金 5	権利擁護と成年後見制度	4－262	授業終了後	なし

（３）合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施され、授業実施教員から合評会の内容について報告があった。合評会の内容は主に【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】【②今後に向けて】であり、授業参観者からの意見も含め、その内容を以下に示す。なお授業実施者の報告に基づいて転記したため、書式は不統一である。

科目名：社会福祉相談援助演習Ⅰ

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

コロナ禍での部屋の換気のために窓やドアを開放している点や、ソーシャルディスタンスにも配慮している点を評価していただいた。

また、授業内容についても学生がワークを行う際の事前の説明の際に、利用者支援の際の言葉の使い方にも多様な意味があることを示したり、福祉現場の具体例を取り上げて説明している点、実際のワークでの学生の気づきを促すためにグループワークの展開の中身に工夫を凝らしている点などを評価していただいた。

一方で、学生がワークの際に使用して記述する用紙に関して、学生のとらえ方がまちまちで、我流で記述しているケースが見られたので、事前にもう少し書き方についての説明をした方がよいのではないかとのご指摘をいただいた。今後は用紙の記述方法についても、その形態に応じて事前の丁寧な説明を行うように心がけていきたいと思う。

【②今後に向けて】

本授業が演習形態のもので、学生主体で様々な活動を行う点をふまえ、将来、現場での実践につながる学修の糸口になるよう、教材の精選に心がけること、また、授業での活動が円滑に行えるように、事前事後の説明や解説を含め、授業展開についての丁寧な準備を行うように更に心がけること、授業時は学生の要望にも耳を傾け、進め方について省みながら問題があれば軌道修正を図ること、複数教員によるクラスごとの授業であるという点をふまえて相互に連携しながら授業展開に不備がないように、今後も情報共有を図りながら進めていくことなどについても留意しながら、授業についての改善を図っていきたいと思う。

科目名：キャリアゼミ実践演習

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

急遽、授業方式がハイブリッド方式からリモート方式に切り替わったため、授業見学もリモート参加となった。従って、アンケートの回答をもって授業終了後の合評会とした。アンケートの結果、「授業内容の必要性や位置づけなどが、明確に示していたと思いますか」と「講師の話し方や説明の仕方は，分かりやすかったですか」いう質問に関しては、回答者全員が「そう思う」と回答した。授業の内容に関する評価は高かったといえる。対面での授業見学ではなかったため、学生の様子がわかりづらかったのが残念であった。リモートでもグループワークをさせて、発表させていた。少なくとも、ほとんどの学生は、真面目に取り組んでいた。

【③今後に向けて】

当該科目は、令和３年度より必修科目になる予定であるため、講義内容に関して、一般企業に対する就活の内容だけではなく、ソーシャルワーカーとして働く社会福祉施設、病院、行政等に関する内容も含めて欲しいという要望もあった。次年度のシラバスについて検討したいと考えている。

今後、学生の進路指導は一層重要になってくること思われるため、キャリア科目に対する学科の要望も伝えたい。そして、学科教員におけるコロナ下における進路指導の在り方、学生の多様な進路に対する適切な個別指導の在り方など、人間福祉学科の課題を明らかにし、学科教員間でも検討していきたいと思った。

科目名：臨床心理学

【①授業の進め方、学生の受講姿勢などについて】

当日の授業は、前半最初の３０分を前回授業の振り返り、その後の１５分を中間まとめの確認テスト、後半をその日の授業内容の講義という形で進行した。

ご参観いただいた先生からは、「授業はアクティブラーニングを意識し、学生が主体的に考えられるよう工夫されている。」「声のトーンや授業の雰囲気が心地よく、緊張せずに受講できる環境が作られている。」との評価をいただいた。

これらの点は、日ごろから授業に際して意識的に心掛けている点であり、ご参観いただいた先生にその点を評価していただけたことは、大変うれしく思う。

【②今後に向けて】

今後に向けては、対面とオンライン併用のＡ方式の授業で、いかにオンライン受講者に疎外感を持たせないようにするかという点が課題だと感じている。実物資料の提示や参考文献の紹介、授業中の身振り手振りなど、どうしても対面受講者の方が有利な気がするので、常にオンライン受講者を念頭に置きつつ、より一層質の高いアクティブラーニングを展開できるように心がけていきたい。

（４）授業相互参観実施の今後に向けて

前年度までは、参観者がいた科目の各合評会に加えて、合同合評会を学科会議で実施していたが、今年度は実施できなかった。公開した授業のうち、参観者が集中する科目もあれば参観者がいなかった科目もあった。来年度の公開授業の参観者の調整をおこなう必要性を感じるが、実際はその調整は困難であると予想され、今後の課題と考える。

４．学科独自の取り組みについて

（１）社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

毎年３月下旬に「社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「社会福祉相談援助演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の担当者 8 名（非常勤講師２名を含む）の参加のもと、各担当者による今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認が行われている。今年度は、①演習Ⅳ担当教員によるオンライン会議、②演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ担当教員による打ち合わせを対面で実施した。

① 相談援助演習Ⅳの担当教員によるオンライン会議

4月24日、4月26日、4月28日、4月30日、5月13日の5回にわたって、相談援助演習Ⅳ担当教員（鳥海，大西［短期大学部］，吉田［教育学部］，脇田［非常勤］）がビデオ会議ソフトを利用して打ち合わせを実施した。

遠隔授業におけるコミュニティ・ソーシャルワーク演習の教授方法、効果的な教材、ビデオ会議ソフトを利用したグループワークの方法について情報共有を図った。また、2016年度より実施している羽曳野市社会福祉協議会との連携による「羽曳野市の困りごと解決プロジェクト」の実施の可能性について検討を行った。その結果、コロナ禍によって緊急小口資金の貸付対応業務が増大した羽曳野市社会福祉協議会の時間確保が困難であることや、対面授業による合同授業が困難であることを理由に、実施を見合わせることになった。

② 演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ担当教員による打ち合わせ

昨年度はメール形式の打ち合わせであったため、2年ぶりの2021年4月5日に担当教員による打ち合わせを実施した。議題は、改正された社会福祉士養成にかかわる演習カリキュラムの変更点とシラバス、今年度の演習授業のふりかえり、次年度の演習授業の共通指針、配慮を要する等の学生の情報共有である。

今年度はオンライン会議ソフトを利用したペアワーク・グループワーク・ロールプレイに取り組んだが、表情や仕草などの非言語的コミュニケーションを用いることの難しさや、教員と学生との関係づくりの難しさが示された。

次年度に向けて、クラス間の足並を揃えるためにA方式で実施することや、非言語的コミュニケーションのスキルの獲得を目的として、ビデオオンで演習の授業に参加することなどを確認した。議事録は次のとおりである。

2021 年 4 月 5 日

社会福祉相談援助演習・ソーシャルワーク演習　担当者打ち合わせ　議事録

日　　時：2021 年 4 月 5 日（月）13 時 00 分～14 時 30 分
会　　場：四天王寺大学　事務局棟 1 階　第 1 会議室
出席者：重野，脇田，大西，坂本，原，吉田，鳥海（敬称略），欠席者：上續

1.新カリキュラム　シラバスの運用方法
【演習Ⅰ】
・ソーシャルワークの展開過程（第 10・11 回），グループワークの展開過程（第 12・13 回）については、各 1 回ずつ程度とし、【演習Ⅱ】【演習Ⅲ】に持ち越す。
・「相談援助の理論と方法Ⅰ・Ⅱ」では、事例を先に紹介してから、ソーシャルワークの展開過程を理論と結び付けて説明している。
・「ソーシャルワークの基盤と専門職Ⅰ（新カリ）」では、ソーシャルワークの展開過程の概説が削除された。

2．2020 年度をふりかえって
【演習Ⅰ】
・配慮を要する学生の中には、課題提出の期日管理が難しい学生がみられた。
・7 回の対面授業のみで、氏名と顔を一致して記憶することが難しかった。
・発熱や感染防止を理由にして「出席したくない」という連絡が学生からみられたため個別指導を行った。

【演習Ⅱ】【演習Ⅲ】
・オンラインでは学生との関係づくりが困難であり、学生の気になる言動を把握することも難しかった。
・提示する課題の質と量について他の教員からの情報提供を参考にして、事例に登場する用語の説明や、支援方針を検討することを課した。
・対面によるレクリエーションの実施が困難であり、計画作成にとどめて、グループワークの展開過程などの補説に充てた。
・ビデオオンにするには「予め言っておいてほしい」という学生の要望がみられた。

【演習Ⅳ】
・ビデオオンを拒む学生に対しては、関係づくりが十分できていない中でビデオオンにするように申し出ることが難しかった。

3．2021 年度に向けて
【共通】

・原則的にビデオオン

あらかじめ IBUnet で周知しておく。理由として、①非言語的コミュニケーションのスキルの獲得や相互学習、②チームワークの形成にかかわるスキルの獲得を演習の到達目標としていることによる。ただし、プライバシーの保護や通信環境の観点から、ビデオオンの難しい学生に対しては個別に配慮を行うこととする。

・1～14 回目の授業方式：A 方式：履修者全員による対面授業 7 回＋双方向授業 7 回

実習に関連する科目であることから、実習生としての学習態度を継続的に把握する必要があるため、原則的に双方向授業でコミュニケーションをとることとする。後半を課題学習にするなどの用途については、教員の裁量とする。

・15 回目の授業方式は教員裁量

授業計画に応じて、対面授業またはオンデマンド授業を教員裁量により選択する（双方向授業は認められない）。

【演習Ⅳ】

・５コマの補講＝特別講義 4 コマ＋1 コマ（対面授業，双方向授業，オンデマンド授業）

4.クラス・担当者

配慮を要する学生等にかかわる情報共有を行った。（個人情報が含まれるため省略）

5.その他

・社会福祉士国家試験合格率の維持および向上に向けて、演習の履修者に何をどのように指導していくのかを検討することが今後の課題として残されている。

以上

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションや、グループによる協働作業は授業の大きな構成要素である。これらの機会が遠隔授業によって制限されることは、演習の成立の可否にもかかわることとして認識される。本学が加盟している日本ソーシャルワーク教育学校連盟による情報を収集・活用しながら、演習・実習担当教員間との連絡を緊密にとり、教授方法の改善につなげたい。

なお、「打ち合わせ会」および「社会福祉相談援助演習」全体の主担当は鳥海、副担当は坂本である。

（２）社会福祉相談援助実習・実習報告会

社会福祉相談援助実習は、社会福祉士の指定実習として 5 週間にわたり実習施設に通う実習である。本学の例年のスケジュールでは、実習生の多くは 6 月に実施、残る数名が 8

月に実施することになっている。しかしながら、今年度は新型コロナの影響により、本学も加盟している日本ソーシャルワーク教育学校連盟から 6 月までの実施を見合わせるように依頼の通知がきたことを受けて、7 月以降に延期とした。大半の者は 7 月に実施となったが、実習施設との調整により、8 月、9 月、10 月それぞれの月に若干名を実施した。

また、一部の者は規定の実習時間を満たすことができなかったため、学内実習に代替した。内容は、援助計画の作成とその事例検討会を主軸として、それに加えて不足時間に応じて指定されたテーマのレポート作成を課した。2 月 18 日・19 日に実施した事例検討会では、11 名の実習生が発表する援助計画に基づいて、援助の視点や援助方針について議論を行った（参照資料：社会福祉相談援助実習・学内実習　事例検討会スケジュール）。

令和 2 年 12 月 18 日（土）に「実習報告会」を実施した。約 5 週間の「相談援助実習」を終えた 3 年生が発表学生として、2 年生の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している（参照資料：社会福祉相談援助実習報告会プログラム）。

従来は大教室に一同が集まる全体発表会と、2 教室に分かれてそれぞれの教室内で複数のグループが同時に発表する分科会を行っていた。しかしながら、新型コロナ禍の中、密にならないように、感染対策を講じる必要があった。例年とは異なり全体発表会は教室間で中継する、分科会は複数教室を使用する計画をたてて、準備を進めていた。

しかしながら、直前の 12 月 5 日から新型コロナの大阪府での感染拡大を受けて大学の授業は全面遠隔化することとなったため、急遽オンラインによる実施に変更した。

「実習報告会」は、当日の司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成 28 年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

今年度も結果的には全面オンラインでの開催となったが、当初計画で全面オンラインにせず、対面を主体とした計画をたてたのは、学生から「対面で行いたい」という意向が強かったためである。

全面オンライン化に伴い、資料のオンライン配信、複数の Zoom ミーティング ID の管理などにおいて、困難も予想されたが、リハーサルやプログラムの変更などを通じてほぼ解消することができた。

当日は、全体発表会では特に問題なかったが、複数のミーティングが同時に実施される分科会の 1 回目では、希望するミーティングへの参加方法を誤る学生が多くみられ、質疑応答の時間が大幅に削られることとなった。初めてのことだったので、ミーティング間の移動時間は余裕をもって設定すべきだったと考える。

学生の発表は、全体発表会および分科会ともにすぐれたプレゼンテーションとなっていた。実習担当以外の教員も参加しており、教員と学生で意見交換する場も設けることで、より良いアクティブラーニングとなり、同時に教員の能力を高める機会にもなっている。ただし、発表後の質疑応答に関しては、例年の対面ほど気軽に質問できないところも見られてオンライン時の今後の課題となった。このように対面とオンラインでの学生の反応の違いを見ることは、今後の ICT を活用した授業の在り方を検討する機会にもなった。

実習の履修を希望する 1 年生にも前半の全体発表会を聴講することを例年義務づけていたが、今年度はオンライン化によるトラブルを減少させるため、動画を記録して 2 年生の

実習指導Aの授業を受けるための事前課題の一つとした。

今後も学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場となるように展開していきたい。

なお、「社会福祉相談援助実習・実習報告会」の全体の主担当は坂本であり、石田、上續、笠原、川下、坂本、鳥海、原、平川が参加した。また、「社会福祉相談援助実習・学内実習事例検討会」の全体の主担当は鳥海であり、石田、川下、坂本、鳥海、大西［短期大学部］、吉田［教育学部］が参加した。

令和2年度　社会福祉相談援助実習報告会　プログラム
12月19日(土)9:10～12:40

1　全体発表会

ミーティングURL	ミーテイングID	パスコード
https://us02web.zoom.us/j/81417356168?pwd=OFNjY2tjVXhPcFlQcmg2L0dzK3dNQT09	814 1735 6168	249369

9:10 着席・瞑想・出席確認・連絡事項

9:20 開会挨拶

【口頭発表】発表15分

	プログラム	テーマ	種別	グループ名
9:25	全体報告1	障害児への支援方法の多様性	児童発達支援センター	チーム桃
9:40	全体報告2	多職種連携の大切さを伝える	病院	チームHP
9:55	全体報告3	認知症高齢者に対する取り組み	特別養護老人ホーム デイサービスセンター 地域包括支援センター	チーム好麩(すこっぷ)
10:10	全体報告4	地域住民と専門職のつながり	社会福祉協議会 福祉事務所	おむらいす
10:25	全体報告5	複雑な気持ちを抱えた 子どもたちとの関わり	児童養護施設 児童相談所	ゆでたまご

10:40 連絡事項

休憩・移動

2　グループ発表会

【グループ発表】発表15分＋質疑交流10分

10:55 ミーティング入室開始

11:00 11:10	1回目　質疑交流のみ(10分)　全体報告1－5グループ
	移動(5分間)
11:15 11:40	2回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Fグループ
	移動(5分間)
11:45 12:10	3回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Fグループ
	移動(5分間)
12:15	4回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Fグループ

12:40 各自退出　実習報告会終了

【発表】発表15分＋質疑交流１０分

■発表時間・分野（19日）

【時間】

1回目	11:00～11:10	質疑交流
2回目	11:15～11:40	発表＋質疑交流
3回目	11:45～12:10	発表＋質疑交流
4回目	12:15～12:40	発表＋質疑交流

発表	種別	テーマ	グループ名	ミーティングID	パスコード
全体報告1	児童発達支援センター	障害児への支援方法の多様性	チーム桃	842 3771 4608	172120
全体報告2	病院	多職種連携の大切さを伝える	チームHP	831 5085 0897	201219
全体報告3	特別養護老人ホーム デイサービスセンター 地域包括支援センター	認知症高齢者に対する取り組み	チーム好麩（すこっぷ）	864 5643 2578	ensyuu5
全体報告4	社会福祉協議会 福祉事務所	地域住民と専門職のつながり	おむらいす	814 1735 6168	249369
全体報告5	児童養護施設 児童相談所	複雑な気持ちを抱えた 子どもたちとの関わり	ゆでたまご	391 7016 6375	464729
発表A	児童養護施設 児童心理治療施設	児童福祉施設で暮らす子どもたち	チーム目玉焼き	840 6558 3749	714936
発表B	婦人保護施設 母子生活支援施設 児童養護施設	～母子・児童の安心と安全を守る～	チーム～卵焼き～	841 2586 9781	763233
発表C	放課後等デイサービス	障がい児との関わりによる気づき	チーム鰹節	880 6610 1133	782830
発表D	相談支援事業	障害者の自立に向けての支援	チームIL	823 6985 2525	201219
発表E	就労移行支援事業 救護施設	利用者とのコミュニケーションを通して	鳩バス	843 6084 7314	201219
発表F	社会福祉協議会 地域包括支援センター 特別養護老人ホーム	「地域で暮らす」を支援する	17:30のチャイム	838 8244 0303	949792

2020年度 社会福祉相談援助実習（学内実習） 事例検討 スケジュール

2月18日（木） 教室：4-262室

	時間	実習施設・機関　事例提供者	担当教員
2限	**10:55**	オリエンテーション	鳥海
	11:15	悲田院児童発達支援センター①	
	11:55	悲田院児童発達支援センター②	
	12:35	昼食休憩	
3限	**13:20**	じらふ（放課後等デイサービス）	
	14:00	みらくるちっぷ（放課後等デイサービス）	
	14:40	実習ノート記録	
	14:45	休憩	
4限	**15:00**	藤井寺市社会福祉協議会	坂本先生
	15:40	大阪市住吉区社会福祉協議会	
	16:20	実習ノート記録	
	16:30	終了	

2月19日（金） 教室：4-262室

2限	**10:55**	東成区地域包括支援センター	坂本先生
	11:35	藤井寺市地域包括支援センター	
	12:15	実習ノート記録	
	12:25	昼食休憩	
3限	**13:15**	ここりーど（就労移行支援事業）	川下先生
	13:55	わっと（相談支援事業）	
	14:35	実習ノート記録	
	14:45	休憩	
	15:00	阪和病院	
4限	**15:40**	実習ノート記録	
	16:00	**実習ノートの提出・終了**	

（３）社会福祉士国家試験対策講座

１．全体の概観

これまで４回生対象の社会福祉士国家試験対策講座は原則土曜日２限・３限に行ってきたが、今年度から火曜日４限・５限に行うようになった。

しかし新型コロナの感染拡大のために夏学期は火曜日４限・５限での対面授業はまったく行うことができなかった。代わって、すべてオンライン授業になった。

同じく２回生・３回生向けの集中講座もすべてオンライン授業になった。

なお１年生向けの対策授業は今年度から取り止めることになった。

４回生向けの対策授業の担当は、昨年度から人健教員全員になっていたが、今年度は、平川（主担当）、石田（副担当）、上續、川下、坂本、鳥海となった。

社会福祉士国家試験対策講座

学年	セメスター	科目名	開講期間	責任者
2年	3	社会福祉探究Ⅱ	8/31, 9/1, 2, 3（計 15 回＋定期試験）	石田
	4	社会福祉探究Ⅲ	2/20, 21, 25, 26（計 15 回＋定期試験）	石田
3年	5	社会福祉探究Ⅳ	8/25, 26, 27, 28（計 15 回＋定期試験）	坂本
	6	社会福祉探究Ⅴ	2/3, 4, 5, 6（計 15 回＋定期試験）	坂本
4年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・土曜２限	全員＊

		社会福祉総合研究Ⅰ	夏学期・土曜３限	全員＊
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・土曜２限	全員＊
		社会福祉総合研究Ⅱ	冬学期・土曜３限	全員＊

（注）「全員＊」は、石田、上續、川下、坂本、鳥海、平川のことである。

２．４回生

①夏学期

				２限	３限	４限	５限
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目
1	5	16	土	児童・家庭福祉①	児童・家庭福祉②	児童・家庭福祉③	
2		19	火			高齢者福祉①	高齢者福祉②
3		26	火			高齢者福祉③	高齢者福祉④
4	8	4	火		低所得者支援①	低所得者支援②	
5		5	水		保健医療①	保健医療②	
6		6	木		福祉行財政①	福祉行財政②	
7		7	金		権利擁護①	権利擁護②	
		17	月	社会保障①	社会保障②	社会保障③	
8		18	火		障害者福祉①	障害者福祉②	
9		19	水		地域福祉①	地域福祉②	
10		20	木	心理学①	心理学②	心理学③	
11		21	金		社会調査の基礎①	社会調査の基礎②	
＊		29	土	総合試験			

コロナ禍のために、授業開始（しかもオンライン授業）は５月 16 日（土）にずれ込んだ。したがって４月 25 日（土）に予定していた夏学期プレ試験（第１回学内模試）は実施することができなかった。また８月 29 日（土）の総合試験（定期試験）は、データで問題と解答を送信し、受講生が制限時間内で問題に取り組んだうえで自己採点し、成績をこちらに送るという形を取った。

なお夏学期のオンライン授業の設定等はすべて石田が行った。

②冬学期

				２限	３限	４限	５限
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目
＊	9	12	土	プレ試験（第２回学内模試）（10：00～14：45）・オリエンテーション			
1		19	土	現代社会と福祉①	現代社会と福祉②	現代社会と福祉③	
2		22	火			相談援助の理論①	相談援助の理論②
＊		26	土	東京アカデミー模試（10：00～14：45）			

3		29	火			社会理論①	社会理論②
4	10	10	土	児童・家庭福祉①	児童・家庭福祉②	保健医療①	保健医療②
5		13	火			相談援助の基盤①	相談援助の基盤②
6		17	土	人体の構造①	人体の構造②	高齢者福祉①	高齢者福祉②
＊		24	土	ソ教連模試（10：00～14：45）			
7		31	土	福祉サービス①	福祉サービス②	福祉行財政③	福祉行財政④
8	11	7	土	社会保障④	社会保障⑤	低所得者支援③	
9		14	土	障害者福祉③	就労支援①	就労支援②	
＊		21	土	中央法規模試（10：00～14：45）			
10		28	土	権利擁護③	更生保護制度①	更生保護制度②	
11	12	1	火			模試解説会①	模試解説会②
＊		26	土	総合試験			
＊	1	9	火	学内最終模試			

土曜日に実施した授業は一斉対面で行うことができた。火曜日実施授業はすべてオンラインで行った。

なお試験は 12 月 26 日（土）の総合試験を除いて、残り（東京アカデミー模試、ソ教連模試、中央法規模試、学内最終模試）はすべて対面で実施することができた。冬学期の総合試験は夏学期の総合試験と同様、データでのやりとりで行った。

コロナ禍のためにさまざまの困難があったが、受講生の授業態度はきわめて熱心で、適度の緊張感をもって授業に向き合っていた。欠席も少なかった。

こうしたことが、今年度の社会福祉士国家試験の合格率の高さ（61.8%[21/34]）に結びついたと思われる。

既卒者（卒業後 3 年以内）への授業開放は、10 月 17 日（土）、10 月 31 日（土）、11 月 7 日（土）、11 月 14 日（土）、11 月 28 日（土）の授業に対して行い、受講者を募集したが、応募して、授業に出席した人はわずか 1 名であった。

既卒者への支援をどうするかは、今後の課題である。

（4）精神保健福祉士国家試験対策講座

毎週水曜日 4 限・5 限に開講している。教員が環境を整え学生が主体的に学習する形態をとっているが、例年 11 月～12 月には、特別講師を招き専門科目の集中講座を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策関連により学生が集まることが出来る 12 月 26 日（土）の 3 限から 5 限までを利用し開講した。また、12 月 12 日（土）、1 月 6 日（水）には、実際の試験を想定した模擬試験を実施した。

第 23 回精神保健福祉士国家試験新卒合格率は 100%（4 名中 4 名合格）であった。なお既卒者の受験はなかった。精神保健福祉士国家試験対策講座は、受験勉強の促進に有効に機能しているといえる。

（５）福祉系公務員受験対策講座（社会福祉特別講義Ⅰ・Ⅱ）

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成29年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義Ⅰは、公務員試験の１次試験対策として位置づけられており、一般教養採用試験の国語・算数が授業内容となっている。

本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっている。受講対象学生は保育科１年生（1セメスター）と人間福祉学科健康福祉専攻２年生（３セメスター）である。令和２年度の履修人数は、95名（短大保育科45名・人間福祉学科健康福祉専攻50名）で、人間福祉学科健康福祉専攻の履修者が増えている。今年は人間福祉健康福祉専攻の本講座修得者から、羽曳野市（社会福祉専門職）、堺市（社会福祉専門職）の２名の公務員合格者を輩出した。

社会福祉特別講義Ⅱは、社会福祉専門職採用試験にかかわる社会福祉の専門知識を確実なものにするための講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。

また、本講座は社会福祉専門職公務員採用試験社会福祉協議会採用試験、独立行政法人病院機構（国立、公立）採用試験などにも有効で、社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが可能である。

いずれの社会福祉特別講座も公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な科目である。

（６）その他

（１）～（５）に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共に確認していく取り組みが求められている。また、ハイブリッド型授業を含めた遠隔授業の実施に伴って、ICT を活用した教授方法の向上にも努めていくことが必要である。学科のすべての教員がこの視点を共有し、チームとして学生を育てていく体制を実施しており、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書作成者は以下の通りである。

１．はじめに：　鳥海直美
２．大学基礎演習について：　平川　茂
３．授業相互参観について：　鳥海直美
４．学科独自の取り組みについて
　（１）社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会：鳥海直美
　（２）社会福祉相談援助実習・実習報告会：　坂本光徳
　（３）社会福祉士国家試験対策講座：　平川　茂
　（４）精神保健福祉士国家試験対策講座：　石田晋司
　（５）福祉系公務員受験対策講座：　石田晋司
　（６）その他：　鳥海直美

＊本原稿は、ＦＤ委員（鳥海）と学科長（石田）が回覧した上で承認を受けたものである。

教育学科 小学校教育コース

1. はじめに

1.1 小学校教育コースの現状

本コースは2019年度から、新カリキュラムとして設定されたコースで、小学校教諭一種免許状の取得に加え、各プログラムの選択によって、学生は特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）（数学）、高等学校一種免許状（英語）（数学）が取得可能となっている。本コースの入学定員は110名であるが今年度は111名の入学者を受け入れ、1年生111名、2年生114名という在籍者数である。また、本コースは今年度新着任教員3名を迎え、教員29名体制でスタートした。

1年生では特に、新しいカリキュラムとして「学びなおし・学びほぐし」をめざす科目である「扉シリーズ」（「数理探究の扉」「英語探究の扉」）や、プログラム選択を判断するいわゆる「お試し科目」（「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションⅠ」「問い直す数学」など）などが開講され、1年生は「多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続ける先生」をめざして学修している。また、2年生では小学校教育実習の実習要件である「インターンシップ」や「スクールサポーターⅠ」が開講されており、新しい教育実習体制の初年度を迎えている。

2.2 今後の課題

今年度は感染症拡大の影響を受けて、夏学期はすべての授業でほぼ遠隔授業が行われた。教育学部での学修に欠かすことのできない模擬授業など、対面授業不可という授業形態では十分な取り組みを行うことができない授業もあった。ICT等を駆使した授業づくりが今後いっそう求められる。

また、教育実習において必修化となった小学校での「インターンシップ」は、今年度の自粛期間の影響を受け受け入れ先の事情にも鑑み、開講を遅らせて冬学期開講となった。「インターンシップ」や「スクールサポーターⅠ」のコーディネート担当教職員の尽力により、こうした状況下でもスムーズに実施することができたが、担当教職員と2年生の担任教員や、本コース所属教員とのいっそうの連携が、引き続き重要である。

さらに、学生によるプログラム選択が本格化していくなかで、各プログラム選択者が必修すべきプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を理解しているか、各プログラムで行われる各種教育実習の実習要件を満たしているかなど、学生指導の充実が必須である。また、2年生になりプログラム選択を変更する学生の追跡および指導も不可欠となる。特に、教育実習がかかわるプログラムについては、実習内諾交渉時期を干渉しないタイミングでのプログラム変更を徹底しなければならない。そして、プログラム非選択者のプログラム関連卒業必修単位取得の保障など、学修充実をどのように図るかが課題である。

2. 「大学基礎演習」について

「いい先生になる」という一貫した理念に基づき4年間のカリキュラムを設定しているが、「大学基礎演習I・II」は、そのもっとも基礎的部分をなすものと言える。大学ディプロマポリシーを受け、大学基礎演習の学修内容をマネジメントした。

1） 大学ディプロマポリシー

1）教員としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもに応えることができる専門的知識及び

実践力、指導力を身に付け、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2）教員としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および教員としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3）変化する社会、学校で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2）　2019 年度「大学基礎演習」のめざすもの

①　これからの大学生活の基盤となる様々な学修や学修ポートフォリオ活用のスキル、および、学習環境の活用のスキル等を身に付けることができる。 ②　和の精神に基づき、学友たちとともに学び合い高め合うことのできる人間関係を構築しようとし、真理や本質の探究を目指し、積極的に討議等の協働的な活動に参加することができる。 ③　学修ポートフォリオやリフレクションを生かし、自分の学びについて振り返り、自己の成長の姿や学修についての改善点に気付き、今後の学びのデザインを描くことができる。

＜大学基礎演習の内容作成にあたって考えたこと＞

・ディプロマポリシーと内容を関連付けること
・レポートや小論文執筆の基礎となる力を身に着けること
・学習履歴を生かすこと。相互評価を取り入れること。
・実際に大学生活を送る上で、重要な事柄として考えられる、「多様な子ども理解」の問題を早期に取り扱うこと。
・司会等を学生に行わせ、主体的に学ぶ場としての大学基礎演習を構築している意識をはぐくむこと。

令和２年度の大学基礎演習I・IIは、本学科小学校コースのカリキュラムにおいて 1 年次の 1）基礎教育科目・共通教育科目と、2）専門教育科目の両者における学びをつなぎ、関連づけながらも、大学基礎演習I・IIで習得した知識やスキルをベースとして 2 年次、3 年次、4 年次の専門教育科目へと学びをつなげ、発展させていく科目として位置づけられている。具体的には、大学ディプロマポリシーを受け、①本学での学びと生活のための基本的なスキルの習得、②専門教育への橋渡し、③キャリアデザインの 3 点を目標として全 30 回の授業計画を設計した。これは従来の大学基礎演習のカリキュラム上の位置づけと基本的に同様である。

しかしながら、令和２年度は、コロナ禍における緊急事態宣言下、全学閉校という未曽有の状況の中でスタートした。昨年末から描いてきた計画は当然のことながら変更を余儀なくされるばかりか、入学したのにもかかわらず大学へすら足を運べない新入生と、どのようにして連絡をとっていくのか、彼らに大学における学びをどのように保障していくのかといった、これまで誰も取り組んだことのない課題に担任団が一団となって取り組まざるを得ない状況におかれた。４月、コロナ禍は改善せず、以下のような経緯で予定は次々と変更されていった。（内容の詳細については省略）

３月２６日提案　（対面予定）
　４月２日（木）新入生オリエンテーション１
　４月９日（木）新入生オリエンテーション２
　４月１６日（木）第１回大学基礎演習Ｉ
４月２日提案　（対面予定）
　４月９日（木）新入生オリエンテーション１
　４月１６日（木）新入生オリエンテーション２
　４月２３日（木）第１回大学基礎演習Ｉ

いずれも、対面の予定での計画であったが、結局、それはかなわず、新入生たちが初めて登学できたのは、１，２，３組が６月２５日、４，５，６組が７月２日であった。それまでの間、時間割づくりや履修登録、オンライン授業対応の環境整備、個別面談等、すべて、遠隔で学生とやり取りを進めた。このような難しい状況ではあったが、学生たちもよく頑張り、担任団も一通り個別面談を行うことができ、大学基礎演習への取組を進めていくことができた。

2.1　「大学基礎演習I」の内容

前述のように、コロナ禍における緊急事態宣言下、当初の計画は大幅に変わり、大学基礎演習はまだ直接顔を見られない学生とのコミュニケーションの確立と、大学生活スタートへの対応という大変重要な役割を担うこととなった。社会全体が不安に覆われ、街に人影がまばらとなった時期である。

	テーマ	内　容
1	ガイダンス１	時間割づくり・履修登録・4 プログラムの説明
2	ガイダンス２	時間割の確認・オンライン授業の進め方
3	ポップを作ろう	読書・ポップづくり
4	ガイダンス３	今後の予定（シラバス）・成績について・プログラム選択
5	個人面談１	健康状態の確認・遠隔対応の状況 困っていること・時間割、プログラムの選択等
6	個人面談２	
7	「多様な子ども」理解 オムニバス講義１	「私の考える多様な子ども」をテーマに、各担任が 5 分程プレゼンを行う。　2 名
8	「多様な子ども」理解 オムニバス講義２	「私の考える多様な子ども」をテーマに、各担任が 5 分程プレゼンを行う。　2 名
9	「多様な子ども」理解 オムニバス講義３	「私の考える多様な子ども」をテーマに、各担任が 5 分程プレゼンを行う。　2 名
10	「多様な子ども」探究１	レポートのテーマ決め・アカデミックライティングの基礎
11	123 組登校日（6/25） 456 組登校日（7/ 2）	和の精神・学修ポートフォリオ・協育実習・履修カルテ クラス内自己紹介
12	「多様な子ども」探究２	レポート作成
13	「多様な子ども」探究３	レポート提出
14	先輩からのメッセージ	リフレクションを書く
15	プログラム選択にあたって	リフレクションを書く　　14・15 をまとめて提出

それでも、前半の３分の１ぐらいを過ぎた頃には、学生たちはオンラインにおける学修を進めていくことができるようになり、全体的には、当初予定していたものをそれほど損ねることなく、大学基礎演習Ｉを行うことができた。

「多様な子ども理解」は、これからいろいろな子どもと接していくための基礎を形成している学修である。6 人の担任が各 10 分「私の考える多様な子ども」をテーマに話をするという方法をとった。担任が、自分の専門分野に近い、あるいは、教育に関してこれまで様々な経験を積んできた中での「多様な子どもの姿」についての話を１０分程度にまとめ、動画配信した。それぞれの担任が作成した動画はいろいろと工夫されており、学生たちにそのメッセージはしっかりと伝わった。担任が動画を作成するということも担任にとっては初めてという人が多く、四苦八苦しながら学んでいった。今思えば、こうした初期の取組が、1 年後、教師も学生も無理なくオンラインに取り組むことのできる基盤を形づくっていったのだといえる。このオムニバス講義を行うに当たっては、司会や運営をクラス委員に任せ、学生が運営する講義という形をとることを考えていたが、オンラインが始まったばかりの状況では、こうした意見交流をすることができなかったのが残念であった。

この６つの講義と、アカデミックライティングの基礎を学んだ上で（これらも遠隔での受講）、学生た

ちは自分なりに問いを立て、レポートを作成するという形で、学修を展開していった。アカデミックライティングの基盤づくりとしての学習である。第１１回の大学基礎演習Ｉで、初めて学生たちは、お互いに顔を合わせることができた。まだまだ厳しい状況は続いていたが、こうして直接顔を合わせて対話することの意義、意味を、身をもって感じ取ることができた。

2.2「大学基礎演習II」の内容

全 15 回の内容は下記のとおりである。基本的には、全体を学籍番号で奇数と偶数に分けた登学であるので、半数の学生はオンラインでの受講となる。一所に長くとどまらないというねらいも兼ねて、対面で出席した学生も、授業前半はクラスの教室で過ごし、後半に大きな教室に移動して学年全体で授業を受けるという方法をとった。

数字は回数；Ａ奇数　Ｂ偶数　組…その時間の司会進行担当

	テーマ	内　容
1　B 2組	冬セメガイダンス ～アカデミックライティングの基礎を身に付けよう～	【学級】顔合わせ・冬セメの学修の概要 【全体】アカデミックライティングとは？（レポート、論文について考え、その意義について学ぶ）
2　AB 4組	ハロースクールに向けて	ガイダンス（四天王寺小学校土井先生）9：30
3　A 5組	冬セメレポートの課題提示 文献検索の仕方	【学級】 【全体】文献検索の仕方　（図書館　仁科さん） ＊「問い」を考えましょうという問いかけをしておく。
4　B 6組	生命誕生１	【学級】 【全体】絵本『赤ちゃんがうまれる』の読み聞かせ
5　A 1組	生命誕生２	【学級】「生命誕生」について、前回の講話で学んだことを出し合いましょう。 【全体】穂迫先生（看護学部）のお話
6　B 2組	「問い」と「研究の動機」をどのように書いたらよいのか	【学級】「生命誕生」の授業を受けて、自分がもった問いはどんな問いですか。クラスで出し合いましょう。 【全体】「問い」と「動機」をどのように書いたらよいか
7　A 3組	防災１～自分のいのちを守る～	【学級】昨今、多くの災害が日本を襲い、たくさんの命も奪われています。学校教育では、どのような「防災教育」を行う必要があるでしょう。あなたの考えを述べなさい。 【全体】「自助・共助・公助」について
8　B 4組	防災２～自分のいのちを守る～	【学級】「防災」について、前回の講話で学んだことを出し合いましょう。 【全体】語り部さんのお話（阪神淡路大震災）
9　A 6組	「本論」の書き方	【学級】「防災」について、あなたがレポートを書くとしたら、どんなことをテーマにして書くでしょう。 【全体】「防災」をテーマにした
10　B 5組	ようこそ先輩１	2 回生（学校実地演習）
11　A 3組	人権について考えよう	【学級】「いのちの教育」「人権教育」という視点から自由に授業を創造してよいとしたら、あなたは、どのようなことをテーマにした授業を考えますか。 【全体】人権講話（御所市立掖上小学校　岸本康孝先生）
12　B	レポート作成に挑戦１	【学級】
13　A	レポート作成に挑戦２	【学級】
14　B 1組	ようこそ先輩２	4 回生（教員採用試験に向けての取組） 大学基礎演習Ⅱの振り返り・1 年間の振り返り
15	ハロースクール	

「ハロースクール」については、今年度より、水曜日の午前中に実施することとなった。実施場所は、例年のとおり四天王寺小学校である。第２回目の授業で四天王寺小学校 土井衛先生よりハロースクール

の説明と当日の注意事項、そして教員を目指す学生としての心構え、教師という職業の魅力とやりがいについて学生に語って頂いた。コロナ禍が続いており、実施にあたっては、1 か月前から検温等の健康チェックを行いそれを当日持参するとともに、消毒やマスクの励行を徹底することで、四天王寺小学校の協力を得ながら、予定どおり実施することができた。ハロースクール当日には、毎回 1 クラスが訪問し、1 年生から 6 年生までの 12 学級に学生が 1 名または 2 名入り、授業観察や個々の児童への支援、授業補助、プリントの添削業務、体育での球技活動や理科での実験に参加した。学生にとっては、初めて学校現場で小学校の子どもたちに接する、また、具体的な指導の様子を観察する機会である。大変有意義なものであるので、今後も継続していくことが望ましい。

毎回の授業では、半分がオンライン参加という状況ではあったが、大学基礎演習Ⅱでは、積極的に学外の講師や先輩の話を聞く機会を設定した。具体的には、ハロースクールのガイダンスに四天王寺小学校の土井先生、「生命誕生」をテーマとした講義で看護学部の穂迫先生、「防災」をテーマとした講義で阪神淡路大震災時に行政で活躍され現 NPO 法人「神戸の絆 2005」専務理事の金芳さん、人権講話の講師として御所市立掖上小学校の岸本康孝先生らである。学外講師については、実際に来校して頂き、対面で講義をして頂いた。先輩としては、4 年生の学生が 2 年生のスクールサポーターや 3 年生の教育実習の話を、2 年生の学生が 1 年間行ってきたインターンシップとスクールサポーターの経験についてお話をした。学生については、Zoom 上での話を録画し、それを配信するという形をとった。配信する側も受講する側も、このようなスタイルに随分と慣れてきており、先輩からのメッセージの動画配信も、これからのキャリアを考えていく上で、成果を得ることができた。

このような話を受ける形で、「文献検索の仕方」や「問い」や「研究の動機」、「本論の書き方」等のアカデミックライティングの基礎をつくっていく学修を進めた。夏セメからの積み上げということで、もう一歩進んだレポートの書き方についての学びを深めていくことができた。

2.3　成果と課題

（1）成果

・コロナ禍という大変難しい状況下ではあったが、様々な工夫を行い、大学基礎演習Ⅰ，Ⅱとしてふさわしい学修を学生たちに提供することができた。また、学生たちも、こうした中で担任たちとのコミュニケーションを深めつつ、学んでいくことができた。
・学生も教師も、オンラインにおける学修ツールをある程度身に付けることができたとともに、このような学修の仕方に慣れ、学修の成果を得ることができるようになった。
・学外講師や先輩の話を聞くことの成果は大きい。学生たちを学年という枠組みにとどめてしまうことなく、積極的に学外や先輩たちからの話を聞く機会を設定できたことはよかった。
・アカデミックライティングの基礎を学ぶ機会を設定することで、学生たちがすこしずつ「書く」ことに慣れてきた。
・基本的には学生に進行を行わせた。対面の授業が少なく十分には活躍をさせてあげられなかったが、学生主体で授業を進めていこうという方針はよい。

（2）課題

・コロナ禍の中で、学生同士の横のつながりが不足している。意図的にそのつながりを形成していかなければ、今後の学生生活に支障をきたす可能性があるのではないか。
・担任と学生が 1 対 1 で話をする機会の設定が難しい。しかし、その必要性はある。
・担任団も他に様々な業務をもっており、学年会の設定が非常に難しい。
・オンラインで済ますことができることが増えた半面、オンラインで済ましてしまってよいのかという問いも必要であり、対面で話や講義をすることの意義を今一度、問い直したい。

3.　授業相互参観について

今年度の授業相互参観を実施するにあたり、小学校教育コースで公開授業を申し出た科目と担当教員および授業日は以下のとおりである。

教育学科　小学校教育コース　相互授業参観　公開授業一覧								（敬称略）
整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
1	教小	山本　博資	11月30日	月	3	教職教養研究Ⅰ（奇数）	4-207	授業後すぐ
2	教小	杉中　康平	いつでも	土	1	道徳教育の理論と方法	4-316	後日
3	教小	佐藤　美子	12月14日	月	5	教職実践演習	理科室	授業後すぐ
4	教小	浅田　昇平	12月2日	水	2	教職論	4-414	授業後すぐ
5	教小	生駒　英晃	12月22日	火	4	教科内容演習（算数）	6-301	授業後すぐ
6	教小	今井　真理	11月17日	火	3	教科内容論（図画工作）	701	授業後すぐ
7	教小	奥野　暢通	11月30日	月	2	教育専門演習	4-314	授業後すぐ
8	教小	奥野　喜之	12月7日	月	5	教職実践演習Ⅱ	4-214	授業後すぐ
9	教小	木村　雅則	12月14日	月	5	教職実践演習「危機管理」	4-214	授業後すぐ
10	教小	小柴　和香	12月8日	火	4	初等英語科教育法	4-414	授業後すぐ
11	教小	坂井　啓祐	12月7日	月	3	教職教養研究Ⅱ	4-307	授業後すぐ
12	教小	坂本　暁美	12月9日	水	3	音楽科教育法	8-210	授業後すぐ
13	教小	鈴木　浩太	11月17日	火	5	障害特性とICTの活用	4-212	授業後すぐ
14	教小	檀上　慎二	11月30日	月	5	教職実践演習（教諭）	4-212	授業後すぐ
15	教小	千葉　一夫	11月30日	月	1	教職教養研究Ⅱ	4-316	授業後すぐ
16	教小	堂上　雅三	12月2日	月	3	教採対策　面接　班別対面授業	4-406	授業後すぐ
17	教小	長澤　洋信	11月25日	水	5	特別支援教育	4-212	授業後すぐ
18	教小	永田　麻詠	12月7日	月	5	子ども支援ボランティア論	4-306	授業後すぐ
19	教小	西岡　智	12月7日	月	3	教職教養研究Ⅰ	4-406	授業後すぐ
20	教小	西口　卓磨	12月15日	火	2	教科内容論（社会）	2-205	授業後すぐ
21	教小	早川　透	12月9日	水	1	知的障害教育論	4-309	授業後すぐ
22	教小	原田　三朗	12月3日	木	4	教科内容論（数学）	2-205	授業後すぐ

23	教小	福本　義久	11月24日	火	4	生徒指導論	4-312	同日５限
24	教小	福若　眞人	12月９日	水	2	教育原論	4-316	授業後すぐ
25	教小	船所　武志	11月28日	土	3	初等国語科教育法	2-205	授業後すぐ
26	教小	牧野　浩二	12/9を除く期間中いつでも	水	1	生徒指導論	4-408	授業後すぐ
27	教小	松岡　隆	12月９日	水	5	中等数学科教育法Ⅱ	4-208	授業後すぐ
28	教小	森田　英俊	12月７日	月	4	数学的リテラシー	4-306	授業後すぐ

今年度は、新着任教員対象の研修制度において、授業相互参観が義務付けられていたため、新着任教員9名は授業相互参観に関する報告書を提出した。そのうち、2名の報告書を以下に示す。

なお、相互参観を行う予定の時期に、コロナ禍で大学の授業が遠隔授業になった。それに伴い、参観の方法は、他の先生に授業を参観されるか、他の先生の授業を参観するかのいずれか一方を選択することとなった。以下2名は、前者の方法で実施した。

【相互参観報告書】

報告者：西口　卓磨

《参観者》短期大学部　保育科　講師　齋藤奈都美
《授業科目》教科内容論（社会）
《授業テーマ》第13回　総合的な学習の時間との関連（１）―多文化共生社会―

《授業の概要》

本講義では、「社会的事象についての各課題に個人もしくは集団で具体的に取り組むことにより、小学校における社会科教育に必要な基本的知識と多面的・多角的なものの見方、考え方を理解したり認識したりする」ことをねらいとしている。そのため、さまざまな側面についてさまざまな立場に立って考える活動が必要であり、一人ひとりの考えをまとめ、表現することで共有し、深める活動を重視している。具体的には、さまざまな意見が出やすいテーマについて、グループ学習（オンライン受講生においては、ブレイクアウトセッション形式）を取り入れて、意見を共有し議論する時間を確保している。

参観していただいた授業は、多文化共生社会をテーマとした藤原孝章氏の著書『ひょうたん島問題―多文化共生社会ニッポンの学習課題―』で扱われているシミュレーション教材を紹介し、実際に体験しながら考察する授業を実践した。

《授業の展開》　※大学入構禁止期間中だったため、全員がオンラインで受講

①教材の概要の説明【5分】
②シミュレーション教材についての説明【15分】　※紙芝居形式
③グループワーク「ひょうたん教育の危機」【説明15分＋グループ学習25分】
　⇒　どのような政策を優先すべきかについてのダイヤモンドランキングを作成する。
④全体での意見の共有【15分】
⑤日本における多文化共生社会の現状についての講義【15分】

《齋藤先生からの主なコメント》

・紙芝居形式も取り入れられており、学生の学修意欲を高めようと工夫していた。
・紙芝居にテキストも見える形で示されていたが、あまり見えなかった。
・ブレイクアウトセッションなどをする上での工夫にはどのようなものがあるか。

《振り返り》

ブレイクアウトセッション（グループ学習も同様だが）をする際には、「なぜこの学習が必要なのか」について受講生が理解し、意義を見出すことが重要であると考える。言い換えると、学びの必然性が問われるべきであるということを改めて振り返ることができた。しかし、それだけではブレイクアウトセッションを通した学習が成立するかどうかはわからない。その理由として、人間関係が構築されているか、役割が与えられているかなどによって、学びの深まり方が変わってくるからである。先日、基礎教育ワーキンググループの研修に参加し、ファシリテーションの技法やそのねらいについて学んだ。今後ブレイクアウトセッションを効果的に活用するためには、授業担当者がファシリテーターとしての役目を果たすと同時に、だれもがファシリテーションができるよう、受講生をファシリテーターとして育成する視点も重要であることを改めて認識した。その点については、新着任研修の報告の際に、教育学科樫本先生にもご示唆をいただいた。より深い協働の学びを今後も追究していきたい。

報告者：森田　英俊

《参観者》教育学科　中高英語コース　助教　樫本洋子
《授業科目》数学的リテラシー
《授業テーマ》トポロジー（位相幾何学）

《授業の概要》　この授業は、身の回りのものごとに数学が潜んでいることの理解を目的としており、基本的に１回１トピックを学ぶ形式である。内容的には高校までに学ぶものを中心としているが、第14回の授業であったため、やや発展的な内容として大学で学ぶトポロジーを紹介した。

具体的には、まず「図形が同じであるとは」という問題から、合同や相似とは別に、図形を伸縮して形が一致するときに「同じである」とみなす、同相という概念を導入した。その例として、ドーナツとコーヒーカップ、また直観的には奇妙に思えるものを図示し、簡単な演習で手を動かした。さらにその図形の違いを表す数としてオイラー標数というものを導入し、具体例を通じて計算した。

《授業の展開》

（コンピューターのトラブルと対応【10分】）
①図形が同じとは？コーヒーカップとドーナツ【5分】
②同相な図形と奇妙な例【10分】
③簡単な図形の同相による分類【10分】
④アルファベットの同相による分類【15分】
⑤オイラー標数とオイラー・ポアンカレの定理【15分】
⑥簡単な図形のオイラー標数の計算【15分】
⑦振り返り【10分】

《樫本先生からの主なコメント》

評価できる点として、板書の見やすさを挙げていただいた。Zoomの映像でも問題なく見られるとのことであった。また、具体例を多く示していることも評価していただいた。特に、アルファベットの同

相による分類は、樫本先生のご専門である小学校の外国語の観点から興味を持っていただけた。改善すべき点として、教科の違いによるのかもしれないが、とお断りいただいた上で、学生からの発言がなかったことを挙げられ、発言を促したり、学生同士がやりとりを行ったりしてもよいのではというご意見をいただいた。

《振り返り》

教室のパソコンが故障していて立ち上がらなかったため、対面の学生には急遽スライドを紙に印刷して配布し、それに合わせて遠隔の学生にもスライドのファイルをダウンロードしてもらい、口頭で説明する形にした。そのため意図していたものとはだいぶ違う形の授業になってしまった。

樫本先生にご指摘いただいた学生からの発言が少ないことについて、授業中に発言の時間はとっているが、それでも発言が少ないことを私も日頃から気になっていた。本学の、また今の学生の気質かとも思っていた（授業後に発言があることは少なくない）が、新着任研修会で他の先生方の報告を聞くと、必ずしもそういう訳ではないと知り、反省を新たにした。他の先生方にどのように発言させているかを伺ったところ、学生を指名してしまうのも一つの方法であると意見を頂いた。数学という科目でこの方法が有効であるかどうか試してみることを含め、発言を促すことを今後の課題としたい。

ここには 2 名の先生からの報告書を挙げるにとどめたが、昨年同様、今年度も新着任教員による授業相互参観と合評会が実施され、研鑽を積むことができたと思われる。ただし、新着任教員以外の教員による授業相互参観は例年通り低調傾向にある。原因としては、参観を希望する授業時に自らも授業を行っていることが多いことが考えられる。特に教育学部教員は、教員免許取得のための必修科目が多く、教員一人ひとりの担当科目数も多くなることから、教員の空き時間と公開授業日がなかなか合わないことが、その要因となっている。その改善方法として、今年度初めて実施された遠隔授業（Zoom、Teams などを活用したオンライン授業、YouTube などを活用したオンデマンド授業）による相互参観を取り入れることが考えられる。今後は、これらの方法を取り入れて、授業相互参観を行うことを検討したい。

4. 学科独自の取り組み

小学校教育コース独自の取り組みとして、次の 3 点を挙げる。

⑴ プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続けるために、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の 4 プログラムが設定されている。新カリキュラム 1 年目である今年度は、各プログラムにおいていわゆる「お試し科目」が開講され、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざし問い続けるのかについて学生が考え、年度末に各プログラム選択者が決定した。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ＝各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。

各プログラムでの学修により、各種教員免許取得をめざすことは基本であるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、各プログラムで学びたいという学生の思いを尊重している。そのため、新カリキュラム 1 期生が 2 年生となる来年度に、プログラムを選択しなおすという意志があれば自由に行うことができる。ただし、4 年間で各種教員免許の取得もめざしている学生に対しては、プログラムの選び直しについ

て慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また初等教育を深く学びたい者や、進路変更によって教職以外の将来を考える者が「プログラムを何も選択しない」という選択も尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として「子ども支援ボランティア論」「子ども企業研究」などといった選択科目を設定し、小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

⑵　教育基礎演習ⅠⅡでの取り組み

今年度は、新カリキュラムの教育基礎演習ⅠⅡがはじめて実施されたが、感染症拡大による自粛期間を受けて、夏学期の教育基礎演習Ⅰはほぼ遠隔授業で進められた。2 年生対象の「教育基礎演習Ⅰ」では、教育実習要件となる「インターンシップ」と連動して、学校現場での経験や学びを他の学習者と共有し、悩みや課題等を教員とともに検討する予定であったため、「インターンシップ」が冬学期に延期されたことに伴い、夏学期の「教育基礎演習Ⅰ」では「インターンシップ」への心構え等を構築するような授業展開を行った。「子ども／学校／教育のみかた」と題して、資料を読んでレポートを作成したり、その結果をオンライン上で交流したり、遠隔授業という形でできる「インターンシップ」連動学習を進めた。加えて、2 年次での学士教育の一環として、アカデミックスキルの育成をめざした学習活動も盛り込んだ。自らの検討課題から必要な論文を検索する方法や、論文を引用する方法等を遠隔授業の形で学び、今後、3 年次以降のゼミ活動で必要となるアカデミックスキルの習得や定着を図っている。

回	日付	内　容	主担当
1	4/ 23(木)	オリエンテーション ⑴ 課題①「自己紹介しよう」	永田
2	4/30(木)	オリエンテーション ⑵ 「自己紹介を共有しよう」	福若
3	5/07(木)	子ども／学校／教育のみかた ⑴ 「資料をみよう／きこう／よもう」	早川 西口
4	5/14(木)	子ども／学校／教育のみかた ⑵ 「考察の観点を考えよう」	
5	5/21(木)	子ども／学校／教育のみかた ⑶ 「クラスフォームで仮想議論しよう」	
6	5/28(木)	子ども／学校／教育のみかた ⑷ 課題②「レポート：子どもにかかわる大人として気をつけたいこと」	
7	6/04(木)	アカデミックスキルの定着 ⑴ 「参考文献を探そう」	鈴木 森田
8	6/11(木)	アカデミックスキルの定着 ⑵ 「参考文献を読もう」	
9	6/18(木)	アカデミックスキルの定着 ⑶ 「問いを立てよう」	
10	6/25(木)	アカデミックスキルの定着 ⑷ 課題③「レポート：事実と意見を書きわけよう」	
11	7/02(木)	学びの共有 ⑴ 「共有テーマを設定しよう」	福若 永田
12	7/09(木)	学びの共有 ⑵ 「共有テーマをまとめよう」	
13	7/16(木)	学びの共有 ⑶ 「共有テーマをひらこう」	
14	7 30(木)	学びの共有 ⑷ 「共有テーマをふりかえろう」	
15	8/06(木)	学習の総括　夏学期のふり返り　授業評価アンケート　ゼミ説明　その他 課題④「冬学期に向けて考えよう」	各担任

冬学期の「教育基礎演習Ⅱ」では、順延した「インターンシップ」が実施されたことに伴い、学校現場で得た課題や、履修者それぞれの悩みを共有し、課題を解決するために先行研究や文献を調査しつつ、課題解決スライドを作成、ウェブ上でコメントをつけ合うなどの意見交流を行った。インターンシップ課題検討会として、対面授業にて成果発表・交流予定であったが、12 月に再度登学自粛期間が設けられたため、ウェブ上で可能な限りの成果発表や共有、意見交流を行った。さらに、3 年次からのゼミ選択を「教育基礎演習Ⅱ」で実施している。ゼミ活動とは何か、卒業研究に取り組むとはどういうことであるのかなどの講話を予め授業内で担任が行い、各ゼミを選択するうえでの契機とした。実際にゼミ担当教員の研究

室訪問を行う期間については登学自粛となったため、zoom による研究室訪問を実施し、ゼミ希望や志望理由書については Google フォームを用いた回収方法を採用した。

回	日付	偶数クラス	奇数クラス
1	9/24(木)	授業の概要　教職センターから 課題検討会およびゼミ選択に向けて	インターンシップに関するアンケート
2	10/08(木)	インターンシップに関するアンケート	授業の概要　教職センターから 課題検討会およびゼミ選択に向けて
3	10/15(木)	インターンシップフリートーク 課題の抽出	インターンシップに関する課題
4	10/22(木)	インターンシップに関する課題	インターンシップフリートーク 課題の整理
5	10/29(木)	担任教員の専門領域に関する講話 ゼミ活動とはなにか	インターンシップ課題検討会の準備⑴ （文献検索と講読　スライド作成等）
6	11/05(木)	インターンシップ課題検討会の準備⑴ （文献検索と講読　スライド作成等）	担任教員の専門領域に関する講話 ゼミ活動とは何か
7	11/12(木)	図書館での文献検索と講読 担任教員による個人面談	インターンシップ課題検討会の準備⑵ （文献検索と講読　スライド作成等）
8	11/19(木)	インターンシップ課題検討会の準備⑵ （文献検索と講読　スライド作成等）	図書館での文献検索と講読 担任教員による個人面談
9	11/26(木)	ゼミ決定までの流れと手続きの説明 ゼミ説明会（小コース教員前半）	
10	12/03(木)	ゼミ説明会（小コース教員後半） ゼミ訪問の意味　各プログラムにおける選び直しの説明	
11	12/10(木)	インターンシップ課題検討会 （ポスターセッション形式）	志望理由書（ゼミ）の作成 選び直しの志望理由書の作成（該当者）
12	12/17(木)	「志望理由書（ゼミ）の作成 選び直しの志望理由書の作成（該当者）	インターンシップ課題検討会 （ポスターセッション形式）
13	12/24(木)	2020 年のふり返りと 3 年生に向けて 志望理由書（ゼミ）（選び直し）の提出	
14	01/07(木)	キャリア形成に関するシンポジウム 第 2 回ゼミ選択希望の確認	
15	01/14(木)	学習の総括　授業評価アンケート　配属ゼミ決定 履修カルテの作成　和の精神ポートフォリオの作成等	

⑶　インターンシップおよびスクールサポーター I について

今年度は、「インターンシップ」および「スクールサポーター I 」の両者が教育実習要件と位置づけられた初年度であり、2 年生夏学期に「インターンシップ」、2 年生冬学期に「スクールサポーター I 」が開

講予定であった。ただし、感染症拡大による自粛期間を受けて、「インターンシップ」と「スクールサポーターⅠ」のどちらもが冬学期に行われた。ほとんどの学生は、「インターンシップ」も「スクールサポーターⅠ」も「いい先生」をめざして意欲的に取り組むことができている。「インターンシップ」に関する学生アンケート結果の一部を以下に抜粋する。

教育基礎演習Ⅱ インターンシップアンケート　自由記述
(1)これまでの経験から、楽しかったこと・勉強になったことなど
先生に会いたいからはやく金曜日になってほしいと言ってくれて嬉しかった。子どもたちと本気で鬼ごっこしたり虫取りしたり楽しかった。
週に1回しか来ない私にも子どもたちは積極的に話しかけてくれる。
大人しいと思っていた子が、会うたびに元気に話してくれるようになった。自分がいることに慣れてきたのかなと思った。自分の存在が段階的に認められているようでうれしいことであった。
算数の説明をして、児童が先生分かりやすいわっと言ってくれたこと。
生徒とふれあえたこと。
児童が名前を覚えてくれていて、毎週、先生～と呼んで来てくれるのが嬉しいです。
色んなクラスをサポートして、担任の先生方から「先生が来てくれたから、〇〇さんが算数の授業に積極的に参加してくれたわ。とても助かったありがとう。」と言ってくれたこと。
授業中の児童の楽しそうな様子
自閉症傾向のある子が、教室ではあまりしゃべらなくてコミュニケーションをとるのが難しいなと感じていたが、あるタイミングで2人きりになったときに自分のことをいろいろしゃべってくれて嬉しかった。特に高学年の子は2人きりになるとしゃべってくれる子が数名いる。
たくさん話しかけてくれて嬉しい　そのクラスに行くのが毎回楽しみです。
覚えていてくれたり、寄ってきてくれることが毎回嬉しい。
多くの児童が自分に興味を持ってくれて話しかけてきて来れ、教員の方々もわからないことがあった時に聞くと優しく教えてくれる。
子供たちと関わることの楽しさ。
児童が話しかけに来てくれることがなによりも嬉しいです。
教室には児童生徒を助けるようなアイテム等を使ってサポートしている。休み時間のおにごっこが楽しい。
児童たちが「〇〇先生」と言って見かける度に寄ってきてくれるのが嬉しいです。
子供たちが積極的に話しかけてくれたこと
寄ってきてくれたことが嬉しかった。
子どもたちが1週間に1回しか行っていない私の名前を憶えてくれていて、会ったら、先生!と呼んで抱きつきに来てくれることがうれしかった。
こどもが寄ってきて、先生!と呼んでくれたり、一緒に給食たべよ!って言ってきてくれること
たくさんの児童が話しかけてくれるのがうれしい。
児童が似顔絵を描いてくれたり、休み時間に遊びに誘ってくれたことが嬉しかったです。
児童が積極的に話しかけてきてくれたり、自分が手助けして勉強がわかるようになっていたこと。
毎週金曜日の朝に子どもたちに会うと「今日は〇〇先生がいる!」「休み時間遊ぼう!」と言ってくれるのでとてもうれしいです。
子供たちと話すこと、教えるという経験を積めたこと
たくさん話しかけてくれて嬉しかった。教えるということが楽しかった
教師の方が全員楽しくしている姿はとても輝いていて、やりがいがあると思った　子どもたちがやさしく接してきてくれ

るのがうれしい
子どもたちに休憩時間「遊ぼう」誘われて遊ぶのが楽しかった。
小さいことでも子どもたちからありがとうとか、今日どのクラス？ とか言ってもらえるだけで嬉しい。 遊びにも誘ってくれるのでそれも嬉しい。
子どもたちに、毎回来てくれてありがとうと伝えてもらった。
先生！と笑顔で呼んでくる子どもたちがかわいいです。
児童との触れ合い
教室に入った瞬間児童たちから声をかけてきてくれたのが嬉しかった。また、これまで 3 年生、5 年生、6 年生を見てきたが、先生方は発達段階に合わせて授業作りをされていると感じたし、児童たち自身で考えることができるように常に問いかけをしているなと思った。
・「子どもたちが休憩になると寄ってきてくれるのがかわいい。」・担当の先生と話をしている時に「寄ってきてくれる子どもよりも恥ずかしかったりして寄ってこない子どもをしっかりと観たほうがいい」という言葉が印象に残った。
初めて学校で児童と接するという日に担当した、児童たちが気さくに話しかけてきてくれて、名前もあだ名をつけてきてくれる程、積極的な児童がたくさんいた。そして、その児童たちは今もなお、廊下ですれ違ったりしただけで話しかけてきてくれる。また、高学年の女子児童は接し方に注意が必要だと感じた。思春期に入ろうとしている、または既に真っただ中の児童と接するときは、こちらから距離を詰めていかず、相手が向かってくるなら、対応して、それ以上はいい意味で深く立ち入らない方が良いと担任の先生に教わった。
学習指導補助をしているときと、子供たちと遊ぶ時が楽しかった。 研究授業からの討論会参加により、教員が考えていることが私の想像より遥かに深く、衝撃を受けた。このとこにより、自分の浅はかな考えではいけないといい勉強になった。
子どもたちが折り紙とかいっぱいくれた時は嬉しかったです。 先生がちゃんとしていれば、子どもたちもその姿を見て、子どもたち同士で注意しあったりするんだなと勉強になりましまた。
1 年生のクラスに入った時みんな素直でかわいくて、クラス全員と休み時間におにごっこして遊ぶのは体力が足りないけど楽しい！ 放課後に担任の先生とお話しする時間が、現場の先生からいろんな話が聞けてすごい勉強になるし、楽しい！
・担当のクラスの子が塗り絵や手紙をたくさんくれる ・担当の隣のクラスに 1 時間行っただけでとても懐いてくれた ・手紙もくれた ・見かけるとすぐに近寄って話しかけてくれる ・担任の先生が、児童の言動や行動で少しでもおかしいと思うことがあったら取り上げて、注意してクラスの全員に共有する。
子どもたちと外遊びで全力で走り回ったこと、子どもが自主学習で解いた問題を丸つけしたことが楽しかったです。勉強になったことは、とても穏やかな先生がいらっしゃるのですが、声をはりあげて怒るのではなく、子供たちが考えて解決できるような言葉掛けをして指導していたことです。
覚えていてくれたり、学校に行くと寄ってきてくれたりすることがシンプルに一番嬉しく、楽しいなと感じる。勉強になったことはたくさんあるが、特に、問題を起こした生徒への叱り方や生徒のあしらい方は初めての経験であることが多かったのでとても勉強になった。
楽しかったことは、先生と呼ばれ児童たちが近寄ってきてくれる点。 勉強になったことは、先生方の指導方法、英語授業の取り組み方、児童たちの理解速度、理解方法、問題のどこで児童たちが理解に詰まるのかを知れる点。
週一でしか行ってないのに〇〇先生おはようございますと名前を覚えてくれたこと。 児童によってフォローすることがプラスになる子とマイナスになる子がいるということ。
本来は朝会を月曜日に実施しているが、臨時でテレビ朝会を開いて下さったので、さまざまな学年の児童が挨拶や声をかけてくれる。校長先生や教頭先生が教室に来られた際の子どもたちへの声かけや担任の先生の声かけ、褒めるとき・叱るときなどの言葉の言い換え方など一つ一つが勉強になります。
図工の授業があり、たくさんの児童が折り紙や手紙をくれたことがすごく嬉しかった。休み時間に児童と一緒に遊ん

だり話をしたりするのがいつも楽しい。 授業の初めでなかなか静かにならない時に、「〇〇さんちゃんと聞く姿勢できてる」とか「この列の人完璧」など、できている児童を褒めて周りを静かにさせていて、勉強になった。
仲良くなると自分のことを話してくれたり、名前を呼んでくれるのがうれしい。 大声の注意は一時的で持続的な効果が無い
楽しかったこと。・児童達と一緒に給食を食べたり、昼休み外で遊んだりしたこと。 勉強になったこと ・授業中の姿勢、聞く態度、話し方など悪い癖がついてはいけないことは、しつこいと思われるぐらい注意することが大切。
元気いっぱいで素直なこどもが多くて、話しかけてきたり時に甘えてきたりしてとてもかわいい。 担任の先生の授業での発問や、注意の仕方などはとても勉強になる。
・「来週の金曜日もこのクラス来る？」などと、私が来ることを楽しみにしてくれている子どもたちが可愛い。 ・毎回、折り紙をくれたり、わざわざ家で手紙を書いてきてくれた子がいて嬉しかった。 ・少しだけしか指導・支援していない子なのに、授業終わりに私の方に来て、「ありがとうございました」と言ってくれたり、「先生〇〇のキャラクター好きって言ってたやろ」と言って、そのキャラクターのしおりをくれたことが嬉しかった。 ・普通学級の子どもたちが、ダウン症の子のことをあらゆる場面で気にかけ、お世話をしている姿に感動した。 ・体育が嫌いなダウン症の子についたとき、私が隣で一緒に行うと、楽しそうにすすんで行ったことが嬉しかった。 ・私からすると、少しこわいイメージの先生なのに、子どもたちは休憩時間になると、「先生、先生！」とべったりひっつきに行く。子どもたちは、そのベテランの先生に何か魅力を感じているのだと思う。一方、その先生も子どもたちから沢山もらった折り紙を全て引き出しに入れて、嬉しそうに私に見せてくれた。先生と子ども、お互いの愛情が通い合っていることが大変素敵だと思った。 ・どれだけ高学年になっても、子どもは子ども、やっぱりかわいいと感じた。 ・わからなかった問題を、私が大学で学んだ教え方を使って教えたことにより、「あー！わかった！」と言ってくれたことで、少し自信がついた。また、大学での学びが役立つことが明確にでき、嬉しかった。
支援学級の児童と１対１での授業のときすごく勉強を頑張っている。
例えば、子どもが怪我をした時、自分がまず担任の先生に〇〇さん怪我したそうです！と言いにいかずに、子どもの勉強の為にも子ども自身が担任の先生の所まで報告するようにさせてほしいと学びました。クラスによって異なりますが、友達と同じ意見の時はグー、違う意見の時はパー、付け足しの時はチョキなど、クラスで決められた合図みたいなのが授業中でもよく見受けられ面白いなと思いました。
体育の授業がとにかく凄い。 まず、説明の時間が学活などの時間に行われていて、体育の時間は動くのみだった。普通は座って先生の説明を聞いて、という形の私の学生時代ではその時間は「暇」で夏だと「暑い」印象ですごく嫌な時間だったので、それが省略されていたのがすごくいいなと思いました。
算数でつまづいている児童を指導することがあるけど、答えを教えるのではなくて考え方を教えるというのはとても難しいことだと思った。だから、児童に毎回毎回理解しているか確認しながら進んでいくことの大切さを学んだ。
中学年の児童は、非常に幼く、大人から見ると大したことない内容でも喧嘩したり、泣いたりする。その反面、教師に褒められると素直に指示を聞いてくれることを学んだ。
「〇〇(下の名前)さん」というように担任の先生が子どもたちをさん付けで統一しており、子どもたち同士でも同じようにさん付けで呼び合っていたことに驚き、勉強になった。
様々な学年の授業を見学できること。
授業はとにかく学ぶことだらけです。大学だけじゃ気付くことができなかったことや、現場だからわかる児童の反応など新鮮なことばかりで、とても楽しいです。また、いろいろな学年・学級に行かせていただいているので、学年ごとの授業雰囲気の違いや、先生の話し方の違いもよくわかって、とにかくどの場面を見ても勉強になります。とてもとても楽しいです。
職員室で教員同士で子供たちの様子や変わったことなどを共有していた。
各学年の授業を見たことで、学年が違うことで授業の仕方も考えなければならないと実感したこと。
6年生教室や支援学級を担当して児童の様子を見ていて、児童一人ひとりにそれぞれ特徴があることは理解していたが、それにしても全然違うのでそれに合ったアプローチをしないといけないと他の教員の様子を見て分かり、そのこと

が勉強になったし面白かった。
子どもたちと一緒に遊ぶこと 毎週一日しか学校に行けないけど、子どもたちとの関係が築けていけているのを実感できること 積極的に意見を交流することで子どもたちが授業に引き込まれていく授業の面白さ
児童を支援する際に、全てをしてしまってはいけないというと。
クラスの一人一人の児童との関わり方の工夫などはとても勉強になった
特別支援についての興味・関心がとても深まった。なぜなら、想像以上に支援を必要としている子どもが多く、対応の仕方や補助方法が正直とても難しく感じたため。
児童と直接かかわる機会、実際の現場にて先生の授業を見ることが出来、勉強になりました。
トラブルの解決方法を勉強になった。
大きな声を出す注意だけじゃ聞いてくれない。落ち着いて、冷静になぜダメか説明すると効果がある。 日を重ねるごとに、「名前何やっけ?」から「千福先生や!」といってくれる子が増えるのがうれしい。
何でもかんでも先生が先頭に立ってするのではなく。、一回子ども達に考えさせてから、行動させる大切さを学んだ。一週間に一回しか行かないのに、みんな覚えてくれて、朝廊下で「先生おはよう!」って挨拶をしっかりしてくれることが一番うれしい。
喧嘩や、悲しむ人が多くでた日の道徳の仕方
授業内では休み時間にどんなにあだ名で呼んでいたとしても、クラスメイトのことを呼ぶ際には「〇〇さん」と 1 年生から 6 年生までが徹底して呼んでいることについてすごいなあと感じた。 給食室へ食器を返しにきた時、それぞれが口々に「給食とても美味しかったです、ご馳走様でした!」と挨拶をする姿がとても素敵。
やる気の起きない児童のやる気を起こした時。
子供はすごく甘えたがり
児童1人ひとりの特性や得手不得手をふまえた指導が行われており、とても参考になる。
授業におけるポイントの説明の仕方や、分かりやすいと感じられる指導方法を見るととても参考になったと感じます。
支援学級の子どもの難しさ
算数が苦手なクラスで授業補助をしているとき、主席の先生の教え方や児童に対する接し方が勉強になりました。その時に児童の素が出ているような気がして、自分も自然と素が出ていて児童と関わること自体が楽しいと感じました。
特別支援の児童の中には、車椅子ベッドみたいなのに乗った寝たきりの状態で、食事を喉から通して食べさせる児童も小学校にいたことにびっくりしました。
子どもの行動について
休み時間と授業のオンオフの切り替えがとてもすばやいクラスがある。先生が何も言わずともやるべきことをわかっている。先生も含めて児童がとても楽しんで生活している。
運動会で子どもたちの成長を感じた。
最初ほとんど学級として成立していなかったが落ち着くようにした方法
運動会に参加してぜんぶみたときに感動したのと、リレーの応援など子どもたちといっしょになって参加できたので楽しかってです。
1年生は本気で怒っても入って来ないのでいざというときまでとっておく
10/4 に運動会があり、参加させていただきました。その練習期間の子どもたちの頑張っている姿を毎週見させていただき、みんなで何かを達成することの楽しさや感動を見せていただきました。練習になかなか集中できない多動症を抱えている子が本番にはみんなと同じように踊っている姿に心を打たれました。 ・勉強になったことは本当に多く書ききることが難しいですが、一番に一人ひとりの先生方の強い想いや子どもたちと関わる姿を現在進行形で見させていただいており、自分もこうなりたいと勉強になることばかりです。

ただし、「インターンシップ」の受け入れ先である小学校から、引き続きの「スクールサポーターⅠ」や教育実習の受け入れを断られるケースなども見られた。そうした場合当該学生は教育実習不可となり、

学生指導をどのように行っていくのかなどが課題となる。さらに、当該学生への指導を充実させることが前提だが、その後の教育実習をどういった形でコーディネートしていくのかなども検討が必要である。

（附記）本報告書は、FD 委員 2 名が作成したものである。
本報告書における「2. 大学基礎演習について」部分は、原田三朗先生にデータや草稿をご提供いただいた。ここに附記し、御礼申し上げます。

（文責　坂本 暁美・永田 麻詠）

教育学科 幼児教育保育コース

１．はじめに

本コースは、平成 31 年度学部改組に伴い新設されたコースであり、令和 2 年度末で開設後 2 年を経過した。幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得を主とし、小学校教諭一種免許状の取得も可能であり、コースの基本方針として、この 3 種免の取得を推奨し、コース運営を行っている。改組前の小学校・幼児保育コースから、幼児教育保育コースに刷新されたことにより、これまで以上に保育者（幼稚園教諭、保育士、保育教諭）の養成に力点をおいたコースとなっている。

入学定員 60 名に対し、令和 2 年度末の在籍学生数は、1 年次生 64 名、2 年次生 67 名であり、8 名のコース教員で運営を行っている。コース教員の専門分野は、幼児教育学、保育学、児童福祉学、音楽学、発達心理学、教育方法学、健康・スポーツ科学と多岐にわたり、それぞれの専門性を活かしながら保育者養成に従事している。

本コースは、以下の 3 つのディプロマポリシーを設定し、学生指導にあたっている。

１）保育者としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもに応えることができる専門的知識および実践力、指導力を身につけ、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

２）保育者としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および保育者としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

３）変化する社会、保育施設等で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

２．大学基礎演習について

大学基礎演習は 4 年間の学びを豊かなものとし、大学全体やコースのディプロマポリシーを実質化する上で、極めて重要な科目である。本コースでは、60 数名の学生に対し、3 名の教員が担当者となり、1 クラス 20 数名による少人数授業を可能とし、授業内容によってクラス別／コース全体を使い分け、授業を展開した。

夏学期の大学基礎演習Ⅰ及び冬学期の大学基礎演習Ⅱの到達目標は以下のとおりである。

＜大学基礎演習Ⅰ　到達目標＞

①大学での 4 年間の学びを理解し、自分自身の目標と見通しをもって学習をするための心構えをもつ。

②大学で学ぶ上で必要なスキルと知識を習得する。

③幼児教育の現状と教員の仕事について理解する。

＜大学基礎演習Ⅱ　到達目標＞
①論理的に考えて発表したり、意見交流したりする中で柔軟に考える力を習得する。
②基本的な学びのルールを知る。
③将来の展望を持つ。

これらの到達目標を掲げた上で実施した、具体的な授業内容は以下のとおりである。

＜大学基礎演習Ⅰ　授業内容＞
第１回目:大学での学びと生活　将来像と自らの４年間の学びを統合する①(オンデマンド)
第２回目:大学での学びと生活　将来像と自らの４年間の学びを統合する②(オンデマンド)
第３回目:大学での学びと生活　将来像と自らの４年間の学びを統合する③(オンデマンド)
第４回目：大学での学びと生活　コースの学びを知り、自らの学びについて再度考えよう(オンデマンド)
第５回目：大学での学びと生活　高等学校と大学の違いを考えてみよう(オンデマンド)
第６回目：大学での学びと生活　「探究的学びのすすめ」から高等学校と大学の違いを知ろう(オンデマンド)
第７回目：困っていることを解消しよう(来学日)
第８回目：クラス別交流会　自己紹介などを通してお互いを知ろう(オンライン)
第９回目：先輩の話を聞こう①(オンライン)
第 10 回目：先輩の話を聞こう②(オンライン)
第 11 回目：読み方　「探究的学びのすすめ」のポイントを復習する(オンライン)
第 12 回目：読み方　「早期教育」を読み、意見交流①(オンライン)
第 13 回目：読み方　「早期教育」を読み、意見交流②(オンライン)
第 14 回目：読み方　「早期教育」を読み、意見交流③(オンライン)
第 15 回目：夏学期の学びを振り返る（履修カルテの作成を含めて）（オンライン）

＜大学基礎演習Ⅱ　授業内容＞
第１回目：大学での学び方を知ろう　キャンパスツアー(偶数)
第２回目：大学での学び方を知ろう　相談会・図書館ツアー(偶数)／相談会・キャンパスツアー(奇数)
第３回目：大学での学び方を知ろう　図書館ツアー(奇数)
第４回目：メールの書き方を知ろう(A 方式)
第５回目：読み方の復習(A 方式)
第６回目：レポートの書き方を理解しよう①(A 方式)
第７回目：レポートの書き方を理解しよう②(A 方式)
第８回目：2 回生の模擬保育に参加しよう（奇数は図書館の使い方、文献検索のしかた）
第９回目：2 回生の模擬保育に参加しよう（偶数は図書館の使い方、文献検索のしかた）
第 10 回目：参加した模擬保育をもとにレポートを書いてみよう①（面談並行）
第 11 回目：参加した模擬保育をもとにレポートを書いてみよう②（面談並行）

第 12 回目：参加した模擬保育をもとにレポートを書いてみよう③（面談並行）
第 13 回目：各自のレポートをもとに交流①(オンライン)
第 14 回目：各自のレポートをもとに交流②(オンライン)
第 15 回目：進路を考えよう（キャリアセンターによる就職支援）（オンライン）
第 16 回目：1 年間を振り返ろう(オンライン)

令和 2 年度は新型コロナウィルス感染症の拡大により、授業運営も多大なる影響を受けた。大学基礎演習においても同様であり、1 年生対象科目ということを考えると、例年以上に授業実施のための工夫や個々の学生に応じた対応が求められた。そのようななか、担当教員の細やかで丁寧な対応により、当初掲げていた到達目標は概ね達成できたものと考える。特に、コースのディプロマポリシーのポイントの 1 つとなっている「他者と協働する」ということについて、大学に登学できない（あるいは偶数・奇数半々の登学）という制限のあるなかで、オンラインツールを活用したりして、効果的に盛り込むことができた。1 年生間のかかわりだけでなく、2 年生とかかわる機会も設け、「縦のつながり」のなかで協働する経験をしかけ、事後の 1 年生の振り返りから、大変有意義な機会となったことが窺われた。

一方で、この 1 年間、いわゆる「対面で」の経験を積み重ねることができなかったのは事実であり、そのことの影響が 2 年生以降の生活で表れてくる可能性も想定される。2 年生以降も「教育基礎演習」の担当者が中心となり、細やかで丁寧な対応を心掛け、不足している経験を補えるよう、コース全体で協議していきたい。

３．授業相互参観について

令和 2 年度冬学期に実施予定であった授業相互参観について、コース教員が設定していた 11 月末～12 月上旬にかけて、新型コロナウィルス感染症が再度拡大し、授業運営も完全遠隔に切り替えるなどの対応が必要となり、十分に実施することができなかった。参考までに、各教員が公開予定であった授業一覧を以下に示す。

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	中継あり	合評会
石田　陽子	2020/12/7	月	2	教育専門演習Ⅱ	6-251 （ML 教室）		授業後に開催
小川　圭子	2020/12/8	火	4	保育者論	5-210	○	授業後に開催
小磯　久美子	2020/12/7	月	4	保育内容理論と方法「環境」	4-309	○	書面で代替
田辺　昌吾	2020/12/9	水	4	保育方法論	6-351	○	書面で代替
丹羽　智美	2020/12/7	月	5	子ども家庭支援の心理学	6-253	○	授業後に開催
山田　綾	2020/12/7	火	1	教育の方法・技術	5-301		授業後に開催
吉田　康成	2020/12/15	火	1	体育科教育法Ⅱ	総合体育館		授業後に開催
吉田　祐一郎	2020/11/30	月	3	社会的養護Ⅰ	4-412	○	11/30 5時間目 または書面で代替

４．コース独自の取り組みについて

（１）「保育インターンシップ」の授業運営

「保育インターンシップ」は新カリにおいて新設されたコース専門科目であり、4 セメスター配当である。コースの全教員が担当者となり、週 1 回、保育所等の保育現場でインターンシップを行うとともに、定期的にインターンシップの振り返りを行う授業である。しかし、令和 2 年度は新型コロナウィルス感染症の影響により、当初予定されていた授業内容の実施が困難となったことから、コース教員間で何度となく協議し、「学生が主体的に学ぶ」ことができるよう、授業内容・方法を工夫し、実施した。主な内容は以下のとおりである。

・少人数（5 名程度）クラスで、映像資料や具体的教材を活用し、幼児教育・保育について議論する。
・新型コロナウィルス感染症が保育現場にもたらした影響を考え、インターンシップや実習で自分たちが保育現場に入るときのふるまい方について議論する。
・学びの目標設定を明確にした上で、1 日実地体験として、保育現場で 1 日インターンシップをする（希望者のみ）。
・実地体験の報告をするとともに、他者の報告に対して自分の経験を照らし合わせて、質問したり感想を述べたりする。
・実地体験不参加者がインタビュアーに、参加者がインタビュイーになり、保育現場の実際についてインタビュー活動を行い、その内容を発表する。

突発的な事態により、対応せざるを得ないなかで講じた内容ではあったが、結果として学生のアクティブラーニングを促すことができ、またコースの全教員が担当者であったことから教員間の協働も促されることとなった。次年度以降もコロナ対策も含めて、引き続き柔軟な対応が求められることから、この授業運営の経験を生かしていきたい。

（２）保育実習先へのアンケート調査

例年 2 月に実施されている「社会福祉施設実習懇談会」が新型コロナウィルス感染症の影響で中止となったため、コース独自の取り組みとして、保育実習先へのアンケート調査を実施した。その結果、49 施設から回答を得た。主な質問項目は、「これまでの本学の保育実習についてお気づきの点やご意見など」「実習にあたっての感染症防止対策として必要とお考えになっている内容など」であった。

「これまでの本学の保育実習についてのご意見」としては、

・四天王寺大学の学生の皆様は、実習に対しての姿勢が優れていて、感心させられます。学ぶ意欲が強く、何事にもチャレンジするところが受け入れる側にも伝わります。（保育所）
・実習への心構えとして受け身で臨むのではなく、自分からやってみたいことを準備してくる。また自分のわからないこと、疑問に思うことはどんどん質問してほしい。指示されたことだけをするのではなく、学生の前向きな姿勢は職員にも良い影響（刺激）を与えてくれますので、積極的に取り組んでほしい。（保育所）
・実習生が来られる時期が、毎年生活発表会の時期と重なり、前後がわからないまま厳しい場面等目にされることになると思います。決してその場面だけを見るのではなく、今に至るまでの子どもと先生の信頼関係や子どもたちのがんばり、成長を見極めてほしいと思

います。（保育所）

・目的意識をしっかりもって実習に臨んでいることがよくわかります。普段からレベルの高い実習指導をされている成果だと思います。貴学からの実習生を受けるのが楽しみです。（施設）

・学習意欲はあるが、活動や日誌に反映できていない印象をうけます。一日一日を大切に積極的に動くよう意識していただきたいと思います。日誌は学んだこと、あった出来事を具体的に書き、自分の考えをしっかり書けるといいと思います。（施設）

・日誌の記録について難しい学生の方が増えているように感じます。話し口調で記載していたり、留意点についても説明していますが日誌に反映されていないことが目立っています。（施設）

など、肯定的なご意見や課題をご指摘くださったご意見など、多岐にわたった。

また、感染症予防策としては、大学で実施している対策（実習 2 週間前からの検温・行動観察、チェックシートの提出、マスク着用）のレベルを維持することや、PCR 検査の受診を希望するご意見もあり、各実習先によって希望する予防策は異なっていた。

アンケート結果は、コース内で回覧し、コース会議で意見交換を行った。いただいたご意見は今後の実習指導に反映させていきたく思う。

５．その他（今後について）

令和 2 年度末で、新コース設置から完成年度を迎えるまでの半分の期間（2 年間）が過ぎたことになる。令和 3 年度以降、順次新たな専門教育科目が開講されるなど、さらなるコース教員の負担増が予想される。なかでも実習関係については、本コースの大部分の学生が 4 回の実習（保育実習Ⅰ（保育所）×2 週間、保育実習Ⅰ（施設）×2 週間、保育実習ⅡまたはⅢ×2 週間、教育実習×4 週間）に参加し、その多くが 3 年次に設定されているため、令和 3 年度以降、順次実施されることになる。旧小学校・幼児保育コースでは、保育実習参加者は 40 名程度であったが、幼児教育保育コースでは 60 数名が参加することから、学生指導や実習先との調整は負担増となる。各コース教員が次年度以降も FD 活動を進めていくためには、コース教員の増員や教職教育推進センターとのより密な連携が必須である。充実した FD 活動を展開するための環境整備が喫緊の課題である。

教育学科 中高英語教育コース

1. はじめに

本コースは，中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものも多い。

2020 年より小学校 5 、6 年生で英語が教科化され、これに伴って一部自治体が中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、中学校・高等学校の英語科教員免許状を取得する本学小学校・幼児保育コース所属の学生が増加している。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが自身の適性などを「最終的に一般企業への就職を目指すようになる学生もいる。

中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループの学生に対しての教育を担うという状況は続くが、このように中学校・高等学校の英語教員志望の学生が増加し、学生のレベルと意欲にばらつきが大きくなっていることから、さらにきめ細かい指導が必要になると思われる。

2. 大学基礎演習について

概要：本学の建学の精神の理解を基本に、大学における学修と大学生活の意義と目的全般にわたり初歩的な自己課題を自覚するとともに、それを支える基礎的知識・技能・態度を修得することで、ＩＢＵ及び所属する学部学科への所属感を確かなものとし、以降の学生生活への見通しを持つ。

到達目標

①本学に所属し、学ぶことの意義を理解し、以降の学生生活に対する自己課題を自覚できる。

②「大学生」としての学修に必要な基本的知識・技能・態度を修得できる。

③「教える」とは何かを理解し、自らの目的意識として具体化できる。

④教員や友人との適切な人間関係を築くことができる。

夏学期は全面オンラインでクラスを分けず教員二人体制でティームティーチングを行った。冬学期からはハイブリッド形式で、クラスを 2 つにわけ、教員が毎週交互に担当した。また PROG テスト結果をもとに個人面談を行い各々が抱えている問題や将来への展望などを聞き取った。また学習ポートフォリオの入力作業なども行った。

コロナ下での大学生活への適応ために、授業開始前から LINE オープンチャットを開設して、細かく学生とのコミュニケーションをとり、教員やクラスメイトのサポートが入りやすい環境を作った。

FSD の観点からは教員二人が話し合いながら授業を行うことにより教員それぞれの強みを

活かし、相互に学び合う環境となっている。
また昨年度からの本コース新しい取り組みとしてハロースクール（1年生全員が四天王寺東中学校の教育現場を見学し授業観察を行う）を実施しているが、コロナ禍であるにもかかわらず昨年度も受け入れていただき、教職へ意識づけをすることができた。

3. 授業相互参観について

コースとして互いの授業は常に開かれた状態でありできるだけ相互に参観することを合意している。しかし授業の重なりや人員不足による多忙のため、コース教員同士の定期的な総授業参観は実施が難しいころに加え、昨年度はコロナ対応で対面授業が減ったということもあり実施することができなかった。

しかしコロナ対策のために、リモートの授業方法や使用するソフトウェアなどについての情報交換の頻度が大きく上がり、授業の質向上に資した。

令和３年度はリモート授業の相互参観や授業の録画をコース全体で共有し話し合うなどの方策を検討する。

4. コース独自の取り組みについて

例年、中高英語教育コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループの存在を前提として、（１）英語力の向上、（２）授業の質改善へ取り組み、（３）教員採用試験対策（授業外）、（４）海外および国内研修などを行っているが、コロナ禍のために大幅な変更を余儀なくされた。以下例年通りできたものを（A）、変更あるいは実施できなかったものを（B）、逆に取り組みの質や量が増加したものを（C）として報告する。

（１） 英語力の向上

① （A）資格試験受験の奨励と指導：英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。

② （B）例年行っているマレーシア国民大学、ソルトレークコミュニティカレッジおよびユタ大学の学生との交流ができなかった。

③ （A）iTalk 訪問の奨励

（２） 授業の質向上に向けた取り組み

① （A）全学的に年 2 回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。

② （A）教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。

③　（C）例年使用していたリアルタイムウェブアンケートシステム「イマキク」に加えて Google Forms や Microsoft Forms をほぼすべての授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行った。

④　（C）ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを本年度は全ゼミで実施した。また冬学期には全ゼミ生の前で各ゼミ優秀者が英語プレゼンテーションの発表を行った。さらに本年度より、この取り組みを卒業研究の必須化へとつなげることが合意された。

（3）　教員採用試験対策（授業外）

①　（A）3 回生対象各種セミナー面接対策：5～6 月、週 1 回

②　（A）4 回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション対策：4 月～9 月、週 1～2 回

③　（A）3 回生および 4 回生対象各種エントリーシート添削：随時

（4）　海外および国内研修

①　（B）例年参加していたグローバルユースカンファレンス（8 月初旬）が中止され参加できなかった。

②　（B）アメリカ英語研修参加者（令和元年 2 月初旬）がコロナ禍によって中止された。

③　（B）グローバル教育研修参加者（アメリカユタ州　令和元年 2 月中旬）がコロナ禍によって中止された。

④　（B）ユタ大学およびソルトレークコミュニティカレッジと共同での授業案作成、タンデムティーチングなどをする予定だったが、来日が中止され実施できなかった。

5. その他

本年度以降はコロナ禍で失われた教育機会を回復させると同時に、コロナ対策で得た様々な、特にＩＣＴ関係のノウハウや気づきを、本コースの教育の質の向上を活かしていく。

令和 2 年度 FD・SD 報告書　教育学部 教育学科 保健教育コース

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭 1 種免許状が取得できる。

学生にとっては 4 年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology： ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。養護教諭は一人配置の学校が多いにも関わらず、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、養護教諭の専門性がより求められている。一方、採用面に関しては、加速する少子化に伴う学校の統廃合とも相俟って、学校数は減少の一途であり、教員採用試験への合格は狭き門である。このような厳しい社会状況ではあるが、一人でも多くの学生が夢を叶え、養護教諭として学校現場で活躍できるよう、現存のカリキュラムに加え、教員採用対策講座の年間課外時間数の増加と本コース独自作成の養護教諭採用模擬試験を実施している。養護教諭採用模擬試験実施に当たっては、試験内容に関連した最近の学校保健の動向について解説を行うとともに、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成を図り、時代のニーズに応じた教育プログラムの構築・充実・改善に努めている。

(1) 取得可能な免許・資格

主免許状：**養護教諭第一種免許状**、中学校・高等学校教諭第一種免許状（保健）*
併修免許状：**小学校教諭第一種免許状**
資格：第一種衛生管理者*、学校図書館司書教諭、ピアヘルパー受験資格*、
　　社会福祉主事任用資格、児童指導員任用資格
〔備考：* 平成 31（令和 1）年度入学生からは取得できない。〕

(2) カリキュラムの概要

1 年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「看護学／学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2 年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「救急処置／学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び

心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」及び「臨床実習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。さらに、「学校実地演習／インターンシップ・スクールサポーター」とその後の「学校・保健室ボランティア活動」を通じて、教員の職務や学校の仕組み等について理解し、教職への適性も確かめ、次年度以降の「養護実習・教育実習（初等教育）」に備える。

3年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「健康相談活動（3年次）／健康相談（2年次）」、「微生物学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。また、「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、保健教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「保健科教育演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4年次は、研究・研修期にあたり、「保健科教育演習Ⅲ・Ⅳ／教育専門研究Ⅲ・Ⅳ」で、大学生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。また、小学校教諭の免許取得希望者は、小学校での4週間の「教育実習（初等教育）」に参加する〔新カリキュラムでは、教育実習（初等教育）は3年次に行う〕。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学4年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

2. 大学基礎演習について

1年次に開講する大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの目標と主な内容は下記の通りである。

(1) 目標

大学基礎演習Ⅰ

① 本学に所属し、学ぶことの意義を理解するとともに、今後の学生生活に対する自己課題を自覚する。

② 大学生として、また教育学科保健教育コースに所属する学生として、教職を目指すための学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。

③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。

④ 社会に生きる人間として、教員や友人との信頼関係を築く。

大学基礎演習Ⅱ

① 本学・本学科に所属して自ら学ぶ意義と課題を把握する。

② 社会人および教員の準備段階として位置づけ、大学生および教育学科保健教育コース所属の学生としての学びに必要な基礎的知識･技能･態度を身につける。

③　自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
④　自分の考えを発表し、お互いに討論する中で教員や友人との信頼関係をつくる。

(2) 演習の概要と指導上の工夫

夏学期はCOVID-19感染拡大の影響で、夏学期はTeamsとZoomを用いたオンライン授業および課題学習を中心とし、冬学期は対面授業とオンライン授業同時進行のハイブリッド型の教育形態を導入した。主な取り組みは下記の通りであった。

①コロナ禍のもとでのオンライン授業：ICTの積極的活用

IBUnetの使用方法全般の解説と、「課題管理」を使って、レポート提出および課題への取り組み等ができるように指導した。また、「授業資料」にアップロードされた電子媒体の演習資料のダウンロードの方法、提示されたURLへのアクセス、オンデマンド教材の利用方法等についても解説した。加えて、「クラスフォーラム」や「Q&A」から質問やディスカッションをする方法についても説明をし、積極的な利用を通して、オンライン授業に慣れることができるように導いた。

②図書館活用法

図書館の利用については、図書館課課員による図書館ツアーと図書・文献検索オリエンテーションを行った。本演習では、OPACを用いて、本学蔵書の中から興味関心のある本を検索し、実際に数冊借りて読むという実践を行った。また、各授業でのレポート・論文作成に必要な論文・資料収集を円滑に行うため、CiNii、Medical Online、EBSCO host、医学中央雑誌等、学術雑誌検索法についても習得してもらった。

一連の図書館活用法を学んだ後、「私の薦めるこの1冊」のレポートを作成してもらった。加えて、11月6・12・19・26日、大学基礎演習Ⅱにおいて、コース内でビブリオバトルを行った。発表の内容や技法等、学生間で評価をさせ、最も評価の高かった上位3名が、12月8～10日に実施された図書館主催のビブリオバトルに出場した。優勝は叶わず、全国大会に出場できなかったが、次年度にチャレンジする良きステップとなった。本プロジェクトを通して幅広い領域の知識と教養を習得し、また、プレゼンテーション力、ディスカッションする能力を高めることができた。

③学外実習

11月25日（水）、大学基礎演習受講生32名が、四天王寺小学校にて教育現場での初めての実習となるハロースクールに参加した。受講生は、少人数のグループに分かれ、小学校1～6年生の各クラスにて、半日見学実習を行った。また、本コース卒業生が、同小学校に養護教諭として勤務しており、先輩から養護教諭の職務の実際と私立学校における保健室運営の特徴等についても学びを深めることができた。

④養護教諭が担う保健教育

養護実習では、保健室での実習だけでなく、保健教育を担当する機会が増えている。そこで、大学基礎演習Ⅱにおいて、1年生を対象に、養護実習を終えたばかりの3年生が実習先で実践し

た研究授業を再現するという取り組みを行った。本取組は、学年間連携を図り、先輩から後輩へのピアエデュケーションの一環と位置付けるとともに、養護教諭が実践する保健教育の実際について学ぶ好機となったと考える。また、演習担当教員が、学校現場で使用されている教科書と学習指導要領解説をもとに、小学校 3 年生から中学 3 年生までの保健科教育について解説を加え、学習指導案の作成方法についても指導した。

⑤キャリア教育：教員採用試験合格体験記

今年度の本コース教員採用試験現役合格者数は、養護教諭 2 名（和歌山県 1 名、相模原市 1 名）、小学校教諭 1 名（大阪府 1 名）であり、「教員採用試験現役合格体験記」と題した講演会を実施した。教員採用試験に向けての対策だけでなく、本学で 4 年間をどのように過ごしたかについて詳細に語ってもらった。また、現役合格を果たした 3 名は、養護実習、小学校免許取得のための教育実習、加えて、学校ボランティア活動にも積極的に参加しており、保健室と養護教諭の役割、小中高等学校における養護教諭の職務の相違、児童生徒の健康事情や取り巻く社会・家庭環境等、多くを学んでいた。1 年生は、先輩の体験談を聞くことで、養護教諭になるという目標が明確化され、学習意欲が更に高まったと思われた。

3. 授業相互参観について

令和 2 年度冬学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目は下記の通りであった。授業参観終了後、合評会を実施した。

＜岡本啓子＞

日時：令和 2 年 12 月 16 日（水）3 限　6 号館 311 研究室

科目：学校看護学 I

対象：教育学部保健教育コース　履修登録者 1 年 32 人、4 年 1 人の計 33 人　全員出席
（Teams による遠隔授業）

内容：学校看護学 I　第 11 回「学校看護技術 2　学校感染予防の技術について」

感染予防の意義と目的についての理解、スタンダードプリコーション（標準予防策）の基本方針と具体策についての理解、清潔・不潔・滅菌・消毒についての区別、原理・原則に沿った滅菌操作の実施を学習目標とした。感染予防のためのプロセス、感染経路対策、感染源対策、感受性宿主対策について説明を行い、学校における養護教諭の実践例に沿って解説を行いながら学生個々に考える時間をとった。また、物品を使った感染予防の技術（滅菌物の取り扱い、手洗いの洗い残し検証など）を教員が行うデモストレーション映像をライブで見せ、画面の向こうでは学生自身にシミュレーションを体験させた。そのあと、学生数人から授業の学びについて意見を求めた。「感染を防ぐ重要性が理解できた」「標準予防策を養護教諭の実践には必要であることの理解が出来た」などの発言は得られるものの達成度は低いように思われる。今回、模擬保健室での演習を計画していたが、遠隔授業の継続が見込まれるため、シミュレーションを取り入れての遠隔授業を行った。部屋・物品などの環境整備も重要であるが、学生のニーズに少しでも対応していくことが学習目標に近づけるように感じている。

＜楠本久美子＞
日時：令和 2 年 12 月 1 日（火）3 限　6 号館 A207 教室
科目：養護概説
対象：教育学科保健教育コース 1 年　受講登録者数 34 人　出席 34 人　欠席 0 人
内容：「色覚異常」
　色覚異常に関する正確な知識の習得と教育的配慮について学ぶ。パワーポイントを使用して、(1)色を感知する視覚細胞の仕組み、 (2)色覚異常者の色の見え方、(3)教育指導中の配慮と工夫について 3 分割で解説した。なお、(1)(2)の後に質問(①授業、②掲示物、③野外活動での配慮すべき事項)を 3 問だし、解答を粘着メモ用紙に書きださせた。教育的配慮を予め考えさせたうえで(3)に進んだ。ほとんどの学生が本時で学んだことは色の見え方の特徴と配慮と工夫についてであり、知らないことを認識し、配慮方法が理解できたと書いていた。

＜土居悟＞
日時：2020 年 11 月 26 日（木）　4 限　5 号館 301 教室
科目：子どもの保健
対象：教育学科幼児教育保育コース 1 年　受講登録者数 65 人　出席 64 人　欠席 1 人
　　（対面 29 人、遠隔 36 人）
内容：子どもの保健　第 9 講　腎臓疾患・泌尿器系疾患
　「子どもの疾病の予防及び適切な対応」のうち腎臓疾患・泌尿器系疾患をとりあげた。
まず、腎臓の構造と生理について、タッチパネル対応ディスプレイ上で、パワーポイントのグラフィックイメージをデジタルペンでメリハリをつけて説明した。具体的には、腎臓の主な働きは体液、電解質、酸塩基平衡の調節や老廃物の排泄のみならず、エリスロポエチンの分泌、レニンの分泌、ビタミン D の活性化をおこなっていることを解説した。エリスロポエチンの分泌と赤血球産生については、水泳の日本代表選手が高地トレーニングをおこなった効果についての手持ちの動画も併用した。そのうえで、学校検尿で分かることを詳述し、検尿の意義を踏まえて、ネフローゼ、糸球体腎炎などの病気の概略について解説した。これらのことを通じて、幼稚園教諭・保育士を目指す学生にとって重要な検尿の意義を、腎臓病の早期発見という視点から学生に考えさせる授業を行った。授業で使用したパワーポイントのデータはすべて IBU ネットの授業資料に上げ、かつ学生に印刷物として配布した。授業終了時に確認の小テストを行った。対面での学生の受講態度は良好で、熱心にノートをとっており、学校・園で必要な医学知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

＜仲谷和記＞
日時：2020 年 11 月 30 日（月）1 限　6 号館 B353 教室
科目：学校看護学 II（疾病 I）

対象：教育学科保健教育コース 1 年　受講登録者数 34 人　出席 33 人（リモート受講者含む）欠席 1 人
内容：「健康診断時に注意すべき疾病および異常: 整形外科関連①（脊柱の疾患・障害）」

本授業では、「児童生徒等の健康診断マニュアル（平成 27 年度改訂版、日本学校保健会）」および「学校の運動器疾患・障害に対する取り組みの手引き（改訂版、運動器の健康・日本協会）」をテキストとして、「マニュアル」第 2 章「健康診断時に注意すべき疾病及び異常」第 1 項「整形外科関連」の「脊柱の疾患・障害」と、「手引き」第 2 章「子どもによくみられる運動器の症状・ケガ・故障」より「Q13 首が痛い」「Q17 腰が痛い」「Q22 側弯症ってなに？」の各項目とそれに関連する疾患について取り上げた。適宜、解剖生理学的事項について復習を行い、また、学生の理解が深まるよう、各種の医学書・文献に基づく図版を用いて視覚的で分かりやすい講義となるよう腐心した。学生の受講態度は良好で、熱心にノートをとり、学校・園で必要な医学知識についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

＜松本珠希＞
日時：2020 年 12 月 8 日（火）3 限　6 号館 A304 教室
科目：公衆衛生学（ZOOM によるオンライン授業）
対象：教育学科保健教育コース 2 年　受講登録者数 29 人　出席 29 人　欠席 0 人
内容：　「21 世紀の健康戦略：MDGs と SDGs」

貧困、紛争、テロ、気候変動、資源の枯渇等、現況の放置は、人類の安定した暮らしを脅かすと危惧されている。「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」は、「持続可能な世界」を実現するための道標である。SDGs は、17 目標・169 ターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っている。本授業では、Global Health の観点から、健康の定義について捉え、併せて、プライマリ・ヘルスケア、ヘルス・プロモーション、ヘルスフォーオール 21、ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）等、過去の健康に関する世界戦略について概説するとともに、SDGs に引き継がれた経緯等についても学んでもらった。SDGs の目標 3「すべての人に健康と福祉を」については、特に時間をかけて解説した。加えて、持続可能な世界を築くために何をすべきか、未来の日本を、そして世界を担う学生達に、どのように目標達成に貢献できるかを考えてもらった。学生の受講態度は良好で、21 世紀の健康戦略についての学びを深めることができ、授業の目標が達成された。

4. コース独自の取り組みについて

(1) ICT を活用した模擬授業実践演習

教育基礎演習 I では、コロナ禍の下での夏学期であったが、養護教諭の健康教育における指導力を高めるため、小学校 5・6 年生対象の保健科オンライン模擬授業を行い、相互評価を行った。短期間で、ウィズ・コロナの授業形態に慣れるとともに、ZOOM や Teams を巧みに操作する 2 年生は頼もしく、オンライン上で先生役・児童役を果たした学生達を、彼らの適応力と柔軟性を含め、高く評価している。

教育基礎演習Ⅱでは、中学生を対象としたハイブリッド型保健科教育の模擬授業実践（対面授業・オンライン授業の同時進行）を行うことで、養護教諭に必要な保健科指導力を高めた。

(2) コロナ禍の下での臨地実習

科目「臨床看護学演習」の一部に位置づく臨床実習は、コロナ禍で医療機関の実習受け入れが中止となったことから、学内実習に差し替えて授業を実施した。2 グループ（10 人）毎 3 回に分散し、マスク・手洗いなどの感染対策を行いつつ授業を進めた。授業内容は、環境整備・感染対策などの実技確認、さらに実習予定病院において昨年度実習経験をした先輩からの体験談聴取などにより、経験するはずであった自らの学びにつなげることができた。体調不良者へは、オンラインで授業を展開し、後日補講を行い学びの確認を行った。

(3)「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」

① 目的

保健教育コースの「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」（専門ゼミ）では、3 年次に下記 5 つの領域のいずれかを選択し、2 年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

a) 学校保健看護研究（担当者：岡本啓子）子どもたちが、安全・安楽に学校生活を送るための支援について考える。「子どもの健康ニーズに対応できる専門性」、「学校と地域の連携やチーム学校による支援のあり方」等を中心に学習する。

b) 学校保健研究（担当者：楠本久美子）：養護教諭の専門領域である「学校精神保健」「学校安全」「保健教育」「保健管理」等について学習する。現在「こころの研究班」「環境保健研究班」「食育保健指導研究班」「フラワーライフ研究班」があり、班独自の計画をたてているが、活動はゼミ生全員で分担している。「保健科教育演習Ⅰ～Ⅳ」以外に学外活動も行う。

c) 小児保健研究（担当者：土居悟）：「小児喘息や食物アレルギーをもつ子どもの学校での健康管理」、「障がいをもつ子どもを対象とした音楽療法」、「児童文学『秘密の花園』における子どもと病気と教育について」など、学校と医療の協力関係や地域の人々と連携することを重視しながら、“子どもは未来である”ことを基調に、小児保健を多面的かつ学際的に学習する。

d) 健康科学・社会医学研究（仲谷担当）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われている。本演習では、そういった健康課題の中で、特にアルコール問題に対して様々な角度から学習する。

e) 健康科学・女性心身医学研究（松本担当）：「心身相関（心と体のつながり）・心身症（心のからくりが関与して起きる体の病）のメカニズム」、「女性特有の健康問題」、「女性のキャリアとライフプラン」「性差と健康」、「美容とアンチエイジング」、「生活習慣（運動・食事・休養）と健康」、「癒しと健康」、「人生 100 年時代の健康管理と生き甲斐」等、心と体の健康について様々な角度から学習する。

② 主な内容

a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。

b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。

c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。

d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。

e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等の演習を行う。

f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。

g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4 年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。

h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 進捗状況

保健教育コースの専門ゼミでは、3・4 年次生合同で実施している。2 学年間の交流も深まり、また各専門ゼミでの研究テーマについて、毎回、興味深い発表と活発な討論が繰り広げられており、各自の卒業研究に意欲的に取り組んでいる。しかし、本コースの大半が教員を志望しており、教員採用試験対策講座や学外実習、学校ボランティア活動を含む過密な学習スケジュールと並行して卒業研究を進めなければならないのが現状である。週 1 回（月曜 2 限）の専門ゼミの時間だけでは各自の調査研究を行う十分な時間が確保できないため、指導教員と担当学生のスケジュールを調整しながら個別に対応をしている。

上述した卒業研究への取り組みに加え、学術研究の実際を学び、研究力を有する教員を養成するためにも、学生には、学会や研究会への積極的な参加を促している。保健教育コースの専門ゼミが開始してからは、学生は、日本養護教諭教育学会、日本学校保健学会、日本心身医学会、日本女性心身医学会、日本思春期学会等に教員とともに参加し、また地域保健研究の一環である HIV 予防啓発活動、禁煙教育指導者講習会、薬物乱用防止教育指導者講習会等に関する各種研究会や講習会に参加し、養護教諭としての更なる知識と技術の習得に努めている。

令和 2 年度は、本コース教員が下記の 2 つの学会・研修会を主催した。

第 67 回近畿学校保健学会を誌上にて開催した（大会長：楠本久美子）。また、学会誌を通して、保健教育コース学生は、児童生徒等の健康課題に関する視点・調査・分析方法、および考察する能力を身に付けた。加えて、近畿学校保健学会関連行事として、本学にて、ハイブリッド型特別

講義「学童期の近視に関する諸問題」(講師:大阪府眼科医会理事の色覚専門眼科医　湖崎淳先生)を行った。

第31回日本女性心身医学会オンライン研修会「現代を生きる女性の心とからだの健康をめぐって」を開催した（主催者：松本珠希)。松本ゼミ生および有志学生が研修会に参加し、最新の研究成果から、現代女性の心身の健康課題について学ぶことができ、卒業研究のテーマ設定にも役立てることができた。

(4) 教員採用試験対策

① 養護教諭採用試験対策講座

3年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教採対策講座を実施している。筆答試験対策の主な内容は、「学校保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置)」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等である。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図っている。また、各ゼミ単位でも、空き時間を利用し、対策講座を実施している。二次試験対策では、希望する実技予想試験について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導も行っている。

加えて、新卒の養護教諭として勤務する4年次生を対象に学校で即戦力となるために保健管理（救急処置、健康診断、健康相談、保健指導、健康観察など）及び保健教育（保健学習、保健指導)、保健組織運営、学校安全に関する業務の確認と復習、新たな健康課題に向けての学習も集中講義で行っている。

本年度の養護教諭教員採用試験現役験合格者は2名（和歌山県1名、相模原市1名）であった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命ともいえる。今後は、養護教諭としての現場即戦力を養うためにも、救急処置に関する実例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

② 教員採用試験現役合格者数の経年変化

教育学部教育学科保健教育コースは、2008年（平成20年）に開設された。前身は1957年（昭和32年）に開学した四天王寺学園女子短期大学保健科である。すなわち、本コースは、2020年現在、63年間継続する伝統ある養護教諭養成機関であり、これまでに、数多くの卒業生が、幼小中高の教育現場で養護教諭として活躍している。

保健教育コース第1期生は2012年（平成24年）3月に卒業した。以後10年間の学生動態は、次頁の表に示す通りである。

入学した学生総数は 471 名だったが、卒業生数は 442 名、除籍・退学者数は 29 名であった。卒業生 442 名中、養護教諭免許を取得したものは 416 名（94.1%）、養護教諭と小学校教諭のダブル免許を取得したものは 195 名（44.1%）であった。養護教諭免許を取得した学生 416 名中、養護教諭教員採用試験を受験したもの（延べ数）は 301 名（72.4%）、最終選考の合格者は 25 名（8.3%）となり、教採現役合格の厳しさを反映している。（入学者総数 471 名を母数とすると、養護教諭現役合格率は 5.3%となる。）

一方、小学校教諭採用試験を受験したものは 66 名で、現役合格者は 22 名（33.3%）であり、合格率は養護教諭と比較すると、約 4 倍高くなった。

●保健教育コース学生動態と教員採用試験現役合格の経年変化

期生		第1期生	第2期生	第3期生	第4期生	第5期生	第6期生	第7期生	第8期生	第9期生	第10期生	
入学		H20年4月	H21年4月	H22年4月	H23年4月	H24年4月	H25年4月	H26年4月	H27年4月	H28年4月	H29年4月	
卒業		H24年3月	H25年3月	H26年3月	H27年3月	H28年3月	H29年3月	H30年3月	H31年3月	R2年3月	R3年3月	総数
卒業生数（人）		50	46	44	44	46	40	42	41	48	41	442
除籍・退学者数（人）		0	4	3	3	0	7	3	4	3	2	29
養護教諭免許取得者（人）		47	45	41	43	43	39	37	37	44	40	416
小学校教諭免許取得者（人）		20	21	19	15	23	20	19	17	27	14	195
養護教諭	教採受験者	29	38	21	34	30	25	30	29	28	37	301
	教採現役合格	4	2	1	0	2	2	5	4	3	2	25
小学校教諭	教採受験者	10	4	11	10	8	6	2	7	5	3	66
	教採現役合格	5	1	3	1	5	1	1	3	1	1	22
	受験者数・合格者数は延べ数											

過去10年間で卒業した442名の本学受験時の入試形態、卒業時累積GPA、教採現役合格との関連について検討した。結果を下表に示す。

各入試区分の卒業者割合の上位5位は、推薦入試前期（113名：25.6%）、一般入試前期日程（73名：16.5%）、指定校推薦入試（56名：12.7%）、推薦入試後期（50名：11.3%）、ＡＯキャンパス参加型（40名：9.0%）であった。

4年間の学びの指標となる累積GPAの平均値については、各入試区分の卒業生数に偏りがあるが、上位5位は、一般センター利用Ⅱ期（3.70）、一般入試前期日程（2.86）、自校推薦入試（2.86）、推薦入試特技（2.81）、一般センター利用Ⅰ期（2.79）であった。

●過去10年間の卒業生442名：入試形態・卒業時累積GPA・教採現役合格との関連

入試形態	卒業者数	各入試区分の卒業者割合	GPA平均値	養護教諭		小学校教諭		除籍・退学者	全除籍・退学者に対する割合
				教採現役合格者数	全合格者に対する割合	教採現役合格者数	全合格者に対する割合		
ＡＯキャンパス参加型	40	9.0	2.58	2	8.0	3	13.6	8	27.6
ＡＯ自己推薦型	4	0.9	2.55						
ＡＯ自由応募型	18	4.1	2.48						
推薦入試特技	24	5.4	2.81	1	4.0	1	4.5	2	6.9
推薦入試特技セミナー	6	1.4	2.55						
特別活動推進入試	4	0.9	1.98						
自校推薦入試	6	1.4	2.86	1	4.0				
指定校推薦入試	56	12.7	2.59	2	8.0	1	4.5	4	13.8
推薦入試前期	113	25.6	2.69	8	32.0	6	27.3	3	10.3
推薦入試後期	50	11.3	2.65	6	24.0	2	9.1	5	17.2
転部転科試験	2	0.5	2.73						
編入学試験	6	1.4	2.37						
一般入試前期日程	73	16.5	2.86	4	16.0	8	36.4	3	10.3
一般入試中期日程	18	4.1	2.60	1	4.0			3	10.3
一般入試後期日程	17	3.8	2.59			1	4.5	1	3.4
一般センター利用Ⅰ期	4	0.9	2.79						
一般センター利用Ⅱ期	1	0.2	3.70						
合計	442	100		25	100	22	100	29	100

③ 教員採用試験現役合格者の特徴

(a) 入試形態

養護教諭教員採用試験現役合格者（25 名）と入試形態との関連については、推薦入試前期（8 名：32.0%）、推薦入試後期（6 名：24.0%）、一般入試前期日程（4 名：16.0 %）の 3 種で、全現役合格者（25 名）の 72%を占めていた。

小学校教採現役合格者（22 名）では、一般入試前期日程（8 名：36.4%）、推薦入試前期（6 名：27.3%）、AO キャンパス参加型（3 名: 13.6%）での入学者が多かった。

●養護教諭・小学校教諭教員採用試験現役合格者の本学受験時の入試形態

入試形態	養護教諭教採現役合格者	小学校教採現役合格者
ＡＯキャンパス参加型	2	3
推薦入試特技	1	1
自校推薦入試	1	―
指定校推薦入試	2	1
推薦入試前期	8	6
推薦入試後期	6	2
一般入試前期日程	4	8
一般入試中期日程	1	―
一般入試後期日程	―	1
	25 名	22 名

また、25 名が受験した入試形態 8 つのうち、入学者数（卒業者数＋除籍・退学者数）に対する現役合格者の割合は、自校推薦入試（16.7%）、推薦入試後期（10.9%）・前期（6.9%）、一般入試前期（5.3%）・中期（4.8%）の順で高い値が得られた。

●各入試形態における養護教諭現役合格率

入試形態	入学者数 （卒業者数＋退学者数）	養護教諭教採 現役合格者	養護教諭教採 現役合格率（%）
ＡＯキャンパス参加型	48	2	4.2
推薦入試特技	26	1	3.8
自校推薦入試	6	1	16.7
指定校推薦入試	60	2	3.3
推薦入試前期	116	8	6.9
推薦入試後期	55	6	10.9
一般入試前期日程	76	4	5.3
一般入試中期日程	21	1	4.8
	408 名	25 名	6.1 ％

(b) 卒業時の累積 GPA

養護教諭教員採用試験現役合格者 25 名および小学校教諭教員採用試験現役合格者 22 名の卒業時の累積 GPA（最小値・最大値・平均値±標準偏差）は下記の通りであった。

●養護教諭・小学校教諭教員採用試験現役合格者の卒業時累積 GPA

養護教諭教採現役合格者			小学校教採現役合格者		
最小値	最大値	平均値±標準偏差	最小値	最大値	平均値±標準偏差
2.43	3.70	3.07±0.34	1.37	3.55	2.88±0.56

(c) 取得した教員免許

養護教諭教員採用試験現役合格者 25 名および小学校教諭教員採用試験現役合格者 22 名が取得した教員免許は下記の通りであった。

●養護教諭・小学校教諭教員採用試験現役合格者の取得教員免許状

養護教諭教採現役合格者		小学校教採現役合格者	
教員免許	人数	教員免許	人数
養護教諭	2	―	―
養護教諭＋小学校	6	養護教諭＋小学校	12
養護教諭＋小学校＋中高保健	5	養護教諭＋小学校＋中高保健	9
養護教諭＋中高保健	12	養護教諭＋小学校＋高校保健	1
合計	25 名	22 名	22 名

養護教諭：養護教諭第一種免許状、

小学校：小学校教諭第一種免許状

中高保健*：中学校・高等学校教諭第一種免許状（保健）

〔*平成 31（令和 1）年度入学生からは取得できない。〕

(d) 都道府県

養護教諭教員採用試験現役合格者 25 名および小学校教諭教員採用試験現役合格者 22 名が採用された都道府県は下記の通りであった。

●都道府県別養護教諭・小学校教諭教員採用試験現役合格者数

都道府県	養護教諭教採現役合格者	小学校教採現役合格者
大阪府	10	12
大阪市	1	2
堺市	1	5
和歌山県	4	―
奈良県	1	2
滋賀県	1	―
高知県	5	―
香川県	1	―
相模原市	1	―
千葉県	―	1
合計	25 名	22 名

(5) 除籍・退学者の現状分析

入学した学生総数は 471 名だったが、除籍・退学者数は 29 名（6.2%）であった。11 頁の表「●過去 10 年間の卒業生 442 名：入試形態・卒業時累積 GPA・教採現役合格との関連」にも示したように、ＡＯ入試オープン・キャンパス参加型で入学した学生の除籍・退学率（8 名：27.6%）が最も高いことが明らかとなった。次に、推薦入試後期（5 名：17.2%）、指定校推薦入試（4 名：13.8%）と続いた。

また、下表に示すように、2 年次夏学期（3 セメスター）までに 48.3%が除籍・退学をしている。これらの分析結果をもとに、担任教員による定期的な個別面談を実施し、本コース生の有益な学びを確保できるように努めている。

●除籍・退学時期

除籍退学時期（セメスター）	人数	パーセント
1	6	20.7
2	5	17.2
3	3	10.3
4	2	6.9
5	4	13.8
6	4	13.8
7	3	10.3
8	1	3.4
9	1	3.4
合計	29	100.0

(6) 高大連携事業

①高大連携校 3 校における定期健康診断の補助実習

本実習は、本学での演習（学校看護学演習・臨床看護学演習）、臨床実習、養護実習を経験した 4 年次生を対象に、エクステンションセンター事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。この高大連携事業は、大阪府立富田林高校、大阪府立懐風館高等学校、大阪府立長吉高等学校の計 3 校にて実施している。本コース 4 年生の「積極的且つ意欲的な健診補助への取り組み」、「養護教諭と現場の教員から多くを学ぼうとする真摯な態度」、「生徒への丁寧な対応」等が、常に高く評価され、有意義な学外実習となっている。

②高大連携校におけるピア活動プログラム

楠本ゼミが、懐風館高等学校にて、高校 1 年生を対象に、「性に関する指導」を担当し、望まない妊娠を防ぐとともに、月経周期や妊娠のしくみ、性感染症等、正しい知識を習得し、的確な判断力を養うための保健指導を行った。

③高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成 25 年度より、大阪府立河南高等学校の e（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

(7) 地域貢献活動

① はびきの市民大学　四天王寺大学特別公開講座「赤ちゃんから小学校に通う子ども（児童期）の育ちについて考えましょう」に出講した。

　第 1 講義　土居悟　「子どもの食物アレルギーについて学びましょう」10 月 25 日

　第 4 講義　土居悟　「子どもの感染症について学びましょう」　11 月 15 日

② 地域産業活性の支援活動として、羽曳野の銘菓、産物、特産品、郷土料理弁当等を羽曳野市以外の在住民に提供してその感想を調査した。結果はエクステンションセンターにて発表報告した（担当教員：楠本久美子）。

③ 楠本ゼミ生が、環境保全実践活動の一環として、石川の清掃活動を行った。

経営学部 経営学科

１．はじめに

経営学科は平成 28（2016）年度の専攻分離後、令和元（2019）年度に完成年度を迎え、公共経営専攻から公務員として、令和元年度は 14 名、令和 2 年度は 17 名を輩出し、企業経営専攻学生も、コロナ禍のなか、根気強く就活を終えることができた。この環境において、様々な採用試験が後ろ倒しになったことから、不安を抱える学生たちを担当教員が継続して励まし、支援した結果でもある。

経営学科では、経営学・法学の基本を学科共通科目として開講し、専門教育科目では、専攻ごとの特色を活かし、学科共通教育科目から専門教育科目へと専門性を深めることにより段階的に無理なくそれぞれの分野が修得できるように科目を配置している。さらに、関連する科目を担当している教員間で情報交換し、連携するとともに、授業の特色に応じてアクティブラーニングを積極的に導入して多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整え、必要な知識やスキルを修得することができ、能力の向上を促進する学習内容となるよう、「学科独自の取り組み」にあげた科目を効果的に配置し、学科の模範学生を公開するために特待生制度（奨学金制度）を設けている。

特に公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材、起業家などの輩出をめざしていることから、専門性を高めると同時に、他者を思いやり、社会のために活躍できる使命感、倫理観を有する人材に育成することにも留意している。大学 4 年間の学びを支え、就職活動には不可欠である基礎学力の向上からキャリア形成までを視野に入れ、大学 4 年間の修学を終える卒業時点において有意な人材として社会からの評価が得られるレベルの能力・知識・スキルが獲得できることを目標としている。

上記の目標を達成するために、多様なことに挑戦する機会を設け、段階的にできることを増やすことによって学生のやる気を引き出し、成功体験を積む機会を提供する環境づくりとして、経営学科が令和 2 年度に取り組んできた特色ある授業科目および取り組みは以下のとおりである。

２．大学基礎演習について

大学基礎演習Ⅰでは、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習Ⅱは「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全員体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習Ⅰは、コロナ禍による履修指導が対面で実施できない事態となったため、早い段階から「電話面談」を実施し、1 年生クラスの履修指導等に万全を期した。ただ、大学生活を円滑にスタートできるような「キャンパスツアー」や「友だちづくり」の授業を実施できず、各クラス内及び各クラス・専攻の枠を超えた直接交流の機会が設けられなかったため、オンデマンド動画や課題学習としてできる限り、大学の学びや学生生活の意義等を紹介

し、考えられるよう配慮した。さらに、学びの基本シリーズと銘打った大学での学びを体系的に体験できるよう、新聞の読み方、著作権、文書の書き方などについてのオンデマンド動画と課題学習を提供し、最終レポートと連動させ、遠隔型の授業においても一定レベルの大学リテラシーの向上にも努めた。

大学基礎演習Ⅱは、対面と遠隔を交えたハイブリット型の授業となったため、早い段階での対面での個別面談も実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、夏学期に実施できなかった「キャンパスツアー」も実施し、偶数・奇数グループに分かれた中ではあったがクラス内での交流も促進できた。

また、経営学科が毎年実施しているビジネスプランコンテストも遠隔型で取り組んだ。まず、アイデア発想、ビジネスプランづくりなどの基礎知識を説明した上で、ビジネスプランの作成、全員が各クラスで発表し、クラスごとの最優秀プランを決定後、教員の投票により1年生の優秀ビジネスプランを決定し、学科全体の審査へと進んだ。今回はオンラインでの報告ながら、画面上に同じクラスのメンバーが一堂に会し、相互に発表し他者の発表を聴くことで、Zoomによるプレゼンテーションの訓練をすることができた。さらに、遠隔授業になって以来の懸念事項であったクラスの交流を深めることにも役立った。

なお、大学基礎演習Ⅱのアンケート調査では、大学基礎演習だけでなく 1 年間の大学での学びについても総括したが、アンケート調査結果を概観すると、「ビジネスプランづくり」「先輩による就職活動体験談」「キャンパスツアー」が自ら学生間の相互理解、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心につながったとする感想が一定程度あった。この学びのふりかえり表には、学生目線での回答が記されており、アンケート調査結果同様、学科内で情報共有することで、ハイブリット型が続く中での大学生活満足度が増すような改善につながると期待される。

３．授業相互参観について

令和２（2020）年度は、以下のとおり、授業参観計画を策定して実施した。

学科選抜科目	概　　要	参観 日時・場所	合評会 日時・場所
①労働法概論 （浅野）	労働契約⑦ 労働契約の終了	12 月 1 日(火)5 限 4-213 教室	授業終了後、同教室にて
②アントレプレナー論（天野）	松下幸之助と起業家精神	11 月 26 日（木）3 限 5-210 教室	授業実施後、実施教室にて
③経営学基礎Ⅱ （伊藤）	ブランド② ブランドの役割、地域ブランド等の解説	11 月 11 日(月) 3 限　5-302 教室	実施後、実施教室にて
④商取引法 （霍）	企業の取引活動と商法について解説・検討	11 月 30 日（月） 1 限 7－114 教室	実施後、同教室にて行う

⑤構造主義入門（加藤）	行動原理の理由等の観点の掘り下げ	11 月 24 日(火) 1 限 4-414 教室	実施後、実施教室にて
⑥ファイナンシャルプランニングⅡ（木村）	贈与・相続と法律、税金について	11 月 30 日(月) 1 限 5-210 教室	実施後、教室内にて行う
⑦ 民法Ⅱ(物権)（後藤）	民法の物権法・担保物権法に関する復習問題演習とその解説	11 月 26 日(木) 1 限 2-205 教室	実施後、教室内で
⑧ マーチャンダイジング（隅田）	さまざまな小売業態での商品管理・販売について	11 月 30 日(月) 1 限 6-303 教室	実施後、教室内にて
⑨ キャリア演習 II（富田）	対人関係とアサーショントレーニング	11 月 20 日（金） 4 限 4-312 教室	実施後、実施教室にて
⑩ ファイナンシャルプランニングⅠ（永川）	リスク管理について考え、該当商品について	11 月 20 日(金) 1 限 2-205 教室	実施後、実施教室にて
⑪ 簿記Ⅱ（原田）	本支店会計の貸借対照表作成の解説と問題演習	11 月 13 日 1 限 6-253 教室	実施後、実施教室にて
⑫ 法と倫理（春名）	治療行為と医師の職業倫理	11 月 27 日（金） 2 限 6−254 教室	実施後、実施教室にて
⑬ 金融論（福田）	銀行以外の金融機関の特徴について扱った。	11 月 30 日（月） 1 限 4－312 教室	実施後、実施教室にて
⑭工業簿記Ⅰ（山﨑）	総合原価計算の解説と問題演習	12 月 4 日(金) 2 限 5-211 教室	実施後、実施教室にて
⑮ コーポレート・ガバナンス論（梁）	株式会社制度に関する説明・国際比較	11 月 26 日 1 限 7－115 教室	実施後、実施教室にて

① 労働契約の終了原因、その法規制と論点について、解雇を中心に検討した。学生がイメージをつかみやすいように、裁判例の具体的な事例を参照することで、解雇の適法・違法について理解を促した。

② 日本・世界を代表する著名経営者の人生や経営哲学、経営史について学んでいる。パナソニック・松下電器産業創業者である松下幸之助氏の人生や経営哲学、イノベーションの歴史について、本人出演のビデオなど、ビジュアルな教材も活用し学ぶ機会とした。

③ ブランドの歴史や意義を学んだ上に、日本と欧米のブランドの違い、ブランド価値について概説し、さらに地域活性化においても重要となる地域ブランドの基礎と実際につい

て各種アンケート調査、さらに大阪における地域ブランドづくりと評価について動画を交えて検証し、これらの課題について考察した。

④ 問屋営業をめぐる法律関係について理解し、取次という商行為と他の類似の商行為との区別ができた。具体的な経済事象を取り上げて法的に考察を行い、法制度の実社会との乖離について考える機会とした。

⑤ 日常的にある倫理感だけで、あるいは資本主義社会の利益優先の行動原理ではなく、何故そうしなければならないのかとか、何故そうしたいのかという観点を深く掘り下げる形で、学生の意識向上に寄与した。

⑥ 相続人となった場合、被相続人との関係で、多様な手続きが必要となることについて、FP 検定試験で問われる視点から、実際に必要となる手続きを解説し、理解を深めた。

⑦ 民法の物権法分野に関して、前週の穴埋形式の小テストの解説をし、学生の知識の定着を図った。その後講義形式の授業を行い、また最後にその講義内容について小テストを実施した。

⑧ 店舗立地、価格、品揃え、商品開発、店舗運営、物流、販売、顧客管理など小売業態に関する多様な活動に焦点を当て、小売業態の商業的活動を概観した。講義の終わりにクイズ（小テスト）を実施し、当該授業に対する受講学生の理解度を確認した。

⑨ アサーショントレーニングを通して、ビジネスにおいて相手に対する配慮、誠実であること、率直であることが、組織の仕事の円滑化、組織力強化のために重要な要素であることを理解した。

⑩ 基礎的な「プランニングについて」社会人として生活をしていく上で、必要となる「お金」について学ぶ。本授業では「リスク管理」について学び、ＦＰ検定で頻出する問題について各自レポートを作成した。

⑪ 全経簿記能力検定 2 級の合格を目標に、相互授業参観当日は、本支店会計の貸借対照表の作成について、過去問題を教材として解答の手順の流れ、ポイントを説明した後、学生に演習を行わせ、そのうえで解説を実施した。

⑫ 治療行為における法的問題と医師の職業倫理について、輸血拒否をめぐって実際にあった事例や裁判例をいくつか紹介し、解説を加えた上で参加者に法と倫理の関係を検討し、さいごにコメント発表とした。

⑬ 銀行以外の預金受け入れ金融機関である、ゆうちょ銀行、信用金庫、信用組合、JA さらには保険会社、証券会社、証券取引所、格付け会社などの金融市場の諸アクターについて紹介し、これらが現実経済で果たしている役割について講義し、最後に IBU.net の小テスト機能で確認テストを出題した。

⑭ 先入先出法と平均法による総合原価計算を扱った。2 つの方法について、考え方の違いを図で示した上で計算方法を確認し、練習問題で実際の計算工程を体験した。その後、全経簿記能力検定 2 級工業簿記の過去問題を教材として解答の手順とポイントを確認した。

⑮ 資本主義社会がグローバル化する中で、国による会社制度には大きな違いがあるので、株式会社制度を説明し、併せて各国の会社制度や経営システムを説明する。学生の就職先や日本企業はどのようなガバナンスを行っているのかなどを調べさせ発表を行った。

４．学科独自の取り組みについて

(1) 特待生制度（経営学部総合奨学金制度）について

公共経営専攻および企業経営専攻では、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる経験を増やすために各専攻において、成績優秀者 1 学年 12 名（計 24 名）を特待生とする、経営学部総合奨学金制度を設けている。1 年次の特待生は一般入試前期日程（チャレンジ試験を含む）の成績によるが、2 年次以降の特待生の選考基準については、公共経営専攻は成績評価のＧＰＡに加えて公務員試験の模試の成績等を加算し、企業経営専攻はＧＰＡに加えて各種資格検定の合格実績や、学部で取り組むインターンシップ、地域連携活動などの学内外で行っている経営学部の各種取り組みへの貢献等を評価しているが、2020 年度はコロナ禍であったため、地域連携活動等は縮小せざるを得なかったが、可能な範囲で実施・評価を行った。学生は特待生に選抜されるために、学業はもちろんのこと、それ以外の活動にも積極的に参画しようとする姿勢が見られる。特待生に選抜された学生は、経営学科学生の模範として学科をリードする役割であることの自覚を育て、牽引力を養成する必要がある。

入学次の特待生は、一般入試前期までが対象となるため、2 年次において一般中期・後期の学生が入り、大きく入れ替わるが、2 年次から 4 年次の特待生は固定化していく傾向にある。

(2) キャリア演習Ⅰ・Ⅱ

就職力をはじめとする下記に掲げる 4 つを目的とし、外部教育機関と連携して、「キャリア演習Ⅰ」および「キャリア演習Ⅱ」を令和 2 年度も 2 年生の必修科目として実施した。

ⅰ.就職試験で多くの企業が利用する SPI 試験への早期対策および早い段階から就職に対する自覚・認識を学生に促すこと。

ⅱ.大学の講義をより円滑に履修するための基礎学力の向上。

ⅲ.2 年次学生の退学率の増加、講義欠席率の増加、日常生活の乱れと講義中の態度の悪化、専門演習ゼミ選択時に備えた学生状況全般についての把握。

ⅳ.教員（担任）と学生の円滑な関係の構築、face to face による学生指導の機会の確保。

①　公共経営専攻

公共経営専攻では、東京アカデミーによる一般教養の講義を行っている。これは 1 年次の公務員講座の内容と、3 年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指すうえでは重要なものである。キャリア演習Ⅱでは、2019 年度から柔軟に 2 クラスに分け、問題に関して教員に直接質問をする場を作り、学生の一般教養に関する学習をサポートする体制を強化している。

② 企業経営専攻

各セメスター（夏学期 : 言語分野、冬学期 : 非言語分野）の初回授業と最終授業において、確認テスト（プレテスト・ファイナルテスト）を実施している。2020 年度の夏学期の言語分野のファイナルテストでは 22.2 点アップし、冬学期の非言語分野のファイナルテストでは 32.3 点アップという成果が認められた。

本年度においては、新型コロナウイルス蔓延により、他の授業と同じように夏学期は遠隔

授業、冬学期は対面授業と遠隔授業併用の授業運営となり、効果的に学習を進めるための具体的な講義実践上の配慮として実施した主なことは下記の点であった。

- 従来どおり、各回で前回の学習内容の定着を図るための小テストを実施した。遅刻や欠席の減少にもつながり、成績評価に「努力」を効果的に反映させることができた。
- 遠隔授業では 10 分程度の動画と確認問題を活用し、単調な授業とならないような工夫が随所に施された。SPI 特有の解答テクニックや PPT のアニメーションなど、これまでの授業と違う切り口とした。
- 下位層、上位層それぞれに対するインセンティブを与える配慮をした。
- 多様な学生に合わせて、理解を促すスライドの視覚情報を増やしたり、意欲的に事前・事後学習に取り組みやすく工夫した。

令和 3 年度は、下位層・上位層共に自発的に学習して伸びる学生を育成する。

(3) キャリア演習Ⅲ

3 年生で体験するインターンシップや就職活動に向けた事前学習として開講し、ビジネスマナーと共に働くうえで必要な基本的な知識・判断力・実践力等を養う必修科目として開講している。

① 公共経営専攻

インターンシップが必修科目とでないため、授業では「公務員の仕事」をキーワードにビジネス社会で必要な情報の提供の場となる授業としている。授業では、仕事をするうえで必要となるビジネスの基本知識や一般常識であるマナーなどの学びの場となるよう、敬語の遣い方やビジネス文書の書き方、スケジュール管理、礼状の書き方、電話応対の実践も行い、学生一人ひとりがそれぞれの課題に真剣に取り組んだ。ビジネス実務マナー検定試験対策も行うことによって、一般常識やビジネスマナーの大切さを理解する機会となった。

コロナ禍における授業は B 方式で行い、オンデマンド授業で予習課題に取り組み、対面ではその解説とアクティビティ等で知識を定着するように授業運営を行った。

② 企業経営専攻

企業経営専攻 3 年生が体験する「インターンシップⅠ」に向けて、事前学習としてビジネスマナーの習得に加え、毎回の授業における約束事を守ることの大切さ、日々の生活の中での自己管理すること等を徹底指導している。また、3 年生の 6 月には授業内容の習得状況を確認するため、ビジネス実務マナー検定試験を全員が受験をするため、合格を目指し毎回の授業で受験対策も行っている。

本年度は、B 方式で授業を行い、オンデマンド授業で予習課題に取り組み、対面ではその解説とアクティビティ等で知識を定着する運営を行った。授業を通して就業意欲が高まり、就業体験をすることが、より身近に感じられる機会となっているようである。授業実施後の感想レポートでは、この授を受けて、表現力向上に役立ったという前向きな意見や、知らなかったことや勘違いしていたマナーを正しく知ることができてよかったという意見が窺えた。

(4) オールインターンシップ

本授業は、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」と続く必修科目で、実際に就業体験を伴うキャリア科目の授業である。授業では、事前学習を行い、3年生夏季休暇中に就業体験を行うが、3科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けての企業経営専攻独自のプログラムとして、キャリア形成推進に向けての大切な位置づけとなっている。

企業研究の指導を行ったうえで、授業内で各種提出書類を書くための実践的指導も行い、予定通り、夏季休暇中に全員参加型のインターンシップを実施した。

3 年生全員、夏季休暇中に就業体験として経験を積み、それぞれに充実した体験として、仕事理解、職場でのコミュニケーションの重要性等を学ぶことができた。特に優秀な学生は、1か所目での就業体験を終えた後、夏休み期間中に異業種で2か所目、3か所目と積極的に就業体験に参加する学生もいる。また、当初就職に意欲的でなかった学生も、就業体験に参加したことで、就職をより身近に意識し積極的に仕事について学ぶ機会となったという事後報告をする学生もおり、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしていた。就業体験の成果として、昨年度同様以下の報告を受けている。

・働くことへの興味関心や視野が広がった
・言葉遣いとコミュニケーション力の重要性を痛感した
・仕事を円滑に進めるためには、人間関係の構築が重要であることを実感した
・就業体験先の情報は、事前に徹底的に調べることが大切であるということを学んだ
・公務員の仕事や試験内容に関する情報を得ることができ、興味関心が高まった
・自分には向いていない、できないと思っていたことが意外と興味を持ってできた。
・短所だと思っていたことが、仕事では長所に成り得るということが分かった。　等

例年、インターンシップ体験は、学生にとって大きな収穫となっている。また、オールインターンシップは、学部教員と担当者、支援企業の協力体制が必要な大きなプロジェクトであり、学生が就業体験中に支援企業に迷惑をかけないようにしなければならない。

(5) 海外インターンシップ

恒例となったオーストラリア・シドニーでの経営学科海外インターンシップ（12 名：特待生、希望者）は、コロナ禍のため延期し、2020 年度対象学生の海外インターンシップは、2021 年度 2 年生と同時（2022 年 2-3 月）に実施することとした。

(6) 公務員関連科目

公共経営専攻 3 年生では専門講座を設けることから、2 年終了までに基礎力を養成する必要があることから東京アカデミー連携授業を導入している。2020 年度はコロナ禍のため、前期は Microsoft Teams を用いた同時中継型の遠隔授業、後期は対面と遠隔併用のハイブリッド型の授業を行ったが、遠隔受講は、厳格な確認テストなどが実施できないこと、学習モチベーションの維持が難しいことなどが大きな課題である。しかし、2020 年度は日常的に学科教員が授業見学をすることで、東京アカデミーの講師と本学教員の間で、授業の問題点などを共有することができた。

① 行政職特別演習

公共経営専攻の2年次では、行政職を志望する学生等を対象として、行政職特別演習（専門科目主要7科目）を開講している。専攻の専門教育科目としての位置づけであり、卒業単位として認定するとともに、学生が出席しやすい時間に配置している。国家公務員や地方上級の合格に必要な専門科目について、基礎を2年次の行政職特別演習として、実践を3年次に公務員講座として、段階的に学ぶ機会を設けている。本授業は東京アカデミーの講師が担当しているが、出欠管理や成績評価、その他授業運営は本学教員が担当するとともに、本学教員が担当する専門科目とも連動させている。公務員試験につながるように、期末試験は本番を見据えて出題している。

共通教育科目で開講されている法学や日本国憲法、経済学等の入門的な科目とも連携し、また、専門科目として開講されている憲法や民法等の科目を少しでも多くの学生に、低学年の早い段階から履修するように促し、3年次講座へつなげるなど、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制を探っていきたい。

② 公安職特別演習

公安職等をめざす学生のために、企業経営専攻の学生を主体の授業として実施しており、配置する曜日や時限を工夫し、真剣に公務員をめざす学生の基礎力を養成している。公共経営専攻においては、公務員志望の学生の基本的知識を習得する場としている。公務員に関する基礎的学習を担う授業としての役割を担うことから、2021年度から公務員基礎演習と名前を変えて開講する。

③ 公務員試験に直結する特色ある授業科目

本年度の「公務員特別演習Ⅰ」は夏期集中講義として行い、公務員試験で必要となる知識・スキルを指導している。提出物は毎回添削して返却し、エントリーシート記入演習では個別のフィードバックも行った。コロナ禍での実施のため、当初予定していたグループワークは見送った。

「ライセンスセミナー公務員」では、公務員試験に関する計画的な学習及び出願をサポートし、「公務員特別演習」に引き続いて、論作文指導、グループワーク等、感染症対策をしたうえで実施した。2021年度から公務員試験の基礎力養成科目として新編成とする。

④ IBU公務員プログラム

● 1年生講座

令和2年度は、コロナ禍により、講座の開始が大幅に遅れ、講義は夏休み期間中に始まった。昨年度、授業期間中の講座数を絞ったことが、授業履修登録数が多い1年生のコロナ禍の負担を軽減することになったと考えられる。また講座が長期休暇にずれ込んだうえ、遠隔指導となり、講座出席指導が例年に増して必要であった。

● 3年生講座

教養科目は全員受講を課しており、専門科目を含む全科目を受講する学生は国家公務員

などをめざす学生が受講している。令和 2 年度は前年度と比べ、特に専門科目を受講している学生が多く、成績に関してもよい学生が多かった。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目を必要とする自治体を志望しているとは限らないが、志が広がることを想定し、積極的に支援する必要がある。今後も遠隔授業に対応した指導を行う予定である。

● 公務員受験のための模擬試験

本年度はコロナの影響により前期に模試が実施できなかったため、後期に 2 回模試を行った。しかし、基礎学力の向上を測定するのに十分な間隔を置かずに実施したために、多くの学生について効果が確認できなかった。今後、環境に左右されない模試の実施を検討する必要がある。

● 令和 2 年度卒業生の公務員試験合格実績

公務員試験受験結果（公共経営専攻 16 名、企業経営専攻 1 名）は下記のとおりであった。

国家公務員特別職（自衛隊一般曹候補生）、大阪府、奈良県、大阪府警、兵庫県警(3)、福井県警、雲南市、大和高田市、湖南市(2)、日高川町、和束町、大山崎町、大阪府学校事務(2)

引き続き、公務員をめざす卒業生、企業での経験を経た後、公務員をめざす卒業生がいることから、卒業後の公務員指導にも力を注ぐ必要が高まっている。そこで、卒業後指導を希望する学生には出願情報を配信している。さらに ES 添削や受験相談についても可能な範囲で対応していく。

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定 3 級 1 年生全員受験（必須）のための支援

7 月実施の全経簿記能力検定試験 3 級について、入学年度に全員受験（受験料は大学負担）を実施している。これは、これまで資格試験等に挑戦したことがない学生たちに、成功体験をし、自信を持つ良い機会にするために設けている。しかし、2020 年度は新型コロナウイルスの影響で予定していた 7 月の検定試験が中止となり、11 月実施となったため、検定前に補講を行うなど、資格取得に向けた支援を行った。しかし、経営学部全体の全経簿記能力検定試験 3 級合格者は、コロナ禍ですべての授業が遠隔であったこともあり、177 名受験中 63 名（合格率：36%）に止まった。

この全経簿記能力検定試験 3 級に合格したことで自信を持ち、さらに上級の資格に挑戦しようとする学生も確実に増えている。このようにして動機づけできた学生の能力をさらに一層伸ばす支援として、授業外でも個別指導としての対策講座も実施しており、可能な限りこうした機会を増やしていきたい。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

本検定試験を受験する目的は、就業体験前に少しでも社会人としての考え方や行動を理解することができるようにするためである。3 年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップⅠ」の授業の一環として、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成 30（2018）年度より、3 年生全員（受験料は大学負担）に受験を課している。本年度の結果は、ビジネス実務マナー検定 3 級を 99 人受験し、39 名合格（合格率 39.4%）、2 級を 9 名受験 2 名合

格（合格率 22.2%）であった。2019 年度の受験では、3 級、2 級ともに 50%以上の合格率であり、3 級は 10 ポイント、2 級は 30 ポイント程度下降した。原因は夏学期が遠隔授業のため、対面授業を必要とする本授業において、徹底した指導ができず、勉強不足等と思われる。

(8) 企業との連携授業－「実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ」

実学マネジメント論は社会人のリアルを学ぶ本学部の特色ある授業のひとつである。本科目は、第一線で活躍する社会人講師を招聘し、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」をテーマに、社会人講師の職業をとおした「職業理解」を促進するとともに、様々な業界について、第一線で活躍するビジネスパーソンや公務員から経験等に関する講義を受け、将来のキャリアを考え、職業適性を発見することを目的としている。毎年、前年度と異なる企業を招聘し、Ⅰ・Ⅱの 2 度の履修が可能となっており、他学科履修も含めて合計 100 名を超える履修がある。

本年度は、オンライン授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド方式で実施した。前半には、学生自身の将来の方向性や適職を考えるためオリエンテーションの後、昨年同様、学科教員独自ルートによる金融機関、ソフトウェア開発（本学 OB）、自動車販売、地域企業、税務署、警察本部という、6 社・団体による講義を実施した。後半には、近畿経済産業局・経済産業省の講師派遣プラットフォームを活用、本学のインターンシップで連携を行っている大阪労働協会の選定により、情報システム、製造、塗装、データ処理、金属加工の中小企業 5 社による講義を実施した。それぞれの会社にはインターンシップも受け入れていただいた会社もある。

学生から「仕事の具体的なイメージができた」「社会人として仕事をしていく姿勢や心構えが理解できた」「知らない業界を知り、興味が広がった」「毎回の個性的な講師の話が楽しみだった」「企業の人事担当者とつながりを持てた」「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」「学生時代の取り組みが重要であるとわかった」「インターンシップに行ってみようと思った」など、好評である。

(9) 学外イベントの参加によるキャリア支援

平成 27 年度より毎年、経営学部全教員サポートの下、3 年生は全員、大阪労働協会が主催する就活準備のための業界研究イベントに参加していたが、コロナ禍のため中止とした。

(10) 低学年インターンシップ、ボランティア、就活支援

低学年からインターンシップ参加の機会を設け、指導する一方、平成 27 年度より経営学部全教員サポートの下、3 年生は全員、大阪労働協会が主催する就活準備のための業界研究イベントに例年参加し、2 年生以下はイベントでのインターンシップを実施していたが、コロナ禍のため中止とした。また、ボランティアイベント等については、コロナ禍では激減したので、両専攻ともに環境に左右されない新しい参加形態のものを模索する必要がある。

(11) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26（2014）年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、公共サービスについての学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うものである。授業で学んできたマーケティングや財務、公共経営などの知識を実際に活用し、商品開発、ベンチャー創業、公共サービスについて知恵を絞って事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、未来のマーケターや起業家、経営者、スーパー公務員を育成することを狙いとしている。

７回目となる今年度は、「コロナを超えて」をサブテーマとし、全学年を対象にプランを公募したところ、他学科生も含めてグループや個人から約 160 プランの応募があった。書類選考の第一次予選、教員による第二次選考を通過した 26 プランについて、加筆とブラッシュアップが行われ、絞込選考を行ったものについて、書類で学科教員全員と関連科目非常勤教員４名が審査員となり、アイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から採点し審査を行った。

単なるコンテストに留まらず、創業を目指す学生、プロジェクトを進めたいについての個別の支援を行っており、関西ベンチャー学会所属の事業化コーディネーターによる支援会議をあべのハルカスキャンパスで春休みに開催、１位、２位、特別賞の学生が参加し、事業化の可能性についてのアドバイスを受け、その後も定期的にアドバイスを受けながら、今夏の会社設立と創業に向けて取り組んでいる卒業生もいる。

(12) 学生プロジェクト活動

① 学生主体の地域連携活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを継続的に行っている。

● 地域連携研究会 Glanz

経営学部１期生の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会（Glanz）活動を学部横断的に発展させ組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学部の教員で支援している。毎週水曜、昼休み時間に定例打合せを行い、地域貢献活動について検討し、地域からの依頼に対応している。令和２年度はコロナ禍での活動となり Glanz メンバーが毎週入れ替わりとなって活動を継続した。加えて、「こよみ手帳」制作に関して、コロナ禍のため、通常授業における地域商店街での取材などを Glanz メンバーが積極的に地域取材を行った。特に、こよみ手帳発行以来初の試みであった藤井寺市長および羽曳野警察署長へのインタービューは Glanz メンバーの功績によるところである。

尚、「こよみ手帳」発行に関しては、例年は１月中に地域（羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等）への配布を行っていたが、令和２年度は、令和３年３月の配布となった。Glanz メンバーおよび地域連携授業 SA 指導は経営学部教員が担っている。

● 「こよみ手帳」の制作

地域情報誌として、商店街の紹介やお得情報カレンダー、世界文化遺産の古墳などの情報発信として、毎年発行している「こよみ手帳」が第９号の発行を迎えることができた。本年度は、コロナ蔓延のため、従来のような情報収集を行うことができず、発行が遅れ、地域の方々が発行を待ってくださっている声に後押しされ、藤井寺市長および羽曳野警察署長の

ご協力に加え、熱心に取り組んだ学生によって、無事発行することができた。ご協力いただいた関係各所に感謝するばかりである。

● 地域イベント支援

従来より、授業等を通じて勧誘した有志学生により、羽曳野・藤井寺・柏原を中心に、役所や商工会、寺社、まちづくり NPO 等の実施する様々なまちづくり・まちおこし活動にブース出展、あるいはボランティアスタッフとして学生とともに参画している。現場でまちづくりや地域ビジネスを体験的に学ぶことで、将来の地域リーダーの育成、輩出を狙いとする。令和 2 年度については、これまで学生が参加してきた多くのイベントがコロナ禍により延期・中止となったが、ハレマチビヨリ MINI（イオン藤井寺 9/11-13）、道明寺天満宮宮子屋（10/17、2/13）、辛国神社ほしまつり（2/4）、FRAP ハレマチフジイデラ（3/28）のほか、月 1 回程度、柏原市の古民家を再生した外国人向けゲストハウス「Bed&Bicycle」を中心とした地域活性化プロジェクトのオンライン・オフラインミーティングに、学生・教員が参加した。

② 公務員自主勉強会

1 年生については、遠隔での授業が増えてきたことによる接触回数の減少により、公務員の学習に関して直接指導する機会は昨年よりも減少した。

2 年生については、恒例となっている、1 年生向公務員説明会、「警察、市、消防、府などの公務員を理解するイベント」の開催を予定していたが、本年度はコロナ禍により開催できなかったが、その代わりとして夏休みに警察署長を招き、遠隔での説明会を開催した。従来のイベントは、準備段階で実際に公務員の方と触れ合い、学習のモチベーションを高めるとともに、先輩と後輩との人間関係作りという点からも有意義なイベントであるため、来年度以降は状況に応じた形式で開催することを予定している。

3 年生については、コロナが少し落ち着いた時期に少人数の勉強会を行ったり、遠隔で質問を受け付けたり、課題管理を行った。また春休み期間は毎週金曜日に全体の勉強会を教員全員でサポートし、春から始まる公務員試験に関する対策および出願・エントリーシート等の指導を行った。従来であれば、4 年生を囲んで経験談を聴く機会を設けていたものなど、対面実施できない場合も遠隔で行い、公務員講座の受講の動機づけなど、機会を作って行った。

4 年生について、コロナ禍にあり、中止・延期になり、長期化する公務員試験に対応するため、状況に応じて柔軟に、エントリーシートの添削をはじめ、遠隔での一般知能の勉強会の開催など、例年以上の支援を行った。卒業生から経験談を聴く機会を予定していたが、これもコロナ禍により中止とせざるを得ず、どのような環境においてもサポートできる体制を検討しながらの公務員受験支援が 3 月まで続いた。

以上

看護学部

１．はじめに

看護学部では、2020（令和 2）年度の重点施策としてシミュレーション教育に関する長期目標に、

「教養と専門性を高め、それらをもとに自ら課題を発見し、その解決に向けて探究できる学生を育成することを目的に、四天王寺大学看護学部におけるシミュレーション教育法の確立を行う。」を掲げ、研修等の取り組みを進めてきた。ここでは、FD 委員会が中心となり活動してきたシミュレーション教育に携わる指導者に求められる能力・知識・技術の獲得を目指し、1）シミュレーション教育展開に向けた実践方法を学ぶという短期目標に対して、(1) 他大学のシミュレーション教育を参観し自らの授業の内容および方法の改善を行う、(2) ディブリーフィング実践技術を学ぶ、この二つの行動目標をあげ、計画・実践した内容を報告する。

しかし、コロナ禍の状況を受け、2020 年度の目標として短期および行動目標について以下の修正を行った。

1）看護学部における FD 活動（シミュレーション）の一環として、シミュレーション教育展開に向けた実践方法を獲得する。

（1）他大学のシミュレーション教育を参観し実践技術（ディブリーフィング等）を学び、自らの授業の内容方法および評価を行う。

（2）授業改善へのフォローを行う。

2）教員の教育力・研究力の向上をサポートする。

２．授業相互参観について

2020（令和 2）年度は、冬学期以下のとおり相互授業参観の実施科目の公開授業一覧表を作成した。

月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	中継あり（〇）	合評会
11月24日	火	2	精神の健康と生活支援	9-121	〇	
12月2日	月	2	在宅療養生活支援技術演習	9-121	〇（A方式）	
12月14日	月	4	健康教育論	9-121		
11月24日	火	3-4連続	フィジカルアセスメント	実習室１		11月26日午後
12月7日・14日	月	3	災害看護支援論	9-121	〇	
11月24日	火	4	保健行動論	9-113		講義終了後
12月1日	火	3	フィジカルアセスメント	実習室２		12月3日午後
12月8日	火	3	フィジカルアセスメント	実習室１		12月3日午後

３．学科独自の取り組みについて

1）シミュレーション教育展開に向けた実践方法の獲得

アクティブラーニングの有力な教育形態の１つであるシミュレーション教育、ICT を活用した教育方法を取り入れている大学の講師を招聘し、演習や実習に関するシミュレーション教育の実際について学ぶ。また、継続したシミュレーション教育の実践と評価を通じて、看護の質の向上に貢献できる教育者の育成と 2021（令和 3）年度より開始の領域別実習や演習等の授業展開に必要なスキルの獲得につながるシミュレーション教育の確立に努めていくことが目標達成に向けて重要である。これらの教育方法は、学生のコンピテンシーの習得につながる効果的な学習方法といえる。

2）教員の教育力・研究力向上のサポート

教員の研究力向上および科研費獲得に向けて、「科研費で研究を進める経験について」をテーマに講演会を開催した。科研費は研究費の基礎として非常に重要であり、科研費の採択は研究計画やキャリアに大きな影響を与える。この講演会は科研費獲得者の貴重な体験を聴けるよい機会になるといえる。

以下に 2020（令和 2）年度の活動状況は以下のとおりである。

日時	活動及び研修内容	研修成果
7 月 2 日(木)	学部教員に向け、夏学期令和 2（2020）年度の授業評価アンケートについて FD 委員会にて検討および学科教員へ mail 配信で意見を聴取した。	FD 委員会の意見を踏まえ、10 月の教授会で報告し、11 月 30 日(月)全学 FD 委員会へ、学科におけるアンケート結果の分析と課題について報告した。
7/9(木) -7/13(月)	【庶務課との連携】 庶務課の確認を得て、2919-2020 年度別の科研費獲得教員リストを作成	ＦＤ委員会にてリストを共有し、科研費で研究を進める経験に関する講演会の話題提供者の選出と依頼をした。
9/2(水)	【研修開催】「科研費で研究を進める経験について」講演会を開催	28 名の教員が参加 今年度の科研申請へ向けて意欲的なディスカッションが行えた。
10/8(木) 13:30-17:00	【研修開催】シミュレーション教育の実践に向けたシナリオ展開演習 東京医科大学副学長／医学部看護学科看護学科長阿部幸恵教授を招き、成人・老年領域の作成シナリオについて実践後に参加者全員でディスカッション後、効果的なシナリオ展開への助言・指導を受けた。	看護学部教員 24 名が参加 老年看護学および成人看護学領域が作成しているシナリオの一部を模擬授業形式で展開し、教員間討議と講師の助言を受けた結果、学生のレディネス・看護学部の DP、CP、シラバス、単元を考慮したシナリオブラッシュアップのヒントを得た。さらに、シミュレーション教育におけるブリーファ、ファシリテーターの役割と指導スキルを共有することができた。終了後のアンケートでは、「領域のシミュレーションに活かしたい」「研修をシリーズ化してほしい」「学部全体でシミュレーションにとりくんでいくようにしてほしい」

日時	活動及び研修内容	研修成果
		など、教員の満足度も高く好意的な評価が得られた。
10/2(金)	10/11(日) web 開催される「シミュレーション教育に関する研修会 -コロナ禍におけるシミュレーションを用いた遠隔教育-」研修への参加推奨を mail にて周知した。	数名の教員が web 参加し教育力向上に努めた。
10/22(木)	大学・高校実践ソリューションセミナー2020 オンライン開催について mail 配信した。 「Teams で始める遠隔授業のご紹介」、「オンライン授業による教育の質向上の可能性と課題」、「シミュレーション教育で看護実践力を高める実践事例」などの内容、「数理・データサイエンス・AI を社会においてどのように活用しうるか」というテーマで、令和 2 年 10 月 29 日（木）16：45～17：45 学内および zoom 参加により ICT 教育 WG を中心に検討が行われる旨を学部教員に mail で周知した。 2 名の教員が参加した。	2 名の教員がディスカッションに参加した。
11/2（月）	全学 FD 委員会より相互授業参観および合評価会開催における実施科目の「相互授業参観・公開授業一覧」の作成に当たり、各教員に mail 配信・回収した。	相互授業参観実施期間：11 月 20 日（金）～12 月 17 日(木)における「相互授業参観・公開授業一覧」を作成した。
1/13（木） 10:00-11:30	【研修開催】福岡女学院看護大学／シミュレーション教育センター／藤野ユリ子 教授を招き、福岡女学院看護大学での学内でシミュレーション教育を取り入れて実習の状況、特に実習にどのようにシミュレーション教育を取り入れているのか、コロナ禍をふまえた実際の映像（知的財産）をもとに解説・創意工夫点・質疑応答を受け、本学の今後の領域別実習の対応への示唆を得る。	看護学部教員 24 名が参加 シミュレーション教育による実習展開（臨地実習を学内で補填する方法）について多くの示唆を得た。終了後のアンケートでは、「具体的な事例をもとに、学内での代替実習のイメージがついた」「コロナ禍での実習の工夫や対応がわかった」「学内実習案の修正点がわかった」「今後もシミュレーション教育を深めたい、定期的に開催してほしい」、ルーブリック評価についても学びたいなど、臨地・学内の領域別実習に対するモチベーションにつながった。
3/16（火） 13:00-16:00	【研修開催】東京医科大学におけるシミュレーション教育の実際・演習展開 東京医科大学副学長／医学部看護学科看護学科長阿部幸恵教授を招き、シミュレーション教育のカリキュラムに効果的な導入方法、授業科目における CP、DP とシラバスとの関連性、実際の演習の授業	看護学部教員 27 名が参加 シミュレーション教育の必要性の理解、授業内容と結び付けた評価および DP/CP に関連づけたシミュレーション教育モデルの具体的な提示の必要性について、具体例を通して教員間で教育活動を見直す機会を得た。終了後のアンケートでは、シミュレーション教育

日時	活動及び研修内容	研修成果
	案と方法論（知的財産）、臨地実習で経験できる・できない内容に関するシミュレーション演習での補完方法、ファシリテーション・ディブリーフィングスキルの向上、シミュレーション教育の評価など、授業秘話を踏まえて助言・指導を受け、コロナ禍も含めた今後の演習展開の示唆を得る。	のブラッシュアップを含め、今後も継続してシミュレーション研修の開催を希望する意見が多かった。

4．評価と課題

1） シミュレーション教育展開に向けた実践方法を獲得するために、他大学への授業参観がコロナ禍の状況下であることを考慮し、他大学の講師を招聘（来学+web 参加）により、シナリオの作成・コロナ禍における臨地実習および学内実習の方法と対応への示唆を得た。今年度は研修参加者が 7-8 割であったため、今後は教員全員参加を目指し、開催日程の検討を行い、研修参加への周知も工夫していく必要がある。

2） シミュレーション教育を導入した授業展開の内容方法および評価を行い、次年度も引き続き授業改善に努めていく必要がある。

3） 今後は、各教員が積極的にシミュレーション教育を導入した授業参観を行い、各科目の授業展開および個々の教員へのフォローアップ体制をどのように整えていくことが課題である。

短期大学部 保育科

１．はじめに

当学科では今年度も「保育実践演習」の実施を中心に、科目間連携、教員間連携を進めながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育・研究活動を行う予定であったが、新型コロナウィルス感染症拡大のため授業形態の変更を余儀なくされ、全てのねらいを達成できたとは言い難い状況である。しかし、限られた環境の中で学生にとっての学びを確保すべく、可能な限りの方策を用い教育を行った結果、例年通りとはいかないまでも、着実に成長させることができたと考える。以下、今年度の保育科の教育活動に関するFD活動の結果を報告する。

２．「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習 II」「保育実践演習 III」「保育実践演習 IV」と 2 年間に渡って続く授業である。異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で毎年評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の「保育実践演習」の概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数	1 年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）	112 名
	2 年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）	107 名
担当教員	保育科専任教員 11 名	
基礎グループ	A～H の 8 グループ（1 グループあたり 1，2 年生合わせて約 27 名）	
使用教室	講堂 701 教室（メイン教室），講堂 702 教室及び 703 教室	
	音楽棟 多目的室 2 部屋及びリズム室，図工室，サブアリーナ, 小体育館	
シラバス	表 1 及び表 2 参照	

表 1「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス（夏学期）

		1年:保育実践演習I	2年:保育実践演習 III
1	4/20	オリエンテーション	オリエンテーション
2	4/27	保育の学びに出会う(マスク作成)	保育の学びに出会う(マスク作成)
3	5/11	マスク作成の振り返り	マスク作成の振り返り
4	5/18	自己紹介を考える	名札紹介
5	5/25	自己紹介	休講
6	6/1	対面授業(クラス顔合わせ)	後輩へ伝えたいこと

7	6/8	オンライン（先輩から保育科の学びを教わる）	オンライン（保育科の学びを後輩に伝える）
8	6/15	休講	対面授業（クラス顔合わせ）
9	6/22	オンライン（先輩から名札づくりを学ぶ）	オンライン（名札づくり紹介）
10	6/29	オンライン（講演「幼稚園園長から学ぶ」）（幼保連携認定こども園　せいか幼稚園 園長　高谷　真子　先生）	オンライン（講演「保育所所長から学ぶ」（香芝市立若葉保育所　所長　三宅　節子　先生）
11	7/6	オンライン（先輩に名札づくりを伝える）	オンライン（1 年生の名札づくり紹介）
12	7/13	対面授業（出前保育について）	オンライン（子育て支援①）
13	7/20	オンライン（PROG テスト）	オンライン（PROG テスト）
14	7/27	対面授業（出前保育について）	オンライン（子育て支援②）
15	8/3	オンライン（まとめ｛子ども・保育と出会う）	オンライン（まとめ「子ども・保育にかかわる」

表 2「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」（冬学期）及び 保育・教職実践演習（幼稚園）シラバス

		2年：保育・教職実践演習（幼稚園）	2年：保育実践演習Ⅳ	1年：保育実践演習II
1	9/29	オリエンテーション（全員）	子育て支援の体験の準備（全員）	9/29休み 10/1（木）授戒会終了後（13：10～14：40）講堂701、1回生オリエンテーション（全員）
2	10/6	（教育実習Ⅱ）	(教育実習Ⅱ）	（教育実習I）
3	10/13	（教育実習Ⅱ）	（教育実習Ⅱ）	（教育実習I）
4	10/20	子育て支援の体験の準備（全員）	子育て支援講演（全員）柏原市子育て広場「ホットステーション」四郎丸和代所長	自宅で課題（教育実習について）全員
5	10/27	子育て支援体験①	子育て支援体験①	出前保育の準備①（全員）
6	11/10	子育て支援体験②	子育て支援体験②	出前保育の準備②（全員）

7	11/17	子育て支援体験③	子育て支援体験③	出前保育の準備リハーサル(全員)
8	11/24	子育て支援の反省会(全員)	子育て支援の反省会(全員)	地域に出るⅠ:出前保育①
9	12/1	保育探究演習報告会の準備(全員)	保育探究演習報告会(全員)	地域に出るⅡ:出前保育②
10	12/8	オンライン「社会人の基礎」講演(前半)入試広報課職員・小里さん　(後半)オンライン(履修カルテ作成)	オンライン＜1年生の相談に助言する(前半)＞	オンライン＜1年生の相談に助言する(前半)　＞　(後半)オンライン(履修カルテ作成)
11	12/15	オンライン「社会人の基礎」講演(後半)入試広報課職員・小里さん　(前半)オンライン(履修カルテ作成)	オンライン＜1年生の相談に助言する(後半)＞	オンライン＜1年生の相談に助言する(後半)　＞　(前半)オンライン(履修カルテ作成)
12	12/22	運動会の準備(実行委員のみ)	1回生に施設実習について語る(オンライン)	1. 施設長の講演(オンライン)児童養護施設「羽曳野荘」中條薫園長 2. 2回生から施設実習を聞く
13	1/5	運動会リハーサル(前半)	運動会(前半)	運動会(前半) (後半)保育探究演習報告会(録画)視聴
14	1/12	運動会リハーサル(後半)	運動会(後半)	運動会(後半) (前半)保育探究演習報告会(録画)視聴
15	1/19	卒園式リハーサル(全員)	卒園式(全員)	卒園式(オンライン)参加(全員)
定期試験	1/26	まとめ:2年間で培った保育実践力について振り返る	(オンライン実施)	まとめ「子ども・保育を知る」について:保育科で学んだもの

(注)　1)前半(グループA,B,C,D)、後半(グループE,F,G,H)

2)子育て支援体験に行かない学生(レポート作成:休校)

3)12月22日は施設実習グループ別(児童養護施設、乳児院、障害児)

(2) 地域の幼稚園・保育所などとの連携

今年度は、新型コロナウィルス感染症拡大防止対策のため、夏学期の幼稚園見学活動は実施できなかったが、冬学期には、地域の幼稚園・保育所での出前保育活動及び、地域子育て支援センターでの子育て支援体験活動を行うことができた。

① 出前保育（1 年冬学期：11/24 及び 12/1）

・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園（2 回実施）
・学校法人谷口学園 文の里幼稚園
・学校法人志紀学園 志紀学園幼稚園
・社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会 ベビーハウス社協
・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院保育園

今年度は、新型コロナウィルス感染症拡大防止対策のため、出前保育に出向くのは演技を行う 1 チームのみとした。園側の配慮もあり、参加する幼児も年長クラスを中心に少人数に絞っていただいたため、交流する機会を設けることができなかった。

② 子育て支援体験（2 年冬学期：10/13, 10/27, 11/10, 11/17）

・羽衣子育て支援センター（大阪府高石市）10/13[教育実習期間の異なる学生のみ対象]
・羽曳野市子育て支援センターふるいち（大阪府羽曳野市）10/27, 11/10, 11/17
・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」（大阪府柏原市）10/27, 11/10, 11/17
・富田林市第 1 幼児教育センター（大阪府富田林市）11/17
・富田林市第 2 幼児教育センター（大阪府富田林市）10/27, 11/10
・東羽衣子育て支援センター（大阪府高石市）10/27, 11/10, 11/17
・香芝市子育て交流センター「おうちのこうえん」（奈良県香芝市）10/27, 11/10, 11/17
・四天王寺悲田院子育て支援センター（大阪府羽曳野市）10/27, 11/10, 11/17
・南海愛児園子育て支援センター（大阪府高石市）10/27, 11/10, 11/17
・親と子のすこやか広場（奈良県大和高田市）11/10

各施設の性格上、少人数でしか参加できないため、限られた教員数で複数園を巡回しながら実施した。

3 回にわたる期間中に 1 回しか参加できない貴重さを感じて参加できるよう配慮し、事前の子育て支援についての講演では、柏原市つどいの広場「ほっとステーション」の保育者から具体的な支援内容を学生たちに話していただいた。その結果、学生も適度な緊張感を持って参加できた。また、事後の反省会での発表は 2 年生のみでの開催とした。

(3) 外部講師による講演

今年度は以下の方々に外部講師としてご講演をいただいた。

① 卒業生の講演（1・2 年夏学期）

・今年度は実施できなかった。

② 幼稚園園長の講演（1 年夏学期）

・高谷　真子先生　幼保連携型認定こども園　せいか幼稚園 園長

③ 保育所所長の講演（2 年夏学期）
・三宅　節子先生　香芝市立若葉保育所　所長
④ 社会人になるにあたっての講演（2 年冬学期）
・小里 樹実氏　本学入試・広報課職員（本学保育科卒業生）
⑤子育て支援についての講演（2 年冬学期）
　四郎丸 和代先生　柏原市つどいの広場「ほっとステーション」
⑥児童養護施設に関する講演（1 年冬学期）
・中條 薫先生　社会福祉法人 児童養護施設　羽曳野荘　理事長・施設長
⑦IBU 保育科卒園式への学外来賓者（１・2 年冬学期）
・松本 千幸先生　社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び 本学非常勤講師
・荒木　環先生　社会福祉法人小浜福祉会理事長　及び　本学非常勤講師

(4) 科目間連携と実施時期

例年、「保育実践演習」の 90 分の授業時間だけでは、学外での体験学習の時間が十分確保できないことや、より学生の活動と学びが深まるようにとの考えから、「保育実践演習」と他の数科目間で科目間連携を行い、成果をあげていた。しかし、今年度は新型コロナウィルス感染症拡大のため、夏学期の学外への体験学習は実施できず、また授業実施形態による制約のために、当初予定していた科目間連携を行うことはできなかった。冬学期に実施できたものを以下に記す。

① 「保育実践演習 IV」と 「保育・教職実践演習（幼稚園）」（2 年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当科独自の科目である「保育実践演習 IV」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。そのため、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業内容として必要な、個人の教職に関する知識や技術についての課題の克服（出前保育での 1 年生へのアドバイス，行事経験を通しての役割分担等）、保護者連携についての学び（お便りや連絡帳についての学び等）、地域の保育現場及び子育て支援現場での実践的な活動（子育て支援体験に関する講演の聴取）を含み、2 年間の学びのまとめとなる授業内容で構成している。

② 「保育実践演習 IV」と「保育内容・表現（総合）」（2 年冬学期）

昨年度同様、「保育内容・表現（総合）」（2 年生対象授業）と連携し、「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」の中で『保育科卒園式』を実施した。『保育科卒園式』は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作り上げることで、そこでの保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に 5 年前から取り組んでいる活動である。

今年度も「保育実践演習」の授業内で行うことにより、1 年生全員はオンラインでの参加であったが、次年度の学びへの意識を高めることができたことがワークシートから確認できた。この良い流れがうまく学びへ繋がるよう、我々教員も引き続き努力するとともに、次年度も卒園式を「保育実践演習」と「保育内容・表現（総合）」の科目間連携を以って、保育科全員参加のもと実施する予定である。

③ その他

従来から行っている科目間連携として、1 年生の出前保育の練習の期間は、「保育実践演習Ⅱ」と「小児体育 II」及び「音楽 IV」と連携し、学生の表現力がよりいっそう習得できるよう授業内容を配慮している。

また、2 年生の子育て支援体験の前には「保育相談支援・相談援助」の授業内容と連携し、理論と実技を関連づけて習得しやすくするよう配慮している。今年度は、夏学期にも少し「保育実践演習」でお便り作成などで触れることで、年間を通して子育て支援について学ぶことができるように改編した。

(5) 2 年生による「学びの発表会」と新科目「保育探究演習」の実施

３年連続して行ったこの「学びの発表会」とその成果をもとに、今年度は、２年生の学生が自らの興味や関心に応じて保育テーマを選んで、仲間と一緒に主体的・協働的に学ぶ「保育探究演習」科目を設定し、実施した。

「保育探究演習」は 6 つの保育テーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）で構成している。

「保育探究演習」は、２年生（3 セメスター）が、6 つのテーマから１つを選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的として、学生の主体的・協働的に学ぶことを通して質の高い保育の専門性を育むことを目標として設定した新しい科目である。さらに、２年生は本授業を通しての学んだ内容を１年生に向けてプレゼンテーションすることで、自らの学びを共有するとともにより学びを深める保育科の取り組みである。

この 6 つのテーマは、既に自由選択科目として科目化されていた「多文化保育論」や「保育内容技術・野外保育」や「音楽 V」をベースにテーマ化されたものと、今後の幼児教育で重視されるテーマとして挙げられているもののうち、「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」を加えて構成した。

カリキュラム構成や教育方法は「多文化保育論」や「保育内容技術・野外保育」で実践されていた教育方法をモデル化し、6 つのテーマ全ての教育方法として採用した。この教育方法モデルの特徴は、主に以下の４点である。

１）学外での学びを取り入れ、より実践的に保育を学ぶことができるようにする。

２）週 1 回 15 回の開講を時間割上設定しているが、その時間割にこだわらず、柔軟に開講時間を設定することで、学外での学びの成果が高まるようにする。

３）学生の自主的な学びが行われるよう、外部講師の講演を取り入れたり、少人数グループでより実践的に深く学ぶ内容を予習したり、学外の学びの現場においても保育者などの具体的な話を聞きながら学ぶことができるようにする。

４）夏学期の「保育探究演習」のテーマごとに、学んだ内容を報告する発表会を開催し、2 年生全員で学びを共有するとともに、1 年生にその学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝えることができるようにする。

この成果をもとに、今年度より新科目「保育探究演習」を実施し、昨年度に引き続き、保育実践演習 IV 及び保育・教職実践演習(幼稚園)の授業内で「学びの発表会」を実施した。

今年度は、新型コロナウィルス感染症拡大予防のための活動の制限や、それに起因する保育現場との連携の難しさ等、大変な環境となったが、オンラインを活用しての講演や交流等を通して、できる範囲での精一杯の学びの経験をした学生たちは、それぞれの成果をまとめて「学びの発表会」を行い、さらに「2020 年度学びの発表会報告集」を作成している。

このように、学生が自らの保育の学びを振り返り、その意義や重要性、さらなる課題を再確認することは、文部科学省が提示している教職実践演習の内容とも合致している。

また、1 年生に対しては後日の録画視聴を行ったが、そのワークシートに、昨年度同様「私も積極的に何事にも取り組みたい」「〇〇の活動を私もしたいです」という意見が多く見られたことからも、自主的な学びの成果と楽しさも 1 年生に伝えることができたと思われる。

３．授業相互参観について

本年度の各教員の授業相互参観のための公開授業担当科目は以下のとおりである。

東	火 4	スポーツⅡ	伊達	月 1	保育内容・表現(総合)
荒木	金 1	音楽理論	原(祐)	火 3	音楽Ⅳ
内本	月 4	図画工作Ⅱ	韓	月 1	教育原理（教育制度的事項等を含む）
梅野	木 4	保育実習指導Ⅰ			
奥	金 1	音楽理論	松山(由)	木 4	保育内容・人間関係
奥野(孝)	火 3	小児体育Ⅱ	吉田(郁)	水 2	児童文化

４．学科独自の取組について

(1) 公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

今年度は新型コロナウィルス感染症拡大により、夏学期及び夏休み中は、オンライン（ZOOM）やメールでの指導を行い、学籍番号奇数・偶数の登校が可能となった冬学期には、受講希望者に対面での、面接や実技等の試験対策指導を行った。保育科教員全員が其々の専門性を生かし、受験内容に応じて個人指導を行った。

数学分野については、教育学部の原田三朗先生の「算数」の授業 15 回を実質的に公立受験対策の指導に充てていただいた。

その結果、今年度は、大阪市、岸和田市、田辺市、吹田市、藤井寺市、名張市、斑鳩町の実質 7 名の合格者を出すことができた。

さらに、今年度も 1 年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義 I」（石田晋司先生担当）を引き続き保育科の 1 年次生も受講できる形にしていただき、合同開講にしていただくこととした。昨年度まで 3 年間の実績から見て、この科目を受講することが直接の合格率アップには結びつかないとしても、 1 年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。

(2) 高大連携事業の実施

今年度は、3 月に 4 回にわたる高大連携協定校実践プログラムの一環としてピアノ講座を保育科音楽教員複数名で担当し開講することができた。昨年度は新型コロナウィルスの感染症拡大により中止となったが、今年度は（大阪府立）貝塚南高校、藤井寺高校、美原高校、

登美丘高校、（奈良県立）高取国際高校、香芝高校より 19 名の受講生を迎え、2 年生の受講生には全員に終了証を付与することができた。今後とも本学の受験生確保に向け一助となるよう願っている。

一方、奈良県立桜井高校普通科保育コースとの高大連携授業は、コロナの影響を受け、今年度は 11 月 1 回のみの実施となった。保育科教員が桜井高校出身の保育科学生 2 年生 1 名、1 年生 4 名を伴い「保育の心理学」の授業を行った。桜井高校の卒業生が高大連携事業の連携授業に参加した意義は大きく、桜井高校からも高い評価を得ることができたと考える。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有意義でさらに保育科への志が高まるような高大連携授業を、対象高校を拡大し行っていく予定である。

(3) ルーブリック評価導入への具体的検討（造形）

今年度は、新型コロナウィルス感染症拡大のために大半が遠隔授業となった。「図画工作」「保育内容・表現」においては、造形担当教員が、IBU net で配信した課題を学生は、自宅で制作。作品を携帯電話のカメラで撮影し、学習成果可視化の造形ポートフォリオに入力した。提出時には、日時、作者コメントを添付する。コメントを読むことで、学生、一人一人の思いを感じることができ、造形ポートフォリオは、遠隔授業の提出方法として大いに役立った。また学生は、アップするときにこれまでの自分の作品を振り返ることになり、過去の学びを再確認する。1・2 年生ともにほぼ 100％の活用率で、１年間で 15 点ほどの作品をアップした。作品が、学生個々の枠にコメントと写真で残ることで、正確な評価にもつながった。学生から評価に対する異議申し立てがあった場合も対応できると考える。次年度以降も、運用しながら、ポートフォリオとしての活用にとどまらず、具体的なルーブリック評価の基準設定の可能性について保育科で検討する予定である。

(4) 「保育実践演習」におけるシラバスについての再検討

今年度も「『保育実践演習』報告会」を開催せず、「保育実践演習」研究会によるシラバス検討会を開催し、今年度を含む今までのシラバスの再検討と教員の役割分担について課題を明らかにし、再検討した。その結果を次年度の「保育実践演習」のシラバスに反映させ、より学生にとって学びが充実したものになるよう科目間の相互連携を図りながら授業内容を再構成した。特に、再検討の中では、今年度は、「学びの発表会」の成果に基づいて新設した「保育探究演習」科目を設定し、学生の学びをより深めるように時間確保を行った。今後の課題としては、アクティブ・ラーニングに必要不可欠な、学外の保育現場等と連携して行う活動について、協力いただいた現場の先生からの学生への評価の本格的な導入が引き続き検討課題である。

(5) 「保育探究演習（多文化保育論）」を中心にした韓国・新丘大学との連携
・オンラインを通しての日韓学生交流活動

令和元年度の保育科重点施策の事業計画の一つである「保育や子どもを取り巻く社会状況に対応できる保育者としての幅広い教養と専門性を深める」ことを目的として、「多文化

保育論」科目を中心に、毎年韓国新丘大学児童保育学科と学生研修交流を行っている。

本日韓学生交流は、参加学生ら自らが活動を計画し、準備・実施するといった学生中心の主体的・協働的学習方法を重視しながら行っている。

前年度までには、同科目の授業の中で、受講生 9〜10 名が多文化保育に関する基礎的知識を学習した上、海外多文化体験研修の事前学習を行い、韓国新丘大学での学生交流、韓国保育文化の体験活動を行っていた。このように毎年、本学の保育科と韓国の新丘大学の保育科学生はお互いの国を訪問し、学習交流及び文化体験・保育現場の見学等を行っていたが、今年度は、新型コロナウィルス感染症の拡大により、オンラインでの交流活動を行うこととなった。

本科目の受講生（10 名）は、オンライン交流活動を計画・準備し、新型コロナウィルス感染症防止対策を徹底して行った上で、７月７日（火）に交流活動を行った。

日韓学生たちは、お互いの言葉で挨拶や自己紹介、保育文化の手遊びや歌、お互いの伝統文化の紹介と保育における共通課題について質問し合いながら両国の保育情報を得る等、多くの学びと感動のある交流となった。言葉の違いを超えて、お互いが学び合い、笑顔があふれる楽しい活動であったが、特に、活動終了後の参加学生の感想には、「国や文化が違っても、お互いを配慮する心の優しさに感動した」、「日韓相互の学生の交流を通して、海外の保育に関する知識を学ぶことができ、さらに文化の多様性について学修でき、今後の保育現場における多文化保育に生かしたい」等の学びが書かれていた。

本交流活動後、参加学生らは本学習で得られた学習成果をまとめ、「学びの発表会」で報告し、保育科全学生と学びの共有を図った。

５．まとめにかえて

本学保育科において、平成 20 年度から積み上げてきた「保育実践演習」の学びの中で 2 年生は着実に成長し、１年生時の経験を通して修得した知識や気づき等を改めて振り返り、まとめて発表するという経験をもとに 1 年生に助言したり、リーダーシップを発揮したり、コミュニケーションの調整をしたりすることができるようになってきていた。そして、それらの自分自身の成長から自信を得て、教員とともに「保育実践演習」をよりよくするためにそれぞれの活動で自らの意見を積極的に提案し、1 年生に学びを伝えようと頑張ってくれるというサイクルが継承されつつあった。

しかし、今年度の新型コロナウィルス感染症拡大防止のために対面授業が殆ど実施できなかった結果、残念であるが１・２年生間に従来のような学びのサイクルが継承されたとは言い難いと感じている。

にもかかわらず、今年度に新科目として設定して行った「保育探究演習」の「学びの発表会」では、録画視聴ではあったが、１年生は上級生のプレゼンテーションから学び、２年生は自らの学びをより効果的にプレゼンテーションすることで学びをより深めたことが、ワークシートの記録から確認された。

他には、オンラインを用いての夏学期の「保育科の学びについて」「名札の作り方」、冬学期の「１年生から 2 年生への相談」「卒園式」、さらに、2 回に分け半数ずつでの実施であったが、対面での「冬の運動会」等、可能な限り 1・2 年生間のコミュニケーションを図る時

間を確保したことによって、1 年生の中には 2 年生の姿を通してより頑張ろうという気持ちを持った学生が少なからずいることが救いとなっている。

今後も新型コロナウィルス感染症拡大の推移が危ぶまれる中にあっても、本授業のねらいである慈愛に満ちた保育者の資質として必要な能力、すなわち学生個々の知識・技術習得を通しての専門性、協同・協調的な学びを通して社会性や豊かな人間性を培うことを明記した 3 つのポリシーと関連づけながら、獲得すべき能力が習得できたと学生自身がより実感できる FD 活動をめざし、保育科におけるカリキュラムと評価の在り方を今後も追求する。

さらに、対面授業を安全に実施できる方向性を模索しながら、今後も個々の学生が自主的に自らの学びをより深め、慈愛に満ちた保育者に育ちあうような経験ができる保育科としての在り方を模索したい。そのためには、「学びのサイクル」の継承復活に向け、短期大学部保育科で受け継がれてきた歴史とさまざまな「つながり」を大切にしながら、これからの保育科の学生の学びを支え、充実したものになるようなカリキュラムについて、教員一同が粘り強く検討・検証していかなければならないと考える。

生活ナビゲーション学科 ライフデザイン専攻

１．はじめに

2020 年度は新型コロナウィルス感染症の感染拡大に振り回された 1 年だった。入学式やオリエンテーションの日程は二転三転し、入学式は講堂ではなく学科専攻ごとに各教室に分かれて行われた。それでも短期大学部においては対面でのオリエンテーションを実施することができ、そのときに担任と学生との連絡手段を確立することができたので、大混乱はしたものの細やかな履修指導等をすることができた。4 月 7 日には緊急事態宣言が発令され、4 月 8 日以降の学生の入校が禁止される。そのため授業は 1 回目からオンラインでの実施となる。大阪府においては 5 月 21 日に緊急事態宣言が解除されるものの、6 月以降の対面授業は大幅に制限された。ライフデザイン専攻にはオンラインでの実施が困難な実習・演習系の科目が多く、また学生の在学期間も 2 年間と短いため、8 回の対面授業が認められたケースもあるが、4〜5 回に制限された科目が多い。また家庭の事情や感染を避ける目的からオンラインでの受講を希望する学生もおり、とても困難な授業運営を強いられた。また調理実習のような授業は最後に試食をするためマスクをはずすことになり、感染予防の観点から対面授業に慎重にならざるを得ない例もあった。2020 年度は東京オリンピックの予定があったため定期試験の予定は当初からなかったが、逆の言い方をすると試験を実施できるような状況ではなかった。

冬学期は３密（密閉・密集・密接）を避ける観点から学生を学籍番号が偶数と奇数の２グループに分け、交互に対面授業を行うことになる。また授業の方法も主に２つの方法が採用された。Ａ方式は半分の学生は対面で残り半分は Zoom 等を用いた同時中継による授業方法。Ｂ方式は半分の学生は対面で、残り半分は自宅でビデオ等を見ながら課題などをする授業方法で、偶数・奇数で２回同じ内容が繰り返される。もう一つ例外的なＣ例方式があり、すべての授業をオンライン授業とするものである。他に勤務校のある非常勤講師が担当する調理実習科目は、他校との兼ね合いによりこの方式で実施せざるを得なかった。11 月末まではこのような方法で授業をすることができたが、12 月 3 日に大阪府が府独自の判断基準である「大阪モデル」の警戒度をレッドステージに移行させる決定したことを受け、本学でも 12 月 5 日以降の授業が全面オンラインとなる。年が明けてからは対面授業が再開し、1 月 13 日には大阪府を含む関西３府県に緊急事態宣言が発令されるものの、学校関係に対しては特段の要請はなされず、1 月中旬の確認テストをもって 1 年間を終えることとなる。

本専攻では専任教員により、一人ひとりの学生が納得のいく履修計画を立てられるように丁寧な指導することを心掛けていたが、コロナ禍の混乱でどこまでできたかは甚だ疑問である。また就職に繋げることを目的にキャリア教育に力を入れているが、後述するようにライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱにおいても当初の授業計画を変更せざるを得ない事態になった。従来のライフデザイン専攻の学生は受け身の学習だったが、オンライン授業では前向きに自ら学ぶ姿勢が求められる。教員の側も丁寧な指導だけでなく、自発性を促し支援する授業へと意識を転換することが必要だろう。

学生の学修意欲を高める対策として、本専攻では資格取得を勧めているが、これも後述するように、コロナ禍の影響で中止になった検定試験があり、昨年に比べて受験者数が約 2/3

に減った。しかし合格率は上がっており、優秀賞等も受賞しており、質的には高い水準を維持できていると考えられる。

２．初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

ライフデザイン専攻では、初年次教育科目として、ライフデザイン・ゼミナールⅠとⅡを開講している。キャリアセンタースタッフの協力を得、さらに外部講師を招聘し、２年次にスタートする就職活動にうまく繋がるように連携を取っている。しかしながら、本年度は新型コロナウィルス感染症感染拡大の影響を受け、以下に述べるように、様々な形で変更を余儀なくされた。

(1) ライフデザイン・ゼミナールⅠ

ライフデザイン・ゼミナールⅠでは、働くという事や自己分析、仕事分析等を中心に学習する。授業内容は表１のとおりであった。全 15 回中 5 回の授業で外部講師を招き、また学生が就職活動を具体的に感じることができるように配慮している。しかし 2020 年度は新型コロナウィルス感染症感染防止のために 4 月 7 日に緊急事態宣言が発令され、学内での対面授業が行えなくなる。大阪府においては 5 月 21 日に解除されるものの、夏学期には大部分の授業を対面で行うことができなかった。幸いにして 6 回目から 11 回目（6 月 5 日から 7 月 3 日）と 14 回目（7 月 31 日）の授業は対面で実施することができたが、それ以外は Teams を用いたオンライン授業となった。外部講師を招いた 5 回分はすべて対面で実施でき、充実した内容だったが、それ以外の回は使い慣れない Teams と IBU ネットの利用に苦しみ、出席管理から課題の回収チェックに至るまで、慣れない作業に追われることになった。同じことは学生にも言えるであろう。就職活動に対する心構えが少しでもできたことを祈るのみである。

表１．ライフデザイン・ゼミナールⅠ授業内容

1	ライフデザインの学びを理解する［オンライン］
2	建学の精神を学ぶ［オンライン］
3	求められる社会人基礎力を学ぶ［オンライン］
4	仕事分析　（さまざまな仕事と職種・業種研究）［オンライン］
5	ライフプランとキャリアプラン［オンライン］
6	短大から始めるキャリア形成［対面］
7	適性テスト［対面］
8	働くとは［対面］
9	私が理想とするビジネスパーソン作り［対面］
10	自己分析（自分を知る）［対面］
11	社会で活躍できる自分になるには［対面］
12	一歩踏み出し 物知りになろう［オンライン］
13	キャリアデザイニング［オンライン］
14	プログテスト［対面］
15	振り返り　夏休みの過ごし方［オンライン］

(2) ライフデザイン・ゼミナールⅡ

ライフデザイン・ゼミナールⅡでは、履歴書の書き方を学習し、一般常識テストを体験する。授業内容は表２のとおりである。

履歴書の書き方では外部講師１名を招き、更に専攻の専任教員が加わることにより丁寧な指導ができるように努めた。その内容は、履歴書の目的・書き方，がんばってきたこと，自分の特徴，志望動機等である。自己アピールできる事柄は特殊な経験や体験と思っている学生が多いため、日常のちょっとしたことで自己アピールできることを気づかせる意義は大きい。

ライフデザイン・ゼミナールⅠの項でも記したとおり、本年度は、新型コロナウィルス感染症対策に振り回される一年であった。冬学期は先述のＡ方式で授業を行った。対面に参加できない学生は Teams による同時中継で授業を試聴した。そのためオンラインで受講している学生には板書が見えずらいなどの不便をかけたようであり、また丁寧な指導ができたかどうかも甚だ疑問である。それでも 1 回目から 10 回目（9 月 24 日から 12 月 3 日）まではＡ方式で授業をすることができたが、12 月 3 日に大阪府が「大阪モデル」の警戒度をレッドステージに移行させたことにより、本学でも 12 月 5 日以降の授業がオンラインでの実施となり、11 回目から 13 回目の授業は Teams 等を用いた遠隔授業になった。年明けの 15 回目は全員対面で実施できたが、一番学生に体験させたかった就職活動におけるグループ面談の練習をすることは結局できなかった。

表２．ライフデザイン・ゼミナールⅡ授業内容

1	キャリアプランを考える［学籍番号偶数登校］
2	履歴書を書く（目的や書き方、ルール）［奇数登校］
3	履歴書を書く（学生時代がんばってきたこと）［偶数登校］
4	履歴書を書く（自分の特徴）［奇数登校］
5	履歴書を書く（志望動機）［偶数登校］
6	履歴書を完成させよう［奇数登校］
7	履歴書を完成させよう［偶数登校］
8	適職診断テスト・進路登録［奇数登校］
9	面接対策（グループ面接）、実践に向けて［偶数登校］
10	面接対策（面接試験の流れと注意すべき言動）［奇数登校］
11	マイナビ登録会［オンライン］
12	クラス担任によるオンライン個別面談［オンライン］
13	適職診断テスト（R-ＣＡＰ）解説［オンライン］
14	ライフデザイン・ゼミナールⅡの振り返り［奇数登校］
15	ＳＰＩ試験対策［全員対面］

最後に、ライフデザイン・ゼミナールⅡで授業アンケートを行った結果を表３に示す。全体的に見て、授業前に比べ授業後には 0.3〜0.6 ポイントが上がっているのが今年の特徴で

ある。ここには載せていないが、どのアンケート項目に対しても分布の傾向は変化していない。「エントリーシートの目的や位置づけを理解している」については 0.6 ポイント上がっているが、それ以外についてはやや評価値が上がった程度と言えるだろう。

表３．ゼミナールⅡ授業前後でのアンケート結果（5 段階評価の平均値を記している）

質　問	事前評価値	事後評価値
1. 就職活動の流れが理解できている	2.5	2.9
2. 課題を自覚し、いつ何をやるべきかイメージできる	3.0	3.4
3. 自分の強みを答えることができる	2.7	3.0
4. 強みを発揮した出来事や事例を挙げることができる	2.6	3.0
5. 気になる企業や職業について調べることができる	3.2	3.6
6. エントリーシートの目的や位置づけを理解している	2.3	2.9
7. エントリーシートで自己 PR や志望動機を表現できる	2.4	2.9
8. 就職活動に適した身なり、立ち居振る舞いができる	3.1	3.4
9. 正しい敬語を使うことができる	3.1	3.5
10. 話したい事をわかりやすく伝えることができる	2.6	2.9
11. 面接の評価ポイントを理解して行うことができる	2.5	2.9
12. グループディスカッションのポイントを理解して行うことができる	2.3	2.7
13. 思うように行かなくても行動し続ける覚悟がある	3.4	3.7

３．授業相互参観について

今年度は、新型コロナウィルス感染症予防の観点から、３密を避けるため、必須の授業を指定して参観することは行わなかった（注、例年参加者が少ないため、新任教員の授業に参観することを必須としている）。また参観のし方も、対面にするか、オンラインにするかは各参加者に委ねた。結果として１名の教員が専門科目（ビジネス実務概論）をオンラインで参観しただけだった。前年度に着任したばかりのため、研修の一環として授業参観をして報告書を作成することが求められていたためで、その報告書は人事課に提出され、授業担当者にフィードバックされることはなかった。次年度は３密を避けつつ、多くの関係者が授業参観する仕掛けを考える必要がある。

４．学科独自の取り組みについて

(1) キャリアの基礎Ⅰ・Ⅱについて

ライフデザイン専攻では必修科目として、夏学期にＳＰＩ試験言語分野に対応した「キャリアの基礎Ⅰ」を開講し、冬学期にＳＰＩ試験非言語分野に対応した「キャリアの基礎Ⅱ」を開講している。どちらも就職試験で必要な基礎学力育成を目的としている。

夏学期は 4 月 7 日に緊急事態宣言が発令され、急なことで準備が間に合わなかったため、最初の２回分は課題で対応した。３回目には、学生の学力に応じた授業展開を行うためにプレテストを行い、その結果によって２クラスに分けた。そして、それ以降は YouTube を用い

た動画でオンデマンド授業を行った。入学したばかりのＩＢＵネットに不慣れな１年生が対象だったため、時間通りにログインできなかったり、小テストを受けられなかったりなど様々なトラブルが発生した。また講師も遠隔授業には不慣れであったため、毎回の小テストの結果を検討し、学生からのコメントを活用するなどの工夫を重ねる必要があったが、授業後の学生の感想には好意的なものが多く寄せられていた。プレテストとファイナルテストの結果を比較してみると、プレテストの平均点は 51.4 点、最高点は 84 点であったものが、ファイナルテストでは平均点は 73.0 点、最高点は 98 点となった。平均点で 21.6 点アップしており、一定の国語力の向上が見られる。この結果は例年とほぼ同程度と言えるだろう。

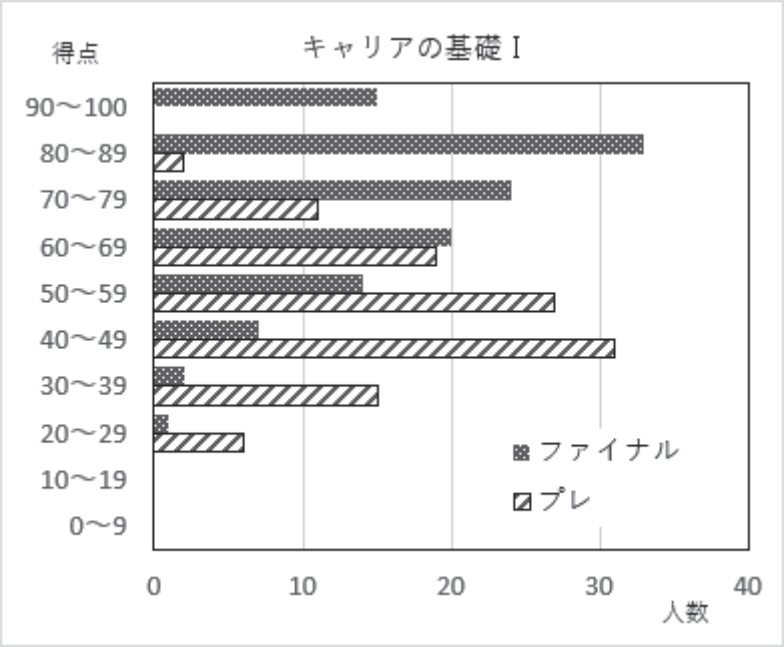


図４．キャリアの基礎Ⅰ試験結果

キャリアの基礎Ⅱも例年はプレテストをして２クラスに分けていたが、今年は新型コロナウィルス感染症対策として学生を２グループに分ける必要があったため、プレテストを利用したクラス分けは行わずに偶数クラスと奇数クラスに分け、対面授業と Teams を用いた遠隔授業を交互に行うことにした。そのため、以下で記すプレテストを半数の学生は対面で受けたが、残り半数の学生はＩＢＵネットを用いたオンラインで受けることになった。また初年次教育の項でも述べた通り、12 月 5 日以降の授業が全面オンラインとなり、また 1 月以降もコロナに絡んだ様々な事情で、対面を避けオンライン授業を希望する学生が少なからずいたため、結局最後のファイナルテストは、全学生に対してオンラインで実施した。対面授業が実施できたのは、奇数クラスが 5 回、偶数クラスが 6 回である。

プレテストの平均点は 51.7 点、最高点は 86 点であった。平均点も最高点も平年より高い。一方でファイナルテストの平均点は 67.7 点、最高点は 100 点で平年並みだった。平均点が 16.0 点アップしている。学生の反応は概ね良好だった。

昨年度までは、宿題点検やノート提出などを課し、学生にとっては「点検されるのでしなければならない」という受け身の学習だったが、今年度は半分以上がオンラインとなり、自

ら学習する姿勢が求められた。多くの学生達は想定していたよりも柔軟に対応し、前向きに授業に臨んでくれたようで、講師の側も教え込む授業から学びを促し支援する授業へと意識の転換を迫られた。

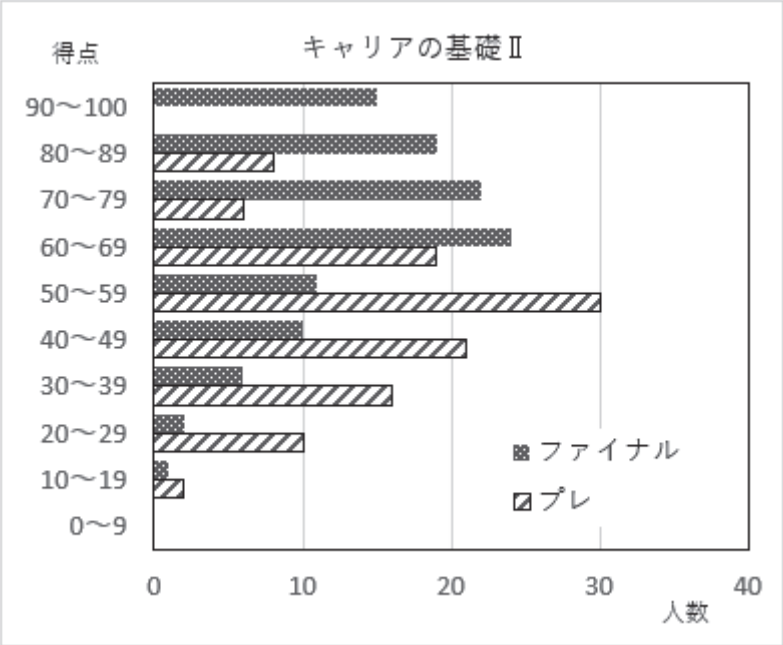


図５．キャリアの基礎Ⅱ試験結果

⑵ 資格取得について

ライフデザイン専攻では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジすることができる。表６と表７に2020年度の学生の資格取得状況を示す。2019年度入学生からは情報処理士の認定がなくなり、代わりに前年度からMOS(PowerPoint)の取得を目指している。

2020 年度は新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、幾つかの検定試験の実施回数が減るなどし、2019年度に比べ受験者数に変動がある。例えば、2019年度はビジネス実務マナー検定２級と３級合わせて 80 人が受験したが、2020 年度は 6 月の検定試験が中止になり、その代わりに秘書技能検定の受験者数が増加している。また食生活アドバイザー検定なども夏に実施予定の試験が中止になり、受験できなかった。2019 年度の資格受験者数の総計が371人（合格率77%）に対し、2020年度は255人（合格率82%）で、受験者数は激減している。しかしその一方で、実務技能検定協会より秘書技能検定団体優秀賞受賞、また色彩検定協会より優秀賞を受賞し、困難な状況下に於いても一定の成果をあげることができた。

表６．認定資格

認定資格	人数
秘　書　士	20
上級秘書士	8
食空間コーディネーター3級	8

表７．取得資格

検　定	級	合格者数	受験者数	合格率
秘書技能検定	2 級	11	28	39%
	3 級	65	67	97%
ビジネス文書技能検定	3 級	23	25	92%
簿記能力検定（全経）	3 級商業簿記	0	2	0%
医療秘書技能検定	3 級	8	18	44%
ドクターズクラーク		4	4	100%
MOS(WORD)		3	3	100%
MOS(EXCEL)		3	3	100%
MOS(PowerPoint)		9	12	75%
色彩検定	2 級	9	10	90%
	3 級	14	15	93%
ファッションビジネス能力検定	3 級	3	8	38%
ファッション販売能力検定	3 級	7	9	78%
メイクアップ技術検定	2 級	9	9	100%
	3 級	24	24	100%
	ベーシック	15	15	100%
アソシエイトブライダルコーディネーター		1	1	100%
建築ＣＡＤ	３級	0	2	0%

(3) 就職支援について

2020 年度は 4 月 7 日に緊急事態宣言が発令され、短期大学生の就職活動はいきなり出鼻をくじかれた。企業説明会の中止や延期が相次ぎ、就職活動の途中で採用が取りやめになることさえあった。面接もオンライン化されたため、学生は WEB 面接のスキルを身につけることが必要になった。緊急事態宣言が大阪府で解除されたのは 5 月 21 日であり、ライフデザイン専攻学生の就職活動が本格化するのはこれ以降のことである。例年だと内定者数のデータは 5 月から図示しているが、今年度はこのような事情により 6 月からとなっている（図８）。さて最初に断っておくと、図８において 2019 年度のグラフが昨年の報告書と若干異なっているが、例年この報告書を書いている段階では最終的な確定値が出ていないためで、それを反映させたために多少異なっている。昨年度の確定値は就職者数は 82 人、就職者希望者数は 83 人（就職率 98.8%）であった。2020 年度については、2021 年 4 月 26 日現在、就職者数 90 人、就職希望者数 93 人（就職率 96.8%）である。図８を見ると、８月頃までは昨年に比べ内定率が低い。これは、今年度は就職活動の様相が劇的に変化したため、学生、キャリアセンタースタッフだけでなく採用者も混乱していたためであろう。しかし、それ以降は持ち直し、昨年よりもやや増加している。最終的な就職率が確定していないので最終値は単純には比較できないが、これだけ困難な状況下においても、昨年と比較して就職率はほとんど低下していないと言える。文部科学省が令和 3 年 3 月 19 日に公表した、2 月 1 日現在

の就職内定率は、短期大学の場合 82.7%（前年同期比 6.6 ポイント低下）であった。本学キャリアセンターが 2 月 6 日にまとめた資料では 87.1%となっており、それよりも高い。学生はもちろん、キャリアセンタースタッフ等周囲の人々の努力の賜物であろう。

最後に、図８には示されていないが、進学者数は 2020 年 3 月卒業生は 1 名、2021 年 3 月卒業生は 2 名である。

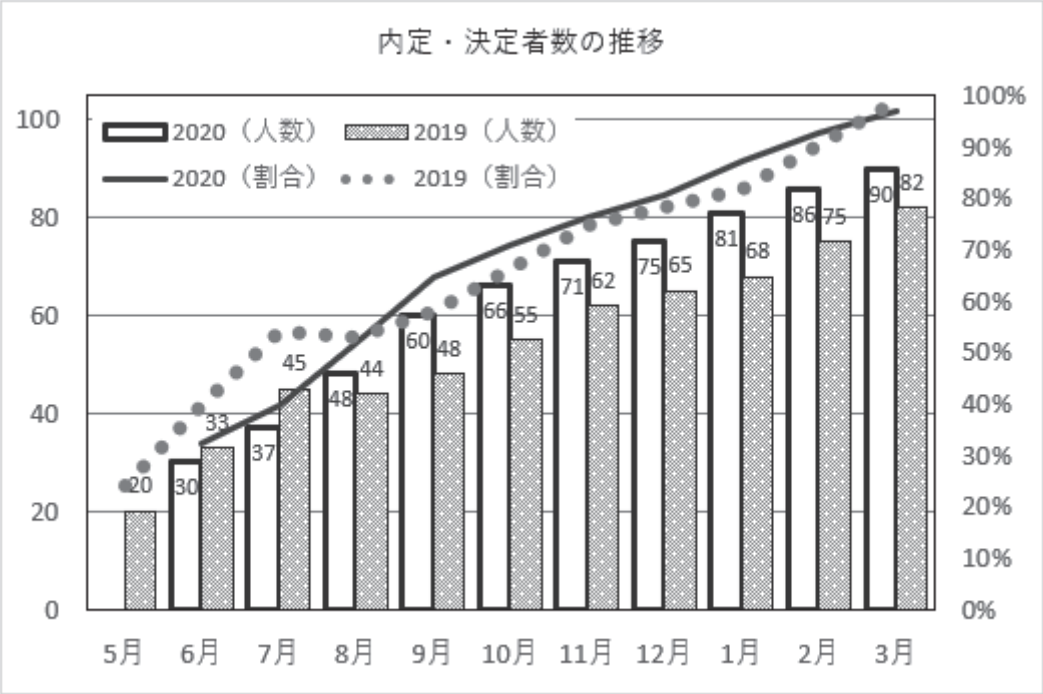


図８．就職内定（決定）者数の推移

５．その他

今年はコロナ禍により、例年恒例の『食べて応援・作って応援』レシピコンテストやデコ＆リメイクチャレンジ展、エクステンションセンター主催の公開講座は開催されなかった。しかし四天王寺大学周辺地域との交流活動や創生事業は様々な形で行われたので、以下に報告する。

(1) 地域創生事業の推進について

① 地域の和菓子工房「あん庵」と協働し新商品「低糖質おからサブレ」をデザイン

羽曳野市の和菓子工房「あん庵」が新商品として発売する「低糖質」サブレをデザインした。学生はフードの学びの中で「低糖質」への理解を深め、各自が自分のイメージをサブレにデザインした。学内デザインコンペを開催し、応募 22 作品の中から、「低糖質」サブレのからだへの優しさを植物のナチュラルな雰囲気で表現したデザインが採用された。学生デザインによるサブレは、令和 2 年 12 月 1 日より和菓子工房「あん庵」で店頭販売されている。自分のデザインが商品化され実際に店舗に並び販売されることにより、学生は短大での学びが実社会につながることを実感し、学びの深まりと広がりにつながる良い機会となった[1,2]。

② 『Umy 堺（うまいさかい）おうち DE クッキング』レシピ考案

堺市地産地消推進協議会と連携し、堺市特産の軟弱野菜の地産地消促進を目的としたレシピを考案し、谷口美佳教授が小学生と一緒に調理を行った。調理の様子は Umy 堺.com ホームページ上で見ることができる。調理の動画に映ってはいないが、ライフデザイン専攻の学生がアシスタントとして参加している。調理の流れを見ながら臨機応変にサポートする必要があるため、学生にとっては課題解決型学習の良い機会となった。また、学生達のおかげで動画撮影時の雰囲気が和やかになった。食材購入時に協働した JA 堺市所属の野菜ソムリエが本専攻の卒業生であったことから、学生は社会で活躍する先輩の姿を身近に感じることができ、キャリア教育の面からも有意義な場となった。動画はコロナ禍でのステイホーム時に親子で料理を楽しむことを目的の一つとしており、今後も Umy 堺.com ホームページ上で配信されていく予定である[3]。

(2) 地域交流活動について

2015 年度より、羽曳野市立埴生南幼稚園との地域交流活動として衣服のリサイクル活動を行なっている。昨年度は、コロナ禍における状況を鑑み、これまでの取り組みに ICT を組み合わせた活動を実施した（全 2 回：2020 年 10 月 15 日，2021 年 1 月 10 日）。

衣服のリサイクル手段として、園児の思い出の古着を成長の記録になる形でのアップサイクルするためのロゼット製作を試みた。ロゼットのモチーフ部分は、園児が作成した切り絵作品を活用した。学生は、切り絵作品をデジタル化し、布にプリント後、くるみボタンに仕上げた。さらに、モチーフの装飾部分は、切り絵を作成した園児が持参した古着によりフリル状に装飾した。

第 1 回交流会では Zoom によるオンライン交流を実施した。第 2 回交流会では緊急事態宣言が発令されたのを受け、オンデマンドによる配信を行い、結果として園児の保護者にも情報を届けることができた。学生が製作したロゼットとメッセージカードは、園児に直接手渡すことができなかったため、幼稚園の担任の先生より園児に届けられた。その後、園児から学生にメッセージカードが送られると共に、卒園式には園児がロゼットを胸につけるなど交流が続いた。

本活動修了後、学生・園児の保護者を対象に Web アンケートを実施した結果、衣服のリサイクル意識が高まったとの肯定的意見が、保護者で 100%、学生で 90%を占めた。また、本活動に ICT を組み合わせることは、コロナ禍において安心・安全な学外（園外）団体との交流を可能とした点で高評価を得た一方、遠隔交流は実践活動を再現するものではないことも明らかとなった。今後の交流の在り方については検討の必要がある（四天王寺大学地域課題解決研究奨励－第 5 号）

(3) 受賞等

公益財団法人実務技能検定協会より秘書技能検定団体優秀賞を受賞した。また、公益社団法人色彩検定協会より色彩検定協会優秀賞を受賞した。

６．謝辞

ライフデザイン専攻では、ゼミナール等の授業運営や資格取得にからみ、キャリアセンタ

ーやエクステンションセンター、入試・広報課など多くの事務職員の方々に支えられて学生指導を行うことができています。紙面の都合上、一人ひとりお名前を列記してお礼を言うことはできませんが、ライフデザイン専攻教員一同、これらスタッフの方々に日頃の支援に対し心より感謝します。

7．参考資料

[1] 四天王寺大学サブレ　糖尿病患者でも食べやすく，産経新聞朝刊（大阪本社版），2020年11月17日，https://www.sankei.com/life/news/201116/lif2011160041-n1.html

[2] 食の楽しみ地域で支える　羽曳野おからサブレ発売，毎日新聞朝刊（大阪本社版），2020年12月16日，https://mainichi.jp/articles/20201216/ddl/k27/040/420000c

[3] Umy 堺.com，https://umysakai.com/（2021年4月29日現在）

「ほうれん草のブーケサラダ」https://umysakai.com/enjoy.html#cooking01

「みかんご飯の小松菜カレー」https://umysakai.com/enjoy.html#cooking02

「ほうれん草とリンゴの蒸しパン」（近日公開予定）

生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻

1. はじめに

ライフケア専攻は、「質の高い介護福祉サービスを提供できる介護福祉士の養成を基本とし、理論と実践のバランスが取れた実社会で求められる社会人基礎力を育み、何事にも主体的に取り組むことのできる人材の養成」を目的としている。それは、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行う」という介護福祉士の定義、及び本専攻のデイプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づいている。

上記の目的に加えさらなる課題は、コミュニケーション力といった社会人基礎力を高めつつ、専門的知識と技術の融合を目指していくことである。また、介護福祉士養成施設の卒業生に、国家試験の受験が段階的に義務付けられたことを鑑み、過去に実施してきた卒業時共通試験対策から国家試験対策へ円滑に移行し、その内容を充実していくことが必須となっている。

入学して間もない学生が、新しい環境のなかで介護福祉士を目指す動機づけを行うための初年次教育「ライフケア演習Ⅰ」、冬学期には「ライフケア演習Ⅱ」が平成27年度からスタートし、次年度は「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」が開講された。これまで国家試験対策の実施によって合格者を多数輩出するに至っている。

コロナ禍にあった本年度のＦＤ・ＳＤ活動は、初年次教育科目「ライフケア演習Ⅰ」「ライフケア演習Ⅱ」に継続して「ライフケア演習Ⅲ」「ライフケア演習Ⅳ」、授業相互参観、学科独自の取り組みとして例年実施されてきたなかでは「介護福祉士国家試験受験対策」は実施できた。「身体障害者グループとの交流会」は、当事者の協力を得てオンラインで実施することができた。　しかしながら、「高齢者のメイクアップ学習会」、「羽曳野市認知症サポーター」、「高齢者との交流学習会」「介護予防通所相当サービス」、「ハル大祭」については、見送られた現状も踏まえて報告する。

2. 初年次教育等について

(1)「ライフケア演習Ⅰ」

【概要】

本学の建学精神の理解を基礎とし、短期大学における学習と学生生活が円滑に始められるようにする。

また、介護福祉士となるうえでのモチベーションを高める。

授業形態は、講義、演習、学外実習、グループ発表等を取り入れ、社会人基礎力における「前に踏み出す力」（主体的に学ぶ力、はたらきかける力、実行する力）を身につける。

【到達目標】

① 本学で学ぶことの意義を理解することができる。
② 将来、介護等対人援助職に就く学生として必要な知識、技能、基本的態度を習得する。
③ 介護福祉士等、自己の将来について展望し、社会人になるための問題意識をもつことができる。
④ 教員やクラスメイトとのコミュニケーションを円滑にし、より良い人間関係をつくることができる。

【授業計画】

授業計画と実施は以下のとおりである。

今年度の開始から遠隔で、その後も夏学期中は遠隔授業となった。

当初計画していたバリアフリー2020への参加は、催し自体が中止となった。また認知症サポーター講習会も見合わせ、先輩の話も行うことができなかった。実習報告会も延期となり、授業計画を大幅に変更しながら臨んだ（別表参照）。

このような状況のなか、１回生の不安を取り除くことを主眼として、オンラインでも教員と学生、学生相互が繋がっていることを実感できるようにと配慮をしたつもりである。

教員自身もZOOM操作になれていなかったが、学生と一緒に慣れていくように心がけた。また途中より推奨されていたMicrosoftTeamsを使用し、短大生活入門の授業として、他の遠隔授業科目が今後スムースに受けられることも目標にして取り組んだ。

当初予定の授業計画		実施した授業内容	
１）４月９日	・先輩に教えてもらっての授業計画（先輩との交流①）	１）４月２３日	【ZOOM使用】・オンライン授業の受け方① ・ZOOMのチャット機能を使う ・授業スケジュールの確認等オリエンテーション ・介護福祉士の取得ルートとカリキュラムの確認
２）４月１６日	・先輩との交流会の準備（話し合い＝先輩との交流②）	２）４月３０日	【ZOOM使用】・オンライン授業の受け方② ・ZOOM機能の使い方の練習 ・新型コロナウイルスで困る人々
３）４月１８日（土）	・（学外活動）「バリアフリー2020」見学	３）５月７日	【ZOOM 使用】・悩み共有、学生同士のコミュニケーション ・能田先生にも参加いただき、ブレイクアウトルームにて学生の悩み相談
４）４月１８日		４）５月１４日	【ZOOM・MicrosoftTeams使用】 ・MicrosoftTeamsの使用方法 （アプリ取得、機能の紹介、Office365 につ

（土）			いて、招待コードの説明）
５）４月１３日	・先輩との交流会（調理実習室を使って共同作業＝先輩との交流③）	５）５月２１日	【MicrosoftTeams 使用】 ・ホームレス問題について
６）４月２３日		６）５月２８日	【オンデマンド Youtube】・生活保護について 【MicrosoftTeams 使用】・生活保護のイメージ、制度の理解
７）４月３０日	・介護実習レベルⅠ後半実習報告会に参加（先輩との交流④）	７）６月１日（月）	【大学の許可を得て、初めての対面授業】 ・授業オリエンテーション、感染防止について ・担任ごとの面談
８）４月３０日		８）６月４日	【MicrosoftTeams 使用】 ・実習報告会に参加するために（１）実習報告会の目的
９）５月７日	・バリアフリー、実習報告会の振り返り ・健康トレーニングの説明	９）６月１１日	【オンデマンド Youtube】 ・実習報告会に参加するために（２）実習報告会レジュメの見方、参加するポイント
１０）５月１４日	・PROG テスト	１０）６月１８日	【オンデマンド Youtube】 ・読書習慣を身に付けよう 【MicrosoftTeams 使用】・動画についての意見・質問
１１）５月２１日	・先輩の話を聞くために ・認知症サポーターについて	１１）６月２５日	【MicrosoftTeams 使用】 ・実習報告会の流れ 【オンデマンド Youtube】・先輩の報告（概要）
１２）５月２８日	（外部講師）・特別養護老人ホーム、障害者支援施設で働く先輩の話を聞く	１２）７月２日	【MicrosoftTeams 使用】 ・社会人基礎力について
１３）６月４日	（外部講師）認知症サポーター養成講座	１３）７月９日	【MicrosoftTeams 使用】 ・PROG テストを受ける前に　目的と方法の説明
１４）	※日時未決定	１４）	【MicrosoftTeams 使用】

７月	介護実習レベルⅡ 実習報告会	７月３ １日	・高齢者問題の３S
１５） ７月		１５） ８月６ 日	【MicrosoftTeams 使用】 ・支援者として自己を知る（PROG テストの結果をもとに）

受講生はライフケア専攻入学生７名。しかし、１名は夏学期を終えて退学してしまった。

短大生活や介護に関する専門的な学習に早く慣れてもらうため、早期に上級生との交流の機会を意図的に設定していた。しかし、こうした交流も外部講師も招くことができず、また対面での授業が１回しか行えないなか、

先述したように新入生の不安や疑問を解消することを主眼として、授業内容をその都度見直した。

【アンケート結果】

アンケート（10 段階評価）は毎回行うことはせず、前半（１～６回）と後半（７～１５回）とに分けて実施した。また、理解度と満足度とを分けて行った。

回数	理解度平均	満足度平均	主な感想
1	7.0	7.4	・慣れないアプリを使っての授業でしたが、自分なりに真剣に取り組むことができました。 ・ZOOM での授業が初めてで緊張した。国家試験が難しそうだと感じた。
2	6.9	8.1	・遠くの友人と声で交流ができて楽しかったです。 ・自分たちも学校にけないが、他にも困っている人たちがたくさんいることがわかった。 ・購入すべきテキストをすべて確認できて安心した。
3	8.5	8.7	（欠席１） ・悩みを相談することで、自分の不安な気持ちが少し楽になったので、良かった。 ・少人数のグループで話しやすかった。
4	7.9	6.6	・チームスは最初は苦労しましたが、何とか利用することができました。 ・Teams の使い方に慣れない。操作が難しいと思った。 ・操作が難しかったが、動画で確認できるので助かった。 ・他の授業でも Teams が使えるのでありがたいと思った。

5	7.4	8.0	・二つの貧困について理解することができました。 ・ホームレスといっても全員の状況が違うことや貧困で困っている人が意外と多いことに気付いた。 ・ホームレスは別世界の話だと思っていたが、そんなことはないのだと思った。 ・少し内容的に難しいと思った。
6	8.2	8.4	・友人と意見交換し、生活保護についてのみんなの考えが聞けました。 ・不正受給のイメージが生活保護にあったが、そうではないことがわかった。 ・グループで話し合って、自分の意見と同じ人が多くびっくりした。
7	**8.8**	**9.2**	・映像授業のことなど、先生に直接聞けて良かったです。 ・質問したかったことがうまく伝えられなかった。 ・実際に会って不安なことを相談できてよかった。 ・初めて会うので少し緊張した。
8	6.7	7.2	・雑音で聞き取りにくく、内容を拾えませんでした。 ・実習について分からないことがあったが、少し理解できた。 ・実習報告会については分かったが、難しそうだと感じた。
9	7.8	7.9	（１名無回答） ・日記の大切さなどについて理解できた。 ・レジュメの見方がわかった。
10	7.9	8.0	（２名無回答） ・韓国についての本を最近読むようになり習慣化してきました。 ・読書に大切さが分かった。 ・スマホばかり見ないで読書をしようと思った。
11	6.0	6.0	（欠席１、２名無回答） ・基礎力の大切さを理解できた。 ・先輩みたいに実習報告ができるのかと思った。 ・社会人としての力を今から少しでも身に付けないといけないなと思いました。
12	6.3	6.3	・社会人に必要なものは何かについて、みんなの考えを知ることができました。 ・短大２年間で、いろいろなことに挑戦したいと思う。
1	7.3	7.2	・PROG の結果が楽しみです。

3			・PROGテストの内容が分かったが、難しそうだと思った。 ・このあと無事にPROGテストを受けることができました。
14	7.2	7.3	・理解したつもりでしたが、忘れているところがありました。 ・もっと福祉について学んでいく必要があると思いました。 ・福祉国家のようにサービスが充実してほしいと思った。
15	8.3	8.4	・自分の結果に納得しました。自分の伸ばすべきところが分かって良かったです。 ・自分を知ることは、これから介護をするうえで必要だと思った。 ・自分のことを見直すいい機会になった。

遠隔授業ばかりのなか、アンケート結果では対面授業が理解度、満足度とも好評であった。

今回、制限のあるなかで「できることをする」ことをすることを当面の目標として取り組んできたが、やや一方通行になりがちであった。そのなかで、ブレイクアウトルーム（機能）を使って友人と意見交換できたことが理解度や満足度にも貢献したと考える。途中での授業方法の変更は、慣れない学生にとっては負担が大きかったように感じる。技術的なサポートが欲しいと感じた。

(2)「ライフケア演習Ⅱ」

【目的】

短期大学における学修と学生生活を円滑に進められるように、また、介護福祉士や援助職となるうえでのモチベーションを高めることを目的とする。地域で生活されている利用者とのかかわり、介護福祉に関係する又は関心をもつ人々との交流を通して介護者としての役割を考える。

【到達目標】

①介護・対人援助職に必要とされる基本的態度・知識・技能を身につけることができる。

②人とかかわる「介護福祉士」等の自分の将来について考える契機とし、社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。

③自己の介護者としての進路について考えることができる。

【授業計画】

1	9月24日	木	4	オリエンテーション　プロセスレコードの修正・提出
2	10月8日	木	3	生と死について
3	10月8日	木	4	(いじめ・妊娠・虐待・孤独死・認知症・介護など、社会問題を知る)

4	10 月 15 日	木	4	『いのち』について考える
5	10 月 22 日	木	3	実習報告会１　　２年生と合同
6	10 月 22 日	木	4	１年生コミュニケーション体験・２年生介護実習レベルⅡ
7	10 月 29 日	木	4	1.2 年生交流　２年生と合同　介護実習レベルⅠを臨むにあたって
8	11 月 26 日	木	4	介護実習レベルⅠを終えて
9	12 月 3 日	木	4	社会福祉のまなび　キャリアデザイン
10	12 月 10 日	木	4	社会福祉のまなび　キャリアデザイン
11	12 月 17 日	木	3	介護福祉実習報告会１　　２年生と合同
12	12 月 17 日	木	4	介護福祉実習報告会２　　２年生と合同　まとめ
13	12 月 24 日	木	4	『いのち』について考える２
14	1 月 7 日	木	4	「子どもと高齢者の居場所」　　報告・事例研究とは
15	1 月 14 日	木	4	まとめ・課題の提出

履修者は 2 セメスター6 名であった。授業は、介護福祉を学ぶ学生として求められる現代社会の課題、福祉の知識・技術の必要性の理解、介護実習報告会での実習の学びについてなど多岐にわたり、IBU ネットによる遠隔授業は 2 回実施している。今年度は、受講者が少人数のうえ、将来介護福祉士の取得や福祉職に就かない学生も 2 名あった。学生の感想から、生と死について及び、いのちをテーマとした内容は、人とかかわりながら社会の中で生きていくという自分の将来について考える契機とし、社会人となるにあたり問題意識をもつことができた、また、2 年生 13 名の実習報告会や交流会等関心をもって取り組むことができた等の声が寄せられた。

(3)「ライフケア演習Ⅲ」

本授業は、初年次教育の「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」に引き続き、ライフケア専攻独自の演習科目として設定されており、介護福祉士資格を取得する学生の必修科目である。

【到達目標】

① 介護職に求められる基本的態度、知識、技能を身につけることができる。

② 人とかかわる介護福祉士等の自分の将来について考える契機とし社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。

③ 介護の現状を把握し必要とされる介護実践力について理解することができる。

【授業計画】

目標を達成するために、具体的に取り組んだことは以下の 2 点である。

① 実習成果を報告し、学生間で情報共有することにより、介護実践について考察する。

4 月：レベル I 後半介護実習報告会（1 回生はリモートでの参加）

7 月：レベルⅡ介護実習報告会　（1 回生：コミュニケーション体験実習報告）

②「介護予防」について、地域の実践を理解する。

4 月～5 月 学生の居住地域でのコロナ禍における「介護予防」のプログラムをまとめレポートする。

6 月～7 月 順次リモートで発表し意見交換を行い、各地域で取り組まれている「介護予防」実践について理解する。

③ 地域連携　新型コロナウイルス感染症対策のため、活動できなかった。

(4) 「ライフケア演習Ⅳ」

【目的】本授業は選択科目であり、介護福祉士資格取得を目指す学生のみの授業であることから、専門職としての自覚および介護福祉士資格取得に必要な「国家試験合格」を目指すことと、介護実習報告会における後輩への支援ができることである。

在学生 17 名中 13 名が履修した（4 名は介護福祉士受験資格の辞退者）。

【到達目標】　以下の 5 つ掲げて取り組んだ。

①介護・対人援助職に求められる知識・技術・態度を身につけることができる（具体例として、国家試験の合格を目指す）。

②後輩（1 回生）の実習に対して、適切なアドバイスができるようになる。

【授業計画】

9 月 24 日	木	4	オリエンテーション、第 1 回中央法規模試の復習・確認　6-159
10 月　8 日	木	4	「人間の尊厳の自立」「介護の基本」　6-159
10 月 15 日	木	4	「人間関係とコミュニケーション」「コミュニケーション技術」　6-159
10 月 22 日	木	3・4	ライフケア演習Ⅱ・Ⅳ　1.2 年生合同授業「介護実習報告会」6-159
10 月 29 日	木	4	「社会の理解」　6-159
11 月　5 日	木	4	「生活支援技術」　6-159

11 月 26 日	木	4	「介護過程」「医療的ケア」　6-159
12 月　3 日	木	4	「発達と老化の理解」　6-159
12 月 10 日	木	3・4・5	第２回中央法規模試　　6-159
12 月 17 日	木	3・4	ライフケア演習Ⅱ・Ⅳ　1.2 年生合同授業「介護実習報告会」　6-159
1 月　7 日	木	4	「認知症の理解」「障害の理解」　6-159
1 月 14 日	木	3	「こころとからだのしくみ」　6-159

【授業の振り返り】

8 月に受けた中央法規の 1 回目の模試の結果は、散々たるもので合格ライン（6 割以上）に達した学生が 3 名しかおらず、4 割以下の学生もいた。そのため、科目別問題を渡して個別学習させた上で授業時にグループで確認させたり、国試対策の時間を使って過去問に取り組ませたり、12 月の 2 回目の模試では 9 名が合格ラインに到達することができた。さらに個別指導や 12 月授業終了後、学期末確認テスト終了後などに専攻長も勉強会を開くなどした結果、13 名中 12 名が合格することができた（不合格の学生は合格点に 1 点足らなかった）。前年度と同じく全員合格を目指したが結果を残すことができず残念である。

3. 授業相互参観について

令和２年度冬学期のライフケア専攻の相互授業参観の公開授業一覧は以下のとおりで、合評会は授業後の実施、参観者は専攻教員のみであった。授業内容は、介護実習報告会及び介護実習指導であり、専任教員の情報共有と学生指導内容と成果が確認できる機会となった。

	教員名	月日	曜日	時限	公開授業科目	教室
1	能田　茂代	12 月 17 日	木	1	介護実習指導Ⅱ	6-159
2	濵田　佐知子	12 月 17 日	木	3	ライフケア演習Ⅱ	6-159
3	大西　敏浩	11 月 25 日	水	5	障害者の日常生活	6-211
4	武田　盛夫	12 月 8 日	木	4	ライフケア演習Ⅳ	6-159

4. 学科独自の取り組みについて

(1)「高齢者のメイクアップ学習会」

毎年「アクティビティケア」の授業のなかで美容ボランティアをされている外部講師を招いて実施している。

昨年１月に毎日新聞夕刊１面に掲載されたことで、楽しみにしている学生も多かった。また、四天王寺悲田

院特別養護老人ホーム以外からも問い合わせがあった。

しかし、実施する方向で調整していたが、コロナ感染の広がりとともに延期→中止の流れとなった。

(2)「羽曳野市認知症サポーター」

例年、羽曳野市地域包括支援課に講師依頼をし、キャラバンメイトという形で社会福祉協議会や特別養護老人ホームの職員の方々にお越しいただき「認知症サポーター養成講座」として講義をしていただいた。今年度も夏学期に１セメスター対象の「ライフケア演習Ｉ」の授業のうち１コマを利用して実施を予定していたが、今年は緊急事態宣言の発令や受講学生数が少ないことなどの理由により見送ることになった。次年度、新入生と共に受講する予定である。

認知症の基礎理解について講義および演習等で学び「認知症サポーター」となった学生には、その証としてのオレンジリングが手渡されることになっている。本専攻学生は、これまで認知症への理解を呼びかけるため、例えば大学祭などに参加する際はオレンジリングを着用するなどし、広報活動を行っていたこともあり、次年度は実施できることが望まれる。

(3) 当事者との交流

①「身体障害者グループとの交流会」

今年も、社会福祉法人あいえる協会内の外部講演を事業としてされている「ピアエンジン」(大阪市住吉区)
に講師派遣依頼をした。

今回、全面オンラインとなる中、ピアエンジンとともにオンラインでできないかと相談し、何度かオンラインの配信テストを行って実施した。

当日は「ケアの本質」という授業のなかで、重度障害のある当事者３名とスタッフ５名で ZOOM にて講演して
いただいた。当事者はいずれも社会福祉法人あいえる協会のグループホームや生活介護の利用者であり、かつ、当事者が組織的に講演活動を行う「ピアエンジン」のスタッフでもある。今年も主となって活動されてきた方が体調不良で、昨年参加の方１名と新規メンバーの２名であった。

自己紹介用の動画を撮ってもらい、それを送ってもらったものを事前学習として学生に Youtube の限定公開で見せておいた。このため、参加者についてはある程度の予備知識をもって臨むことができた。

当日の講演は、グループホームや公営住宅（バリアフリー設計）で、ヘルパーの手を借りながら一人暮らしの夢の実現をされている方の話を伺った。軽い知的障害により、青年期は入所施設での生活を余儀なくされ、やはり自分の力で地域生活したいという心からの

願いについて訴えられた。

また、高次脳機能障害により生活が一変してしまった中途障害の方の話も聞いた。健常である私たちも、いつ「障害者」になるかわからないという当たり前の現実と、だからこそ福祉施策の充実が安心感につながるし
人々の人権の保障にもなるということを学んだ。

学生からインタビューする形での交流が行われ「休みの日はどうしていますか？」とか「いま、困っているこ
とは何ですか？」などの質問が飛んでいた。

後日の「振り返り」では、関わる中で重度の障害者と自分とは同じ人間であるということが実感できたようである。また、かなり重度の障害者が一人暮らしをされている陰には多くのサービスや人が関わっていることなども知ることができた。それとともに「自分たちの生活を見つめなおす機会ともなった」とのコメントが寄せられた。

②「地域の介護施設高齢者との交流会」

例年、１セメスターの「社会福祉援助技術総論」または「ケアの本質」の授業前半で、「年を重ねても『よりよく生きる』ことを学ぶ」をテーマに、介護を必要とする人の理解や尊厳について考え、学びを深める機会を設けていた。大学の近くにある特別養護老人ホームで生活をされている、利用者２名と生活相談員をお招きするこの取り組みは毎年恒例となっており、その醍醐味は、毎年違う要介護状態の高齢者に来学して講師となっていただき、学生によりよく生きることの意味を考える契機になっていた。しかし、今年度は緊急事態宣言の発令を受けて、高齢利用者の安全を考慮し、高齢者にとって馴染みのないリモートについても見送ることとなった。

(4)「介護予防通所相当サービス」

施設側の新型コロナウイルス感染予防対策の一環として、サービスが中止となり参加することは出来なかった。

(5)「介護福祉士国家試験受験対策」

第 33 回介護福祉士国家試験は令和 3 年 1 月 31 日（日）が試験日であり、出題数は試験科目 11 科目から 125 問、問題の総得点の 60%程度を基準としていることから、学生一人ひとりが合格に向けて目標を立てて受験対策に臨んだ。

主に「ライフケア演習Ⅳ」の授業のなかで取り組んだ。8 月に中央法規出版主催の全国統一模擬試験 1 回目受験を皮切りに、その試験問題の「解説」を夏季休暇の課題として冬学期の「ライフケア演習Ⅳ」に臨んだ。9 月からは授業の前後の放課後も教室を借り上げ、自主学習（教員が在室し質問に答えた）を行った。

12 月には第２回目の中央法規模試（中央法規全国模試は全２回）を行った。自己採点し、

間違った問題について自分たちで解説を加える形の自主学習と図書館予算で購入した予想問題集、過去問にも取り組んだ。

１月になると学生にも真剣さが強く感じられるようになり、教員に対して問題を出してほしいと要請が多くあるようになってきた。

学生たちの努力により、13 名中 12 名が合格することができた。

中央法規出版の『国試ナビ 2020』をテキストとして絶対購入とさせ、さらに受験ワークブックを参考図書にして解説した。本書をよく読み込みアンダーラインやふせん等がたくさん加えられ「自分のお守り」のようになったことは、次年度にも活かしていくものになると考える。

今後の課題として、介護業界が人材不足の為、介護福祉士の資格が無くても就職が可能であり、さらに経過的措置もあるため国家試験に合格しなくても介護福祉士を名乗ることができる。こうした現状から学修習慣が身についていず、さらに資格に対する執着心が薄い学生の場合、努力を怠る傾向にある。いかに早期から危機感をもって取り組ませることができるのかが課題である。「今月はここまで」という具体的な数値目標などを設定することも一つの方法であるかと思う。

(6)「ハル大祭」　新型コロナウイルスの影響により、今年度は開催されなかった。

第５章　本学における仏教教育について

Ⅰ　基礎教育科目「和の精神」について

１．カリキュラム上の位置づけとその課題

本学における「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（１年次）、仏教的学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（１年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、都合４科目６単位が必修科目となっている（ちなみに、平成 30 年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の４科目６単位が必修）。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計 2 単位）は、大学・短大の 1 年次の全学生 1100 名以上が礼服（オフィシャルスーツ）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根柢といえる。

平成 24 年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、令和 2 年度末で 9 年目を迎えた。下記に示す「和の精神授業規律」「講話内容」「アンケート」等はすべてその体制のもとで整えられたものである。

もっとも、本科目は 1100 名を超える超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

２．大講堂内における指導体制

25 年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会・合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

(1) 責任担当　学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

(2) 全体担当　仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価を行う。

(3) 学科担当　(1)(2) 以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科担当の教員は、学科専攻学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

(4) 宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科専攻の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科専攻に伝え、学科長とともに学科専攻での指導の在り方を取り決める。

令和２年度の授業実施についてであるが、先ず夏学期に実施予定の「和の精神Ⅰ」はコロナウィルスへの対応準備ができていなかったため冬学期に実施を遅らせ、「和の精神Ⅱ」を次年度（令和 3 年度）への実施へと変更した。また、冬学期においても、1100 人超える学生を大講堂に一堂に集めることに懸念があったため、**学生番号の奇数・偶数による対面と遠隔授業を交互に実施するハイブリッド授業を実施するとともに、対面実施の教室を大講堂に加え、講堂 701 や 5 号館の学生収容数の多い教室など 5 会場を準備し、分散による実施を行った。**各会場においても、総じて静謐な環境で授業が行うことができており、各会場に分かれての分散実施や遠隔授業の実施に関して学生の多くが満足しており、学生の満足度も相応に高い状況を維持できている。客観的な数値による詳細は後述のアンケート結果を参照されたい。

３.「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業中における授業規律について

仏教文化研究所において 24 年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(24 年度末・令和元年度末に一部改定)、25 年度からは、毎年『履修要覧』『学生便覧』に掲載している（下記参照)。

以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらうよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長（礼拝担当）より「和の精神授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律（2020. 2. 26 一部改訂実施）

礼儀を正して静穏な環境で自らを省み、自他を尊重し、思慮深い安定した人格を養うことが「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の目的です。主旨を自覚し、下記の規律を遵守してください。

1. 単位の認定は、全授業回数のうち 3 分の 2 以上の出席を必要条件とする。写経の場合、写経用紙の提出も必要条件とする。なお、以下の 2・3・4 の項目に違反する場合は出席を認めない。

2. 出席時の服装は、指定された服装を端正に着用する。

・Ａタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スカート）、白色ブラウス、黒色の革の短靴。

・Ｂタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スラックス）、白色ブラウス、黒色の革の短靴。

・Ｃタイプ・オフィシャル・スーツ（スーツ用ジャケット・スーツ用スラックス）、本学指定ネクタイ、白色カッターシャツ、黒色の革の短靴。

※Ａタイプ・Ｂタイプで夏服時に襟なしシャツ着用の場合、オフィシャル・スーツのジャケットを着用すること。

※黒色の革の短靴：くるぶしにかからないもの、スニーカー不可、就職活動やインターンシップで着用するようなカジュアルでないもの。

3. 入堂時には『聖典聖歌集』を所持していることを示す。

4. 授業は午前 10 時 55 分開始である。開始前には入堂し着座しておく。

（ただし、今年度の授業では遠隔授業への対応の為、11 時 10 分開始とした。）

・遅刻は駅で発行する電車の延着証明書があり、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ入堂を認める。

※原則として、電車以外の延着は認めていません。

・延着証明書は１人１枚を必要とする。複数人で１枚しかない場合は、入堂を認めない。

5. 授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。

6. 授業中の私語・通信機器等の使用は禁止する。

・注意されたら、すぐに改める。

・再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、改善が認められない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。

7. 授業中の中座は原則として禁止する。

・やむを得ず手洗い等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。

8. 心身の疾患など、やむを得ない中座の理由の有る者は、診断書などの証明書をもって学生支援センターに授業配慮申請を行うか、教務部教務課（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮を行う。

9. 私語・通信機器等の使用・中座等について、改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の履修登録を抹消する。

４．和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

24 年度から、これまで２年間にわたって履修した「仏教Ⅰ～Ⅳ」が１年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通

りである。

① 和の精神Ⅰ

和の精神Ⅰでは，基本的にはこれまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を行っている。ただし、今年度はコロナ禍への対応として対面・遠隔のハイブリッドで授業を実施しており、対面授業の際には読経・聖歌斉唱に関して学生は心の中で唱える形で実施しており、聖歌の斉唱指導は行わなかった。

講話については、第２回目の授業での学長による「本学の建学の精神及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、人権をテーマに「自死」について考えさせる講話など、各回の講話の充実を図っている。また、初回の授業から、例年は本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。

そして、例年どおり、今年度も学外講師として、弁護士の成田由岐子先生を招聘し、今年度は「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」と題する講話を動画でしていただいた。身近な犯罪の防止等に関する内容などを盛り込み、隣り合わせにある犯罪の危険に学生も認識を新たにしたはずである。

さらに、和の精神の学修上の意義について学生への周知・理解をはかるために、杉中康平教授からの講話を行っていただいた。

また、関係教員にも協力をお願いし、学生が主体となる講話も実施した。先輩学生による海外留学・語学研修や地域連携のボランティアの体験談等の発表を聞くことにより、受講者は、上級生の講話にも親しみをもって耳を傾けてくれ、また講話を担当する上級生も多くの聴衆の前での講話を貴重な機会と受け取ってくれた。

和の精神Ⅰで行われた講話は次の通りである。（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー。）

尚、今年度の授戒会は、学科ごとに割り当てられた大学内の各会場にて、大講堂で行われる様子をモニターで視聴しながら実施する遠隔分散実施となった。

No	日程	担当者	講話／聖歌
1	9/24	奥羽充規先生☆ 坂本光徳先生☆ 原祐子先生	受講こころえ-授業規律に関して/礼拝説明 （授戒オリエンテーション） （聖歌練習〈授戒会の練習〉） 聖歌＜聖徳太子讃仰歌、四恩の歌、精進＞
2	10/8	岩尾洋学長☆	建学の精神―「こころえ手帳」に寄せて 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞
3	10/15	坂本光徳先生☆ 伊達由実先生 藤谷厚生先生☆	「読経概論・瞑想―心を整える楽しみ―　」 （大学生活の心得） 「ウパーヤ」について 聖歌＜精進＞

4	10/22	杉中康平先生☆ IR・戦略統合課	「和の精神」を学ぶ意義 「学修ポートフォリオの記録について」 聖歌＜父母の歌＞
5	10/29	藤谷厚生先生☆	「四天王寺学園、建学の歴史」 聖歌＜父母の歌＞
6	11/5	成田由岐子先生	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌＜常不軽菩薩＞
7	11/12	仲谷和記先生	「コロナ禍　感染予防について（仮称）」 聖歌＜常不軽菩薩＞
8	11/19	石田陽子先生☆ 学生有志	「仏教聖歌―なぜ、聖歌を歌うのか―」 グローバル教育研修 （1）-アメリカ編（辻　荘一先生・国際キャリア学科　中田茜さん　） 聖歌＜学園歌＞
9	11/26	坂本暁美先生 学生有志	「学園歌」-作詞家と作曲家からのメッセージ グローバル教育研修 （2）中国編（李美子先生・学生） 聖歌＜学園歌＞
10	12/3	福若眞人先生	「人権について」 聖歌＜聖夜＞
11	12/10	森嶋俊行先生 深見　環先生 学生有志	「日本学科・国際キャリア学科学生発表」 聖歌＜聖夜＞
12	12/17	矢羽野隆男先生☆	「学園訓-和について-」 聖歌＜みめぐみの＞
13	12/24	奥羽充規先生☆	「学園訓-誠実について-」 聖歌＜みめぐみの＞
14	1/7	高橋麻起子課員	「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」 聖歌＜父母の歌＞
15	1/14	奥羽充規先生☆	冬学期を終えるに当たって 聖歌〈聖徳太子讃仰歌〉

②和の精神Ⅱ

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、24 年度から 2 年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が 1 年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低 20 分は確保すべく、講話は 10 分～15 分ほどに短縮することとしている。しかし、実際には、講師によっては講話に熱がこもり、やや延長する場合があり、その時には写経の時間の確保が難しい場合もあり、例年のアンケートで「写経の時間は必ず

確保してほしい」といった不満の声が一部に出ているのも事実である。

今年度の「和の精神Ⅱ」は、「和の精神Ⅰ」が冬学期に実施されたため、実施を来年度へと変更した。

５．アンケートの実施

①アンケート実施授業

令和２年度は「和の精神Ⅰ」のアンケートを実施した。内容は冬学期全体についての質問である。

質問項目	大学				短大			
	令和２年	令和１年	前年度比較		令和２年	令和１年	前年度比較	
a 総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いましたか。	4.24	3.58	0.62	↑	4.18	3.54	0.64	↑
b この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	4.19	3.78	0.41	↑	4.12	3.74	0.38	↑
c 先生は学生に、丁寧に対応してくれていますか。	4.35	3.91	0.44	↑	4.46	4.00	0.46	↑
d 授業の方法が工夫されていますか。	4.18	3.69	0.49	↑	4.40	3.85	0.58	↑
e 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	4.51	3.86	0.65	↑	4.47	3.87	0.60	↑

② アンケート結果の分析

アンケートの回答は、各質問項目について、５「そう思う」、４「少しそう思う」、３「どちらともいえない」、２「あまりそう思わない」、１「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形

で行った。数値はその平均値をとり、３が中間的な評価、５に近いほど高い評価を示すことになる。

「和の精神Ｉ」の結果を主な項目について比較すると、次の通りであった。

大学・短大共に、全体的に各項目の評価とも、前年度比べ上昇している。年々、少しずつ「和の精神」の授業の評価は高くなって安定しているが、今年度は３密回避の為の対策が学生に理解され受け入れられた結果であろう。また、授業内容についても評価する学生が多く、教員・職員全体の取り組みが一定の成果を出したものと言える。

ただ、現状に満足は出来ないので、今後も更によい授業になるよう緊張感をもって運営を進めたい。

③ アンケート自由記述欄

アンケートの「自由記述欄」は、学生が自由に、授業環境や内容への感想を記すことができるものであり、ここには上記のマーク方式の回答からはわからない学生の考え感想をうかがうことができる。今年度もＩについてアンケートの自由記述欄から〈所属学科〉〈記述内容〉を仏教文化研究所で通覧したのち、宗教委員会で各学科専攻の宗教委員に伝えた。

今年度は、和の精神Ｉで以下のような感想が多くあった。

（１）〈内容〉に関するもの

ご講和は自分の為になることばかりだったので、受けてよかったと思いました。

自分について振り返るきっかけになりました。

講話のパワーポイントの字が教室の端の席からは見えにくい。

対面でのスライドが早いので、スライドに書いてあることがメモに取れないので、そのスライドを授業資料にあげるか授業動画を公開して欲しい。

（２）〈指導・管理〉に関するもの

出席したのに、課題提出を忘れて欠席になるのは何とかしてほしい。

課題の提出期限が短いと思いました。

（２）〈実施形態〉に関するもの

大講堂をカメラで見やすいように映してくれたことで自分が別の教室や場所にいても同じように授業を受けている感覚になれたのでありがたかった。

後半に行った完全オンラインの形の講義形式がとても受講しやすかったです。

コロナ禍の中、オンデマンドや分散登校をうまく利用し、学生の学びを担保してくれたと感じている。

対面でも密を避けるために教室を分けて行ったのは大変だったとは思いますが、とても有り難かったです。

（４）〈設備〉に関するもの

対面受講時音質が悪い時が何回かありました。マイクテストの時間が長かったです。
コロナ感染予防対策として教室がいくつかに分かれていましたが、それでも人数が多いように感じました。

これらのうち、改善できるものは改善を図っている。

Ⅱ　共通教育科目「仏教実践演習」について

１.「仏教実践演習」の目的と授業展開

この科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（卒業必修科目）が、24 年度からの新カリキュラムでは「仏教Ⅰ・Ⅱ」（同上）に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで行っていた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目（3 セメスター以上配当）として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想についても考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、Ⅰ・Ⅱで学んだ実践行をさらに深めてゆくものである。

例年は夏学期の水曜２限に１コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「仏教Ⅰ・Ⅱ（和の精神Ⅰ・Ⅱ）」と同様の形式で実践的な授業を展開しているが、**今年度の授業では、遠隔実施という状況であったため、オンデマンドでの動画を作成し、各回の動画を期限内に視聴してレポートを作成し、学生のペースで写経を実施するように指示した。**

２．授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。また、今年度も「お遍路さん」といった具体的な仏教実践行についての講話も行った。

以下のその詳細を掲げる。

講話一覧

回数	講話担当者	講話題目
1	奥羽　充規　先生	授業オリエンテーション
2	藤谷　厚生　先生	動画課題－空海の謎に迫る
3	藤谷　厚生　先生	六波羅蜜について
4	西岡　秀爾　先生	布施波羅蜜－慈悲を施すこと－
5	藤谷　厚生　先生	持戒波羅蜜－戒律を守ること－
6	西岡　秀爾　先生	忍辱波羅蜜－苦難を忍ぶこと－
7	奥羽　充規　先生	日本の巡礼①　－「お遍路さん」と巡礼の目的
8	西岡　秀爾　先生	精進波羅蜜－努力を重ねること－

9	西岡　秀爾　先生	禅定波羅蜜－精神を調えること－
10	藤谷　厚生　先生	般若波羅蜜－仏教実践と智慧
11	奥羽　充規　先生	日本の巡礼②－西国霊場・四国霊場について
12	西岡　秀爾　先生	聖徳太子の教え
13	藤谷　厚生　先生	菩薩と和の精神
14	藤谷　厚生　先生	六波羅蜜について
15	藤谷　厚生　先生 奥羽　充規　先生	仏教実践演習（まとめ）

４．アンケートの実施

本年度も、本授業のアンケートを実施した。

質問項目	平均
１あなたは、毎回の授業（対面授業やリアルタイム・オンデマンド・課題提出などのあらゆる形式の遠隔授業）時間に、課題作成の時間や予復習の時間も加えて、どれくらい学習しましたか。（何回分かの授業をまとめて一課題が出ている場合は、その回数で割ってください。）	後述
２授業の開始時刻は守られていますか。	
３総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。	4.02
４この授業を意欲的に受けてきたと思いますか。	3.90
５この授業の授業概要（シラバス）をよく読んだ上で受講しましたか。	3.96
６シラバス達成のために努力してきたと思いますか。	4.06
７あなたは、履修要覧の授業科目編成表にある「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	3.90
８先生は学生に、丁寧に対応してくれますか。	4.10
９授業方法は工夫されていますか。	4.00
10 授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれましたか。	4.24

アンケート結果の分析

回答総数が、全授業者 159 名の 30%程であった。授業では、動画でアンケートに答えるように呼びかけはしているが、ウエブでの回答であり、手軽にスマホ等で回答できる反面、授業中に全学生一斉に回答用紙に記入させ、回収することができないため、なかなか、回答してもらえないという実態がある。

なお、質問１は、毎回の授業時間に予復習の時間を加えた学習時間を示している。有効回答数 49 名中、以下の回答があった。（　）内は人数を表わしている。

①4.5 時間以上（3）　②4.5 時間以内（2）③３時間以内（10）　④1.5 時間以内（25）
⑤30 分以内（9）

今回は初めてのオンライン授業であったが総じて良好に授業が進められた。また特に毎

回課題レポートを課したので、学生の学習時間が今回はかなり増加した。ただ回答率が少ないので、今後は学生へのアンケート回答の勧奨に努めたい。

アンケートの回答は、各質問項目について、５「そう思う」、４「少しそう思う」、３「どちらともいえない」、２「あまりそう思わない」、１「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、３が中間的な評価、５に近いほど高い評価を示すことになる。

どの項目においても、評価の平均が４前後であった。高い評価ではあるが、例年に比べると若干数値が下がっているのは、やはり実践行として対面授業を期待した学生が多かった為であろう。

来年度以降に向け、更によい授業になるよう一層の工夫をして努めたい。

Ⅲ　仏教教育に関するその他の取り組み

１．仏教文化研究所の活動

平成２４年度から、当時の西岡研究所所長（学長）の下、主任研究員（矢羽野）および研究員（上續・兼子・藤谷・源・桃尾・南谷恵敬）が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施してゆく体制が作られている。２８年度からは、新学長の岩尾洋研究所長のもと、坂本光徳、杉中康平、奥羽充規の三氏が研究員に加わり、あらたな一歩となった。さらに２９年度は、中田貴眞、南谷美保の２名が加わった。また、30 年度からは石田陽子、令和元年度からは李美子も加わり、現在は主任研究員（藤谷）の他 10 名の研究員（専任教員）により、さらなる研究の充実を目指し、積極的に活動している。

研究所の具体的な活動としては、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の建学の精神や仏教の教学を身近に感じ、理解を深めてもらうことを目的に年に二回発行し、大短在学生・学園教職員および保護者へ配布するもので、令和２年度には 16 号・17 号を発行することができた。１年次の学生には、「和の精神Ⅰ」における初回の授業に配布し、和の精神（仏教教育）の涵養に役立てている。また、令和４年(2022)は四天王寺学園創立 100 周年を迎える節目に当たり、建学の理念である「和の精神」や学園訓の理解と実践を薦めるため、なお一層の紙面の充実を目指して取り組んでいる。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、26 年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。16 号・17 号でも引き続き学生編集員がウパーヤ誌上、研究所ＨＰに学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

２．今後の取り組み

建学の精神を学部・学科・専攻の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出

していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでにも、各学期初めのオリエンテーションや大学１年次の「大学基礎演習」においては、建学の精神に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。また基礎教育科目「和の精神Ⅰ」においても、今年度は、和の精神の体現として学生に地域連携ボランティアの取り組みを発表していただいた。今後も、和の精神を体現する様々な取り組みや活動を紹介し、大学全体での建学の精神の浸透に励みたいと考える。

昨年度から、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、それまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と建学の精神の涵養を図るよう引き続き取り組んでいる。

今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に努めていきたい。

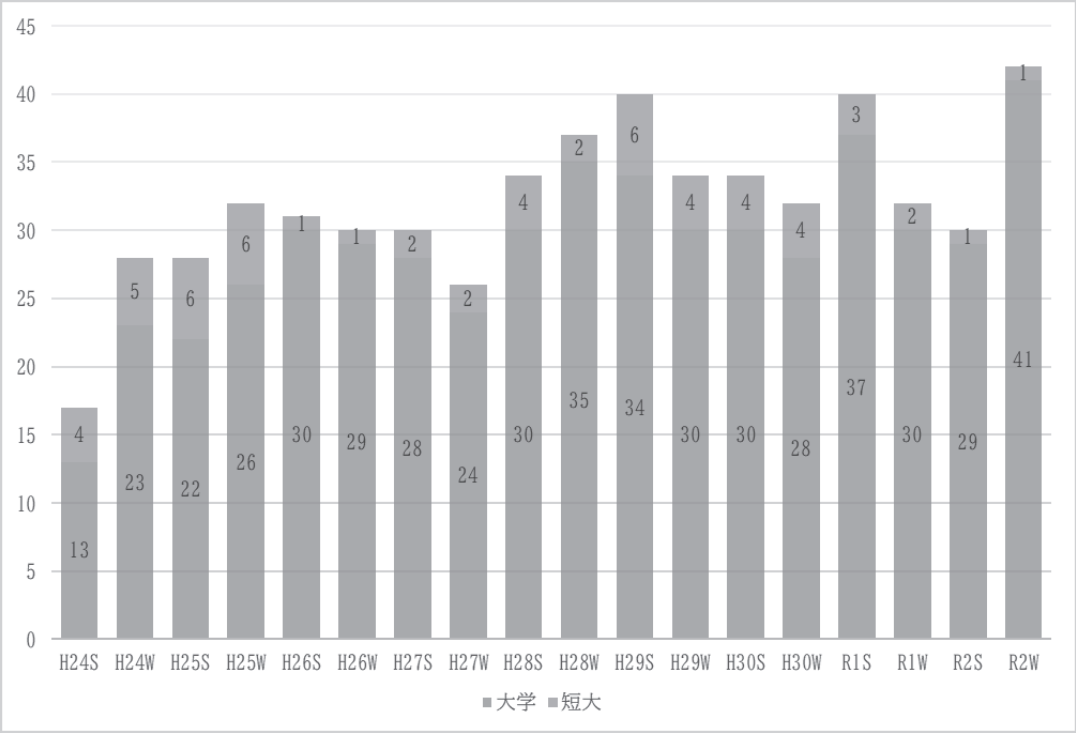
第６章　学生支援センターが取り組む学修支援について

（１）障害学生への「授業配慮申請システム」について

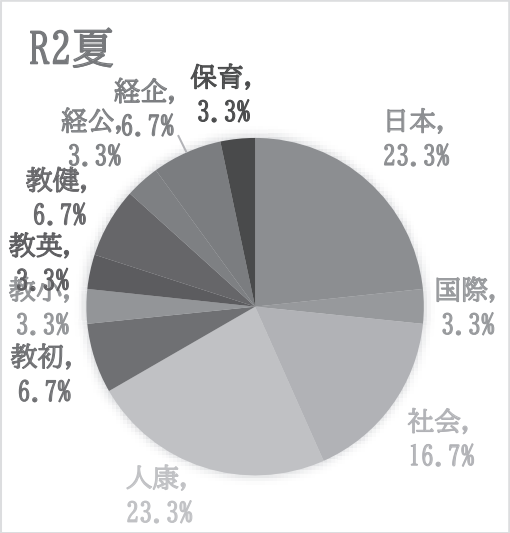
①本年度の概要

本年度も引き続き、教育への機会均等、環境保障を基本とした「授業配慮申請システム」による修学支援を行った。本年度の配慮者数、障がいの内容、配慮申請学科については以下の図、表の通りである。

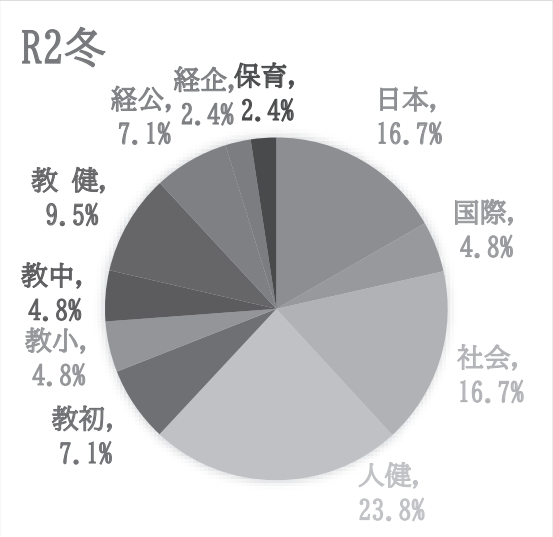
＜図-1 授業配慮申請システム申請者数経年変化＞



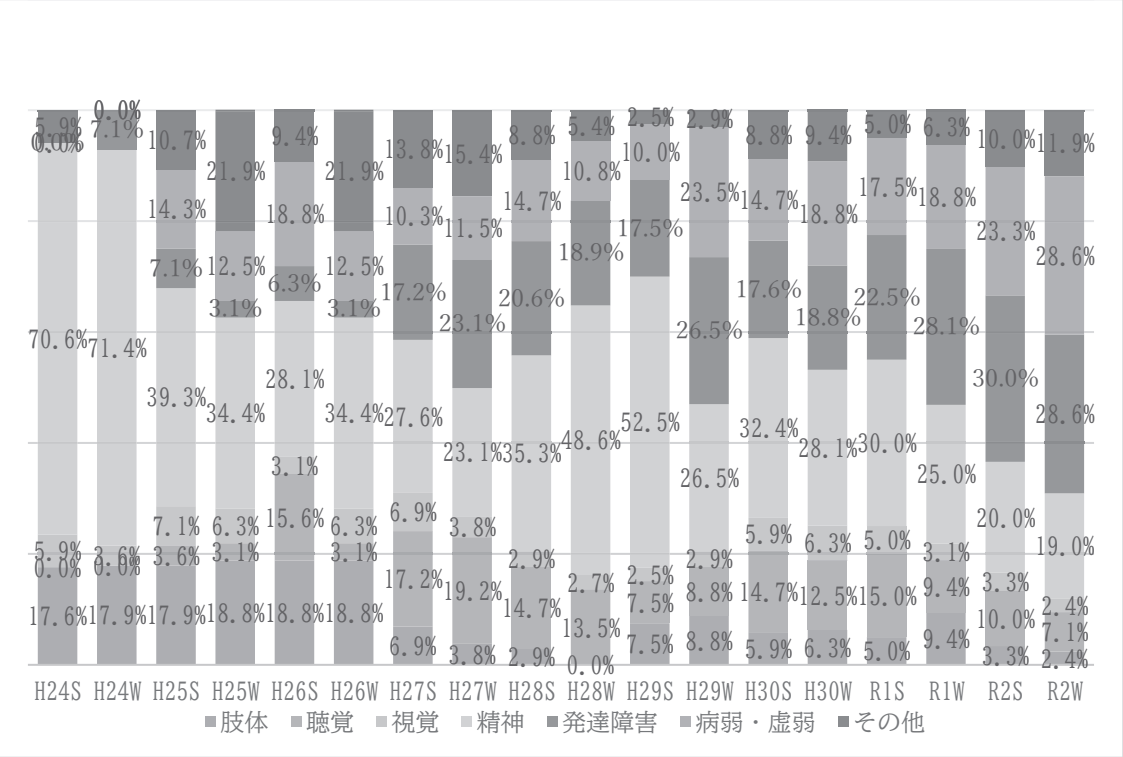
＜図２令和１年度夏学期配慮申請の学科別数＞



＜図３令和１年度冬学期配慮申請の学科別数＞



＜図 4 授業配慮申請システム障害種別割合の経年変化＞



②課題

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、ケース会議をオンラインで実施したり、書類の配布もメールを活用したりと、配慮申請に際して変則な手続きをせざるを得ない状況であった。また、遠隔授業になったことで、それに見合った新たな支援の方法を考え実行していくことも求められた。学生にとってはなじみのないパソコンを使っての遠隔授業の支援では、必然的にパソコン操作をめぐっての支援が求められ、学生相談室でも学生の窮状を救うために、本来の役割を超えてパソコン操作も含めた授業支援をせざるを得なくなった。「なんでも相談」と銘打って始められたこの支援を 20 名ほどの学生が利用し、何とか学業を続けられたことは支援の意義があったものといえる。しかし一方で、本来の守備範囲を超えたことで、教務課の範疇にかかわることもせねばならず、そこで課題を抱えることにもなった。これらの学生は、単にパソコンの操作法を教えたり、学習の方法を教えたりということでは解決しえない課題を抱えており、その点では学科や教学部門では賄いきれない問題を突き付けているといえる。

今後はこのような学生に対して、大学教育をいかに授けるかを大学全体で考えるべきではないかと考える。その際、新しく設置された高等教育推進センターの主導のもと、学科、学生支援センター、学生相談室が連携して支援を進めることが必要であると考える。

（2）ピアサポーターによる学習・生活支援

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大が学生生活全般に大きな影響を与えた 1 年であった。学生の課外活動で中止、停止になったものだけでも「新歓行事」（4 月）、「寮生会議」（4 月）、「水無月祭」（6 月）、クラブ活動（緊急事態宣言発出時）、また内容をコロ

ナウイルス感染防止策に沿う形で変更し開催したものは「入学式」（4 月）、「学園祭」、（11 月）、「卒業式」（3 月）などである。

このような状況下でピアサポートも毎年行っていた「履修相談会」「あべのハルカス相談会」の実施を見合わせた。また、新規サポーターの募集についても例年になく応募者が少なかった（24 名）。その中で対面でなくともできる支援として「Twitter 質問箱」により相談を実施した。新型コロナウイルス感染症の拡大により大学への入構が禁止された 5 月から夏学期終了の 8 月までを、令和 2 年度新入生向けの質問期間として実施。また、令和 3 年度新入生に向けても、「あべのハルカス相談会」に代わるものとして「新入学予定者対象質問箱」として実施した。以下にそれぞれの実施結果を記す。

１）ピアサポート Twitter 質問箱（令和 2 年度新入生対象）

①内容

学生や保護者から相談や質問を広く受け付け、ピアサポーター学生からの目線で回答することにより、遠隔授業状況での不安や疑問を解消し、新入生が学生生活を円滑に進められるよう支援することを目的として、PIATA 公式 Twitter 内に質問箱を設置した。

回答については担当学生ピアサポーターが考案し、協力教員のチェックを経て公開した。

②期間

令和 2 年 5 月 7 日～令和 2 年 8 月 7 日

③参加サポーター学生　27 名(実数)

5 月：25 名　6 月：23 名　7 月：22 名　8 月：7 名

④相談・回答件数

5 月：202 件　6 月：114 件　7 月：142 件　8 月：45 件　合計 503 件

⑤相談内容

相談内容（複数回答あり）	授業について				課題について				課外活動について					四天王寺大学	大学生活
	授業/出欠	オンライン授業	ZOOM	対面授業	課題	先生Q&A	提出期限	レポート	部活	委員会	バイト	大学祭/イベント	PIATA		
5月	21	10	3	20	15	3	3	3	14	4	2	4	11	14	12
	54				24				35						
6月	27	3	0	7	2	2	0	0	11	1	3	0	3	19	13
	37				4				18						
7月	19	15	0	4	6	3	1	2	5	0	2	2	3	14	0
	38				12				12						
8月（~8/7）	6	2	0	8	2	1	0	0	0	0	0	0	4	3	1
	16				3				4						

相談内容（複数回答あり）	単位/成績	学費	貸出PC/IBU.netの使い方	自分自身	友人関係	恋愛	教科書	給付金/奨学金	履修	図書館	ゼミ/実習	将来/就活	コロナ	その他	合計
5月	8	7	4	4	3	4	4	1	3	2	2	2	5	17	205
6月	5	1	5	2	2	0	0	3	1	1	0	0	0	3	114
7月	10	4	3	0	0	0	1	2	0	1	2	3	31	10	143
8月(~8/7)	5	0	1	0	1	1	0	0	0	0	1	3	2	4	45

＊相談件数が多い項目より上段左から右→下段左から右

⑥月平均対応件数

5 月：8.0 件(25 日)　　6 月：3.8 件(30 日)　　7 月：4.6 件(31 日)　　8 月：6.4 件(7 日)

⑦総括

月別相談件数では遠隔授業が突然始まった 5 月がやはり最も多かった。この点では学生の不安や疑問に答えるという役割は果たせたと考えられる。相談内容では、遠隔授業の方法も含めた授業についてが最も多く、課外活動についての質問、課題に関する質問という順に続いた。課外活動についての質問が多かったことから、新入生の課外活動に対する関心が高いことがうかがえた。このことは冬学期に実施した新入部員募集のイベントや、中止する大学が多い中で学生のみの参加ではあったが学園祭を開催する決定を後押しする結果となった。

２）ピアサポート Twitter 質問箱（令和 3 年度新入学予定者対象）

①内容

新入学予定者やその保護者から相談や質問を広く受け付けピアサポーター学生からの目線で回答することで入学前の不安を解消する目的で、四天王寺大学 PIATA 公式 Twitter 内で質問箱を開設した。回答案については担当学生が作成し、ピアサポート協力教員がチェックの上公開した。

②期間

令和 3 年 2 月 4 日～令和 3 年 3 月 31 日

③参加サポーター学生　　20 名(実数)

2 月：18 名　　3 月：10 名

④相談・回答件数

2 月：118 件　　3 月：260 件　　合計 378 件

⑤相談内容

相談内容（複数回答あり）	履修・授業に関して				課外活動			大学/学科について	留学	実習/教職	資格	奨学金/給付金/学費	編入/転学科
	履修/時間割	単位/成績/授業/クラス	オンライン授業	対面授業	部活/サークル	委員会	大学祭/イベント						
2月	5	19	0	0	4	0	1	13	2	2	0	2	0
	24				5								
3月	18	36	3	2	15	1	0	10	0	5	0	5	3
	59				16								

相談内容（複数回答あり）	大学生活に関して						将来	入学に関して				その他	合計
	服装/持ち物	通学	寮/一人暮らし	バイト	生活全般	友人関係		PC	教科書	プレエントランス	入学式/オリエンテーション/入学に関する事項		
2月	12	4	16	1	5	5	0	3	1	7	9	12	123
	43							20					
3月	13	30	2	9	6	2	0	7	6	0	74	14	261
	62							87					

＊複数項目質問あり

⑥月別一日平均対応件数

2 月：4.7 件(25 日)　　3 月：8.4 件(31 日)

⑦総括

入学前の高校生が、入学式も含めてオリエンテーション、教科書など、入学直後の諸事について疑問を多く持っていることがわかる。また、大学生活に対する疑問が多いことから、具体的な大学での生活について高校までとの違いもあって不安を多く持っているものと思われる。履修、授業については不安や疑問を持つことは当然であろうが、クラブ活動への質問が少ないのは、高校までの生活である程度予想の付く内容であるためと考えられる。

入学前の学生へのアプローチは、新入生の大学生適応を促すものとして有意義であり、「あべのハルカス相談会」も含めて、次年度以降も実施したい。

３）令和２年度ピアサポート活動

冒頭に記したように令和 2 年度は新型コロナウイルスの影響で従前のような対面での活動がほとんどできなかった。このことは、ピアサポートを受ける機会が少なくなったという点で利用者への不利益であったことはもちろんだが、新規参加のピアサポーターに実質的な学びをほとんど与えられないまま、年度の活動を終えざるを得なかったという意味で、次年度以降の活動にマイナスの影響を与えるものと思われる。

次年度以降、ピアサポート学生、協力教員、学生支援課が手を携えて、この状況を乗り越え、ピアサポーターの育成とより有益なサポートを進めていく必要がある。

第７章　SD 活動の取り組み

1. 事務局全体研修会の実施について

［趣　旨］　教職員から、「現在の学生は自己肯定感がなく、自己 PR も思い付かずに、就職活動が難航している。」「コロナの影響でオンライン授業となり、体調やコロナを理由に人との距離を離す逃げ道ができてしまった。」との声が上がっている。また、事務職員も学生との面談や相談など、学生に自信を持ってもらうためのコーチングやコミュニケーション能力が求められている。学生とのジェネレーションギャップもあり、コミュニケーションを図り辛くなっている。
そこで、学生とのコミュニケーションをはじめ教職員間の人間関係を良好に築くため、アンコンシャスバイアスの手法を学ぶ。

［日　時］　令和 3 年 2 月 25 日（木）15：00～16：30

［場　所］　本学 5 号館 5-303

［対　象］　事務職員及び希望する教育職員
出席　83 名（事務職員 76 名、教育職員 7 名）
欠席者は録画視聴（事務職員 20 名）

［講　師］　張　琴
一般財団法人日本経営協会　講師、社会教育研究所　所長
アンコンシャスバイアス研究所　講師
略歴　立命館大学卒業
㈲オフィスミック所属　DJ、ナレーター、アフレコ、MC として活躍
その後、㈱レディ・ライフ・コーポレーションを設立して代表取締役に就任、企業主催のセミナー運営や MC 養成および人材派遣事業を運営、自らも研修トレーナーとして活躍、現在は㈱HONKI 相談役も務める。
専門分野
リーダーシップ、ビジョン・理念浸透、課題解決、マインドセット、セルフマネジメント、コミュニケーション、メンター育成、ファシリテーション、ロジカルシンキング、ロジカルコミュニケーション、ビジネスコーチング、スピーチトレーニング他

［テーマ］　『和の精神は実践できているか～アンコンシャスバイアスからの視点～』

［内　容］　アンコンシャスバイアスとは何か？を知る。
・アンコンシャスバイアスとは、無意識の「偏ったモノの見方」

・私たちは、“今”ではなく“過去”を見ていることがあるかもしれない。それが自分と相手の壁になっているかもしれない。

・アンコンシャスバイアスは誰にでもあって、それ自体が悪いものではない。

１．アンコンシャスバイアスの何が問題なのか？に気づく。

・同じ言葉でも、受け止め方は人それぞれ、良し悪しは「心のあと味」で決まる。

・私たちは解釈の世界に生きている。

・ひとりひとり、その時々で違うのに“こういうものだ”という決めつけが問題を生むことがある。

・アンコンシャスバイアスは完全には払しょくできない。しかし、気づかなければ問題が生まれるかもしれない。

２．アンコンシャスバイアスにどう対処するか？

・対処法①　決めつけない、押しつけない。

・対処法②　サインに注目する。

・対処法③　アンコンシャスバイアスに気づこうと意識する。

・「私は大丈夫」「私は問題ない」と思い込まないこと。

・100 人が同じでも、101 人目は違うかもしれない。同じ人でも、過去と今では違うかもしれない。

・ひとりひとり異なるからこそ、その時々と向き合うことを大切に。

・異なりが調和を招く、これを道という。道とは、各々が歩みし調和の姿なり。これを和道という。和道に従いて、この世に生まれた目的を実現する。これを順道という。和に従うが人の役目。和は順道なくして果たし得ぬ。

アンコンシャスバイアスを知ること、気づくこと、対処することが、ひとりひとり生き生きと活躍するために効果的である。

［質疑応答］

① 「組織で起きるアンコンシャスバイアスを克服するにはどうすればよいか」という質問に対しては、「決めつけていないか、思い込んでいないか、組織のミッションに照らし合わせて、共有することが重要である。」と回答した。

② 受講者の感想として、「留学生を受け入れているが、この国の学生はこういう対応が良いと初めから決めつけないで、自主的にアンコンシャスバイアスに気づいて、学生を傷つけないように対応していきたい。」

③

［アンケート］

研修会終了後、アンケートを実施、アンコンシャスバイアスがどのようなところに現れているのか、無意識を意識し、普段の業務体制や進行方法等を見直す大変貴重な時間となった。学生対応ではすぐにでも活かすことができると好意的な回答が多かった。

［総　括］

アンコシャスバイアスへの対処法について、具体的な言葉（決めつけ言葉・押しつけ言葉）やサインに注目すること、アンコシャスバイアスに気づこうと意識することなど、具体的に学ぶことができた。今後の学生との面談や相談の場面、教職員同士や学外の保護者等とのコミュニケーションを通して、職員の資質・能力向上に期待できる。

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

第１条　この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下「委員会」という。）を設ける。

第２条　委員会は、第１条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、ＦＤ活動の推進にあたる。

（１）授業内容、方法および、評価に関する事項

（２）授業の改善に関する事項

（３）その他、ＦＤの目的達成のために必要な事項

第３条　委員会の委員長を教務部長とし、他の委員を次のように構成する。

（１）教務副部長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）

（２）学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員

（３）教務課長

（４）その他必要に応じて委員長が任命する委員

第４条　委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。

第５条　委員の任期は１年とする。ただし再任を妨げない。

第６条　委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。

第７条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。

第８条　この規程の事務は、教務部が所管する。

附　則

１　「学生アンケート委員会規程」は平成１８年４月１日から施行する。

２　「学生アンケート委員会規程」は平成１９年３月３１日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成１９年４月１日より施行する。

３　この規程は、平成２０年４月１日から一部改正し施行する。

４　この規程は、平成２２年４月１日から一部改正し施行する。

５　この規程は、平成２５年４月１日から一部改正し施行する。

６　この規程は、平成２７年４月１日から一部改正し施行する。

７　この規程は、平成３０年４月１日から一部改正し施行する。

８　この規程は、平成３１年４月１日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

（目　的）
第１条　この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「ＳＤ」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。
（組　織）
第２条　委員会は、次に掲げる者をもって組織する。
（１）事務局長
（２）総務課長
（３）人事課長
（４）教務課長
（５）就職課長
（６）学生支援課長
（７）その他事務局長が必要と認める者
２　副学長は、必要に応じてＳＤ委員会に出席する。
（委員の委嘱）
第３条　前条に定める委員は事務局長が任命する。
（委員長）
第４条　委員長は、事務局長がこれにあたる。
２　委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。
３　委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。
（委員の任期）
第５条　委員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。
（審議事項）
第６条　委員会は、次に掲げる事項について審議する。
（１）ＳＤの企画立案に関する事項
（２）ＳＤの推進計画に関すること
（３）ＳＤの実施に関すること
（４）その他ＳＤ推進に必要な事項
（委員以外の出席）
第７条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。
（所掌事務）
第８条　この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附　則
この規程は、平成２７年４月１日から施行する。

令和２年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
ＦＤ・ＳＤ報告書

編集・発行　四天王寺大学
ファカルティ・ディベロップメント委員会
スタッフ・ディベロップメント委員会
住　所　大阪府羽曳野市学園前３丁目２－１
ＴＥＬ　０７２－９５６－９９５２
ＦＡＸ　０７２－９５６－３８９１
E-mail　kyomu@shitennoji.ac.jp